

# 滨松市民文艺

## 67



滨 松 市

# 令和4年度 浜松文芸館の催事と講座

(内容等については一部変更されることがありますので、浜松文芸館にご確認ください)

## ●講座

講座名	講師	開催日時等	受講料円
『源氏物語』入門講座 —北村清春の『源氏物語忍草』をよむ—	松平和久	4/6、13、20、27、5/4、11 毎週水曜日(全6回) 9:30～11:30	3,000
古文書読解講座 —古文書は…お宝の山!—	小木香	4/14、21、5/12、19、26 木曜日(全5回) 9:30～11:30	2,500
江戸の絵本講座 —「あんぱんたん」をよむ—	勝田敏勝	4/14、5/12、6/9、8/11、9/8、10/13 第2木曜日(全6回) 13:30～15:30	3,000
川柳入門講座 —風刺やユーモアのセンスを磨こう—	今田久帆	4/24、5/22、6/26、7/24、8/28 第4日曜日(全5回) 9:30～11:30	2,500
『平家物語』講座 —播磨の兄、平家に近づく流亡の足音。—	大石嘉美	4/24、5/22、6/26、7/24、8/28、9/25 第4日曜日(全6回) 13:30～15:30	3,000 (テキストは個人で購入)
『おくのほそ道』講座 —その出会いと別れ—	勝田敏勝	4/22、5/27、6/24、7/22、8/26、9/23 第4金曜日(全6回) 13:30～15:30	3,000
篆刻入門講座 —世界に一つだけの自分印—	下石哲幸	5/21、28、6/11、18、25 土曜日(全5回) 9:30～11:30	2,500 (別途材料費 2,000)
俳句入門講座Ⅰ —俳句をはじめてみよう—	村松二本	5/28、6/4、11、18、25 毎週土曜日(全5回) 13:30～15:30	2,500
朗読入門講座 —声で表現する楽しさを味わおう—	堤腰和余	6/14、7/12、8/9、9/13、10/11、11/8 第2火曜日(全6回) 9:30～11:30	3,000
朗読書講座 —本の世界を朗読で表現しよう—	堤腰和余	6/14、7/12、8/9、9/13、10/11、11/8 第2火曜日(全6回) 13:30～15:30	3,000
夏休み読書感想文講座 —これで読書感想文が書ける—	林 容子	①7/23(土) ②7/31(日) 9:00～12:00 4～6年生対象 付添不要	500
夏休み絵本づくり講座 —世界に一つだけの絵本—	井口恭子	7/23(土) 13:30～16:00 4～6年生対象 付添不要	500
楽しいお話づくり講座 —おはなしづくりにちょうせん—	井口恭子	7/31(日) 13:30～15:30 1～3年生対象 付添不要	500
短歌入門講座 —三十一音で遊ぼう—	村松建彦	9/3、10、17、24、10/1 毎週土曜日(全5回) 9:30～11:30	2,500
俳句入門講座Ⅱ —俳句をはじめてみよう—	坪井孝之	9/3、10、17、24、10/1 毎週土曜日(全5回) 13:30～15:30	2,500
近代詩鑑賞講座 —手製本で楽しむ近代詩の薫り—	折金紀男	9/4、11、18、25、10/2 毎週日曜日(全5回) 9:30～11:30	2,500
『万葉集』講座 —人麻呂・虫麻呂・家持をよむ—	松平和久	9/5、12、19、26、10/3、10 毎週月曜日(全6回) 9:30～11:30	3,000
『古今和歌集』講座 —巻18・巻19・巻20をよむ—	松平和久	2/8、15、22、3/1、8、15 毎週水曜日(全6回) 9:30～11:30	3,000 (テキストは個人で購入)

展示 9:00～17:00 5階 展示室

## ●企画展 収蔵展

企 画 展 令和3年度浜松市教育文化奨励賞受賞 「古典文学研究家 松平和久氏所蔵品展」  
3月1日(火)～6月19日(日)  
特別収蔵展 浜松を愛した望郷詩人 「森の水車 清水みもの展」 7月1日(金)～10月16日(日)  
※ 以降の企画展、収蔵展は計画中

## ●講演会

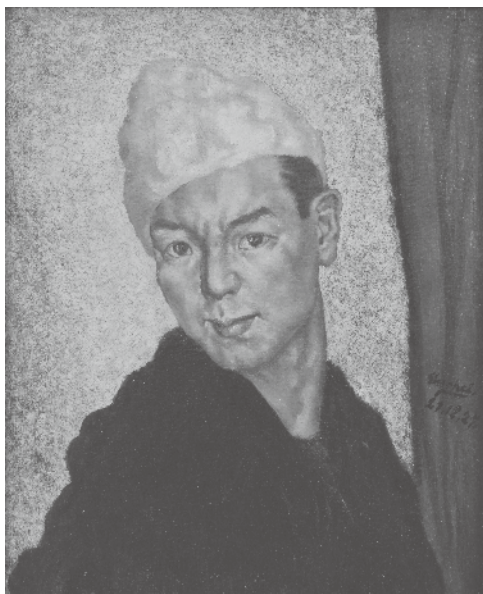
「『蔭介石の書簡外交』とは」 金原増吉 5月14日(土) 9:30～11:30 500円  
「浜松ゆかりの近・現代作家たち～あの人の人、作品紹介～」 和久田雅之 8月7日(日)13:30～15:30 500円  
「(仮)芭蕉という革新者」 高柳克弘 11月12日(土)13:30～15:30 500円

## ●朗読会

「堤腰和余が志賀直哉をよむ」 堤腰和余 10月16日(日)13:30～15:00 500円

# 浜松市民文芸

第 67 集



原田京平「自画像」(1921) (我孫子市白樺文学館所蔵)

浜 松 市

選者	小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
	竹腰幸夫	鈴木ゆき江	中西美沙子	たかはたけいこ	橋本由紀子	村木道彦	高柳克弘	鶴田育久	今田久帆

☆ 表紙絵

齋藤 幸宏

令和三年度 浜松市芸術祭「第69回 市展」

芸術祭浜松市長大賞受賞作品 工芸部門

題 『地球修復ロボ G-3』

意味不明の作品名：「G」はなんの略？ネタ  
晴らしをします。このロボットは「ガラクタ  
(G)」から作り出されました。便利さだけを追  
求した人間社会：今、そのツケが地球全体に拡  
がっています。ガラクタ・ロボットが、自然界  
で皆が共存していたあの時の地球に戻すべく、  
修復に動き出したのです。

「浜松市民文芸」第67集 市民文芸賞受賞者

短歌	詩	随筆	評論	児童文学	小説	部門
<p>高橋 賢三 鈴木 和子 鈴木 ちせ 坂口 新一郎 石原 新一郎 岡田 新一郎 高山 新一郎 永瀬 誠人 山下 誠人 竹内 誠人 中津川 久子 別所 綾子 木俣 統裕 河島 憲代 金指 美代 住吉 玲子 生田 基行 村上 拓</p>						受賞者
<p>川柳</p>						部門
<p>鶴伊 瑠璃 熊靖 子 竹山 一郎 菊川 文江 中谷 則子 中津川 久子 池田 智子 藤本 幸子 杉田 みさき 峯村 香里 大平 悦子 勝田 洋子 川口 八重子 鈴木 やよい 加藤 美智代 山田 泰久</p>						受賞者

# 目次

## 小説

### 市民文芸賞

エーデルワイス	村上 拓	10
村方始末記	生田 基行	25

### 入選

まわり道	安間 知世	41
乱声	嘉山 春夫	54
非色に染まる	竹内 弘子	71
父の帰る日	遠藤 ゆき	88

### 選評

竹腰 幸夫	103
柳本 宗春	104

### 選評

森においしやさんがやってきた	住吉 玲子	105
月あかりの一軒の家	金指芙美代	113
このお花、なあに	河島 憲代	123

### 市民文芸賞

フフツのふうちゃん物語	佃 美帆	130
	鈴木ゆき江	141

### 入選

フフツのふうちゃん物語	佃 美帆	130
	鈴木ゆき江	141

### 選評

	鈴木ゆき江	141
--	-------	-----

## 評論

### 市民文芸賞

藤枝静男と死者の箱庭	木俣 統裕	142
------------	-------	-----

### 入選

原田喬と俳誌「樵」	市川 敏	150
岸田劉生「麗子微笑」蒐集物語	伊東 政好	158
パトロン浜松山本貞次郎	中西美沙子	161

### 選評

	中西美沙子	161
--	-------	-----

## 随筆

### 市民文芸賞

怒ってくれる人	別所 綾子	164
最期の桜	中津川久子	165

### 入選

下田の鴉	井上 盛	167
人生の機微	松田 健	169
父、育翁になる。	高木由実子	171
老いて生きる	糟谷 修子	173
妻と歩む老々介護	鈴木 勝則	176
妻の生命保険	福代 善彦	178

### 選評

	たかはたけいこ	180
--	---------	-----

### 市民文芸賞

邪鬼のよばなし	竹内としみ	183
---------	-------	-----

### 詩

邪鬼のよばなし	竹内としみ	183
---------	-------	-----

何でもない日	山下	來郁	185
ちぢれ麵	永瀬	誠人	186
寒椿	高山	ひなた	187
密やかに女	岡田	あい	188

入選

介護列車	鈴木	勝則	190
音色	吉川	愛	191
ふーちゃんの	尾内	以太	192
風鈴	石野	帆奈	193
音楽	首藤	琴音	193
鼓動	谷澤	萌那美	194
もつと遠くに	竹原	孝子	194
黄泉比良坂	内山	文久	195
	橋本	田紀子	197

短歌

市民文芸賞

石原新一郎	坂口	ちせ	鈴木	和子
鈴木賢三	高橋	幸		

入選

倉見 藤子	伊藤	美代	菅沼	祐子
伊藤 雅章	飯田	裕子	安藤	圭子
柴谷 俊行	宮本	恵司	坪井	いち子
伊藤 友治	岩城	悦子	尾内	甲太郎
池上 佳弘	鈴木	壽子	リコ	リス

鈴木 弘子	鳥井 美代	遠山 長春
平井 要子	加藤 貴代美	桜花 ふみ
宮澤 秀子	高木 勝海	大檐 一郎
清水 孜郎	根本 文子	鈴木 善一
吉野 正子	阪口 佳寿子	渥美 進
木下 文子	松浦 ふみ子	柴田 千賀子
佐野実佐代	山本 勝彦	鈴木 浩子
江間 得二	石井 泰子	かもともこ
あひる	内山 正則	峯村 友香里
清水 紫津	平野 旭	竹内 オリエ
神谷 司	白柳 ますみ	木村 幸子
井口 絹子	大庭 拓郎	袴田 成子
相曾 多加根	岡本 蓉子	赤堀 進
藤原 孝志	高山 紀恵	井浪 マリエ
池田 稔	古谷 聰一郎	内山 文久
田中 貞夫	渥美 佳子	鈴木 民江
小川 道子	フーコ	鈴木 勝則
寺田 ひさ子	栗原 恵子	中村 照美
池谷 和廣	神谷 淳子	大城 きみ子
美山 愛	大山 啓	鈴木 健示
福島 正義	木本 紀子	内藤 久仁茂
水野 佐喜恵	和久田 俊文	山下 晏子
伊藤 正	河合 和子	村木 幸子
伊藤 米子	渥美 朋可	手塚 みよ



青海 まち 戸田田鶴子 由倉 典之  
 野末 妙子 すずきとしやす 石黒 實  
 中村 淳子 山田 文好 遠藤 ゆき  
 飛天 如 小笠原靖子 寒風澤 毅  
 鴫田 健  
 選 評 …………… 村木 道彦 …… 211

定型俳句

市民文芸賞

山田 泰久 加藤美智代 鈴木やよい  
 川口八重子 勝田 洋子 大平 悦子  
 峯村友香里 杉田みさき 藤本 幸子  
 池田 智子

入選

渥美 朋可 伊藤 久子 井浪マリエ  
 岩崎 五郎 小楠惠津子 河合三代子  
 柴田ミドリ 鈴木 利久 鈴木 浩子  
 鈴木由紀子 中川 正男 中津川久子  
 中村日出子 名倉 智代 二橋三千代  
 能勢亜沙里 長谷川絹代 村松ヒサ子  
 山口 英男 和久田郁江 渡辺きぬ代  
 赤堀 進 縣 裕子 池谷 静子  
 石井 泰子 市川 敏 伊藤 倭夫  
 稲津とし子 内海セツ子 太田沙知子

小川 恵子 加藤 喬 川島 泰子  
 絹 枝 後藤 とも 笹瀬 幸代  
 佐野 朋旦 鈴木 章子 鈴木 嘉子  
 砂間 達也 竹田たみ子 竹平 和枝  
 田中美保子 根本 文子 橋本 英夫  
 林田 昭子 日比つや子 平野 旭  
 藤井 星子 藤田 節子 堀川千代子  
 宮田 悦自 山上アサ子 由倉 典之  
 渥美 進 あ ひ る 飯田 裕子  
 井口 絹子 池谷 和廣 石川 みき  
 伊藤 正 伊藤 好子 岩城 悦子  
 岩崎 芳子 大田 勝子 大屋 智代  
 小粥 通恵 小楠 勝代 小楠 達司  
 小栗 道子 小澤 幸一 尾内 以太  
 小野田みさ子 尾林せい子 影山 久恵  
 糟谷 修子 加藤 雅子 金子 典子  
 神谷知恵子 かもともこ かりりん  
 川合 泰子 川上 勝 川原 弘美  
 菊池みよ子 北村 友秀 切畠 正子  
 齊藤 純子 佐藤 健 小 百 合  
 清水 孜郎 白柳ますみ 鈴木 和  
 鈴木 和子 鈴木 健示 鈴木 賢三  
 鈴木 智子 鈴木 直美 鈴木みちゑ  
 高木 勝海 竹下 勝子 館石 照子





選評

和久田俊文	宮本 恵司	藤原 孝志	平松 茂子	永井 眞澄	嶋田 健	田中 貞夫	竹内オリエ	鈴木 勝則	下位 満雄	佐藤 晃成	加藤貴代美	岡本 蒼子	内山 文久	伊藤 美代	浅井 裕子	山口 京子	宮澤 秀子	ま さ こ	古橋美由紀	中村つぎ子	鳥井 美代	田中 愛子
山口 一郎	松本 栖枝	深谷とく子	野田 俊枝	利徳 春花	坪井いち子	竹田 道広	鈴木 利定	須川てる子	宍戸 理乃	神谷 司	刑部 末松	大石 万鈴	右崎 容子	伊藤アツ子	山田 明知	美山 愛	松本憲資郎	古谷 とく	野田多満子	永田 恵子	寺田ひさ子	
山中 伸夫	水野 健一	藤生 君江	飛 天 如	戸田田鶴子	手塚 みよ	竹平 安則	高山 紀恵	鈴木 敦子	清水 康成	坂本 清美	一 義	大村千鶴子	氏原 魁星	伊藤 栄里	山本晏規子	山川美恵子	宮崎季有美	牧 元久	野田智恵子	中村 功	徳澄 英樹	

高柳 克弘：241

自由律俳句

市民文芸賞

中津川久子

中谷 則子

入選

桜花 ふみ

源 次郎

宮本 卓郎

村松ヒサ子

岩城 悦子

大庭 拓郎

神谷 司

杉田みさき

鈴木 和子

竹内オリエ

ヒメ巴勢里

渡辺 憲三

伊藤 正

伊藤 美代

内山 文久

遠藤 ゆき

岡本 蒼子

嘉山 春夫

嶋田 健

戸田田鶴子

中谷 則子

中村 淳子

古谷聰一郎

美山 愛

鶴田 育久：248

川柳

市民文芸賞

菊川 文江

竹山恵一郎

鶺鴒 瑠璃

伊熊 靖子

入選

後藤	加藤貴代美	伊藤 美代	森 恵子	藤生 君江	平野 旭	鈴木 民江	かとうのじい	伊藤 正	鶴 瑠璃	徳田美知子	高木 勝海	川口八重子	足立 和代	美山 愛	竹山 容子	鈴木 敏子	菊川 文江	岡本 蓉子	池田 稔	宮澤 正人	田中 恵子	鈴木 俊彦	浅井 常義
白柳ますみ	神谷 司	大庭 拓郎	谷田貝忠弘	馬淵 征稍	フーコ	中津川久子	鈴木 勝則	岩城 悦子	由倉 典之	戸田田鶴子	高柳 龍夫	佐次本浜子	荒沢 博	山田とく子	鶴見美佐子	高山 功	源 次郎	小川 道子	伊藤 信吾	山口 英男	牧田 龍司	鈴木 均	嘉山 和美
高山 紀恵	河島いずみ	影山 久恵	あつこ	宮澤 秀子	藤井 星子	根本 文子	鈴木 賢三	江間 得二	池谷 和廣	中村 禎次	寺田喜代子	佐野ふみ子	池谷八重子	山中 伸夫	名倉 智代	竹山恵一郎	鈴木 和子	加藤 典男	内山 敏子	伊熊 靖子	宮崎 和子	竹川美智子	鈴木千代見

選	評	和久田俊文	早水 精一	寺田ひさ子	竹内オリエ	竹平 安則	戸塚 忠道	手塚 美誉	古谷聰一郎	藤原 孝志	どぜう	今田 久帆
---	---	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-----	-------

「浜松市民文芸」第68集作品募集要項……………265

……………264



作品掲載については、清書原稿のままを原則としました。  
掲載順については、市民文芸賞受賞作品は選考順、入選作  
品は選考順または五十音順としました。  
第67集の作品応募状況

部門	作品点数
小説	一五
児童文学	八
評論	四
随筆	二七
詩	一六九
部門	作品点数
短歌	五〇三
定型俳句	八八六
自由律俳句	一七三
川柳	四二六
計	二、二一一



## 小説

「市民文芸賞」

## エーデルワイス

その街の中心にそびえる巨大なビルの最上階に、私は住んでいた。おそろしいほど巨大なビルで、地上の晴れた日には富士の雪掛かった山頂を見下ろすことができたし、アクトタワーなんか小人の住む平屋のように見えた。その高さは、一階からエレベーターに乗るとその部屋に着くまでの間に長編映画を少なくとも十本は見ることで、長い移動中に餓死しないように、牛が一頭丸々入るくらいの冷蔵庫と簡単な調理器具の一式が、エレベーターの中に備え付けられているほどだった。

そのビルの最上階には私の部屋ただひとつだけしか入っていないなくて、エレベーターを降りて正方形のエントランスを抜け、ウエスタン・レッド・シダー製の重いドアを潜ると、『コ』の字型をした部屋の北側が一面透明なガラス張りの窓になっている。安全のため、窓はたった十五度、縦方向に傾くよう

村上 拓

に開くだけだったが、開いた窓からは街の上澄みを流れる混じり気のない空気が穏やかに吹き込み、頬に落ちかかる髪を優しく撫でてふわりと舞い上げ、埃ひとつない床の上をくるくると踊るように滑り抜けていった。なにしろその部屋は自衛隊のAWACSが飛ぶよりも高い場所にあつたので、街が曇っていても、その部屋の窓から見ると風景はいつでも青々と晴れていた。

その窓の前に立ち、私は街を見下ろしていた。街の風景は、私が望めばどこまでも近く私の眼前に迫ってきた。それは望遠鏡を覗き込むのとはまるで違った体験だった。私は何を見ようと思うこともなく、ただぼんやりと眺めた街の中の風景を、自在に拡大したり、縮小したりしていた。その部屋の窓から通行人を見ると、提げたビニール袋の中身からセーターの糸のほつれから生えている髭の本数に至るまで、何もかも

はつきりと見て取ることができた。また逆に視界を引いていくと、このビルそのものをも含む広大な大陸全土とその複雑な海岸線と、海上に立つ無数の白波が織りなす神秘的な幾何学模様すべてを見晴るかすことさえできた。私はこのビルの最上階の部屋にいて、同時にどこにもいないような気分だった。

そのとき私は、大衆映画館の前の道路の一面を眺めていた。昔風のフィルムカメラのオブジェを屋根代わりにした映画館にはジャッキー・チェンの映画の色あせた巨大な一枚看板が掛かっている、その前で黒いスーツを着た若い三人の男たちが、下品な調子で話しながら何やら大声で喚き散らしていた。男たちは悪い酔い方をしているようで、三人とも肌が紅潮し、目がじつとりと据わっていて、唇が重い肉の塊のようにだらりと垂れて、口が開いたままになっていた。人波は彼らを避けて流れていった。早歩きになる人もいれば、露骨に走り去る人もいた。三人の男のうち一人は痩せて背がひょろりと高く、一人は筋肉質で、一人はちびだった。

痩せて背の高い男がスーツを着て早歩きをしていた若い女に、右手に持ったカップ酒の中身をぶちまけた。筋肉質とちびの二人が手を叩いて笑い、女は青い顔を背けて走り去った。長い髪の毛の端から、透明すぎるほど透明な液体が滴り落ちてスーツの背中とスカートを濡らした。その背中を指さして男たちはさらに笑った。

映画館から出てきた太った中年の男が、彼らの姿を目の端

で捉え、ため息をつき、わざとらしい咳払いをしながら彼らの横を通り過ぎようとした。筋肉質の男が足を掛けると、中年の男はよろけて転びそうになった。その背中をちびが押すと、中年男はどうとうその場に倒れ、安酒で濡れた道路の上に顔を擦って鼻血を出した。その様子を見て三人はまた笑った。中年の男は立ち上がり、口をもごもごさせながら、何事もなかったかのようにその場を立ち去ろうとしたが、もつれた足がズボンの裾を踏みつけてまた転び、三人をますます笑わせた。中年男の失態は特にちびの男のツボに入ったらしく、彼は腹を抱えて辺りを転げまわり、狂ったように笑っていた。

次に彼らの前に現れたのは、真っ白な髪にピンクのカーデイガンを羽織り、オフホワイトのジーンズを履いた老婆だった。小柄だが、背筋がしゃんと伸びている。道路の向かい側からまっすぐに男たちの方へと進むその左手薬指には、銀色の指輪が光っている。

三人の男たちが笑うのを止め、その老婆の方を見据えた。彼女を前方から取り囲むように三方向に広がり、首を赤ん坊のようにゆらゆらと揺らし、脚をがたがたと落ち着きなく震わせながら、老婆の全身を上から下へ、品定めするようにじろじろと眺める。紅潮した頬が力なく弛んで、ブルドッグのような不気味さで威嚇する。

老婆は怯むことなく、目の前にいる背の高い男に歩み寄る。正面十五センチ、鼻先が触れ合う寸前の距離まで近づい

て、急に上体を屈めると、男の視界の中から老婆が消えた。それはまさに一瞬の出来事だった。戸惑う男の背後に潜り込んだ老婆は、男の細すぎる腰まわりを骨の形の透ける両腕でがっちりとホールドし、思い切り身体を反り返らせる。あれは何という技だっけ？ そう、バックドロップだ。私が老婆の繰り出したプロレス技の名前を思い出すのと、男の脳天がアスファルトを打ちつけて鈍い音を響かせるのは同時だった。街に歓声が轟いた。流れていた人波が急に動きを止め、重くなり過ぎた油滴のように、丸い塊になって彼らの方を一斉に見た。全身の筋肉を弛緩させた男がだらりとその場に伸び、老婆の身体をずるずると滑り落ちていく。彼の右手にあった安酒のカップがその場に落ちて、乾いた音を立てて割れた。

老婆は後の二人にも果敢に近づき、同じ要領でバックドロップを極めていった。三人の男たちがアスファルトの上にながらにのびていく。三人の男たちは、老婆の攻撃があまりにも予想外過ぎたのか、それとも安酒に酔いすぎていたせいなのか、反応が遅れていた。その一方で、彼らを取り囲むギャラリィは少しずつ増えていった。腕を高らかに上げて叫ぶ私と同じ年くらいの男がいた。首にタオルを巻いた薄着の女が、老婆にスマートフォンを向けていた。

アスファルトの上のびきった三人の男を背後に、老婆は額の汗をカーディガンの袖で拭い、ポケットからキットカットの小袋を取り出して開けると、左側の奥歯でかじった。私

はそれを見て、とびきり熱いコーヒーが飲みたくなってキッチンに立った。やかんでお湯を沸かし、冷蔵庫を開いて見つけたプチマトのへたを取ってボウルに入れて窓の前に戻ると、一転してギャラリィは消え、立ち尽くす老婆の背中側で、筋肉質の男が片腕を地面につきながら、もう一方の手を老婆のカーディガンの襟首へと伸ばしていた。地を這うような唸りが、獐猛な獣のように飛びかかる。

「舐めんじゃねえぞ、このババア！」

老婆は背中から引きずり倒され、短い悲鳴を上げた。それから四本足でアスファルトの上を這いずりまわる三人の男たちに激しく蹂躪された。両腕を潰れるまで押さえつけられ、腹と頬を何度も打たれ、鼻柱を殴られ足蹴にされ、カーディガンを引き裂かれた。身体中の皮膚が切れて血が流れ、街の低い位置を漂う暗い色の砂と泥にまみれて赤黒く汚れていた。手の指を一本ずつ折られ、そのたびに乾いた音がした。

新品のチョコレートが折れるときのような、奇妙に軽くて現実離れた音だった。年相応の皺に反して薄白く、染みのない肌の上を泡立ちぬめった唾と鼻血が覆い、白い髪は手当たり次第に筆られて落ち武者のようなハゲができていく。折れた前歯を飲み込んで咽ると首を絞められ、さらに別の歯をへし折られた。彼らを止める者は誰もいなかった。いったいあれだけいたギャラリィはどこへ消えてしまったのだろうか？

彼らは最後に、老婆の曲がった左指から銀色の指輪を引き抜いた。ちびの男がそれを太陽にかざして、眩しそうに眺め

た。

「これ純銀かな」と彼は言った。

「安物じゃねえの。このカーデイガン、ユニクロだろ」と背の高い男が言い、ピンク色の布の薄汚れた切れ端を指先でつまみ上げ、ひらひらさせながら笑った。

「安物でもいいさ、さつさと金に換えて酒を飲もう」と筋肉質の男が言った。

三人の男たちは立ち上がり、ぼろ切れのようになった老婆を見下ろした。あばよ、ばあさん、と言つてもう一度ずつ唾を吐き掛けて去って行く。老婆はわずかな体力を振り絞って身を振り、うつ伏せになって泣いた。腹の底から絞り出すような、恨みのこもった泣き声だった。

きつと大切な物だったんだわ、と私は思った。当然だろう、だって薬指にしていたんですもの。

そこで私は目を覚ました。二階建て学生アパートの二階のワンルーム。家賃月二万円ポッキリ。夜中に窓が明るいと近所迷惑だからと、母に渡された遮光カーテンが朝の陽射しまでも遮って、私の生活リズムを狂わせていた。スマートフォンで時間を見ると、もう九時過ぎだった。枕元には読みかけの小説とパズル雑誌とちびた鉛筆とデスクライトとティッシュの空き箱が無秩序に散乱していた。敷きっぱなしの布団の表面はなぜかしっとりとしていて、実家の庭で吹き曝しになっていたプリンターを思い出させる。下手に裏返したらゲジ

ゲジやムカデの一匹でも這い出てくるような気がして、怖くて干すことさえままならない。

新卒で就職して二年半務めた教育関係の出版社を辞めて、もうすぐ三か月になる。悪夢を見て真夜中に飛び起きることはなくなつたが、代わりに慢性的な不安が、私の精神を蝕み始めた。失業保険が切れたら、いったいどうやって生きて行けばいいのだろう。そもそも最初の会社を自己都合退社した時点で、私の人生はすでに詰んでいるのではないだろうか。私はただ普通に生活したいだけなのに、どうしてそれがこんなに難しいんだろう。両親はいつでも帰ってくればいいと言ってくれているが、そんな惨めなことはしたくない。これって私のわがままなんだろうか？

仕事を辞めてから、私は自分を奮い立たせるために一人暮らしを始めた。当然両親の猛反発を食らったが、仕事もせず実家暮らしでは、自分がダメになっていくのが火を見るよりも明らかだった。両親を説得するときの私は、自分自身に対する焦燥感で、半ば狂っていたと思う。

家具屋で見たときはおしゃれに見えたダークブラウンのダイニングテーブル。ワンルームの部屋には大きすぎるサイズで、薄暗い部屋には陰湿すぎる色合いだった。ときどき私はとがった鉛筆の先や定規の角で、布団から一番近い脚の真ん中をひつかいて傷をつけた。いつかこの脚が折れて天板が崩れ落ちたときに私の生活は変わるだろうと、根拠のない予感が私の中にあつたが、今のところその兆候はどこにもなかつ

た。脚は傷ついても決して削れず、私の生活は改善するどころか悪くなつていくばかりだった。

「二トリの家具は頑丈すぎる」と私は難癖にもなり切れない無害な文句を呟いた。黒一色で飾り気のない髪留めを外して顔に落ちかかった髪の毛は荒れていて、乾燥しがちな肌をなぞると羽虫に這われているようにぞわぞわする。シャワーでも浴びてこようと身体を起こすと腰と肩が痛くて、いつの間にか丸く欠けていた足の爪の先が毛布の糸くずを引っかけた。

その夢は、私にとって大きなショックだった。どれだけ生活が悪くなつても、心の中だけは貴婦人でいようと私は思っていた。あの暴力的な夢は、私の中に住まう鬱屈が具体的な形をとって現れてきたもののように思えた。小綺麗なピンクのカーデイガンに身を包む生真面目そうな老婆の変わり果てた姿と笑いながら去っていく男たち。それをコーヒートとプチトマトを摘みながら、空の彼方で眺め下ろす私。

あのと私とは、笑っていなかったか？

□元の引きつれが、笑っていたためか乾燥肌のためか、あるいは会社勤めをしていたときに顔面にこびりついた愛想笑いのせいにはよく分らない。とにかく今日はハローワークに行こう。気に入る仕事がなくとも、失業保険が切れるのをただぼうっと待っているよりはましだ。四十三度のシャワーが肌を伝う狭い浴室で、冷えたままの壁に肩が触れて、そのあまりの冷たさに私は悲鳴を上げた。

なにやってんだって、坂本の声が、遠い記憶の中から私を呼んだ。

坂本は私が高校生だった頃の友達で、私は彼のことを友達以上だと思っていたが、彼の方は私をただの友達としか思っていないらしいかった。私と彼の間には、ほとんど共通点がなかった。私は文系で、彼は理系だった。私は文芸部で、彼は合唱部だった。私は音楽の単位を落としかけたが、彼は皆勤賞を取って表彰された。私は惨めに生きているが、彼は二十歳を待たずに死んだ。なぜ彼が死んだのか、なぜ彼が死ななければいけなかったのか、私には未だに分らない。

彼の遺影は、彼が高校二年生のときに修学旅行先の沖繩で珍しいカブトムシを捕ったときの写真だった。彼にお線香をあげに行つたとき、私は彼の母親の菊子さんから、生前彼が使っていたというアコースティックギターを貰い受けた。

「ときどき裕子ちゃんのことを、話していたんですよ」と菊子さんは私に言った。「とても可愛い子がいて、一緒にギターを弾くんですよ」

「へえ」と私は言った。とても可愛い、ね。

「だからあの子も、裕子ちゃんにギターを受け取ってもらえたら、きつと喜ぶと思うんですよ」と彼女は言った。「本当に、とても楽しそうに話していたんですよ」

今、そのギターは私の部屋の隅のエアコンの下に寝転んでいて、埃を布団にしている。弦が茶色く錆びて、背に薄白い



かびが浮いている。ときどき弾いてみようと思うのだが、チューニングのために六弦を弾いて、思いのほか大きな音にびつくりして、そのまま止めてしまう。頭の中がぐらぐらと揺れて、映像と匂いがフラッシュバックしてくる、激しい音だ。なにやっつてんだって、という坂本の声が、そのたびに聞こえてくる。

彼がはじめてそう言ったのは、器楽のテストであまりに酷い演奏をした私を音楽科の平野先生が音楽準備室に閉じ込めて、居残りをさせていたときだった。課題曲はエーデルワイス。コードを順番に弾くだけならそんなに難しくもないこの曲がどうしてそんなに酷いと言われるのか自分でも不思議に思いながら、私は延々と弦を弾いていた。

「演奏がましになつたら見せに来なさい」と平野先生は言った。それで私は三度見せに行ったが、三度とも途中で止めさせられた。平野先生は「自分の音をちゃんと聞きなさい」と言うばかりで、何が悪いのか教えてくれなかった。私はただひたすらに指の動きを洗練させ、楽譜を頭の中に叩き込み、正確なコードを正確に押さえられるように練習を重ねていった。

何度目かの通し練習の後、顔を上げると、私の真向かいに椅子を置いて、坂本が座っていた。

「なにやっつてんだって」と坂本は言った。

「練習」と私は言った。

「何の?」

「エーデルワイス」

「嘘だろ?」と彼は言った。「お前って、もしかして音痴なの? 音、ぜんぜん合っていないけど」

「別にそういうわけじゃないけど」と私は言った。「でも、弾いてるうちにチューニングがずれてきちゃうのは仕方くない? 古いギターだし、弦だつてヘタってるし」

「そんなの知ってるよ」と彼は言った。「何で直さないんだつて」

「何でつて、めんどくさいじゃん」と私は言った。「もちろん、平野先生のとこ行くときは直してるよ。ちゃんと。でも、今は自分しか聞いてないんだし、わざわざ直す必要なくない?」

「俺がいるじゃん」と彼は言った。

「さっきまではいなかったじゃん」と私は言った。

「うん。でもさ、俺がいなくてもお前がいるよ」

は? 「なにそれ、禪問答?」

「そうじゃなくてさ」と、坂本は私からギターを取り上げて、六弦から順番にチューニングを合わせていった。顔をギターに俯けると男子の癖に意外とまつげが長い。私より長いんじゃないか? と思うとちよつと癩で、引きちぎつてやろうかとも思うが、かわいそうなのでやめておく。もう冬なのに日に焼けて浅黒い肌は、健康的か遊んでいるかどちらかだが、弦に触れる彼の長い指からは、そのどちらのイメージも浮かんでこない。別に手入れとかもしてないんだらうけど、指先の爪に艶があつてとつても綺麗。

「ほれ、弾いてみ」と彼が言った。彼の指先に意識を集中していた私は一瞬反応が遅れて、ちよつと変な感じになる。

「あ、うん」とギターを受け取ってほうつとしていると、「ほら、はやく」と彼が促してくる。「何を弾けばいいの」と私は言う。「決まってるだろう、エーデルワイス」

彼に流されるまま、私はギターを弾き始める。しかし三つコードを弾いたところで、私の指は戸惑いはじめ、ごちゃごちゃにもつれてしまった。指先が無意識に別の音を求めているんだ、と彼は言った。

「つまりな、お前自身だって、ひとりの観客なんだよ」と彼は言った。「だから正しい音で練習しないと、いざつてとき正しい音が出せなくなるんだ。今のお前みたいに」

「今の私みたいに」と私は繰り返した。

「そうだ」と彼は言った。それから坂本は頷いて、後はもう大丈夫だろう、がんばれ、と言い残してどこかへ行ってしまった。私は楽譜を見て、慎重に指を確認しながら新しい音でエーデルワイスを弾いた。それは今までとはまったく違った種類の音楽だった。そして私が触れているのは、今までとは全く違った種類の楽器だった。私は三回に一度チューニングして、エーデルワイスを弾き続けた。弾くたびに周りの空気が少しずつ暖かくなるような気がした。その温度の変化を初めに掴まえるのは、六弦に触れる親指の先だった。

今日のハローワークでは成果がなかった。水道屋の図面管

理の仕事なんて手先が不器用な私には務まる気がしないし、農業用肥料の発注の仕事だって、覚えることが多くて大変そうだ。ハローワークの職員さんは「とりあえず面接だけでも受けてみたらどう？」と言うが、適性があるとも思えない仕事の面接なんて、お互いに時間を無駄にするだけだ。何かの間違いで採用されてしまったら、今度は金銭的損害にもなりかねない。「君は正直すぎるね」と職員さんは言うのだが、正直であることのいったい何がいけないのだろうか？

「私はただ、これ以上悪くなりたくないだけです」と私は言った。職員さんは白髪交じりの短髪をぼりぼりとかいて、分かった、来週になればまた新しい求人が来るから、また来週ね、と言った。私は頷いて帰った。

家に帰ってきた私はテーブルに向かつてパズル雑誌を広げ、ちびた鉛筆でピクロスパズルをやっていた。数字を頼りにマス目を埋めていく古典的なパズルは、頭の体操に丁度いい。

あと数マス埋めれば絵が完成するところまで、大学時代のサークル仲間で飲み友達の晴香が電話を掛けてきた。

「もしもし、裕子久しぶり」と晴香が言った。

「どう、再就職先は見つかった？」

「まだ……っていうかデリカシーなさすぎ」

と私はため息をついた。

「あはは、ごめんごめん。じゃあお詫びも兼ねて今晚私の家

で飲まない？ 今日と明日、旦那出張でさ、ちよつと寂しいんだよね」

私は空になったコーヒーカップを流しに片付けながら、いいよ、三十分でそっち行くから待ってて、と返事をした。それからまたテーブルに向かつて、ピクロスパズルの大詰めに取り掛かった。

ほどなくして、すべてのマス目が埋まる。雑誌を目から離してみると、それはどうやら馬の横顔のようだった。余計なところを塗ってしまっていたらしく、頬に小さなほくろのある、不細工な馬だった。

晴香が旦那さんと二人で暮らす家は愛野駅のすぐ近くにある、いわゆる新興住宅地に立つ三階建ての一軒家で、外壁は目に鮮やかな水色をしていたが、晴香はそれを空の色だと言いつつ張っていた。私はその壁を赤み始めた遠い夕焼けの中で見ながら、今朝見た夢のことを思い出していた。あの窓から見上げる混ざり気のない空は、ちょうどこんな色をしていたような気がする。あまりにも理想的な、実在しない空の色。

玄関で迎えてくれた彼女はモスグリーンのセーターにジーンズ地のスキニーを履き、そして左手の薬指に銀色の指輪をはめていたので、私は夢の中の老婆のことを思い出して一瞬ぎよつとした。

「いらつしやい、よく来たね」と晴香は言った。「はやく上がってよ、イタリアの美味しいワインとおつまみと、実はホ

ラー映画も、何本か借りてあるんだよね。裕子、好きでしょ？」

「別に好きじゃないよ。ホラーなんて嫌い」  
と私は言った。「でも、本当に上がってもいいのかな。隆史さんに悪くない？」

私を玄関に取り残したまま廊下の奥へとずんずん進んでいく晴香の背中を見て、私は言った。  
「裕子ったら、何言ってるのよ。私が裕子を呼んだんだし、この家は私の家でもあるんだし、それに旦那だって、裕子がいる方が安心するのよ」

「うん、じゃあ、お邪魔します」と私は言った。  
靴を脱いで揃え、用意してもらったスリッパに履き替えて

晴香の後に続き、廊下の奥から二番目のドアを開けてリビングに上がる。リビングの隅にベビーベッドが置いてある。私の部屋にあるダイニングテーブルとはまったく逆の白樺のようなオフホワイトが、木目調の部屋の中でどこか浮いている。テレビの前のソファアに腰掛けて何となく見ていると、気が早いけど買っちゃった、と隣に立ったままの晴香が言う。

「子供ができる見込みなんて、まだ当分ないんだけどね。この間も、旦那と二人で産婦人科に行つて、不妊治療の話聞いてきたところ」

見込み、という言葉が、胃の底に重く響いた。晴香は結婚前には小学校の先生をしていて、今は近所の塾で小学生に国語と算数を教えている。結婚したら、子供は最低三人は欲しい、というのが大学時代の彼女の口癖だった。これから継続

的に体質改善とか試していくんだけど、まだまだ先は長そうかな、と晴香は伏し目がちに笑った。

「私も再就職できる見込みないなあ」と私は眩くように言った。「仕事辞めちゃったの、失敗だったかなあ」

「何言ってるの、あんな会社辞めて正解だったって。仕事辞める前の裕子、なんか変だったもん。どこ見てるか分からないうって言うか」

「そうかな」と私は言った。

「そうそう。こんな状態の裕子をスキーに連れて行ったら、すべての障害物にぶつかってごろごろ転がって行って、でっかい雪だるまになっちゃうかもって、みんなで噂してたんだよ」

「何それ、冗談にしても酷くない？」と私は笑いながら言った。「そりゃ、私、晴香ほど上手くはないけどさ」

「それくらい酷かったことだよ。あのとときの裕子は」と言って晴香も笑う。「なんか懐かしいね。飲むつか、お酒入れてくるね」晴香がキツチンの奥へ引つ込むのを、私は目で追いかけている。

あのとときの私は、どこを見るか分からなかった……私は胃の底が痛むのを感じながら、頭の中でそう呟いた。あの頃はやるべきことが多すぎて、毎晩夢に見るくらい多くて、だからいつでもきよるさよろしていたんだと思う。今は見るべきものが何もないから、目の奥が小さな空洞になってしまっている。果たしてこれは、本当に進歩なんだろうか？

私と晴香はスキーサークルの同期で、初雪が降るとゲレンデを求めてどこまでも遠征したものだ。肝心の腕前は私の方が晴香より二歩も三歩も劣っていて、晴香が難しいコースを持ち前の大胆さでぐいぐい進んでいく一方で、私は真つ直ぐ滑り降りるのも一苦労という有様だった。晴香に言わせれば私には思い切りが足りないのだそうだが、それについては結局何も分からないまま、とうとう大学を卒業してしまつた。

「お待たせ、さあ、飲もう飲もう」

晴香はトマトのサラダとバジルのスパゲッティとカットグラスに入ったワインをソファの前のローテーブルに並べてから、リモコンを操作し、テレビをつけた。テレビでは六時のニュースが流れていて、巷で流行しているウイルスの東京での感染者数が再び増加傾向にあることと、次の感染爆発が三か月以内に起こるであろうことをグレーの背広を着た医者のお爺さんが熱弁していた。画面越しに唾が飛んできそうなほどの激しい口調で、彼は何かについて怒っていた。それは罪のない人々に不自由な暮らしを強いるウイルスに対する怒りかもしれないし、自粛要請に応じない東京都民に対する怒りかもしれないし、世界中の無防備な人々に対する怒りかもしれないし、あるいは自分自身の無力に対する怒りなのかもしれない。とにかく彼は怒っていた。

「私ね、この間冷蔵庫と喧嘩したの」テレビを見ていた晴香が唐突に言った。頬がテレビに照らされて、青白く光っている。

る。「つまりね、冷蔵庫をこんな風に怒鳴りつけたのよ。お前なんかもう、絶対に買い換えてやるから買って。買ってからまだ一年も経ってないし、どこも壊れてないのによ。おかしいでしょ」

「どうしてそんなことになったの？」と私は尋ねた。

「別になんてことない話なのよ。ある日私が家に帰ってきたら、冷蔵庫が開いたままになっていたの。甲高い音でアラームが鳴り続けて、中に入ってた卵とかお惣菜のパックとか生野菜の表面に汗みたいに水が浮いてて、それが川みたいになって流れて床にこぼれてたの。それを見てるうちに、私、なんとなく、私はもうこの冷蔵庫を愛することはできないんじゃないかって気になったの。それで、買い換えよう、って」「なにそれ」私は笑った。「冷蔵庫もとんだとばっちりだね」「本当にね」晴香も笑って言った。「そもそも、私がちやんと扉を閉めなかったのが悪いのにね。でもね、カッとなってるときって、なかなかそのことに気づけないのよ。この人だつて……」

私と晴香は、同時にテレビに目を向けた。テレビにはあのグレースーツの医者はまだ映っていて、『ん』の字のようなカーブを指先で荒っぽくなぞりながら、やはり唾を飛ばしていた。

「私、ときどき思うのよ。ウイルスだって、なにも人を殺してやろうと思つて増えてるわけじゃないのになって。旦那に言わせると、ウイルスは生き物じゃないからって言うんだけ

ど」

「うん？」と私は少し考えてから「いや、それは私も旦那さん側かも。ウイルスにまで感情移入してたら仕方ないっていうか」

「ん、そうかな？」

「上手く言えないけど、ほら、私や晴香の目線に立ったら、結局ウイルスっていうのは厄介な敵なわけじゃん？ もちろん想像力をはたらかせるのは大事なことも知れないけど、そんなところにまで想像力をはたかせてたら、どうしようもなくなる？」

晴香はそれについてしばらく考えていた。その間にニュースは切り替わり、赤ちゃんパンダを見に動物園を訪れる人の群れを映し始めた。グレースーツの医者はスタジオを追い出されて、無害そうな顔をしたニュースキャスターが皮肉染みだ半笑いのような表情で動物園の開園時間について説明している。開園時間は九時半から十七時、休園日は祝日を除く毎週月曜日です。

その映像を見ながら私は、東京なんて遠い町だよ、といつか坂本が言っていたのを思い出した。

「そりゃ、東京についての情報ってのはいくらでも入ってくる。テレビを点けてもラジオを聞いてても、ネットを見たって東京の情報が溢れてるだろ？ でも情報が多ければ多いほど、そこは俺からは遠い場所なんだって、そういう気がするんだよ」

「あなたにとつての私みたいに？」と私は言ってみた。彼は少し考えて冗談だと思つたらしく、あほか、とだけ言つてそっぽを向いた。午後の学年集会で、進路の話がされたばかりだった。進路主任の岡崎先生が「進路は皆さんの人生を著しく左右する選択ですから、たくさん情報を集めて、慎重に判断しましょう」と言つた。イチジルシク？ 私はその大袈裟な言葉を、脳内で変換することができなかった。

「坂本は何になりたいの、将来」と私は彼に聞いた。

「俺？ そうだなあ……」彼は少し悩んだ。たぶん、彼は自分の夢に悩んでるわけじゃないだろうと私は思つた。ただ彼は、それを私に話すかどうかで悩んでいるのだ。そしてそれは、彼が私にとつて遠い存在なのだと思うれなくなつたからだ、というのは少し考え過ぎだろうか？

「まあいいか、言うわ。俺は将来、弁護士になりたいと思つてる」と彼は言つた。

「弁護士？」と私は驚く。彼はまったくそんなタイプには見えなかつたのだ。「なんで、また」

「別に深い理由があるわけじゃないよ。弁護士になれなかつたら、自衛隊でも、警察官でも、プールの監視員でもいい。ただ俺は、自分の周りの世界を守りたいんだ。正しい人間が正しいことできるような場所を守りたいんだよ」

そういう風に語る彼の目は細かく震えていて、それが緊張のせいだと気づいたのは、だいぶ後のことだった。

「でも坂本って、私が髪留めの位置逆にしたのに気づかない

よね」と私は意地悪を言つた。

「いや、気づいてたよ？ でも、間違えただけかと思つてさ」「はあ？」と私は言つた。「髪留めの位置逆にするなんて間違ひ、素でするわけないじゃん。逆の手で留めないところはならないんだからさ」

「そう？……あ、なるほど、確かにそうだ」

「坂本は想像力が足りないね」と私は言つて笑つた。

坂本にとつて、正しさとはなんだつたのだろう、と私は思つた。それって、彼のやり方で見つけ出せるものなのだろうか？

私はローテーブルの上のワインを手に取り、ぐいと一息に飲み干した。テレビの画面は再び切り替わり、いつも通りのバラエティ番組をやつていた。芸能人が近所のレストランを訪ねてまわり、大袈裟にリアクションをする長寿番組で、食事シーンの間左下に、思い出したように「※感染対策を徹底した上で撮影を行っています」と出てくる以外は、昔とまるで変わらなかつた。

「かあつ、このバジルのスパゲッティは絶品だね。まさに、黄金のデュラム・セモリナって感じ」テレビのリアクションを真似て、晴香が言つた。「映画見よつか、とびきり怖いって評判のやつ、借りてきたんだ」

私は頷いて、バジルのスパゲッティを口に運んだ。黄金のデュラム・セモリナがどうこうは分からなかつたが、それは確かに美味しいスパゲッティだった。

どうやら映画を見ながら眠ってしまったらしい。私はまた、あの『コ』の字型の部屋の中にいた。ダイニングテーブルの一面に晴香が座って、カットグラスからコーヒーを飲んでる。テーブルの真ん中にはトマトのサラダも置かれている。私は窓から街を見下ろしている。

映画館の前に、あの三人組の姿がある。私は耳を澄ます。音は拡大されて、この部屋のすぐ近くまで届く。

「それじゃあ、坂本の死を悼んで、乾杯」

彼らは片手に掲げ持った安酒のカップを打ち合わせた。かざらんと、小気味のよい音が鳴り響いた。彼らの着ていた真っ黒いスーツが喪服であることに、私はやっと気がついた。

「しんみりしてたって、あいつは喜んだりしないからさ、ばあつとやろうぜ、な」

背の高い男がそんなことを言っていて、思い切り酒を煽った。悪酔いする酒の飲み方の見本のようだった。そんなことをするから、関係のない人に迷惑を掛けることになるんだ。そんなことを考えながら、私は泣きそうになるのを堪えていた。やがて、ピンクのカーディガンを着た老婆が道路の向こうからやってくる。車道を渡りながら唾を吐き捨て、悪態をつく。

「へん、お前たち、乱痴気騒ぎをするならどっかよそでやんな。誰の用いだから知らないが、お前らの友達だっていうんなんら、どうせくだらないやつだったんだらうね。死んでくれて

本当に良かったよ」

私ははっとした。三人の男たちは、老婆が立ち向かってくることに驚いて動けなかったわけじゃない。もちろん、安酒に動けなくなるほど酔っていたわけでもない。ただ、自分自身の根源を揺るがすほどの激しい怒りに身体を震わせていたのだ。俺たちの親友を愚弄するなら、絶対に許さない。そんな殺気のこもった冷たくて熱い視線が、老婆の身体を三方から射た。

老婆のバックドロップと立ち上がる歓声。晴香も立ち上がり、私の隣で街を見下ろしている。やがて老婆は彼らに背中を向ける。襟首を掴まれ、アスファルトの上に引き倒され、三人の男たちにもみくちゃにされる。

晴香がいてもたってもいられないという様子でエントランスの方へ走りだそうとするのを、私は袖を掴んで引き留める。

「何で止めるの？」と晴香は言った。

「何で行くの」と私は言った。

「助けなきゃ」と晴香は言った。

「助からないよ」と私は言った。

「でも助けなきゃ」と晴香は言った。

「今から行っちゃって、間に合わないよ」

「でも」

「晴香らしくないよ。冷静になって」

「……」晴香の身体から、すつと力が抜けていった。

「ねえ、聞いてくれる？」私は彼女の袖を離した。「今朝、

この夢を見たときはね、私、自分はずごく冷たい人間になつたんだなつて思つたの。夢つて、つまり私の脳が作り出す映像だからさ、私はいわば当事者で、正義の味方がいて、それが悪い人たちに殴られて、どうにでもできたはずなのに、私は何もしなかつた。でもさ、晴香の話聞いたからかな、本当は正義の味方なんていないんだつて分かつて、私はこうしてここでただ見ているだけなのが本当は正しくて、だつて私、無関係なんだもん。ただの観客だつたのよ。私の夢の一番の観客は、私自身なのよ。つまりね、三人の男の子たちには、三人の男の子たちなりの事情があるし、カーデイガンのお婆さんには、カーデイガンのお婆さんなりの義憤があるの。だから、私にはどうすることもできないし、どうするべきでもないんだなつて思つたの。ねえ、晴香、これつて、何かおかしいかな？」

こうしている間にも、老婆は手の指を一本ずつ折られていく。若竹の枝を折るような音が、運動会の空砲のように広い空を響いて渡る。混ざり気のない空が、その音から私を守っている。私を完全なる外の世界に閉じこめて、まるで頭蓋骨が脳を守るように、私を守り続けている。

男たちが老婆の左手から指輪を抜き取つた。晴香が息を飲むのが分かつた。晴香の左手にも、銀色の指輪が光っている。

「これ、売っちゃまおうぜ。酒の飲み直しくらいはできるだろ」男の一人が笑いながら言い捨てた。晴香の唇の先が震えているのが分かつた。唾を飲みこむ音がした。

「裕子、あなたは確かに正しいのかもしれない。けど、私、やっぱり行くね」と晴香が言つた。「私、裕子が言うような正しさのことなんてぜんぜん分からないけど、私が信じているものは、やっぱり守らないといけないと思つうから。このまま目を逸らすのは、自分が信じているはずのことに對して、責任を果たしていないことだと思つうの」

男たちはもう行つてしまふところだつた。晴香はまた、ゆつくりとエントランスの方に向かつて歩き始めた。「もう間に合わないよ、みんなどこかに行つちゃうよ」と私は言つた。「これは裕子の夢なんでしょ？」と晴香は言つて、振り返つた。「じゃあさ、裕子は私のことを信じてみてよ」

「え？」

よく意味が分からないでいる私のすぐ横を、全速力で晴香が駆け抜けた。リノリウムの床を蹴り飛ばす激しい音と振動が、この部屋だけではない、ビル全体を揺らしている。上体をぐつと落とし、全身をばねにして片足を軸に跳躍すると、彼女の長い足が私の頬のすぐ側を横切つていく。高らかな掛け声と共に、晴香は思い切り窓を蹴り飛ばす。澄んだ水面に泳ぐ陽射しのような亀裂がガラス一面に広がり、粉々になつて落ちていく。彼女は飛んだのだ。翼のない鳥になつて、その高さから飛び出したのだ。その背中のは後ろを、ガラスの破片の一部が、一呼吸遅れて追いかけていく。

割れた窓から身を乗り出して落ちていく彼女の姿を見つめていた私は、ふと我に返り、玄関ドアを開けてエントランス



へと出ていく。灰色のコンクリートに囲まれた、息が詰まりそうな灰色の空間の中に坂本がいた。

「祈るんだよ、裕子」と坂本は言った。「君にできることはそれだけだ。少しでも世界が良くなるように、ここで祈るんだよ」

「坂本」と私は言った。「私、やっぱり冷たいんだよ。晴香みたいに飛び込むことも、坂本みたいに今あるものを大切にすることだってできないもの。自分の居場所に文句を言つて、ただそれだけなんだよ」

坂本は首を振った。「でも君は、あのカーディガンのお婆さんを殺さなかったじゃないか。酷い音のエーデルワイスでも、弾き続けるのを止めなかったように」

「あれは、偶然そうなっただけでしょ？」

「夢の世界に偶然も必然もあるものか」と坂本は言った。「じやあ、俺がここにいるのも偶然か？」

私は少しためらってから、首を振った。窓に向かつて跳び蹴りをかます晴香の姿が、脳裏をよぎっていた。「違う。私、あなたのことが好きだった。だからあなたは、今、ここにいらる」

「初めて聞けたね、その言葉」と坂本は笑った。

「そうだったっけ？」

「実はね、君が好きだと言ってくれたら、俺は受け入れるつもりでいたんだよ」

「なにそれ、ずるい」

坂本は笑った。「祈るんだ、裕子。この世界が少しでも良い方向へ変わるように」

「うん、ありがとう、坂本」と私は言った。

「坂本のギター、ちゃんと弾くね」

坂本はにつこりと笑って、風の中へと消えていった。私は静かに目を瞑り、祈った。あの日弾いたエーデルワイスが、正方形のエントランスの中を響いていた。

目を覚ましたとき、まだ外は薄暗く、テーブルの上には飲みかけのワインとサラダが半分残っていた。目を擦り、つげばなしになっていたテレビにピントを合わせると、デジタル数字が五時五十八分を示していた。普段よりも三時間以上早い時間だった。

私は食器をキッチンに下げ、残ったワインを流しに捨て、サラダボウルのプチトマトをひとつだけ摘み取ってから、ボウルにラップを掛けた。それからケトルでお湯を沸かして、二人分のコーヒーを淹れた。

ローテーブルに二つのコーヒーカップを並べて置き、眠ったままの晴香の閉じたまぶたに向けて語り掛ける。

「ねえ、晴香。私、二か月前に仕事辞めて、再就職が思ったように上手く行かなくて、焦って実家を飛び出して……失業保険と貯金を切り崩して何とか生きて、晴香みたいに自分で何でも決められるわけでもないし、人に頼るのも上手くないし、我ながら、要領の悪い生き方してるなって思うけど

……だからさ、私、今度はなりゆきに任せてみようって思うんだ。今日またハローワークに行って、あの職員さんに謝って、一番最初に勧められた会社に面接に行って、それから、世界のために祈ろうって思うんだ」

晴香は目を覚まさなかった。私はそのことに、少しだけ安心した。私は祈る、なんて宣言にはあまりにも実体がなく、力もない。晴香のようなまともな人間に聞かれたら、鼻で笑われるのがオチだろう。いや、晴香は優しいから笑ったりはしないかもしれない。でも私の信じることを、晴香もまた信じられるとは限らない。

それでも私は信じている。正しい祈りは、世界を正しい方向に変えるだろうということ。そしてそのおこぼれが、少しずつは私にも降り注いでくれるだろうってことを。

だから私は祈る。実らなかつた初恋を思いながら、不妊に悩む友人を思いながら、終わりの見えない感染症との戦いを思いながら、ありとあらゆる人と人との争いを思いながら、ただ静かに、祈る。

自分のことなんてどうせなるようにしかならないんだから、その次で良い。

(袋井市)

## 村方始末記

生田 基行

「よてよて、やっかいなことになったもんだ」

天保四年（一八三三年）の七月、日中はまだ暑いなか、庄屋の八郎兵衛はうかぬ顔をして、今年もまた少し不出来な田圃を見つめている。不出来の原因というのは、今年の梅雨明けが遅かったこと、夏先の暑さが不足したことが重なったからではないかと思われた。

「やはり米作りにはお天道さまの暑さと適度な雨が肝心じゃ。日照りばかりでも困るし、降り続ける雨も弱ったもんだで。それにいくら田の草を取ったり、水を切らさぬよう気を配っていても、上手くいかぬことは往々にしてある。台風が来れば一気に稲穂が倒れてしまうし、あとは神頼みしかないとなる。人が努力することに意味がないのか、いや、人の望み通りにゆかぬのがこの世の習いというものか」

八郎兵衛は横にいる二人に聞きとれないほどの声で独り言

を呟いた。横の二人とは、組頭の孫三郎と百姓代の藤蔵である。眺めている田圃は、昨年に続き今年もまた米の生（な）りはよろしくない。それでも年貢は納めなければならない。

ここ、遠江国では、米の減収はあるにせよ、他国のとくに寒い地域に比べればまだマシというものであった。不作が続いたといってもすぐに喰い潰れることもなく、どうにかやっていくことはできた。それに麦や粟、稗などやむなく米に交ぜて、なんとか喰うだけならできないこともない。ときおり伝え聞く、「凶作」といわれる地方では打ち毀し、略奪など、所謂百姓一揆なるものの騒擾が起きている。それは封建体制の根底を揺るがすものと言える。公儀の支配のありかたが問われていた。またこれよりあと、百姓町人ではなく、天保八年（一八三七年）には大坂町奉行所与力であった大塩平八郎

が窮民救済のため叛乱を起こしたが、大塩が公儀の役人であったことに、幕府の受けた衝撃ははかりしれないものがあつた。この原因のひとつには、米が貨幣と同じ役割を果たすことができなくなつてゐるということでもあり、これはすでに米経済ではなくなつてゐることの証左でもある。

そのような中、水野家の支配下浜松藩での年貢取り立ては昔に比べ厳しくなつてゐる。八郎兵衛の溜め息にも似た呟きは、これからの農政の先行きを暗示してゐるようでもある。

八郎兵衛の思ひを占めてゐる目下の問題は庄屋としての村方のまとめ、藩に対する百姓の少なからずの苛立ちなど多方面にわたる。そして今度の村方明細のこともある。

それは三日前、藩の普請役から村方の明細を提出せよ、との達しがありその期限はあと七日ばかりの事であつた。

それは「御分間絵図御用村方明細書上帳」といわれ、東海道に面した近在の村々にその年の米収量の石高、街道に面した長さであるとか、家数や村の生活のありようなどがわかるよう書き上げよという指図である。

天龍川を西に渡つて最初の村が中の町村で次に安間村、薬師村、そして八郎兵衛が庄屋を務める橋羽村、その西が永田村となつてゐる。安間村より西の永田村の辺りは南北に長い長上郡に含まれる。その長上郡のうち、東海道に面した四村の庄屋、組頭、それに百姓代が橋羽村の玖遠寺に集められた。そこへ藩庁から、普請役皆川定次郎、杉田与左衛門、鈴木七

太夫の三名と小者五名が来て縷々詳細を話していった。このうち杉田与左衛門は前藩主井上正甫（まさもと）の家臣であるが、その他の二人は水野忠邦の家臣である。その説明書きには十六年前の写しが添えられていた。

十六年前とは浜松藩主井上正甫が江戸でへんな事件を起こし、陸奥の棚倉藩（福島県棚倉町）へ転封となつた年である。しかし正甫は病氣を理由に江戸から出ず、棚倉へ行くことはなかつた。それは氣の病とみなされたのか確かなことはわからないが、正甫には浜松へ戻りたい願望があつたことは明らかである。

そうしたなか井上家としては、領内の管理をはきとさせ水野家へ移管するための検見をしたのであつた。その直後、今の水野忠邦が藩主として、肥前唐津より入部してきたのである。その際、井上家の家臣団はほとんどが棚倉へと向かつたが、一部の家臣（普請役人、郷方役人など三十名ほど）は浜松に残ることとなつた。水野家にしても百姓に慣れた郷方にいてもらうことは得策でもあつた。残つた家臣三十名ほどは、いつかきつと井上の殿様は浜松にお戻りになれるに違いないと考えていた。という風評はあつても、根拠は確かなことではなかつたが或いは、とも思つていた。

この時代、唐津藩は六万石と言われていたが、実質は二十万石もあつたのである。それにもかかわらず、水野忠邦は幕閣に入らんがため、猛烈な運動を展開し、足掛かりとす

べく浜松城に入ること成功したのである。しかし、そのために家臣団は転封によって石高が大きく減り、財政が困難になると忠邦に諫言したが、ともかくも幕閣を狙う忠邦にあつては聞く耳を持つていなかった。となれば、村方からの年貢徴収は増していくのも当然であつた。

八郎兵衛としては、前藩主と現藩主をつい比べてしまうのであるが、井上の殿様の方が百姓にとつては、いくらカマシであつた気がする。

「いまの殿様はほぼ浜松におらず、江戸に定府されておる。幕閣の要職にあると聞いているが、わしらには雲の上のことはよくわからぬ」

と田圃を見ながら八郎兵衛が言えば

「そうさ、この浜松からは搾り取つておるだけのように見えるわい。もう少し領内の事もみてほしいわ。郷方のお役人は話のわかる方だけんども」

と組頭で押し出しの強い孫三郎が言った。

郷方の役人とは、この地域を担当する井沢半左衛門のことをいっている。井沢半左衛門もやはり井上家の家臣で浜松に残つた一人で、村人の話をよく聞き、武家と農民の両者ともに面子をたてるという気配りのできる役人である。

だが、孫三郎が言うように、たしかに以前と比べ年貢の取り立ては厳しくなつてゐる。橋羽村に限つて言えば、米の収量は平年で百十四石であるが、このところ続く梅雨時から夏

の始めの冷害によつて稲の成長が悪く、収量は百石を切つてゐる。むろん百姓は豊かな暮らしができるわけではないとわかりきつてゐるのだが、そういつたことまで書き上げるのか、といった問題までおきる。ただ、ときおり耳にする、東北地方ではあまりの貧しさに自分の娘を売る、などということはこの村ではまず無い。それを思えば、まだ有難いかもしれない。

「藤蔵さん、どう思うかね」

八郎兵衛の問いかけに

「ここは十六年ぶりの検見の前であるけれど、今年の稲の実は具合を早めに鑑定して、ほぼ間違いない石高を載せるしかないでしょう。村をいまいち度見て廻る必要がありますね」

八郎兵衛よりひと周り以上若い百姓代の藤蔵が、やはり稲穂を見ながら言った。

藤蔵は若い物が物の見方がしっかりしており、庄屋の八郎兵衛としても、なにかと頼りにしている。百姓代は、百姓五人組を構成しているその組をまとめる役目である。百姓は百姓代を通して意見を具申することになつてゐる。藤蔵は隙（ひま）を見つけては田畑の生りを見、百姓に声をかけて回るのが習性でもある。そのため、村の隅々まで目を配り、ときには八郎兵衛よりも村方に詳しいこともあつた。

さて八郎兵衛は、書くことだけならばさほど難しいことではないと思つてゐる。ただ、有体に書くことは少し憚られる。それに、藤蔵が言うように今年の検見はこの九月に予定され

ている。その検見で稲穂の実り具合により、今年の年貢の高が決まるとあれば、慎重にならざるを得ない。

かといつてこの村には隠し田も無く、百姓のほとんどが小作であり、潰れ地（百姓が田畑を担保にして借金をし、返済できず作り手がなくなった地）となっている田も無い。八郎兵衛は組頭の孫三郎や百姓代の藤蔵にも談合して明細を書き上げるつもりであった。そのようなことを考えている間に辺りは夕闇が迫り、白い靄のようなものが立ち込めてきた。

その夜、八郎兵衛は、今年の稲の成長具合をおよそひと月ほど前からの観察で、出来はおそらく平年の一割五分は減ずるとみて算盤をはじいてみた。すると九十六石九斗となった。明細書きには一石減じることとして、この数字を頭に入れ、村方明細の長い下書きを作ってみた。書き終わって夜具に入っても、暑さばかりでない寝苦しい夜であった。

翌日、孫三郎と藤蔵は八郎兵衛の屋敷に集まり、いま少し詳細に田の様子を見ることにした。三人が連れだつて街道を歩いて行くと、思ったより強い晩夏の日差しが照りつけるため、時々街道沿いの松林の木陰に入って涼をとらねばならなかった。田圃はその街道沿いの家並みの裏手にある。その田圃では、汗を流しながら小作の茂八や善蔵が夏草を刈っていた。また目を細めてみると向こうには与平もいる。田の畔道に足を踏み入れた三人を見て訝しみながら、茂八が頬かぶりを取り、暑いですなあと声をかけてきて、

「今日はお三方でどうされたのかね」

畦道には与平の女房おはるも田圃の手前の草を刈っている。どこの百姓の女房もみな同じだが陽に焼けて黒い顔をしてい、それがたくましく思われる。

「いやなに、今年の米の出来はどうかと見て回っているところだな」

八郎兵衛が愛想よく答えた。

「八郎兵衛さん、今年も去年に続いてかなり悪そうで困ったもんだだよ」

と茂八が口をとがらせながら言った。

「夏に入る前の冷えは稲の成長に良かアないでね」

茂八と同じように顔の黒い与平も言った。

「そうか、今年もせいぜい九十石どまりか。なあ、藤蔵さん」腕を組みながら、眉間にたて皺を作った孫三郎が言った。

八郎兵衛の屋敷に戻り、手足を井戸水で洗ったあと、座敷に上がった三人は早速帳簿に向かいあうことにした。八郎兵衛の女房のおとしが部屋に入りながら

「お暑い中ご苦労さまにございます」

と言つて三人の前に茶と菓子を手際よく並べていく。おとしは四十を少し回り、やや肥えていてその額からも汗が浮かんでいた。おとしが部屋を出ていくと、八郎兵衛はきのう書き上げた下書きを二人に見せながら筆をとり、

「表書きは後回しにして、条々を箇条書きにしていけば良い

かな、まず……」

一、当村往還通家並百八拾五間（三三六<sup>五</sup>）之内家居飛々ニ、  
參拾壹軒御座候

「橋羽村の長さとしては、もう少し長いではありませんか」

と書付を見ながら藤藏が言った。

「いやなに、家が連なっているのがそんなもんだ。じつさい  
東の薬師と西の永田までとなると、ざっと倍くらいになっ  
てしまうで」

したり顔で孫三郎が言った。

「では、どちらかといえば過小に見立てているということだ  
すか。家数はそのままでもよろしいようですね」

と藤藏が言えは、

「さよう、小さな村で皆が一所懸命に米作りなどに励んでい  
ることを書き記すのだよ」

八郎兵衛が諭すように言った。次に

一、用水 水元……

と書き、下書きが空白になっているのを見ながら八郎兵衛  
が

「はて、あの市野村を所領している旗本は誰だっけかな？」

「ああ、それは北條……ええと、新八郎って御仁ではなかつ  
たか。顔を見たことも無いが」

と孫三郎がちよっぴり不機嫌そうに答えた。

「おおそうか、そうだったな。年貢だけは取っておるだな」  
と言いながら八郎兵衛が筆をすすめた。

一、用水 水元北條新八郎様御知行所市野村溜池より引申  
候、右村迄道法參拾町（三km余）

「これは昔から変わることが無いな。ただ北條さまが移封す  
ればどうなるのか」

と孫三郎が言ううと

「いえ、旗本は移封することはありませんよ」

と藤藏が言った。そのとき藤藏は、そういえば前の井上の  
殿様は陸奥の国に行かなかったことを思い出した。転封とな  
れば一族郎党ともどもの仕度からその費（つい）えなども大  
がかりなもので、大名とはそれなりに大変なものだとも思  
った。

つぎに、八郎兵衛は

一、村内呑水堀井戸二御座候

と書いて

「ほかには何か呑み水に使っているものがあるかな。たとえ  
ば雨水を濾して使っているとか？」

と言った。

「いや、雨水は使わんでしよう」

と藤藏が笑いながら言ううと

「まあそうだよな」

と孫三郎も二人のやりとりを聞いて笑っている。

続けて八郎兵衛が

一、農業（のうなりわい）の間、男はそうりわらし（草履草  
鞋）、女ハ木綿（ゆう）業仕候

これを見て藤蔵は、そうか生活に刻（とき）を無駄なく使  
い生きているのだと村人に感心しながら、だがこの世にはそ  
うでない、農とはかけはなれた人間がいることもわかっている。  
ここまで生活を切り詰めているのだから、お上は年貢の  
事をもう少し勘案してくれたらどうなのかと思つたが、口に  
出すのはやめておいた。隣に座っている孫三郎は、うんうん  
と頷いている。また、つぎに

一、五穀之外時分の野菜ハ勿論、其外何ニ而茂作不申候

と八郎兵衛が書くと、思わず藤蔵が

「五穀のほかは野菜も作らないつて、これ少しヘンじゃアな  
いですか？」

と言うと孫三郎は

「いやア、このくらいに書いておかないと、村に何か蓄えて

もあるのではないかと疑われるでな」

「へえ、そんなもんですか。そうすると実のところは、あま  
りまっとうに書かないほうがいいつてもんですか」

藤蔵が言う

「そりゃそうよ。お侍さんには野菜のことなんかわかりやし  
ねえよ」

と孫三郎が言った。横で聞いていた八郎兵衛が苦笑しなが  
ら続いて

一、竹木之類船積筏下ケ等無御座候

この村では大きな川を使った筏下りも船も無いので当たり  
前のことであるし、なければ書く必要も無いのではないか、

とも藤蔵は思っている。がやはりこれが公の書き方であるの  
かと、首をひねりながら書付を見ている。さらに藤蔵が横目  
に孫三郎を見ると、いつもとは違つてかなり真剣に八郎兵衛  
の話を聞いている。それは、ひよつとしていつかは自分もこ  
のようなことをしなければならぬかもしれない、と思つてい  
ようでもある。組頭は庄屋の補佐もその任務である。だが、  
百姓代である藤蔵は組頭にはならないし、八郎兵衛の立場に  
もなるまいと思つている。次に

一、当村名物、名産、名所、旧跡無御座候

と八郎兵衛が書くと、孫三郎は

「ほお、こはほんとになんにも無い所か。侘しい所だなア」  
と言つたので三人とも口をあけて笑つた。

八郎兵衛は

「まあ、探せば名所旧跡の一つくらいはあるうが、書きつけ  
るほどのこともあるまいて」

公の文書とはいえ、孫三郎はなんと侘しくなつてきた。

一、当村山川無御座候

一、当村山獵人（やまさつびと）渡世之者無御座候  
こう書いたあと八郎兵衛が二人を見て

「この村には危ない人間はいないということがわかるな。と  
いうことは見慣れない者が入ればその様子を見て、村役が尋  
問するということになるで。まあ減多なことは無いがな」

「八郎兵衛さんの言うとおりで。呼んでくれればその時には  
わしも行くで」



と孫三郎が少し楽しみに言った。だが実際には、村を東西に延びている街道には、昼日なかには様々な人間が通る。問題は夜間である。このころ、村境には粗末な番小屋があり、村人が三人ずつ交代で詰めることになっている。春から秋にかけての季節はいいのだが、北風が吹くころともなればとくに気を配りながら、深夜まで五ツ（八時）、四ツ（十時）、九ツ（零時）と一刻（二時間）ごとに拍子木を打ち、村中に火の要領をさせる。これがなかなか大変であった。家に帰るのは九ツ半（午前一時ころ）前となり深夜である。こういった毎日の行事ごと夜番帳に書き記し、それぞれの名前を残しておく。余程のことがない限り交代することもなく、村人はこうして村を守っている。これも御法度のひとつである。

一、浜松江之助郷（宿駅への課役）二御座候

これもまた、その時になると村人にとっては、重く苦勞する役回りである

「浜松への助郷だなんて、こんな決まりはいつまで続くもんじゃろうか。浜松のご城下だけでは手が足らんだかの？」

孫三郎が不満げに言う。

「わしもそう思う。だが御法度である限りいたしかたない。村方に住み着いた宿痾みたいなもんだ。農が煩瑣なときにはまことに困ったもんだの。刈入れの後ならまだしも」

と八郎兵衛も言った。年貢と課役を考えたそのとき、藤蔵は近ごろ北の方の百姓が不穏な動きをしているらしい、と耳に入っていることも思い出した。そういうことを庄屋である

八郎兵衛も知らぬはずはないと思うが、胸中はわからない。いつそのこと、それを聞いてみようかと思ったが、村方明細書きが先であると思ひ直した。

「では、肝心な最後の条になるが」

と言いつつ八郎兵衛は

一、此巳年貢用米収量見立九拾五石九斗参升二御座候

孫三郎がこれを見て

「ほお、八郎兵衛さん、細かく見立てたものだな。算盤をいれてみたのかの？」

「ああ、孫三郎さんに言っただけでなかったが、昨日藤蔵さんがうちへ寄って、勘定をした数を出してくれたので、二人で今いち度あたってみたらこんなふうだった。おそらくこれより少しは出目があると思うが。まあ当たらずとも遠からずとてこじやないかな」

「ほお、じゃあ悪くてもこれ以下は無いとみてよろしい訳だの。まあまあ昨年並みか」

と孫三郎は言ったが、藤蔵は孫三郎に話していなかったことに少し気がひけた。

「まあ、この条がいちばん肝心なところで、わしらも頭を悩ますところよ。これをお役人がそのまま認めてくれればいいが、簡単ではないかも知れんな、うん。どうだな、孫三郎さんそれでよいかの」

と八郎兵衛は明るく言っつて、孫三郎も

「藤蔵さんも勘定が達者でなによりじゃの。次の時にもよろ

しく頼むで」

と言ひ、憮然とした様子はなかつた。藤蔵はほつとして「ええ、できるかぎりのことはいたします」

と簡単に答えて、余計なことは言わずに控えておいた。

それでは、と言ひながら八郎兵衛が表書きを

「御分間絵図御用村方明細書上帳 橋羽村」

としたため、あと書きには

右五街道御分間御絵図御仕立

御用二付往還通之儀御尋二付

書上候通相違無御座候 以上

天保四年巳七月

橋羽村

組頭 孫三郎

百姓代 藤蔵

庄屋 八郎兵衛

御普請役

皆川定次郎様

杉田与左衛門様

鈴木七太夫様

このようにして村方明細を書き上げた三人は、おとしが新しく淹れた茶を啜った。

つぎの日、八郎兵衛と孫三郎は村方明細書きを持って、郷方役人井沢半左衛門の屋敷を訪れた。半左衛門の屋敷は思ったほどに広くなく、門をくぐつて玄関口前まではほんの狭い庭になっていた。その庭に秋を告げる萩の白く小さな花が遠慮がちに咲いている。訪いを入れると小者が現われ、玄関右の小部屋に案内された。通された小部屋に座していると、奥の座敷からは男二人であろうか、話の前身はわからぬが声が漏れ聞こえた。じきに小者が茶と菓子を運んで来、今少しお待ちをと言つて下がった。八郎兵衛と孫三郎は茶菓を口にしながら、世間話をするこゝもなくじつと待つていた。

やがて四半刻（三十分）ほど待たされたあと、小者に奥へと案内された。廊下の途中で、奥から出てきた、年のころ三十ほどの男とすれ違つた。二人は廊下の端に寄つて辞儀のあと顔を上げて見ると

「おお、そちは八郎兵衛どではござらんか」

と声をかけられた。驚いて二人が見ると、先般の書き上げ説明に來た普請役杉田与左衛門であつた。二人は慌てて、これはどうも先日はご足労様にございました、と頭をもう一度下げた。

「どうであるかな、村方明細は出来上がったでござるか。なかなか面倒をかけて相済まん」

と労わるように与左衛門が言つた。もともと井上家の家臣で普請役にある与左衛門は、郷方の役人とも政務のうえでは繋がりが深い。そのため農事にも詳しく、農民に対する態度

にも蔑むような言葉は使わない。

「はい左様でございます。ただいまその明細書きを持参いたしました次第です」

と八郎兵衛が言う

「おお、そうか、それでは半左衛門どのと一緒に目を通すことといたそう」

そう言つて与左衛門は帰りかけたところをまた奥の部屋へと戻ることにした。部屋では井沢半左衛門が、戻つてきた与左衛門たちを見て、どうしたのかという顔付きだったが、すぐ合点して三人を招き入れると

「そうか、村方明細を書上げたのだつたな。どれ拝見いたそう。その前に茶など持つてこさせるのでくつろいでいたきたい」

と言つて小者に茶など持つてくるよう指図した。すると間もなく年の古い女中が茶と菓子等を皆の前に並べ辞儀をして、障子は開けたまま去つて行つた。

井沢半左衛門は八郎兵衛からそれを受け取り早速目を通しはじめた。時々目を止めてうむうむと言いながら、半左衛門はじつと読んでいる。それを八郎兵衛と孫三郎は畏まつて眺めている。井沢半左衛門は、日ごろ外にばかり出ている郷方役人らしく色浅黒く精悍な感じがする。年のころは杉田与左衛門とほぼ同じ三十ほどになると思われた。先ほどはどんな話をしていたのかわからぬが、与左衛門とはかなり近い間柄のように思えた。

読み終えて井沢半左衛門が

「まず、橋羽村とは街道に面した長さがこの程度なのか。なにか、もう少し長いような気がするが、如何か？」

と問われ、八郎兵衛が

「はい、おそれながら、家並みのあるところだけで書き記したものでございますので、その程度でございます」

「左様か、あまり大きくはない村とは心得ているが、あらためて数字を見るとこのようなものか、うむ。次に用水はかなり遠方からとっているようだが障りはないか？」

「はい、できればもう少し近いところの小川の流れなどがあれば申し分ないのでございますが。なにぶんにも、そういったものがないので台風での大雨の後や、逆に旱魃のときなどは難儀いたします。時々は畔の土手なども修理に手がかかります、はい」

と今度は孫三郎が言つた。

「なるほど、村の東に天龍川の支流があるが、そのあたりから水を引くことも考えなければならぬ。ちよいと流れがややこしい川だが、そんなに難しいことでもないと思われるがな。むろん今すぐどうこうするということではないが」

と農事に詳しい井沢半左衛門は灌漑用の引水を考慮しているようであった。

「それから、この村には名物などにもござらんか？ それに新田を開墾するような原野も全く無かつたであらうか？」  
矢継ぎ早に聞いてくる井沢半左衛門の質問に村役は、あら

かじめ考えておいた言葉を繋ぎながら答えた。

「はい、名物や名産などはとくにこれといってございませぬ。あえて申せば、街道の松並木くらいが、夏は日差しを和らげ冬は風を多少なりとも防いでくれる、貴重なものかと思われる程度にございます。その街道から南に入った玖遠寺はどうかと思いますが、開山して五百年ほどでございますから、旧跡と言うほどでもないかと存じまして」

と八郎兵衛が、世辞を込めた松並木のほかには、我が村には特筆するのはほんとに何も無いという顔で言った。あるのは、街道筋にはありふれた、なんの変哲もない酒屋、飛脚屋（地元では状屋と呼ばれていた）、鍛冶屋、青物屋、魚屋であつて、五穀の農作とは違い、年貢米を納めることはない小商いの店である。それらは諸座にかかる運上金を一定の賦課金として納めるのであるから、米を貨幣と同じとみなしている武家や百姓とは考え方も違っている。

「あと、開墾ができるかどうかわかりませぬが、その玖遠寺の西南に池とはまた違う、ちと厄介な沼があります。広さはわかるのですが、深さがよくわかつておりませぬ。竿を入れるとどこまでも潜ってしまうのです。これの水を抜き、どこからか土を入れ干拓して開墾となると、どれほどの人手、労力それに資金がかかるかは定かではありませぬ、はい」

と孫三郎が開墾するならばこしかないと説明をした。

「うむ、その沼のことは承知しておるが、干拓開墾にあたいするかどうかは、いちど手を入れてみなければならぬかも知

れんな。頭に入れておこう。さて、これが肝心なところだが、今年の見立て米収量は九十五石ばかりとなるのであるうか？ 昨年に続きあまりかんばしくないと思されるかな？」

「はい、これは既にご承知のことと存じますが、梅雨明けが遅かったことと、その後の暑さが思うように来なかったことが原因と思われる。天候の不順はいたしかたのないこととございます」

と八郎兵衛が言った。

「そうか、与左衛門どの、どう思われますかな」

と井沢半左衛門は横にいる杉田与左衛門の考えを聞いてみた。与左衛門はすぐには答えられず、腕を組み変えたり、ときおり天井を見上げ、暫く考え込んだ。そのあと、逡巡するような、うーむと溜め息まじりの声を出し

「まあナニだな、今年は昨年と似たような天候であるゆえ、これはやむをえんことと申すものでござろうか。それに算盤も入れていることだし、もっと増やせと言っても無いものは無いであろうから、うむ、いたしかたないことであろう。橋羽村は永田村や北島村に比べ耕す田が少ないことでもあるし、ま、それで手を打つしかあるまい。ま、そんなところではないかな、半左衛門どの」

それを聞いて八郎兵衛と孫三郎はほっと息ついた。そして冷えた茶をがぶりと飲んで喉を潤した。八郎兵衛は普段と変わらない落ちついた様子で話しているが、孫三郎はやや緊張の面持ちであった。

「では、橋羽村の村方明細はこれで良しといたそうか。兩人ともご苦労であったな」

そう言つて、村方明細書上帳を横に置いた井沢半左衛門は煙管を出し、きざみ苘(たばこ)を器用に詰め、火をつけて一服した。辺りは暮の紫煙と香りが漂い、一区切りしたのだという雰囲気になった。半左衛門が三回ほど吸いつけたあと、火落として煙管を軽く打ち

「さて、これはすでに聞き及んでいるかもしれないが、他の村々の内情のことだな。なにぶん内密な話になるので他言は無用にしていただきたい」

と言つて、やや居すまいを正した半左衛門は

「今のところ風聞ではあるが、ここよりかなり北の方、有玉村辺りでは、なぜか年貢の取り立てに不満を持った者たちが、最近ひそかに夜の神社境内に集まつておつたりしておる。まだ確かなことはわかつていないが、なにやら不穏な動きがあるという。いや、けつしてそちたちを脅して言つているわけではない」

と言つて聞かせた。八郎兵衛は、藤蔵がなにかの折に言つたことを思い出した。なるほどあれはたんなる噂ではなかったのか、と思ひ返し、そういえば、有玉村の郷方役人は水野家の者たちであることも思い出した。すると杉田与左衛門も「こういつた風聞が膨れ上がり、実の形になれば、あげく打ち毀しなどが起きることもなろう。そうなつたとき狙われるのは誰か明白であらう。今までのことも考え合わせれば、

おそらく百姓は、左程に強くない村役の者たちを襲うであろう。村役は年貢収納の手先のように思われて、損な役回りであることはわれらも承知しているのだがな。それに、もし城下まで来るとなれば、それ相応の覚悟が要るであらうからな」

いや、めつそうもない、と八郎兵衛が言おうと口に出しかつたとき、黒雲が覆いだした西の方角から光るものが見えた。稲妻である。その光により部屋の雰囲気が一転暗澹としてしまった。井沢半左衛門はそれを見て

「ま、すぐにどうということもなからうが。いや、先の殿はまだそこまで領民に厳しくはなかったが、いまの水野の殿はあまり領民のことを考えておられないようにも見えおる。と

いうことで、騷擾にならぬよう気を配つてみてくれぬか」

八郎兵衛と孫三郎は、普請役と郷方役の言つたことが頭から離れず、帰り道はほほ話らしいこともせず家路についた。暗さを増した空は月も星も隠れていたが、道は白つぽく浮かんでみえるようだった。雨がぼつりと来る気配があつた。

北の方の村の情勢を、ひと通り見て回つた藤蔵が八郎兵衛の屋敷を訪れた。八郎兵衛は藤蔵を座敷に通すと、おとしに茶と菓子を持つてくるよう言いつけた。すこし冷ました茶と菓子を出しながら

「藤蔵さん、いつもありがとうございます。手土産までいただいてしまつて」

「そう言っておとしが去ると」

「藤蔵さん、暑いなかご苦労さんでしたな。早速だが、それで有玉の方はどんな具合かね？」

とやや心配顔の八郎兵衛が言った。

「はい、あの村はよく見ると、昔の旅籠のような家並みが少しばかり残っているところですね。そのようなところにも顔を出して、それとなく米の出来具合などを聞いてみました。やはり今年はやや不作ということのようです。そのため、どうも年貢の取り立てばかりでなく、労役にも不満を持っている百姓がかなりいると聞きました」

「うむ、あそこはたしか……」

と十五、六年前を思い出しながら八郎兵衛が言った。

「本坂通りの北側になるが、通りとは近いので、昔は市野と同じように賑やかな村だったと聞いておる。それが水野の殿様が来てじきのことだが、何故か藩と諍いがあって、藩では村人のほかはその通りを往来させないように止めてしまったらしい。そのため、市野と同じく有玉の村も廃れてしまったようだ。ま、それはそれとして年貢のことばかりでなく、やはり百姓の不満が溜まっているのかもしれない」

「と申されますと、年貢の取り立ての仕方になにか意を含むものでもあるのでしょうか？」

「かもしれないな。この辺りの村は年貢としてはせいぜい三割から三割五分まで。村によって違いはないはずだが」

「ということであれば、百姓が飢えてしまうということもな

かろうと思いますが。なにせ水野さまの家中では、先の井上さまとは違う置ききのように聞こえてくることがありますので、やはりそのへんの何か深いモノがあるのかもしれないな」

「うむ、うちの村もじゅうぶん百姓の声を聞いて、不満があれば郷方なりに届けておくようにしたほうがよいな。これからも北の方の情勢には注意をしておくことだね」

「はい、孫三郎さんにもお話ししておいてください。ところで、このあいだの村方明細は東海道筋の村だけのことであって、本坂通りのことは明細を出さなくてよいのでしょうか？」

「そうそう、あれは東海道筋のことだけで、差し出したあと藩ではそれを元にして絵図を作り、まあ絵図であるから、こまかいきつちりとしたものではないがな。その写しを取ってから御公儀に提出することになっているようだよ。名目は旅をする人の案内のためになるらしいが、実のところは各藩の内情もあわせて知ることになるであろうよ。さてそれが吉と出るか凶と出るかは、わからぬが」

「すると、この小さな村のことも御公儀の知るところとなるってわけですね。それにあの村方明細というものは、何年かにいちどはそれを書き上げることになるのですか？」

「うむ、まあ検見があるときと、殿さまの交代のときか。おそらく十年か十五年にいちどくらいのもんだから、わしの代ではこれが最後かもしれない。あとは孫三郎さんや藤蔵さんに任せることになろうよ」

と八郎兵衛は言つて藤藏の肩をぽんと叩いた。八郎兵衛はまだ五十には間があるが、髪はかなり白くなり、壮年とは言い難い。村のまとめ役としては人望もあり、まだまだこれからと、藤藏は思うが庄屋としての務めは気苦労が絶えないのかもしれない。

帰り道、晩夏の夕風を顔に受けながら藤藏は、この村でも有玉村のように百姓の不満が溜まれば、どのようなことが起きるかわからないと思つた。が、百姓代としてやれることはたかが知れている。考えても埒はあかない。自分としては、百姓代として百姓の話をよく聞き、その意見を組頭や庄屋に取り次ぐくらいである。

家へ帰つた藤藏は井戸端で手足を洗うと茶の間に入った。すぐに女房のおせんが茶を持ってきた。

「お疲れさまでした。八郎兵衛さんとの話は済みましたか？ お腹もすいたことでしょうか。すぐに夕餉にいたします」

そう言つて、おせんはへつついの前へ行き、味噌汁を入れた椀をお盆に載せ、おひつからご飯もよそつて藤藏のところへ持つてきた。そのほかには焼いた小鱈と沢庵や梅干しもならべた。十歳になる娘のおさとは、藤藏が帰つてくるのが待ちどおしかつたように奥から出てきて、三人で飯を喰つた。

杉田与左衛門の出屋敷では郷方役人の井沢半左衛門が来て話し込んでいた。その前日には、各村からの村方明細書上帳を差し出させ、そしてそれを元にして絵図を作り上げるのは

城下の絵師の仕事とするよう、手配りも済んだのが今日だった。

「やれやれ、これで絵図のほうは一段落となるが、しかし領内の詳細な図もあるとわかりがいいのだが。それはもつと大変な仕事になるのでござらうか？」

と与左衛門が言う

「杉田どの、それはなかなか。そこまで藩士が領内を絵図としてまとめあげるのには難しいものでござるよ。それこそ藩士だけでなく領民にも相当な負担をかけることになりましような。領内の絵図は五十年、いやもつと昔のものもありますが、そんなに様子が変わつてゐるとは思われないので、それはそれで結構ではござらぬか」

「そうか、ま、そんなもんかの。ところで以前、八郎兵衛たちに申された例の不穏な動きとやらは如何かな？」

「ええ、私も井上家の家臣であるので、村方のことはよく承知しておるつもりでござりますが、水野どのの家臣たちはいまだ村方のことを掴みきれないように見受けられますな。なにせ九州の唐津の人たちでござりますからな」

と言つて井沢半左衛門は、障子の間から田に広がる黄色く色づいた稲穂を見た。出屋敷は城下から東に少し離れた場所にあった。

「ところで杉田どの、話は違いますが、二歳になるわが一人娘多恵（たえ）の養子縁組の話を早めてはどうか、と言つてきた御仁がありましたな。むろん、婿どのを迎えるというこ

とになれば杉田どの、ご次男のことにござるが、いくつになられましたかな？」

「そのことなら、うちの次男坊、源次郎はまだ五歳に満たないゆえ、まだまだ先のこととして考えたら如何なものでしょうかな。おたがい井上家の家臣でありますから、将来になっても少しも揺らぐことはないし、いますぐどうこうと言うことでもござるまい」

「左様でございますな。まあこの話はしばらく先にといいとで了見いたしますよう」

と半左衛門は言った。

「さっきの話に戻るが、井沢どの、有玉村のほかにはなにか不穏な動きのある村はござらぬか？」

「郷方役を務めとしては、噂だけでも聞き逃すことの無いようにしておりますが、風聞では南の方、三島村になにかあるように耳に入ってきてござります。いまのところは、はきとしておりませぬが」

「左様ですか。どちらの村も噂だけでは首謀者を捉える、などと言うことはできかねることでござるので、今は目配りを怠らぬようにするしかありません。井沢どの、ご配下の者にもよろしくお頼み申しますぞ。いずれにしても、なにかことが起きたときには普請役では務めが違いますので、あとは郡奉行や目付に報告するしかござるまいが」

と与左衛門は言った。

「左様心得でございます。風聞があれば、その在地の百姓の

話を聞くにしかずということもござりますな。例の村方細のときでもそうでしたが、ただ抑え込むだけでは不満は残り、村内に火種が燦ぶることにもなるでござるでしょうから。ただ、上も下も丸く収めるというのは、なかなか骨の折れることにござります」

と井沢半左衛門は郷方役人としての胸中の一端を吐露しておいた。

八郎兵衛のもとに一報が届いたのは、夜四ツ（午後十時）過ぎのことであった。報せを告げに来たのは孫三郎であった。隣の薬師村の中心にある薬師堂の前に、松明を掲げた男衆が五十人ほど集まっているというのだ。今にも何か起こしそうな不穏な空気に溢れているという。八郎兵衛はすぐさま藤蔵に知らせるよう使いを走らせた。

孫三郎と二人で薬師堂に向かうと、階段の上上がった男が何事か百姓衆に呼びかけている。八郎兵衛が明かりの中をよく見ると、橋羽村の茂八もいるではないか。孫三郎と一緒に人をかき分け、茂八のそばに行く

「茂八、こんなところでなにをしているのだ。よその村まで来て、なんとということだ。おかしなことをしてはならんぞ」

と八郎兵衛が叱った。

「庄屋さんこそ、ここには危ないで、うしろに下がっていった方がいいだよ」

と言った茂八は、目がつり上がっておよそいつもの顔とは



変わっている。八郎兵衛はぞつとして周りを見ると茂八ばかりでなく、松明に照らされたほかの男たちも奇妙な顔つきになっている。まるでなにかに取り憑かれたような、あるいは熱にかされたようでもある。八郎兵衛も孫三郎もこれほどうしたことかと驚き、背筋に冷や汗が流れるようである。なにがここまで人を変えているのかよくわからない。するとうしろから

「皆の衆、わしは郷方役の井沢半左衛門である。このような時刻の夜の集まりは法度に違背する。おとなしく家に帰ればよし、そうでない者は取り調べをうけることになる」

と落ち着いたよくとおる、大きな声で申し渡した。

が、ざわついている男たちは半左衛門を取り囲むような動きをした。手にしている松明が奇妙に揺れている。仁王立ちの形で対峙している半左衛門は、大刀を帯びずに脇差だけである。その様子を見て、すでに腹をくくっている八郎兵衛と孫三郎は意識せぬまま半左衛門の両脇に立ち、護衛する形になった。八郎兵衛が振り返ったそのとき

「待つてくれ、わしは橋羽村の百姓藤蔵だ」

遅れてきた藤蔵が大きな声で呼びかけた。

「井沢さまの申されることはほんとのことだ。なにか不満があるなら百姓代をとおして、組頭なり庄屋さまに申すべきだ。理の無いことをやるもんでないぞ。先だつての村方明細でも正直に差し出せば、それはお認めになるのだ。この村々にも法度というものがある、それはいやでも守らねばなら

ん。さあ、静かに解散することだ」

そう藤蔵が言うのと、階段の上上がったいた男は藤蔵をじつと見たあと降りてきて、八郎兵衛たちの近くに来た。その男は三十そこそこで色浅黒く、しかし弁舌は巧みであった。

「お前は薬師村の者か？ 名は何という？」

と井沢半左衛門が問うと

「わしはこの村の組頭政七という者です。騒動を起こすつもりはなく、村の百姓の生活を救うためには、年貢の納め方に今ひとつお考えをいただきたい。ついてはどのようにして訴え出たらいいか、ということを皆の衆に問うておったのです」

「しかし、かようなやりかたでは、お前を取り調べなければならぬ。と言っても縄をうつことはせん。おとなしく郷方役所へ同道しなさい」

政七は暴れることもなく、言われたとおりおとなしく半左衛門について行った。それを見て、先ほどまで口々になにか罵っていた男衆たちは、いまは昂ぶる気持ちもさめたのか、松明を持ったまま、てんでに帰って行った。

八郎兵衛、孫三郎はほつと胸を撫で下ろした。

「藤蔵さん、よくやりましたな。まずはやれやれ。いつときはどうなることかと思つて、気が気ではなかったが。まあ間にあつてよかつた」

八郎兵衛は昂奮の覚めやらぬ顔で言つた。

「そうだよ藤蔵さん、あんたが来なかつたら、この薬師村の百姓たちはなにをしかしたかわかつたもんじゃないよ。と

もかく間にあつてよかつたわい」

と孫三郎も眉間に皺を残しながら言った。

「いえ、つい出過ぎたことをしてしまひまして。でも、自分でもよくわかりませんが、このままではまずい、と思つただけです。井沢さまもおられましたから。気付いたときには大声を出してました」

と藤蔵は言つた。

八郎兵衛は明かりもなくすでに暗くなつた薬師堂を見やつた。もしこれが橋羽村であつたらどうなつていたことやら、先日の杉田与左衛門と井沢半左衛門の脅しにも似た言葉を出した。

夜遅く家に帰つた茂八は、待つていた女房のおきくにこつびどく叱られ、意気消沈してこそそと夜具に入つた。

この夜、橋羽村から薬師村まで行つた百姓は、茂八のほかには誰もいなかった。庄屋の八郎兵衛にとつては、それが救いであつた。

橋羽村では庄屋、組頭、百姓代からの聴き取りだけで済み、郷方役所で誰かを取り調べるといふこともなかった。

だがこのあと、全国的な飢饉により各地で打ち毀しが起きるようになる。

風評のあつた有玉村では百姓が庄屋高林伊兵衛の屋敷に押しかけ、乱暴をはたいた。しかし世を乱すほどの乱暴をはたらいたといえども、百姓を責めることはできない。水野家

では浜松を離れるにあたつて、それまでの領民からの借金を棒引きにしようとしたばかりでなく、百姓に対しては年貢の取り立てが四割を超えるほどになつてきたのである。混乱の元凶は水野家にあつたともいえるこの打ち毀しは、水野家が浜松を離れ、井上正甫の子、正春が入部するその間隙を突いたものであつた。このため、井上家としても黙つて見ているわけにもいかず、借金のことや、年貢取り立ての仲裁の労を取つた。こうして老中から失脚した水野忠邦は、出羽国山形藩へと去つて行つた。

橋羽村の秋が深まろうとしている。八郎兵衛は孫三郎、藤蔵とともに今日もまた、田の畔に伸びている輝く芒の向こうに、今年もそれほど多くはないが、収穫を待ち、頭を垂れている黄金色の稲穂を見つめていた。八郎兵衛のその胸のうちには、ともかく翌年にはお天道さまに恵まれさえすれば、この村も何とかなるのだがという思いでいっぱいであつた。だが、自然を相手にする百姓のちっぽけな願いは些細なことでは弾（はじ）けとんでしまう。この理不尽ともいえる世の仕組みはいつか変わることがあるのだろうか。

いや、百姓だけが大変な思いをし、けつして侍が楽をしているわけでもないのだ。戦ともなれば侍は先に立つて戦わなければならぬし、命を落とすこともある。そのために侍としてそれなりの覚悟もいる。先の村方明細書上にしても、法度はそれなりにうるさいものだが、百姓には季節ごとの祭り

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

など、楽しみ方もあり、ある程度の気ままな暮らしも許される。その土地に根づいた村の主役はなんと、いつでも百姓である。

八郎兵衛はそんなことを思いながら空を見上げた。百舌鳥が鳴きはじめて、青く澄んだ空は天のずっと高みにあった。悠久な蒼穹のように見えた。

(東区)

「入選」

## まわり道

安間知世

自分の信じた道を振り返った先に残ったものは、たったこれだけ、だった。

## 【夢のこと】

空を泳ぐ夢を見た。

《飛んだ》ではなく《泳いだ》のだ。

上空で平泳ぎするみたいに手を動かすと体はまるで水の中にいるみたいにくんぐん進んだ。季節はまだ真夏だったが、空に吹く風は涼しさを含んでいて心地良い。

頬にあたる風を感じながら、さらに上へと向かった。

どこまでも行けそうな気がした。上へ行けば行くほど、もっとその先を見たくなる。頭の中では、これは夢だと分かっていたような気もする。だからこそ何も恐れるものはなかった。

目が覚めても《泳いだ》感覚は一日中消えず、夢の中でやってきたように、つま先で地面を軽く蹴れば体が浮き始めるのではないかと錯覚した。

## 【埋もれること】

誰にだって踏み入れたくない記憶の領域がある。違いはただそれが広いか狭いかの差だけ。

——私にもそれがある。

## 【足りないこと】

ただただ闇雲に空白へと手を伸ばし続ける。もしかしたら

何かあるんじゃないかと希望を持ってみるけど、空白はどこまでいっても空白でしかなかった。何もないなんてことは最初から分かっているけど、それをやめたらきつと後悔する。

つかめそうになっても、やっぱりつかめない。夏祭りの金魚みたいに尾をヒラヒラさせて逃げられてしまう。

気がつくくと、そこには冷たい静寂が広がっているだけだった。

## 【努力の先のこと】

……ない。

これが最初に思ったこと。

高校受験の結果は失敗だった。

何度も見てもネット掲示板には七十三の番号はなかった。

ものすごく悔しいはずなのに、気持ちだけが空回りして涙は一粒も出てこない。

……なんで？　なんでそうなった？

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

心の中はたちまち洪水の嵐となっていく。

でも次の行動に移らないと何も始まらない。電話の受話器を手に取って、ある番号を入力する。

結果発表当日、合格した者のみが再登校する手はずとなっていた。集まった人達はその場で、誰が失敗したかを知ることになる。

だから、友達に報告する。それが今、私に見せられる唯一の意地なのだ。私が姿を現さないことに困惑して、希望を捨てずに待たれるのは苦痛でしかない。

結果はどうであれ、プライドだけは捨てるわけにはいかなかった。せめて、強い自分を演じたかった、そうありたかった。そうしないといつか心がボキリと音を立てて折れてしまいうような気がして、しかもそれはきつと修復するのにとてつもない時間がかかるだろうと自覚していた。

### 【未来のこと】

不安に襲われて眠れない日があった。この先のことを考えると無意識に涙がこぼれ落ちた。目の前に広がる、避けようのない未来にどうしようもなく吐き気がした。誰にも見せられない感情が、お腹の底の深いところで渦を巻いていた。

### 【同情されること】

「皆で笑っておめでとうって言い合いたかったって泣いたんだよー」

後日、友達に言われた。  
何も知らないくせに。

この言葉が頭をかすめた。受験に失敗したせいで一番感情が不安定な時期だった。それでも、友達にそんな感情を持つ

なんて、今まで一度もなかった。

しかし、あろうことかこの感情は私の中で増幅していく。菌止めは効かない。

……何も知らないくせに。私があなた達よりはるかな努力をしたことを。たくさん我慢したことを。私は精一杯頑張った。心残りは無い。

……なのに、なのに何故泣かれないといけない？ それはそっちの自己満足だ。

笑って一緒におめでとうって言いたかった？ そんなの自分勝手だ。私だって出来ることなら、そうしていたかった。

合格した人達に私の気持ちなんて理解できる訳がない。いや、理解されてたまるもんか。

抑えていた感情が一気に爆発した。ずっと封じ込めていた、黒くてドロドロしたものごとめどなく溢れ出してくる。制御の仕様が無い。

指先のペンだこを無意識に触っていた。彼女達の手元を見ても私のようなそれはない。不自然なおうとつの無い指を見ていると無性に泣きたくなった。そのことが余計に悔しくて、腹立たしかった。

もちろん、彼女達にこの気持ちを明かすことはない。

彼女達の目には、私の必死に張り付けた笑顔だけが映っていた。

【卒業式でのこと】

ついに卒業式当日。そしてそれは、前日まで積み重ねてきた練習が嘘だったかのように、あっけなく終わってしまった。卒業証書を受け取って、合唱を終えてもまだ、これが自分のことだという実感が湧かない。私がこの学校に生徒として通っていたり、朝に教室で友達と挨拶を交わしたり毎日のように何気ないことで笑い合ったりしていたことを考えると、もうこの場所には戻って来られないのだと漠然と思った。そういうことを考えていると涙がこぼれそう、そんな自分が嫌で仕方がない。しかし周りで泣き合っている人達を見ると、こんなに分かりやすい場面で泣く弱い人間になりたくないといと心のどこかで思った。

他の人の写真に写り込まないように気をつけながら足を進める。友達との写真はいっぱいになっても、心の空白が埋まることはない。彼のことを横目で追いかけている、密かに姿を目に焼き付ける。多分もう、近くで顔を合わせる機会はやってこないから。でもやっぱ、私には思い出の中の彼だけが特別で、私の中で煌々と生き続けていた。

私の手元にはノリで撮ったクラス写真の彼だけが残った。

【抵抗すること】

春休みはめいっぱい遊んだ。名目上では友達との思い出作

りだったが、実際はこの先の望まない道から目を背けるためだった。高校生だけはまだ完全なるそれになりきっていない、そういう曖昧な立場がそうさせたのかもしれない。その期間だけは自分がどの組織にも属していない、どこまでも自由で解放されているような、そんな錯覚に陥っていた。そして、それがその場限りの抵抗であることは自分が一番良く分かっていた。

【導き出すこと】

携帯を開くと一件の通知が来ていた。

〈返事、まだ?〉

そろそろ言われるのは何となく予想はしていたけれど、改めて言われるとやっぱり困惑してしまう。

どうしよう。後悔しない選択はどれ？

先のことは全く見えない。今、伝えるべきことは何だろう。

【友達のこと】

卒業後、友達とは進路がバラバラになった。小・中学校までと違って顔ぶれが変わる高校への入学は、周囲の環境の変化に弱い私にとって間違いなく大きな試練となる。そして受験に失敗して私立高校に進むことへの不甲斐なさと、親への申し訳なさが余計に心の重荷となって私にのしかかった。

最も大きい問題はやはり、友達づくり。新しい環境下では、九年間築き上げてきたものが当たり前のように通用しない。自ら人と関わることは大の苦手だけど、集団の中で一人でいることはもつと辛い。

入学式後、教室では友達づくりに勤しむ姿がたくさん見受けられた。まだ名も知らない他人でしかないクラスメイトに囲まれて未だ経験したことのない緊張と焦りで頭の中がいっぱいだった。体中に変な汗をかいているのが分かる。

周りが楽しげに話す中、私は一人で机に座っていた。周囲の輪の中に飛び込む自信がない。出遅れた気がした。

どうしよう、このままだと私——。

涙が出てきそうになるのを必死に堪える。

休み時間やお昼に一人で過ごすなんて、そんなの嫌だ。私も話せる人をつくらないと何も始まらない。

——動け、動け、動け……。

自分の席から立ち上がれない。硬直した体を動かそうとしても、言うことを聞かない。私はここにいるはずなのに、彼ら彼女らの世界には私が存在していないみたいだった。

……どうしよう。

そうしている間にも時間はとめどなく流れ、休み時間の終わりを告げるチャイムが学校中に鳴り響いた。

「あはは、『友達になってください』って真つ正面から言う人、見たことないよ」

「そうだね、私も見たことないな」

口々からかってくる友達。久々に会った彼女達は少しだけ大人びた気がする。

「だって話しかけられないし、それだと友達出来ないから、そうするしかなかったの。私が見知りなこと、知ってるでしょ？ 皆もないし……」

口からは言い訳ばかり出てくる。やっぱり言うんじゃなかったかな。

「頑張ったね」

こういう時に褒めてくれるのが彼女達だ。

たった一言、肯定してもらうだけで素直になってしまふ。

「でもやっぱり、皆といるのが一番楽しいな」

「お、嬉しいこと言ってくれるじゃん」

「我ながら良いこと言った」

「自分で言うんだ」

何気ない会話の中に、あたたかい笑顔が生まれる。

どういう訳だか彼女達の前では自分らしく振る舞える気がする。この感じがどこか懐かしく、嬉しかった。

### 【見せられないこと】

転校先に出来た好きな人について楽しそうに話す幼馴染。

彼女に対して私のすることは「なるほど」と相槌を打つことのみ。それしか出来ない。

私もこんな恋が出来たらいいのに。少しだけうらやましく思う自分に気がつく。

彼女みたいに、甘いお菓子をほおばった時みたいに幸せな顔をして友達に全て打ち明けたい。好きな人の好きなどころを話してみたい。

一番私を知っていて心を許しているはずの彼女なのに、何も打ち明けられない。なぜか彼女の前では、いつまでも本と戦国武将が好きで、まだ恋を知らない無垢な人間でありたいと思っている。

一番心を許しているはずの彼女なのに、何も打ち明けられない。親しすぎて、知られたくない。

### 【道のこと】

将来の夢。小さい頃からの私のそれは、変わっていないかった。今よりもずっと無知だった中学生まではそれを疑うことすら知らなかった。

しかし高校生の今、本当にそれになりたいのか分からないうい。でも、周りからの印象はいつまでたつても変わらない。だから私もその期待に応えてしまう。

もちろん今も出来る事ならその夢も叶えたいと思っているが、私はそれだけの実力や才能を持っているだろうか。

——もし本気で目指して叶わなかったら、その先に何が残る？ 何を残せる？

不安だけが先走っていく。

親も私をそれを目指しているものだと思っっているはずだ。そのことがもつと苦しい。胸の奥がギュッと締まる感じがして、息苦しくなる。自分までもを騙してしまいういになる。どうするのが最善の道なのだろう。進むべき道を狭くしたくない。

自分のことなのに周りを気にするなんて馬鹿みたい。このままだと自分が他人のものになってしまいういそうだ。私を私から守りたい。

——どうすれば良いの？

### 【静止すること】

学校を出ると辺りは真つ暗になっていた。ふと腕時計を確認するともう十七時過ぎだった。無理もないか。

どこからか「今日って中秋の名月だよね」という声が聞こえてきた。つられて上を見上げるとそこにはどんよりした曇り空しかなかった。満月とか天の川とかは大抵、見たいと思つた時は見れないのに、後から「あ、そういえば」と思いうす時に限ってその日の天気は快晴だったりする。

世の中ってそんなものだったりする。軽くため息をついてみる。



夜は好きだ。慌ただしい昼と比べて、時間はどこまでも永遠のような気がして特別に感じる。全ての人が平等に闇に包まれる。一人夜風にあたりながら自転車をこぐと不思議な爽快感が芽生える。

等間隔に位置する街灯が唯一、私が闇に飲み込まれるのを繋ぎ止めている。家々から漏れでる光さえもが美しいのは、この闇のせいだろう。昼間はあれほどつまらない世界が、太陽の不在という単純な理由だけで輝いて見えた。

### 【失ったこと】

自分の前が真っ暗になった。今までは進むべき道、それにさえ従っていけば間違いないだろう道がずっと見えていた。照らしてくれる何かがあった。

だけでも分からない。何もかもが。

周りで支えてくれた中学時代の友達も近くにいない。こんな時には彼女達に会いたいと強く思うのに、それがすぐに実現しないことがじれったい。そして一番に励まして欲しいその人にはもう、助けを乞わないほうがいい気がする。

孤独という現実が痛む傷口に塩を塗っていた。

寂しい、辛い、怖い、心細い、分からない、見えない、叶わない、届かない……。

様々な感情が行ったり来たりしすぎて、考えがまとまらなくなつた。

誰かに言って欲しいのだから。  
「あなたは大丈夫」と。

### 【あのこと】

（こめんなさい）

そう打って、携帯をしまう。

良かったのだ。こうすることが正しかったのだ。最善の選択だった。

手に冷たいものが当たった。雨かな？ と思ったが、ここは屋内だ。

気がつくくと、泣いていた。

\*\*\*

別れが怖い。出会いは同時に別れでもあることを知った。

少しでも一定の関係を越えてしまうと、途端にその人と離れがたくなってしまふ。いつかやってくるそれを考えると、初めからそのような関係を持たないことが一番だと思っていた。いづれ失うのが怖かった。

そして、私は自ら大事な人を遠ざけてしまった。決して興味がないわけではないし、ましてや嫌いになったわけではない。

望んでそうしたはずだった。

……なのに、なのに私は、

自分の為だと思つてやったことなのに、その存在が思つていたよりはるかに大きなものだったと気づかされる。今は、私は寂しいんだな、と他人事のように思つた。

分かつているのに、行動に移せない。珍しくやりたいことは、はつきりしているのに勇気が出ない。それが、私だ。

自分が内側から音を立てて壊れていくのが手に取るように分かる。

【保持すること】

「何も変わつてなくて安心する」

久しぶりに会う友達は何、口を揃えてこう言う。

でも、違うよ。それは違う。

私がそう見えるのは、意識して振る舞っているから。いつまでも私を覚えていてくれて、友達だと呼んでくれる人達に違つて自分を見せたくないだけ。せめて大事な人達の前ではそう居たいだけ。

きっと誰よりも、私が、変わつてしまった。

【変わらないこと】

放課後、学校付近の飲食チェーン店に入った。おしゃべりな飲み物と雰囲気売りのこの店は学生の間では憧れだった。

同じ制服がちらほら見受けられる店内で友達と無駄話をしながら抹茶フラペチーノを飲んでみると、中学校の頃の友達を思い出す。彼女は今、何をしているのだろうか、ここにいたらもっと楽しいのに。

今の私には彼女達と過ごすことが一番楽しい。次に遊ぶ日を毎日待ち遠しくして、そのために生き続けている。

そんな私つてどうなんだろう。自分だけが過去に取り残されている気がする。

【後悔すること】

登校時、あの人と会つた。同じ校区内に位置するお互いの家は歩いて五分もかからないのだから無理はない。なのにその後ろ姿を見ただけで心臓がバクバクしてドクドクして激しく動き出す。

……鳴るな、私の心臓。

小さくつぶやくも、意味がないことはすぐに分かつた。彼にこの音が聞こえませんが、と願つた。

いつもは顔をしかめるコンビニの揚げ物油とコーヒーの入り混じつた匂いでさえ、魅力的に感じる。そのたつた十分間は憂鬱な一日をも色鮮やかに染め上げてしまった。

ああ、私はやっぱりこの人が好きなんだと痛いほど思い知らされ、それと同時にやるせない気持ちに胸が押しつぶされた。「なんで素直になれないんだろう」とか「なんで忘れら

れないんだろう」とかという湧き上がる心の声を全て無視して、自分以外の誰にもぶつけられない怒りを静かに抱えながら自転車のペダルを強く踏み込んだ。

【伝えたかったこと】

——もうこれ以上に私に優しくしないで。そんなに柔らかく笑いかけないで。惑わせないで。思い出させないで。後悔させないで。

止まらなくなった感情の洪水を、私は遠くから指をくわえて見ていることしかできない。自分自身を傍観する。

でも、こんなことが言いたいんじゃない。本当はもつと……。

他人のために生きることには疲れた。幼い頃から大人に教え込まれた生き方に従い続けてきた。相手に合わせたり、その人が喜びそうなことをしたり、そんなことを心がけて生きてきた。なるべく目立たないように、嫌悪されないように、孤立しないように。

皆は私のことを優しい人間だというけれど、そんなんじゃない。

私はずるい人間だ。さも自分の考えのように相手に同調する意見を言ったり、共感を求められると自分の意見を言わずに曖昧に笑ったり、困っている人を善人ぶって助けたり、そんなことをしてきた。

こんな人間を好きだなんて言わないで。好きにさせないで。

——もうこれ以上、誰も私のことを信じないで。

【伝えられなかったこと】

かくとだに、えはやいぶきの さしも草

さしもしらじな 燃ゆる思ひを

（あなたは知らないのでしょうね。私の燃え上がるようなこの思いを。）

身まで焦がしてしまいそうな恋心。伝えたいけど伝えられない、胸に秘めた熱い想い。かつての私が自分を重ねていた歌だ。

でも、意味が果てしなく情熱的で今の私には少し眩しすぎる。

当時の私は純粋で、ただただひたむきに憧れを追いかけ続けていた。

まだ本当のそれを知らない頃。理想だけを見つめていた頃。あの頃が一番楽しくて、毎日がキラキラしていた気がする。

今となってはただ懐かしむだけ。この身が、骨が、想いと一緒に燃え尽きてしまうのをじっと待っているだけの時間が流れ去っていく。

——それしか出来なくなっている。

この先のことは、もちろん誰にも分からない。  
一つだけはつきりと言えるのは、私があのかを今でも思  
い出しては後悔しているという事実があるということだけ  
だ。

### 【逃げること】

高校生になって半年が経つ。

時たま、心の奥がひんやりして冷たくなる。別に友達がで  
きないとか、はじめを受けているとか、勉強についていけな  
いとかそういう直接的なことは何もない。

学校生活は充実しているように感じるし、楽しいと思うの  
に前触れもなく、ふと辛くなる時がある。

「教室の窓から桜の雨ー ふわり手のひらー 胸ふるわせた  
ー」

そういう時、この歌を口ずさむ。卒業式の合唱曲。アルト  
パートだったが故にメロディが定まらない私の歌は、私の心  
を確実に過去へと繋ぎ止める架け橋となつていく。

ただ今は、過去だけを見つめていたい気分なのだ。

### 【どうしようもないこと】

まだ冬だと言いつつ切れない季節に吹く風は、私の指先を冷や  
していくには充分だった。

\* \* \*

息が白くなって空に巻き上がる。地上に浮かぶ小さな雲み  
たいだ。面白くなって何度も雲を作ってみる。鋭く吹く北風  
が私に襲いかかり、雲は一瞬にして消えた。

指先に息を吹きかけ、さする。しかしそんなことをしても、  
すぐにまた凍りそうに冷たくなる。

はあーっと大きく息を吐きだす。

遠目に彼が歩いてくるのが分かった。少しだけ嬉しくな  
る。行動力に欠ける私には話しかけられないけれど、見てい  
るだけで満足してしまう。心がポカポカしてきて寒かったこ  
とも忘れてしまう。きつと、これが幸せってことなんだろう  
と幼心に思った。

自分の想っている人と同じ場所にいられること以外に、も  
う何も要らなかつた。

この時間が、幸せが、ずっと永遠に続けばいいのに。  
赤い指をさすりながら、そう考えた。

\* \* \*

思い出した。

忘れたと思いついていたこと、思い込ませていたこと。そ  
れらが唐突によみがえった。そして、ひどく物悲しい気分に

なった。

——今の私は、つまり一緒に居たい人と同じ場所に居ない私は、幸せだろうか。

高校生になって、新しい生活を始めようと思っけていても、意識は勝手にあの人を求めている。いつの間にか面影や雰囲気が似通っている人を目で追っていたことなんて一度や二度ではない。自分の世界のどこかに、何かを探し続けている。

どうしようもないのだ。どうすることもできないのだ。

もしも私に、もつと勇気があつたなら……。

何度願ったことだろう。でも、これは願うことじゃない、努力で変えていくことだ。頭では分かっている。分かっているのに、変えられない。

結局、私の心の芯は四年前から一ミリも変わっていないのだった。

### 【演じること】

小説や歌の中で「私のことを分かってくれるのは、あなただけ」という言葉を耳にしたことがある。でも、そんなことってないと思う。

だってその人のことを理解できるのは、その人自身のみなのだから。もしかしたら自分のことすらも分かかっていないこともある。

人間は簡単に他人をだます、だまされる。

だから百パーセントの理解は存在しないし、他人に理解されているという確証もどこにもない。

そのために、人は群れる。他人に信用してもらうために、相手を理解しているように振る舞う。自分を正解にするために、行動する。「私はあなたの仲間ですよ」って証明して安心させようとする。それでも、百パーセントはない。

自分でも自身の気持ちがあつきりと分かることはそうなのに、他人に分かる訳がない。自分は自分で、他人は他人。それって当たり前のことだ。なのに、何故この世界は協調性やら何やらを重んじるのだろうか。他人に合わせて無理矢理に生み出す協調性なら、無くていいのに。

### 【振り返ること】

駆け寄ってくる足音。いつもの優しい微笑みを浮かべた彼の顔。何か言いたげな瞳。

彼は去ってしまつた。

——待って、まだ行かないで。私も……。

頭の中では何を言いたいのか分かっているのに、私の口は微動だにしない。冬の季節のせいなのか、緊張しているせいなのか唇が乾燥して動かせない。無理矢理動かそうとしてみると、刺すような痛みが走つた。体が傷だらけだった。唇だけではない痛みを確信しながらも、気づかないふりをする

ことを選んだ。

やっぱり私は、後悔でいっぱいの心を抱えていつもの通学路を歩くしかなかった。

——また、同じ夢を見た。

何度見ても、言動や結末は一緒。いくら夢の中でも、私はやり直せないし、現実だつて変えられない。

起きたらそこには無力な一人の人間がいるだけだつた。

自分に失望しながら、またあのことを思い出す。

あの背中。彼が小走りで去っていく背中は、何年経つても忘れる気がしなかった。そして夢の中の私も、あの日の私もそれを杲然と見ていた。私は何回あの出来事に励まされ、落ち込んできたことか。

単純な自分に嫌気がさしながら眠い目をこすつて、彼が遠いこの世界に足を踏み入れざるを得なかつた。

【前を見ないこと】

高校生になつて半年。

時たま、心がひんやりと冷たくなる時がある。別に友達ができないとか、いじめを受けているとか、勉強についていけないとかそういうことは何もない。

直接的な理由がないことが余計に怖かつた。学校生活は充

実しているように感じるし、楽しいと思うのに前触れもなく辛くなったり、心にポツカリと穴が空いてスースーする感じがする。何でだろう。

「教室の窓から桜の雨ー ふわり手のひらー 胸ふるわせたー」

そういう時は無心でこの歌を歌う。卒業式で歌つた合唱曲。アルトのパートだつた私はメロディを歌えないけれど、この歌は私の心を過去に繋ぎ止めてくれる。

今は、過去だけを見つめていたい気分だつた。

【過ぎ去つたこと】

彼のたつた一言の言葉だけで喜怒哀楽する。そうやって生活してきた時もあった。

その日一日が彼と話せたかどうかで見える世界がまったく変わった。毎日周りに気づかれないように彼のことをこっそり見て、目が合つただけで喜んで、他の女子と仲良くしているとしつかり嫉妬して、そういう日々が楽しかつた。今、生きていくんだなーって感じがした。

友達にも恵まれて笑顔が絶えない生活で、仲間が私の存在を認めてくれて、ここに居ていいんだって胸を張つて思えた。理想的な学校生活だつた。

中学校が懐かしい。あの校舎が、笑い声が先生が、そして何より友達が——。

中学生に戻りたい。ほんのわずかな時間でいいからあの時を共有した大切な仲間たちともう一度だけ同じ時間を共有したい。

そんなことをぼーっと考えているうちに気だるい授業は終わり、一日が終わっていった。

### 【知らないこと】

放課後、授業が終わると椅子を引く音を合図にして学校全体にざわめきの波が広がる。それはやがて騒音となって私を刺激する。耳を塞ぎたくなるのを我慢して、私は足を進めた。

図書室。ここはいつでも私を受け入れてくれる。海の底にいるみたいだ。海上で起こりゆく物事からは想像できないほど、平和で安定した世界。同じ箱の中にいるはずなのに、こだけ流れる時間が違う。

個性豊かな背表紙を目でなぞるだけで、満たされていくのが分かる。紙とインクの匂いを体いっぱいを受けて、ゆっくり、踊るようにして歩いた。

私は、私で良いんだ。

### 【前を向き続けること】

クレヨンを塗ったような青空つてこういうの言うんだろうな、と自転車に乗りながら上を見上げてそう考えた。青す

ぎて、広すぎて、遠すぎて切なくなる。

私はここに生きているんだってことを誰かに証明したくて、してほしくて——。でもそんな誰かはどこにもいなくて、結局自分に言い聞かせる。

こんな日はちよつとだけいつもと違うこと——例えば、自転車の上から歩行者に挨拶をするとか、友達の鼻歌に合わせと一緒に歌ってみるとか（私は音痴なので人前では歌わない）——をしてみたくなる。

そして意外なことに、こういうことで生きる世界を広げてきた自分に気づく。

人間って思いもよらない場面に変化していくものなのだろう。そう思った。

そうやって変わるのもそう悪くないかもしれない。

私はいつまでも私で、気の遠くなるような世界の中でこうして生きていく。この先も、ずっと。

——それだけでいい。

秋の気配を感じさせる風に当たりながら、強く思った。

\* \* \* \*

——ここで終わっていた。

こんなものを書いたことなど、すっかり忘れていた。

かつての自分が書いた私小説。誰にも言いたくないこと、けれども何かしらの形で外に出さないと自分が潰されてしまいうようなことをノートに書いて発散していた。目をおおいたくなるような、つたない文章のはずなのに、何故か最近読んだ小説より何よりも心にひびくものがあった。

忘れたかったこと、忘れたくなかったこと。読んでいるうちに、失いかけていた何かを取り戻した気がする。

きつともう、二度と忘れることはない。一年先も十年先も、私がこの世から消えゆくその時まで、私はそれを抱えて生き続ける。

少し迷って、ノートを元の場所に戻した。私にはもう、これは必要ない。

大きくふくらんだバックを手にとって部屋を出る。

机が、椅子が、カーテンが、見慣れた景色が——あるいはここで過ごした時間の全てが——私の背中を押してくれているような気がした。

——いつてきます。

振り返らずに前へ進もう。未来はそんなに悪くない。

(北区)

「入選」

## 乱声

嘉山春夫

この街では皐月の青空に鯉幟は泳がない。不思議な空だと思ふ人達もいる。そう感じる人の心得は、集合住宅のベランダの手摺に細いアルミポールを括り付ける。ポールとセットの吹き流しに黒と赤と青の三旒の鯉幟を供えるように飾る。

「旒」と数える大きさではない。この街に定住した旅人の故郷では、十余旒に及ぶ鯉幟が、矢車を冠した高い檜の御柱の天辺から足元までたゆたう。豪勢な鯉の数から一族郎党、家勢の誇りが窺い知れる。

この街の端午の節句は鯉幟に代わって、大凧が天空に舞う。小刻みに叫ぶ「掛け声」バルブの無い五音の「信号ラッパ」コルクの球が狂乱する「呼び笛」の合奏リズムは躍動的だ。あたかも戦国の合戦の「乱声」だ。凧を揚げるこの伴奏は、帆船のマストに帆を張る「揚げ索」引きと同じだと言う人もいる。何れにしても船乗りの士気高揚に打ってつけだ。

東から西に向かつて、ほぼ一直線に海岸線が延びている。河口と灘が作る細長い砂丘は海岸線に沿って幅数百メートル



ル、長さ四キロメートルの広がりを持つ。砂丘の一角に防風林に囲まれた赤土と、荒い芝目の広場が造成されている。「風合戦」の会場だ。競い合う合戦は、風の揚がった高さではない。延ばした糸の長さでもない。風の絵柄でもなければ、風の大きさでもない。風糸と言うには太過ぎる親指大の揚げ綱だ。宙に伸びる数枚の風の綱が絡み合った時、これを放ち、引き寄せ、摩擦させて綱を焼き切る。最後まで綱に繋がっている風が勝者になる。表彰状も賞金もない。町内会単位の合戦だから、その仲間内で「オレッチの組の勝ちだ」と、歓声と祝杯を上げる。綱の切れた風は双眼鏡を持った同じ町内の集団が回収する。

「初子」と言われる一歳児はその名を描いた大風を揚げて祝う。記名のある大風は合戦に臨まない。この町の端午の節句は雄々しく風に向かい、空高く揚がる風のように、前途洋々たる子等の成長を願う。鯉職が吹く風に任せて子等の洋々たるを祈るなら、大風揚げは大人達が乱声に乗じて寄り合い、風を起こして子等の将来を鼓舞する。

風揚げの観戦棧敷席に精巧電機株式会社の社長夫妻が招かれた。

「子供の誕生を祝って成長を祈願すると言うが、むしろ『困難を乗り越え』と、大人に向けた応援歌に聞こえる」

「そうですね。こんなエールを頂いたら、私達の会社もこの先きと栄えるに違いないわ」

「それにしてもこの勢いは凄まじい合戦だ」

「血は湧き立ち、肉は躍る感じですよ」

「やっと思いきさうだ。前金一千万円が振り込まれた。残り四千万円は原理が解明されてからだ。結局、ウチの技術は指導料込みで五千万の譲渡だ。さんざん実験してきたのだから間違いないさ」

「苦労が報われましたね。堅い市役所を辞めて十年経ちました。お義父さんの技術を継いでそれを越えて、いよいよ本領が発揮できますね。あと三年長生きなされば、あなたが継承技術を磨きあげたことを、きつと一緒に喜んでくださつたでしょうね」

「自力での電機メーカーへの売り込みは悉く失敗した。彼らは既成技術から飛び出そうとしない。出来ないのだ。保有技術の延長線から離れられない。腹が立つほど保守的だ。それに比べて化学メーカーはいつも新規性を探っている。随分慎重だったけれど、最後にはドアを開けて中に入れてくれた。宇山産業は生産技術力が充実している。二番手だからこそ、新しい分野に貪欲だ。意気込みは尋常じゃない。五年後には一兆円の売り上げ目標を掲げている。実現すれば一番手の仲間入りだ。」

大風合戦の棧敷席に精巧電機株式会社の社長夫妻を招待したのは株式会社宇山産業だ。技術職の小川が風揚げの観戦を案内した。小川の住む社宅のベランダには小さな鯉職が括つてある。

金融機関は落穂拾いのように、庶民のささやかな懐金を集めて預かる。塵も積もれば山となった金銭を、多くは自社の判断で企業、法人、結社、団体などに貸し付ける。率の高い金利を元金に乗せて回収する。その利鞘の飛沫の一滴を出資者である預金者に還元する。金融機関は預け入れる人々を、ただ店のカウンターで待ち、借り入れ者を応接室で静かに待っている訳ではない。金銭の流れが円滑に進み、多額の金利収入が得られるように競って工夫する。行員のノルマはきつい。毫るように預かり、ここぞという客に押し付ける。貸付先が怪しくなっても、無造作に融資額を増やしたりしない。他の安全な企業を選定して手を結ばせる。場合によっては吸収合併まで世話をする。人々の「幸せ」を実現する資本主義の経済原則だと言う。

特殊な技術を保有すると自賛する「精巧電機株式会社」は創業者が病に倒れ、公務員だった息子がその職を辞して、家業を引き継いだ。丁度十年になる。経営は父の遺産の「商流」を不器用になぞっていた。しかし、この頃、精巧電機の二代目社長は重大な「新技術」を完成させたと、あちこちで吹聴する。取引銀行にも聞こえてくる。銀行は歓喜して常套手段を仕組む。他企業への技術供与だ。一時金と生産高に応じた技術使用料を入手させようと企む。銀行員に技術の優劣は判断できない。笛や太鼓で売り込む技術を囃し立て、貸付の脅迫要素も盛り込んで他社へ売り込む。紹介先の選定を誤るこ

とはめつたに無い。

精巧電機の新技術の売り込み先は「株式会社宇山産業」だ。対応者は期中採用直後の小川部長だ。小川は化学材料の開発経験が豊富だ。前職の大手企業では、紫外線に耐性の強いプラスチック材料を商品化した。原則だがプラスチックは屋外の構造物として使うことは少ない。力学的物性値の劣化が金属材料に比べて極めて速い。その後、小川は自主的に「導電性プラスチック素材（\*註）」の開発に取り組んだ。元々プラスチックは不導体だから電気は通し難い。電気素材としては絶縁体に活用されている。小川は電気を通すプラスチックを実現するために、導体である金属やカーボンの微粉末を流動状のプラスチックに混合し練り合わせ、化学処理で硬化した。この手法に研究開発の同僚達は眉を顰めた。導体と絶縁体をただ混合するだけで、導体や絶縁体素材の分子構造をいじるものではないように映った。

意気消沈した小川は気晴らしに、出身大学の卒業論文研究室の同窓会に顔を出した。まだ技術者としての社会的評価はついていないだろうと判断しての出席だった。

「おう、小川、この頃学会誌で論文を見ないから心配していたよ。耐紫外線樹脂以来な」

「うん、あれは自動車分野で随分使って貰っている。公知の紫外線吸収剤が鼻薬だ。まあ四、五十年も乗り続ける車は滅多にない。野晒なら塗装や、薄い板金だって、同じような耐

久性だ。丁度、車の設計寿命の十数年にマッチしていただ  
だ」

「その後の開発テーマは何だい」

「うん、導電プラスチックだ」

「そりゃ難しいな」

「導電現象は物質が金属結合で自由電子が飛び回っている  
か、イオン結合の物質でなきゃ起らないよな。プラスチック  
はその二つのどちらでもない、共有結合だから、電子はガツ  
チリ手を結び合っている。外から電界をかけても、磁界に浸  
しても、光を当てても、熱を加えても、ぶん殴ったって電子  
はピクリともしない。だから、電流は流れないのだろう」

「そう決めつけられたら何も出来やしない。確かに物理学に  
は『例外』現象は無い。すべて綺麗な数式に納まる。原理原  
則に当てはまって、現象を裏付けける「公式」が出来る。しか  
し、化学はどんなに丹念に分類しても、そのグループに入れ  
てもらえない例外物質が山ほどある。その例外を探すことが  
今の俺の仕事だ。つまり導電性プラスチックの発見だ」

「発見か。発明じゃないのだな。そういう仕事は結構挫折す  
るぞ。まっ、俺が今の勤務先の宇山産業にいる限り、いつで  
も小川の転職を受け入れるよ。同業者だからな。君のねちっ  
こい、一滴の水も漏らさない実験力は俺には無い。畏敬に思  
っているよ」

「褒めているのか、嫌みにも聞こえるな。頭の固い奴が力仕  
事しかできないってことか」

小川の開発テーマが成功すれば身の回りの電気配線は様変  
わりする。現在屋内の照明やコンセントの配線は壁や天井の  
裏を電線が走り廻っている。一對の電線の太さは親指大だ。

自動車の床や天井、ドア、エンジンルームの中にも電装品を  
駆動する電線は隠れて張り巡っている。その一本一本を繋ぐ  
と、全長は富士山の高さを越え、重さは成人女性の体重に匹  
敵する。パソコンやテレビ等、電子機器の配線には髪の毛よ  
り細い金属線から、数ミリ幅の板状導材や、厚さ百分の一ミ  
リ以下の金属箔も使われている。もし導電性プラスチックが  
完成すれば、波状のまま刷毛で壁に塗る。あるいは導電部を  
印刷や転写で描く。この上に絶縁性の凝固剤を重ね塗りす  
る。住宅も、自動車も、電子機器も、現状の電線による配線  
は革命的に変わる。配線工は塗装工や印刷工に職種変更にな  
る。小川はその将来を思いながら、研究開発に挑んでいた。

新商品で一発当て、その功績で居心地が良い会社生活はせ  
いぜい三年だ。企業規模が小さくなるにつれ、心地良い期間  
は指数関数的に短くなる。その間に次の商品を生み出さなけ  
れば開発技術者の資質が問われる。責任を感じて、いたたま  
れなくなり、自ら逃げ出す者もいる。あるいは配置換えの辞  
令に不承不承従う場合もある。小川が五年間ノーヒットのま  
ま、研究開発職に在籍していたのは少し長かった。自他とも  
に一発屋研究者で終わるのかと思う頃、当たり前のように職  
場の異動辞令が降りた。異動先は分析部門だった。

分析業務は材料の組成を解析する仕事だ。社内で新しく合

成した素材、他社が商品に使っている素材、社内の不具合の多い素材などの組成を解明していく。分析計の精密な操作、被分析サンプルの前処理まえしより、測定器の出した結果と公開データとの突き合わせ、同定、比定の精査等、この業務でも高度なノウハウがあるが所詮、他部署から依頼されたルーチン仕事だと思われている。オリジナリテイのある新商品の創出や、工業所有権の登録、研究論文の発表などは少ない。いわば「縁の下の力持ち」だ。技術系大卒者の新採用では、八割の青年が「研究開発部門」を希望すると言われている。

小川は二年前のゼミの同級会が大脳皮質に刷り込まれていた。学生時代共に卒業研究を仕上げた宇山産業の村田の発言だ。随分重い腰を、迷いながら地方都市に向けて上げた。

「四捨五入すれば四十だよ。現職で研究開発職を追われてしまった。宇山産業で俺のやれる仕事はあるかな」

「何がしたいのだ。何が出来るのだ」

「宇山産業は生産技術が秀でてしていると聞く。新商品の研究開発は手薄だそうだな」

「その通りだ」

「四十までにもう一つ自分の開発作品が欲しい」

「転職先を選ぶと当社になったのだな」

「そう考えたが、無理かな」

「前職の垢を全部落として、真っ白になって来い」

「体一つで行きたい」

「よし、解った、一応役員会議にかけることになる」

宇山産業の村田は三十代で重役に就いていた。技術職のマネージメントに長けていた。

小川は村田の支援を得て宇山産業の研究開発事業部新規技術開発部長に迎えられた。前職に比べ企業規模は一回り小さくなった。年収はほぼ同額だった。部長とは名ばかりで部長は一人、役職を付けて、その手当てで前職の年収を確保している。村田の配慮だった。

「役職なんかどうでも良かったけど、年収が変わらないのはありがたいよ」

「実績を上げて、この新しい部を大きくしてもらいたい。先行投資だ。それに君はマネージメントに慣れていないだろう。まずは一人の部下を巧く動かす練習をしよう」

「うん、俺は一人で実験するのが好きだ。協調性はポンコツだけだ。村田さんの期待にだけだけ応えられるかな。マネージメント力はともかく、取り敢えず新商品開発に挑戦する」

「部下の中村は工業高校の電気科卒、叩きあげた。歳は俺達より幾つか上だ。骨太だ。電気分野の知識は先生並みだ。新商品より、既成商品の改良や付加価値の向上が得意だ。当社の主力商品の電線で、しなやかで断線しにくい、愛称『したたか』をロボット装置の配線分野に持ち込んだ。今、市場占有率は四〇%を超えている。勿論売り込んだのは営業マンだが、中村の作品あつての売上確保だ。ロボット購入者からも評判が良い」

「珍しいな。工業素材に愛称を付けるなんて。テレビコマー

シヤル等やらないだろう」

「うん、最終ユーザは業者だから、品番だけで良いのだが、製品を愛称で呼びあうと、製造や流通の職場に、息抜きの穏やかさが生まれるかも知れないって、癒し効果を狙った。社長長の提案だ」

宇山産業は元々縄跳びの藁縄をビニールの紐に置き換え、取手と一体成型した体育教材に始まっている。当時はビニールの質感が学校市場に好んで受け入れられた。従来、縄跳の縄は荒縄に水を浸み込ませて跳んでいた。ビニール紐はこれよりはるかにスマートだった。以来「押し出し成形」の製造技術が、塩化ビニールのパイプに発展し、チューブやテープ、シートや筐体を生み出した。この頃の稼ぎ頭は電線の絶縁被覆だ。導電体の銅線は太い「母線」を購入して、これを社内で細線化する。単線のまま、あるいは撚り合わせた導体に絶縁材を「押し出し被覆」して電線を完成する。

「俺達の夢の一つは『動く商品』を作ることだ。例えば、電線の延長線上に、電動機や発電機がある。これらは歴史も技術も枯れ果てている。もし、ウチがやるなら画期的な電気機器でなければ売れない」

「うん、素材屋にとって、『動く商品』は夢だ。俺達の作る商品はいつも静止機能を求められる。沢庵石や文鎮と同じだ。まあ、土木建築製品も、動いてもらっちゃ困るけど」

「風合戦はいかがでしたか」

「やあ、勇壮そのものでした。激励されました。大人の節句ですわ」

「それでは、改めて紹介します。御社の発電機を検証する部長の小川と、主任の中村です」

「よろしくお願いします」

村田取締役は二人を紹介して応接室の席を立った。三人は実験室に移動した。

「中村が一月かけて、間に合わせの試験装置を作りました。まずは御社試作品の発電機を回しました。私達の採った測定値の説明から始めます。この後、精巧さんの手でも再実験してください。汎用誘導電動機で御社の発電機を駆動しました。発電機出力は歪波です。残念ながら回転力計が手配中でして、この実験では正しい入力の仕事量は解りません。発電機に軸を繋いだ電動機モーターの入力電力と発電機の出力電力の比を取りました。回転数を振って、負荷抵抗がパラメータです。特性グラフによればその比である効率効率は、ほぼ百三十%で飽和しています」

「やっぱり効率は百%を超えましたか。良かった。ウチの実験と一致しましたね。本当に良かった。ホッとしました」

「御社のデータを拝見しましたが、測定方法が明示されていませんでした。多分これと同類だと思えます。ですから御社のおっしゃる『効率一五〇%』に疑問を持っています」

「でも小川さん、今、中村さんの実験で私どもと同じように百%を超える効率が証明されたではありませんか」

「これは間違っています。発電機を駆動する電動機の入力は、発電機の機械的入力トルクを回転力計で測定しなければ仕事量になりません。発電機を駆動した誘導電動機の入力の電圧と電流には位相差があります。単純に測定電圧と電流の積が入力電力ではありません。それに、御社の発電機の出力電圧は歪波ひずみ波ですから、高次正弦波の級数演算が必要です。このままでは正しい出力電力値とは言えません。狭い範囲で比較の目安にはなると思いますが、絶対値ではありません。」

「ちょっと待ってください。私も、御社の中村さんの測定値も間違っているのですか」

「はい。間違っています。効率を求める正しい実験とその算出方法ではありません。ところで、当社の経営陣にはどのような説明でこの発電機を売り込まれたのですか」

「そりゃ、効率が百%を超える発電機だと」

「当社は一も二も無くこの話に乗りましたか」

「いえ、最初に非常勤の技術顧問に相談してみると言われました。一流大学の先生とそのお弟子さん達だそうですね。一か月待ちました。技術顧問の結論は『無いと思うが、あるのかも知れない。やってみるよりしようがない』と言う結論だったそうですね」

「実験してみるより『しようがない』と、ですか。やってみる『価値はある』とは言わなかったのですかね」

「はい、一か月後、手付金を頂戴しました」

「私はODA、政府開発援助機構が期待して居ると聞いてい

ますか」

「はい、市場はその方面です。途上国は水も電力も輸送手段も極端に不足しています。この発電機が完成すれば、まず容易に電力が確保出来ます。電動ポンプで水が得られます。電気自動車や電動バイクを作って輸送手段が整います。そうそう、最初の頃でした。手付金の前です。ODAの方と宇山社長、村田さんと懇談して頂きました。ODAの方に開発途上国の実態について、スライドを使って話して貰いました。もしこの百%を超える発電機が完成すれば、政府予算が買取るだろう、とも言われました」

「ODAの方の名刺を複写させてください」

「はい、村田さんもお持ちだと思いますが」

名刺はオー・デー・エー事務局・佐伯和夫とあった。肩書は無く、氏名の印刷は黒々とした異様に太い行書体だった。小川は佐伯の信用調査を村田に具申した。

調査会社の結論は迅速かつ簡潔だった。

【毎々お世話になります。この度ご依頼いただきました調査対象者について報告します。当社ではこの者についての扱いはありません。なおカタカナのオー・デー・エーと言う団体は存在しません。類似のODEでも登録はありません。当社の業務範囲では調査出来かねます。悪しからずご了承下さい。今後とも宜しく願います】とあった。

「小川君、俺は迂闊だったよ、精巧電機については事前に信用調査をしたけど、ODAの佐伯の調査はしていなかった。

当社が会員になっている大手信用調査会社からは、きつぱり断られたけれど、他に大手をスピンアウトして個人で興信所をやっている奴が居る。次は彼に頼んでみる。こいつは特殊な分野でも平気で調べてくる。ところで、トルクメータが納品されたら、続けて実験と解析を頼むよ」

「はい。『佐伯さん』は調査するに能わず、と言うところでしようか」

「調査不可能は無いと思う。調査をしたくないというレポーターだな。佐伯の息子がウチの取引先の調達課長をやっている。毎月塩ビパイプを随分買って貰っている」

「佐伯さんと当社は互恵関係にあると判断していたのですか。親子は別人格ですけど」

「甘かったな」

「この発電機を嘩し立てるのは、当社に繋いだ銀行より、佐伯和夫ですね。きつと」

小川は精巧電機に電話連絡をした。

「御社の試作した発電機の、確からしい測定結果が 나왔。近日中に当社までご足労ください。じっくり議論しましょう。一週間ほど当社内のゲストハウスを予約します。ご都合の良い日程をお知らせください」

「発電機や電動機の特性測定装置を専門にしている外注さんに製作をお願いしました」

「楽しみです。効率は百何パーセントですか」

「本当に百分を超えるとお考えですか」

「はい、エアコンのエネルギー消費効率は三だの七だのと言っています。効率は百を掛けますから、三百%。七百%ですね」

「それは、入力電力一キロワットで、一時間の冷房能力が何キロワットの機器かと言う機能評価です。一時間かけて、何キロワットの熱を室内から室外に運ぶことが出来るかと言う性能です。熱機関そのものの効率ではありません。車で言えばガソリン一リットルで何キロメートル走るかという走行能力、燃料消費量に当たります。空調機では一定の入力電力がキロワット、出力能力もキロワットですから熱機関の効率だと勘違いしてしまいます。しかも「エネルギー消費効率」と呼びますから余計に装置の熱効率だと誤解してしまいます。車は燃料が体積のリットルで、走行能力は距離のキロメートルですから明らかに次元が違います。熱効率だと誤解することはありません。「燃料消費量」と言う言葉からも走行能力だと解ります。空調機器の消費効率は「成績係数」と言えは誤解が起きます。COP、コエフェシエント・オブ・パフォーマンスです。効率を表すエフシエンシーと言う英単語はどこにもありません。一定の供給エネルギーに対しての動作能力を表す係数です。エアコンの動作能力とは熱の運搬能力です」

「えっ、違うのですか。私は百分を超える熱効率は存在する

と信じています」

「ところで、佐伯さんと交流する様になった経緯はどの様なものだったのですか」

「はい、『永久磁石応用連絡会』と言うグループで何度もお会いしています。私どもの発電機技術も永久磁石がキー技術ですから」

「差し支え無い範囲で、佐伯さんのオリジナル開発商品を教えていただけませんか」

「何れも、小型の直流モーターや発電機を使った機器です。その応用商品は幾つか聞いています。トイレの洗浄水力で発電して、個室の照明を賄う『せせらぎ』と言う水洗発電システム。小物を干す丸い物干しハンガーをゆっくり回転させ、それに吊ったおしぼりを室内で乾かす『ロンド』は動くオブジェとして好評だそうです。生ごみの脱水機、確か愛称は『しほりじめ』とか言っていました。彼のモーターで水を遠心分離するのだそうです。普通の洗濯機の脱水とは構造がちよつと違います。回転ドラムに小さな穴は無く、底の直径より口の方が少し広くなっているそうです。遠心分離した水分は回転ドラムの上の縁から放出されるそうです。だから生ごみをビニール袋に入れたまま脱水できると伺っています。『芳醇』という商品はウイスキーのボトルを高速回転する筒の中に入れて、回転波動を加えます。コクのない安ウイスキーが深みのある味に変わる装置です」

「何ですか、『回転波動』と言うのは。不思議な物理用語で

すね」

「はい、回転運動と横波振動は同じことだと言っていました。回転の方が高効率だとも。これは実際に舐めてみましたが、確かに味は違いました。回転前と後のウイスキーを持ってこられました。実際の回転装置は見ていません。他の装置も実物は見ていません。もっとも、私は下戸ですが」

小川は食傷気味の表情で聞いていた。

「面白いネーミングですね。売れていますか」

「解りません。最近は、『発電モーター』を使ったバイクです。これに私どもの発電機を使っています。この発電モーターバイクが O D A を市場に見据えた商品です。もし効率が二百なら、発電電力を走行力に使いながら、その電力をモーターの駆動力にも使います。外から電力を加えず永久に走行力が続きます」

「それはこの発電機と同じものですか」

「いえ、佐伯さんには当社の測定で効率二百%を納品しました。宇山産業さんに納品したこれは効率百五十%です。ところで、今回の宇山産業さんの測定結果はいかがでしたか」

「精巧さんのご期待に添った結果ではありませんでした。当社の実測では御社の発電機の効率は六二・二%でした」

「ええつ、半分にもならないのですか。そんなことは有り得ないと思います。まだ測定方法に不備があるのだと思います」

「ちなみに自転車の灯火用発電機の効率を実測しました。



三〇%でした。文献によれば電力会社の発電所の発電機効率  
は九十%を超えているそうです。念のため精巧電機さんもこ  
の測定装置で実験をしてください。後ほど宿泊場所のゲスト  
ハウスをご案内します」

「やってみますがこの測定装置はトルクメータと出力電力測  
定器が共通接地になっていますね。これが百を超えない理由  
だと思えます」

「計測器が拾う雑音を抑えるためです」

「これを独立させて計ってみます」

「はい。そうしてください」

精巧電機は宇山産業のゲストハウスに宿泊しながら、一週  
間、効率測定を繰り返した。結果は平均六十二・二%だった。  
測定誤差の範囲で両社の測定値は一致した。

「精巧さん。最初に御社の測定方法に間違いが有ったと思い  
ます。効率が百%を超える測定結果に疑問をお持ちになら  
ず、『新しい原理を発見した』と、佐伯さんや銀行、そして  
ご自身の『乱声』に浮き足立ち、遠足前夜の子供の様に心躍  
ったのだと思います。加えて、当社の応対に舞い上がられた  
気がします。きつい言い方ですが、乱声が乱心を招いてしま  
ったのではないのでしょうか」

「とんでもありません。何をおっしゃいますか。私はいつだ  
って冷静です。時に、高名な学者先生が、『教科書には間違  
いが有る』と公言されます。だから『熱効率は百%を超えな  
い』としている物理読本を疑いました。むしろ新しい物理学

を提唱できると思えました。ODA事務局長の佐伯さんも甚納  
得されて、この発電機をバイクに活用しようとしています」

「『教科書の間違い』とは、その部分が誤解を招く記述で『完  
璧な表現ではない』と言う意味だと思います。これは間違い  
ではありません。実際に教科書にある間違いは誤植程度でし  
ょう。誤植は教科書の発行前後に、正誤表が配付されます。

その著名な学者先生の『間違い発言』も、精巧さんの誤解を  
招きました。教科書の基礎学問を習得した後、それを越える  
学問を求めなさい。そこでは、あれやこれや、試行錯誤が有  
るでしょう。後に間違いだったとされる仮定や推論を立て、

その中に真理を見つけることが学問だ、という意味だと思  
います。その学者先生の『間違い』と言う表現も不完全だっ  
たと思います。あるいは、ご自身が子供の頃、教科書の記述を  
誤解したのかもしれない」

「おっしゃることは解りますが、世の中に間違いや誤解は幾  
らでもあると思いませんか」

「あるでしょう。間違いの他に『分からない』ことが山ほど  
有ります。分からないことに拙速な結論付けをすると、後に  
『間違いだった』ことにもなります。教科書に間違いがある  
という発言は教科書に接する教育現場の先生方に大変無礼で  
す。先生方は自然現象や原理を十分理解しています。その上  
で生徒に教示します。教科書は授業の進行表のようなもので  
す。私は大学の教養課程で物理学を講義する老教授がとても  
印象に残っています。毎回手ぶらで教壇に立たれました。つ

まり、先生も学生も教科書は持っています。先生はいきなり黒板に図や公式を書き始めます。学生は必死でノートをとります。その解説が終わると、演習問題を解き示しました。学校を卒業して、会社勤めになって、物理や数学の公式を駆使する人は減多に居ません。受けた教育のほんの一部の専門知識が活用されます。理系教育は自然現象の原理原則を理解させるために、演繹的思考手順、帰納的思考方法を身に付けさせていきます。社会に出た時、日々の『仕事』である『問題解決法』を数学や物理学を例にして練習しているのだと思います。教育現場の先生が学生、生徒に間違いを教えることは、ほとんど無いと思っています」

「そうですか。もう一度この発電機を持ち帰って、ウチの測定機にかけてみます」

小川は村田取締役に精巧電機の反応と、今後の業務計画を報告した。

「これから、磁気回路をいじってみようと思います。できれば効率八十%を越えたいと思います。使い道も合わせて中村さんと探ってみます。それから、技術顧問と議論する場を設定してください」

間もなく、一匹狼の信用調査会社から佐伯和夫の信用調査報告書が届いた。

【氏名 生年月日 本籍 現住所 学歴 職歴 現職 論文  
登録工業所有権 所属団体 推定年収 賞罰 生育地 家族  
構成 交友関係 趣味 周囲の評判等が列記され、最後に総

合コメントが綴られていた。

佐伯和夫は O D A、政府開発援助機構の職員ではありません。カタカナのオー・デー・エーはオリジナル・デザイン・アシストです。日本語訳は原理設計支援としています。夜の街の発明家、電気音響設備の設計施工、特に接客室の照明、音響を購入品で構成して、夜の街に相応しいシステム創りを売り物にしています。佐伯のオリジナル商品はすべて原理試作で終わっています。高学歴、一流企業勤務を経て、個人で電気音響設備設計会社を設立しましたが、市場調査と称して、夜の街の遊興で資金を使い果たしました。技術分野の人脈も絶たれ、現在は投資した夜の街を漂いながら生活しています。家族とは完全に別居状態ですが、長男が事務所兼用のアパートの家賃を肩代わりしているようです。本人に面談を申し入れましたが拒絶されました。

【以上】

宇山産業の技術顧問三人と村田、小川、中村はその地の奥座敷と言われている温泉旅館で技術検討会を開いた。

試作発電機の動作原理を矢示法で説明した。加えて測定装置と測定結果を図解した。特段の現象も、説明すべき理論も無かった。

教授が反応した。眉間に縦皺を寄せた。

「そうですか『やっぱり』ですね。そうじゃないかと思っていたのですが」

村田が教授にさりげなく聞いた。弟子の准教授と助教に答めるような眼差しを向けた。

「学会でもこの種の論文発表は有りますか」

「ええ、未だにあります、稀ですが。さすがに『永久機関』と言う記述はしません。効率が百分を超えらるとも表記しません。高効率とだけ書いてあります。しかし明らかに、永久機関の話です」

「そのような論文も発表する機会が与えられるのですか」

「春と秋の学会はお祭りです。誰でも歓迎です。この時はフルペーパーではないので査読はしません。すべての論文発表を採用します。玉石混交です。その論文に興味を持った人が追実験をしますが、永久機関の追実験論文は記憶にあります。怪しげな論文発表はプログラムの先頭に設定します。朝早く聴衆の少ない内に済ませます。世の中への悪影響を少なくする配慮です。困ったことに永久機関の提唱者はそれを否定する話に耳を貸しません。その道の信者です。永久機関に取り憑かれています。試作は途中で諦めます。だからマジシヤンのような小細工さえます。供給電源を実験台の中に隠して偽実験を披露します」

続けて准教授は浮薄な口調で評論した。

「昨今は強力な永久磁石が回収ってます。希少金属のネオジウムとボロンの微粉末に鉄粉を混ぜて、高温で焼き固めた焼結金属ってヤツです。その高磁気エネルギーがモーターや発電機にどんな形で表れてくるか興味がありましたね。もともと

技術的好奇心ですわ。ただの強力な磁氣的位置エネルギーに過ぎなかつたのか。磁力の大きさに比例した電気エネルギーに変換されただけだったのか」

技術検討会は夕食前に僅か三十分で終わった。夕食後、顧問一行は館内の「カラオケラウンジ」に移動した。准教授が「歌は助教が一番上手い」と歩きながら呟いた。村田が一泊組に残り、小川と中村はタクシーで自宅に帰宅した。

「中村さん。助かった。あなたの電磁気学の知識と手先の器用さがあって、残り四千万円をむざむざ、ドブに捨てずに済みました」

「いや小川さんの探求心に付いて行っただけです。小川さんのリードが有つてのことです」

「お互い様つてことにしますか」

「やらなくてもいい仕事でしたね」

「いや、あの顧問達は専門が『精密機械』だから、『電気機器』は素人だと思ふな」

「そうなら、専門の先生を紹介してくればいいじゃないですか。あの大学には電気工学科だってありましたよ。その中には電気機器が専門の先生だって何人か居たでしょう」

「大学の先生は案外孤立しているみたい。一国一城の主で、ほかの城は攻めないし、和睦も結ばない、それが礼儀なんですよ」

「攻めなくてもいいですけど、協調し合つたつて罰は当たらないでしょう。それにしても、小川さんはめずらしい人です

ね。我社での初仕事が『ダメ出し』の実績ですからね」

「そう、普通は新商品の売り上げ実績が評価されるけど、まあ、これからだと思っている。このテーマはこれで終わりにしてもいいかな」

「そうしましょう」

精巧電機は三か月経て電話をして来た。

「すみません。一か月のつもりでしたが、実験に手間取りまして。明日にも新幹線で伺います。午後一番でお願いします」

小川はその間、精巧電機に連絡を取らなかつた。結論は出していたので、この発電機の効率向上の試作を繰り返した。

その応用として農業用の灌漑用水路を使った「マイクロ発電システム」や、街灯用「風力発電システム」の設計を始めた。

あるいは、液化ガスエンジンでの「発動機発電機」を企画した。広く協力会社の知恵と技術を借りてのことだった。

「お久しぶりです」

「どうでしたか御社での再実験は」

「やはり一五〇%の効率に変わりはありませんでした。今日は第二案をお持ちしました」

精巧電機の社長は次案の解説を始めた。

「新しい構造を考えて来ました。まず一キロワットのエネルギーを貰って一キロワットの仕事をすれば、効率は百分で良いですね。この試験装置のように、駆動用モーターと駆動さ

れる発電機を一本の軸で繋いだりしません。モーターと発電機の両方を一体化します。モーター巻線と発電機巻線を交互に配置します。これに回転する永久磁石の磁力を作用させます。そうすれば、電気の仕事量と機械の仕事量を区別して換算することもなく、仕事の効率がいっぺんに判ります。きつと宇山産業さんの効率測定装置でも百分を超えます」

「第二案のアイデアも、まず御社の技術で原理試作をしてください。その試作品を私共が評価します。そういう契約でしたね」

「いや、ウチの技術だけでは作れないので、宇山さんのお力添えをお願いしますのです。原理だけは私どもが提供します。これが契約に沿った一連の技術供与になると思っています」

「絵に描いた餅では、これ以上進まないでしょう。最初に御社提供の試作品が効率百分を超える発電機であればと仮定して、その原理の解明を当社が請け負いました。百分を超えるければ契約は『解消』になります」

「先ほど申し上げた『一体化』で実現できます。最初にモーターを駆動する初期電力パワートを加えます。回り始めたら自分の発電力で回り続けます。この回転力と電力に、色々な仕事をさせます。電力は照明です。家電にも使います。回転力はポンプに繋いで水を汲みます。自転車につなげば電動バイクになります。パイロットはクランクを使って手で回しても良いです。後のエネルギー供給は自給です。開発途上国は待つて居ます。いえ、世界中のすべての国が助かるはずです。救世

主です」

「精巧さん。電動アシスト自転車はご存知ですね」

「承知しています」

「あれはどうして、続けて漕いだり、充電したりしなければならぬのですか」

「車輪駆動用のモーターしかついていないからでしょ」

「車輪に灯火用発電機を付けて、出力電力をアシストモーターに繋いだら如何でしょうか」

「発電機も、モーターも私どもの原理と違いますから、成立しないでしょう。私どものモーター発電機を使えば、最初に二、三回漕ぐだけで、後は自力で走り続けます。これがさっきの電動バイクに繋がります」

「精巧さん『永久機関』と言う代物はご存じですか。十八世紀に端を発した研究です」

「はい、それが私どものこれです。でもその四文字を口にするとみんな私から離れていきます。近寄ってくれたのは、佐伯さんと、銀行と、御社です」

「永久機関は現代物理学ではあり得ないことになっていますが」

「だから、それを打ち破りたいと、以前にもお話ししました。私どもの先代は発電効率の測定をしていませんでした。三年前に気付いた私は効率測定を何度も繰り返しました。父の発電機は効率百%を超えていました」

「たとえば水を汲み上げるために使った動力エネルギーは水

汲み仕事を終わると消えてしまいます。仕事を終えたエネルギーを再度、何らかの方法で引き出して、次の仕事に使うことは出来ません」

「でも、小川さん、世間では『再生可能エネルギー』と言うではありませんか。エネルギーの再生でしょ」

小川は精巧電機社長の説得にかかった。

「埋蔵量に限りのある石炭石油はいずれ絶えます。人工的には造れないので「再生不可能」なエネルギー源と呼びます。それに対し無尽蔵である太陽光を「再生可能」エネルギー源としました。精巧さんは本当に使ったエネルギーが再生できると思われますか」

「はい。再生するからそう言うのでしょ。リサイクル、リユースです」

「エネルギーは使い棄てです。使用済みのエネルギーは再生不可能です」

「水の電気分解と、燃料電池の関係はエネルギー再生ですよ。水に電気をかけて水素と酸素に分けますね。その水素と酸素を反応させれば電気と水が出来ます。これを繰り返せばエネルギーの再生ではないでしょうか」

「それは可逆反応のことです。どちらも発熱を伴います。熱損失が発生しますから効率百%にはなりません」

「物理だけじゃなくて、化学でも効率百%は超えないのですか」

「物理と化学の違いではありません。自然科学の現象と、そ

れを裏付ける理屈です。精巧さん。私達は生きるためのエネルギーを毎日どのように供給しているのでしょうか」

「食料ですね、インフラの電力、ガスや石油です」

「その大本は何ですか」

「食料は穀物、野菜、肉、魚ですか。電力は石炭、石油、原子力ですか、水力もありますね。そうだと太陽光発電も広まってきました」

「米や野菜はどうしてできますか」

「そりゃ肥料があるからでしょう。エネルギーを持っていない水も必要な気がします」

「植物は太陽光と炭酸ガスと水で光合成し、その結果『でんぷん』を作ります。水と炭酸ガスだけではでんぷんは出来ません。生命のエネルギー源は太陽光の存在がキーになります。思い出してください。中学校の『理科』で習った『食物連鎖』の切り口です。太陽光が持続して地表に降り注いでいるから、私達の生命エネルギーが持続して得られます。植物も、動物も、エネルギーは使った分を補うため補給します。使用済みエネルギーが再生出来れば『食べても、食べても減らない羊羹』が出来ます。子供の頃にそんな夢の漫画がありました。再生可能エネルギーという表現はこの頃、持続可能エネルギーとか、非化石エネルギー、自然エネルギーとも言います。使ってしまったエネルギーを再生して、また使うという誤解を招かないためかも知れません」

「再生しない再生可能エネルギーですか。日本語がおかしい」と思いませんか」

「法律用語、学術用語、生活用語、などの有識者が膝を突き合わせて決めたのではないのでしょうか。太陽がある限り、光は注ぎ、風は吹き、波はうねり、雨は降るでしょう。『再生』より『持続可能』の方が誤解は少ないと思います。持続可能と言っても、『未来永劫、永遠』は形而上、精神世界の語句でしょう。技術分野では『寿命』が重要視されます。ここで使った永久磁石の永久と言うのも怪しいものです。その磁気的位置エネルギーは着磁後本当に永久でしょうか」

「はい永久です。私の知る限り、磁力の劣化は見たことがありません。精密に測定したわけではありませんが」

小川は精巧電機の社長に軟着陸を勧めた。

「さて、御社の原理試作品は効率百%を超えない実験結果でした。従って、御社から当社への技術譲渡、その後の共同開発契約は『解消』でよろしいですか。精巧電機さんが納得されれば、その旨当社の法務部に伝えます。それとも、御社の検討期間をとりましょうか」

「あと半年頂きたいです。効率測定装置をお貸しただけませんか。この方法で、当社の発電機効率を自分なりに測定してみます」

発電モーターの実証課題は小川、中村が始めて九か月になる。小川は村田取締役を経過報告をした。

「うん、どうだい、継続するかい。効率を百%に近づける『高

効率化」を追求するか」

「まず、精巧電機との契約は解消しましょう。発電機の効率は今のところ六十二から八十三にアップしています」

「短い間に随分と向上させたな」

「向上じゃありません。教科書通り、鉄心を積層珪素鋼板にして鉄損を減らしただけです」

「まあ、駄目出しの研究も重要だ。今回は小川、中村コンビの確かな実績だ」

「応用分野については、試作止めにしたと思います。発電機ではなくて『発電システム』で新規性を強調した工業所有権登録の請求をしたいと思えます。特許公開公報で世に晒しましょう。他社からのクレームが多いほど登録の価値は高いはずです」

「知財部と議論してほしい」

「あと一か月かけて報告書をまとめます。銚を取めて、永久機関の乱声を鎮めましょう。銀行にも、佐伯さんにも落ち着いてもらいましょう」

「うん。合理的な引き際だと思ふ。宇山社長も納得するだろう。私から報告しておく」

「ところで、開発開始のきっかけは技術顧問の『やってみなけりゃわかない』と言う発言が大きかったのでしょうか」

「まっ、俺もその言葉には触手が動いた。勿論やらなくても良い事だって幾らもあるさ。だけど『動く商品』を作り出したかった。その前向きな商売上の好奇心だ。しかし笑っちゃ

うな。二百年の間にフッとぶり返す市井の科学迷信はやっぱり迷信だったな」

「確かに『動く商品』はやって見たくなります。子供のおもちゃ遊びみたいなもので、動く『からくり』を見たくて随分分解しました。再組み立てが出来ないこともありました」

「話が変わるが、会社が新規に社員を一人、一年間雇う経費を知っているかな。我が社の場合一口で一千万円だ。その社員が何の実績も無く、社員教育を受けて、給料を貰って、社会保険を手にして、一年で辞めて行くと、会社は一千万円の損失額を出す。今まで新入社員の食い逃げは何度も経験した。面接試験でこつちがしくじったってことだ。今回は早々に残り四千万円の出費を抑えたじゃないか。上出来だよ」

「でも初期に一千万かけても、一年後にはそれを上回る売り上げが必要でしょ」

「心配しなさんな。これだけ社員が居れば、他者の分まで稼いでくれる社員は幾らでも出てくる。それに会社経営は二年の短いスパンで考えてはいない。五年後、十年先の構想を持って動く。それより、今回、君は中村君や外注さんを上手く動かしたじゃないか。成果はそこだ。二人とも一皮も二皮も剥けたと思うよ。マネージメント力こそ『やってみなけりゃわかない』だったな。全く、ほんとに。これが会社の財産だったことさ。技術力は人が生んで育てるものなんだろうな」

「それにしても高い買い物でした」

「法務部が精巧電機に向いて、契約解消を取り付けてきた。手付金の返還は求めないことで精巧さんは承知した。貸した効率測定装置は木枠の開梱さえしていなかったそうだ。精巧さんはなごり惜しむ元氣も無かつたらしい」

「繰り返してすみません。手付金の出費一千万円の勇断理由は何だったのでしょうか」

「何よりも『好奇心』だ。加えて精巧電機は一か月後に『不渡り手形』の状態だった」

「宇山社長は情に厚い方ですか。一代で従業員八千人の会社に仕上げた実力はお人柄でしたか。でも企業は営利の追求が原則です」

「創業の頃、縄跳びのビニール紐が取手の付け根ですぐに千切れてしまった。あれは季節商品だ。ひと冬もてば良いのだが、子どもの正月遊びで瞬く間に千切れてしまう。春風の中で跳ぶことは出来なかった。そこで押し出し工程を二回に分けて、ビニール紐の付け根を太くした。丈夫になると思っていたことだ。しかし逆だった。付け根の紐を太くすればするほど切れ易くなった。取引先の大手教材問屋の技術顧問が助言した。『紐の付け根を細くしたらどうか。細くしていくことは紐が無い状態に近づける。究極、紐がなければ切れない。有るから切れる』と。宇山社長は少しずつ細くして旋回耐久試験を繰り返した。加えて取手に柔軟性を持たせて、ひねり荷重を、握る親指と人差し指に分散させた。たかが縄跳びの道具でも、学問的に順を追って検討すれば、目標の特性が得

られるものと、つくづく思ったそうだ」  
「それで技術顧問の存在を重要視されるようになったのですか」

「買い替え需要は少なくなったが、丈夫だと言う評判で新規に取引する教材問屋が増えた。僅か三年後には全国シェアが八〇%になったそうだ。切れ難い紐の開発に苦しんでいた丁度その頃、ビニール原材料の支払いが滞り、来月には手形が不渡りになりそうだった。その時、大手教材問屋は宇山社長に『もう一息だ』と激励して、怪しげな手形に裏書きをしてくれた。おかげで、經理の綱渡りも、半年後には正常に回り出したと聞いている」

「そう言う社史が有ったのですか。その恩返しを今回精巧さんに向けたのでしょうか」

「『情け』も切掛けの一つだったかもしれない。詰まるところ、画期的な新商品が欲しかったのさ。社是に『社会貢献』等と掲げる必要は無い。大勢の人が必要とする商品なら、売上高は怖いように伸びる。それが社会貢献の指標だ。今回のしくじりは商売上の好奇心が科学的な好奇心を上回ってしまった。技術的好奇心は高度な科学知識に裏打ちされて初めて意味を持つ。小川、中村の実験で、当社の不足していた知識や知恵を一つ補うことが出来た。」

減多にないことだが、その年の嵐揚げ合戦は三日間、梅雨の走りを思わせる嵐が吹き荒れた。毎年の乱声は静まり返っ



ていた。小川は風雨の音を聞きながら「希望や正義や真理を追い込む乱声は、いかにも頼もしい。心強いもののだが」と思った。ふと朝刊に目を落とすと「電動バイク詐欺・被害額二億円」の見出しを見た。電動バイクの代理店を募集したところ二十店が応じた。保証金を支払ったが、電動バイクはいつまで経っても、いずれの店にも納品されなかった。詐欺グループの一人に佐伯和夫の名があった。

### \*注釈

現在、導電性プラスチック素材は「有機半導体」の分野で実用化されている。長期に渡る研究とその成果を讀えて、二〇〇〇年白川英樹氏等にノーベル化学賞が授与された。

(中区)

「入選」

## 非色に染まる

竹内弘子

物心ついたときには憐れむことを知っていた。まだ四歳、自我が目覚めたばかりだった。

私は母を憐れんでいた。かわいそうな母、気の毒な母、哀れな母、どうしようもない母として――。しかし、それと同時に私は母を憎んでいた。

母は唐突に、私に声を荒らげる。

「本当に、あんたって子は！」

そこから先は言葉が出ない。顔を真っ赤に膨らませ、両手をぎゅつと握りしめ、ぶるぶると震えながら立ちすくむ。

母が何に對して怒っているのか、私にはさっぱりわからなかった。私はない知恵を必死に絞る。おもちゃを片付けなかったからか、ご飯をこぼしながら食べたからか、それとも、それとも……。

いくら考えてもわからないから、口がへの字に曲がってくる。両目が険しさを帯びてきて、こめかみに皺がよってくる。

「また、そんな顔をして！」

耳元でぱんつと乾いた音が響く。頬が熱したように熱くな

る。私は頬に手を当てて、涙目で母の顔を盗み見る。顎先をくいつとあげて、冷たい目線を下ろした母は、「泣いたって駄目だからね」と、抑揚のない声で言い放つ。

私はきつと母の本当の子供ではないのだろう。だから私のことが嫌いではかたないのだろう。その場をやり過ぐすそのために、私は思考を放り投げる。遠いところ、誰の手も届かないような高い空へ、私は心をのぼらせる。

私は知っている。母の怒りは精神の平衡を保つために、必要不可欠なものなのだ。私を捌け口にすることで、本物の鬼と化するのを辛うじて踏みとどまっている。本物の鬼に化してしまつたら、私は今よりもっとひどい扱いを受けるだろう。

私だけではない。二つ下の弟や、家族のために身を粉にして働いている父まで被害をこうむるかもしれない。

私さえ我慢すれば、家のなかの平和は保たれる。母に抵抗できなかったのは、非力なうえに語彙が少なく言い返せなかったというもあるが、この家を壊すわけにはいかないという使命感があつたからだ。

母親としての資質に欠け、娘にかばってもらわなければ母親としての立場を守れない人——それが私の母だつた。しかし、そんな母でも愛していた。ふとしたときに頬に浮かべたささやかな微笑みや、横断歩道を渡るときに手をひいてくれたときの温もりを、何度も何度も思い出しては心の箱に刻んでいった。

愛されたいという願望と、受け入れてもらえない辛さや悔

しさ、そして諦め、それらがなймаぜになつた感情をどう表現したらいのかわからない。思慕という言葉では片づかないものがある。だったら何かと問われると、私は答えに窮してしまふ。

そんなもやもやを抱えたまま、私は幼稚園に通いだした。このままの状態が続いていくと思っていたが、事態は一気に好転した。

年長組にあがる前に、私たち一家は父の実家に引越した。長男である父が年老いてきた親の面倒をみるためだと、あとになって聞かされた。

転園は嫌だつたが、祖父母といっしょに暮らせるのが、私はうれしくてたまらなかつた。祖父は寡黙だがにこにこしていて、あぐらの中に私が入ると包み込むようにしてくれた。祖母はしっかり者で、びしゃりとした物言いをする人だつた。しかし、善悪をわきまえていれば叱られることはなかつたし、その一方で甘やかせるということをきちんと知っている人だつた。デパートに連れていってかわいらしいワンピースを買ってくれたり、屋上でアイスクリームを食べさせてくれたのも祖母だつた。

その一方で、母は居心地の悪さを募らせた。子供に当たり散らしていると、祖母が風のように飛んでくる。叱っている理由を尋ねられても、母はまともに答えられない。

「そんな育て方をしていれば、どんな子も根性が捻じ曲がる！」

四六時中といつていくらい、母は祖母に戒められた。子育てだけではなく家事が得意でないために、たびたび指導もされていた。

母は萎縮していった。身体がひとまわり小さくなり、表情も乏しくなっていた。祖母の気配を感じるだけで、身体をびくりとさせていた。しかし、おかげで家の中が平和になり、私はのびのびと育っていた。

それから何年かたったのちに、立て続けに祖父母が亡くなった。祖母の監視が消え去ったせいで、母は完全に解き放たれた。いらいらを募らせて、私に向かって当たり散らす。それで気分がおさまらなければ、手をあげることもしばしばだった。

建築士の父は仕事で忙しく、抑止力を期待することができなかった。しかし、そのころには私は大きくなっていった。以前のような無力さは微塵もなく、母を完全に凌駕していた。私は母をねじ伏せた。理不尽な暴力を受けそうになったときは、容赦なくその手を遮った。母は私には勝てないと思つたのだろう。私に哀れを装った。しかし、その陰で弟に刃を向けていた。

気弱な弟は決して歯向かわず、やられるままになっていった。弟を守らなければならぬが、いつでもそばにいてやるわけではない。

私にできる唯一の方法は、母のガス抜きをすることだった。母の言うことにいちいち肯き、味方を装って話を聞くと、

表情がだんだん和らいでくるのだ。

そのおりに母の生い立ちを聞かされた。

戦後すぐに、母は一家で満州から日本に引き揚げてきた。それまでは裕福な生活を送っていたが、帰国したときは無一文に近かった。親戚を頼って生活を立て直せたものの、それまでの苦労は筆舌に尽くしがたいものだった。

「着るものはみすぼらしいし、引揚者だつて見下されてね。馬鹿にされたりいじめられたりで、辛いばかりの毎日だった」

そのときに聞いた言葉が、ささくれのようにひつかかった。私だけがこんな苦労をしなければならなかったと、母は確かに言ったのだ。

母だけが苦労したというのはあり得ない。いっしょに引き上げてきた兄弟姉妹も、同じように苦労を重ねたはずだ。父親は引揚げる直前に亡くなって、病弱な母親に無理を強いることはできなかった。母の上に兄と姉がいるのだが、年長者の心労はいかばかりだったろう。全員連れて無事に帰りつかなければならないと、重責に耐えに耐えたいうえでの帰還だけに違いない。

その後の話の中にも、同じフレーズが繰り返された。

「私だけがこんな目にあっている」

「私だけが犠牲になっている」

みんなそれぞれ苦労してるし、みんなそれぞれががんばっている。母だけではないのだと、さりげなく言ってみたが、母の耳には入っていない。

自分の辛苦が最大であり、それ以上のものなど存在しない。それなのにその辛さを誰一人として理解しない。夫も子供も助けにならない。私だけが苦しくて悲しい——。

次々と吐かれるそれらの言葉は、まるで呪詛のようだった。母にとって世界というのは、自分の表皮の内側だった。表皮の外側は存在しない。それなのに外に向けて大きな声で叫んでいる。私のことを理解しろ、私のことを慈しめ。幼児が駄々をこねるように、じたばたと要求し続ける。

視野が極端に狭いのだ。理解の範疇を超えていた。原因はわからないが、わかっていることが一つだけあった。私には母を救えない。

\*

午後八時、夕食の片付けがすんで、リビングのソファに腰をおろす。テレビにはプロ野球の中継が映っている。夫はビールのを片手に、するめをちびちびとかじっている。パジャマがわりのＴシャツの裾から、お腹の贅肉がはみ出ている。

「お疲れさん」

画面から目を離さずに、夫がぐもった声を出す。私は中日にも巨人にも興味がなく、ユニフォームの違いもわからな

い。  
あなたはいいよね、テレビを観ていればいいんだから。思わずため息が漏れ出てしまう。

家事をしない夫にむけての憤りからではない。狭いマンションでの二人暮らしだ。二人の子供が独立してから、家事の一切が簡素化した。慣れない家事なんかに出されたら、余計な仕事が増えてしまう。

私のため息は、これから始まる苦行にむけてのものだった。毎晩、電話がかかってくる。時刻はちょうどこれくらい——。

「今日はさあ」

挨拶もなく、そこから始まる。電話を切るまでの一時間、口をはさめる瞬間というのは皆無に近い。

「千恵子さんたらさあ」

スマホを片手に和室に飛び込み、びしゃりとすべての襖を閉める。その間も母の声は、がさがさと耳障りな音をたてている。

父は去年、めでたく定年で退職した。おとしから弟夫婦が同居している。年取った両親の面倒をみてくれるというのだから、本当にありがたい。

弟の啓介がせっかちなら、伴侶の千恵子さんはおっとりだ。二人そろろうと漫才のような、軽妙なやり取りを見せてくれる。彼らの子供たちも成人して独立し、今は遠方に住んでいる。

「ご飯を作ってくれるのはいいんだけど、なんだか味が濃くてねえ。私もお父さんも高血圧があるっていうのに、ぜんぜん配慮っていうものをしてくれないのよ。全く気がきかな

いんだから。自分だっていい年なんだから、言わなくてもわかると思うんだけど……」

「ちよつと、声が大きいんじゃないの？ 千恵子さんに聞こえちゃうよ」

咎められても、母はけらけらと笑うばかりだ。年に似合わない甲高い声が、私の背立ちを掻き立てる。

「大丈夫よお。自分の寝室で話しているんだもの。お父さんは茶の間でテレビだし、あの二人は二階に上がったから、私の声なんか聞こえないわよ」

目の前に母の顔が浮かんでくる。得意そうに鼻をもちあげ、嬉々として喋っている。醜い顔だ。顔立ちは悪くないのに、内面が造作にあらわれている。私は母似だから、年をとつたらあんな顔になるのだろうか。そう思つたらぞくりと背中を悪寒が走った。

無言の私に構わずに、母は悪口を言い続ける。話題は千恵子さんから啓介にうつり、啓介から父にうつつて、再び千恵子さんへと戻っていく。

よくもまあ、こんなふうに次から次へと出てくるものだ。一時間も聞いていると、身も心もくたくたになる。

なんとか頃合いを見はからつて、母の話を中断させる。

「そろそろ私、お風呂に入るから」

「まだ早いじゃない？ あんまり早いと湯冷めするから嫌なのよね」

あんたの湯冷めなんて知つたこつちやない。そう言いたい

ところをぐつとこらえる。

「母さん、人の悪口ばかり言わないほうがいいと思うよ」

「あら、こういうのは悪口とは言わないのよ」

「だったら何ていうのよ」

「普通に話してるだけじゃない。悪口をいうっていうのはね、おばあちゃんみたいに本人の目の前で、ちくちくちくちく垂れることをいうのよ」

祖母が死んで三十年以上の年月がたっている。それでも恨みを忘れないのか、声を尖らせて母は続ける。

「私はね、意地悪な姑になるつもりはないんだから。なんか言つてもここだけの話。罪のない話だと思わない？」

目の前で言いさえしなければ、何を言つても許される。表向きはにこにことしているのだから、なんの支障も起こらない。

母の主張は屁理屈だ。一つ屋根の下で暮らしていれば、言わなくても相手の心情がわかってくる。自分のことをどう思っているのか、自ずと知れるものなのだ。

年を重ねればわかつてくる理屈だが、母にはそれがわからない。そうとわかつていても、黙っていることができなかった。落ち度ない千恵子さんが一方的に貶められるのを、見過ごすわけにはいかなかった。

「千恵子さんに頭を下げてお願ひしたら？ 味付けを別にしておほしいって」

母はとたんに不機嫌になった。

「だから言ったでしょ。意地悪な姑になるつもりはないって。千恵子さんの前では、努力してにこにこしているの。そうすれば千恵子さんだって気持ちいいし、家族円満でいられるのよ。目の前にいいお手本があるんだから、あなたも私を見習いなさい」

だったらこれ以上言うことはない。私は無言で電話を切った。突然電話を切られても、母は一向に気にしない。「あら、切れちゃった」というだけで、明日も懲りずにかけてくる。

結婚して家を出るときに、自分の役目は終わったと思った。弟も大人になって強くなり、母から理不尽なことをされたとしても、笑っていられるようになっていた。

しかし、一か月もたたないうちに、父から泣き言を聞かされた。

「母さんの当たりが強くなって参ってるんだ」

迷ったのちに、私は実家に電話を入れた。あの時の母の声が忘れられない。水を得た魚のように、べったりと鼓膜にはりついた。

その電話が今現在まで続いている。この役目はいったいいつまで続くのだろう。私だって来年は還暦だ。自分の老後を考えなければならぬ年齢になったのに、母のために一日一時間、貴重な時間を浪費している。

電話は切ったはずなのに、耳奥で母の声が響いている。はつらつとしたその声に、頭痛とめまいが入り混じる。

\*

死者はよみがえらない。すがりついても泣き叫んでも、死が撤回されることはない。残された者たちは、呆然とその死を見つめ続ける。死体を清めることも、墓に入れることも、失念したまま立ちつくす――。

世界中の人たちの生活が、非日常という禍々しい色に染まってしまった。そして私もただ中にいる。陰湿な空気が社会を覆い、さまざまな疑惑が蔓延した。あいつはマスクをしていない、あいつは目の前で咳をした、ささやかれる言葉がウイルスという存在を、さらなる悪へと導いていく。

檻に閉じ込められているわけではないのに、身体が縮こまっているように感じられる。心臓がきゅつと締めつけられたようになり、家事をするにもものろろと腰をあげるありさまだった。

だから私は五感を閉ざす。何も見ないように、何も感じないように、感覚を意図的に遮断する。そうすることでいつもと変わりない日常が、いつも通りに続いていると錯覚させる。

新聞はとっているが、目を通すのは家庭欄だけ。新型コロナウイルス関係の情報は、見て見ぬふりをして通り過ぎる。

日中にテレビを観るときは、教育番組だけにした。他の局はこぞって感染の話題をとりあげているが、マスクの装着や手指の消毒、せいぜいソーシャルディスタンスを叫ぶにとどまり、具体的な解決策は一つも提示できないでいた。

観ても不安が残るだけなら、そんなものは観なければいいのだ。買い物は宅配を頼むようにした。それも週に二度ほどだから、配達員と顔をあわせる機会はほとんどない。趣味といえるものは読書しかないが、最近是有料になるが図書館の宅配というサービスがある。ネットで予約すると自宅に配達してくれるので、フルに活用すれば外出する必要はない。

この分なら慣れない自粛生活もなんとか乗り越えられるかと思つた矢先、午前中にも関わらず、母から電話がかかってきた。

「ちよつとお、不織布のマスクが買えないのよ。薬局に行つてもないんだものお」

妙に語尾を伸ばした話し方が、ねつとりと私に絡んでくる。

「しかたないじゃない。みんな洗つて再利用しているらしいよ」

「だつて、一枚も残つてないのよ。買えなくなるなんて思つてなかつたから、買い置きなんてしてなかつたの。今から病院に行かなくちゃならないっていうのに、一体どうすればいいのよお」

どうすればいいかと問われても、私だつて困つてしまう。今はどの店も品薄で、買うには決死の覚悟がいるのだ。

「どこの病院にかかるわけ？」

「整形外科よ。昨日から膝がしくしくしちやつて、歩くのも一苦労してるのよ」

歩けなくなつたら、トイレに行くのにも誰かの介助が必要

になる。そのときは父や啓介、もしくは千恵子さんが手を貸してくれると信じているが、できることならそういう事態はもう少し先に延ばしたい。

私はいったん息をのむと、押し殺した声で母に言った。

「わかつた。今からマスク持つてそつちに行くから」

「そう!? そう言つてくれると思つたのよ!」

電話を切つた私の脳裏に、小躍りしている母が浮かんだ。

両手を打ち合わせたり、頭上でひらひらさせながら、邪鬼さながらに浮かれている。

喉元までせりあがつてきた吐き気を飲みくだし、勢いをつけてソファから立ち上がる。玄関の壁の車のキーをひつたくるようにして鷲掴みにすると、地階の駐車場まで小走りで駆けていく。

車を開錠して運転席に乗り込んだが、走り出したとたんに胃袋がぎりきりと痛みだした。言わずもがなだ。嫌なのだ。結婚して一度は母から離れたが、子供が生まれてからは関係を修復した。

夫の父親は早くに亡くなり、母親は病弱で入退院を繰り返していた。孫と遊んでくれるのを期待するのは酷だった。子供たちから祖父母の思い出を取り上げてしまうのは、身勝手な気がしてできなかった。

しかし、子供たち、特に長男が早いうちに気がついた。「どうしておばあちゃんは、お母さんのことを悪く言うの?」

正月の挨拶のために実家に行った帰り道、長男が私にそう

訊ねた。もうすぐ中学生という年だった。

どきりとしたが、素知らぬふりをした。ここで同調してしまつたら、祖父父母の思い出に傷がつく。

「おばあちゃん、私のこと悪く言つてた？」

私は後部座席に首を回した。

「言つてたじゃない。すっかり太っちゃつて、みつともないつて」

夫は車を運転しながら、バックミラー越しに長男にむかつて笑いかけた。

「そうか。太つたつて言つてたか。けどな、お父さんは太つたお母さんが大好きだぞ。ぶにぶにしているかわいいら、食べちゃいたいって思つてるんだ」

「ぶにぶにってかわいひよね。ぶにぶに、ぶにぶに……」

ポータブルゲーム機を操作していた次男は、キャラクターと私をだぶらせた。言葉の奥の明らかな悪意は、小学四年生では理解できない。

「大丈夫。お母さん、がんばつてダイエットするから」

「なんのダイエットするの？ 運動するの？ ご飯を減らすの？」

「甘いものをやめるっていうのはどうかなあ」

「あつ、それ反対。ぼくね、チョコレートダイエットがいい。ケーキダイエットっていうのでもいい！」

ちゃかした雰囲気になつてくれたので救われた。私はほつと息をつくつと、運転席の夫を見た。

夫はわかつてくれている。母の言葉尻の汚さも、無神経で自己中心的な性格も――。

「お母さんとおまえとでは、性格が全然違うんだな」

両親に夫を紹介したときに、あとで言われたのがそれだった。承知の上で結婚してくれて、そのうえフォロワーまでしてくれた。おかげで子供たちに、いい思い出だけを与えてくれた。本当に夫には感謝している。

その後、実家との関係は少しずつ希薄になっていった。子供たちの学校が忙しく、家になつて夜遅くにならないと帰つてこない。大学に進学して家を出てからは、益暮れにしか帰省せず、おまけにバイトがあるからと数日の滞在で帰つてしまう。

両親は孫とまつたりと過ごしたいと思つているが、物理的にかなわないまま時が過ぎた。私は意図的に、実家に立ち寄らないようにしていった。夜の電話以外は疎遠に近く、最後に会つた母の顔をうつすらとしか思い出せなくなつていた。

それでも一向に構わない。それこそが私の望みなのだ。しかし、「介護」という名の仲介が、母との関係を再び濃厚にさせていく。

「嫌だ、嫌だ。本当に嫌だ」

吐くように呻きながら、ハンドルをぎゅつと握りしめる。奥歯がぎりぎり音と音をたてる。こめかみの血管が怒張する。

世の中には星の数ほど親子関係が存在する。車を運転している人も、道路を歩いている歩行者も、必ず親というものがある。



存在する。彼らの親子関係は、どんな形をしているのだろうか。丸なのか三角なのか、それとも四角い形をしているのか……。

自分の形を思い描いてみたものの、どれもしっくりとこなかった。丸でも三角でも四角でもない。私の形は星型だ。とげとげが私を傷つける。楔は深く、引き抜いても根っこが深部に残ってしまう。ぐじぐじと侵食し、私を鬼に変えていく。母への想いが私を鬼に変えていく。

鬼のままで車を走らせ、一軒の家の前で車をとめた。黒い屋根瓦の二階家だ。玄関は両開きの引き戸になっていて、赤いポストが脇の壁にかかっている。シャリンバイの生垣に取り囲まれた、昭和が漂う古い家だ。

待っていましたといわんばかりに、母が玄関から飛び出してきた。私より頭一つ分背が低く、肩先で切りそろえられた髪はまっ白だ。鶏ガラのように痩せていて、着ているスーツはだぼだぼしている。

「遅いから待ちくたびれたよ！」

母は両目をきつと吊り上げ、私の顔をにらみつけた。

「そんなに時間はかかってないでしょ！」

私も母をにらみ返す。

「はい、これ」

小さな紙袋を差し出すと、母は袋をひったくった。がさごと音をたてながら、中身をずるりと引っぱりだす。

「なによ、一枚だけじゃない!？」

「当たり前でしょ。私のところだって余裕があるわけじゃないんだから」

「そんなこと言ったって、それじゃあ困るの」

ぶつぶつと文句を言いながらも、母はマスクを顔に当てた。それから横柄な態度を崩すことなく、私に向かって言い放った。

「榊原医院だから、早くして」

「はあ!？」

思わず間抜けな声が出た。

「いいから早く乗せなさいよ。あそこは行った順にしか診てくれないから、急いで行かなくちゃいけないの」

「私、帰るよ。連れていく約束なんてしてないもの」

今度は母が、間抜けな声を出す番だった。

「なにバカなこと言ってるの。ここまで来たんだから、乗せていくのが当たり前でしょ!？」

「バカなことを言ってるのは自分じゃない。とにかく私は帰るから」

しかし、結局私は乗せた。大声のやり取りに、何事かと思っただろう。隣の家の奥さんが、玄関の隙間からそつとこちらをうかがっていたからだ。

母は上機嫌で助手席のシートに腰をおろした。鼻歌さえも聞こえてきそうな、満面の笑みを浮かべている。

「千恵子さんはどうしたの」

ハンドルを切りながら、私は訊ねた。

「ああ、あの人……」

関心がまるでないかのように、母はそっけなく返事をした。

「啓介は仕事だからいないのは仕方ないけど、千恵子さんは家にいたんでしょ。マスクがあるか聞いてみたら良かったのよ」

「言ったのよ。不織布のマスクが欲しいって。探してくれたんだけど、どこにもなくてさ。だったら買ってくるって家を飛び出して、それっきり帰ってこないのよ」

私は思わず絶句した。今頃千恵子さんは薬局をはしごしたり、長蛇の列に辛抱強く並んでいるに違いない。

「悪いことしちゃったな……」

私のつぶやきは母には聞こえなかったらしい。

「あんないい加減な人なんて、こつちのほうから願ひ下げよ。やつぱり頼りになるのは娘よねえ」

榊原医院に着いてからも、母の機嫌は変わらなかった。母は車からおりた足で運転席に回り込み、ガラス窓を拳でどんと激しく叩いた。

「家にいたって暇でしょ？ だったら終わるまで待つてよ」

「なに言ってるの!? ここまで送れば十分じゃない。帰りはタクシーを呼んでよね」

「そんな冷たいこと、よくも平気で言えるわね。曲がりなりにも母親なんだから、それくらいしてくれてもいいでしょ！」

これ以上駐車場でもやりあうわけにはいかなかった。騒げば

病院に迷惑がかかる。私はここでも母に屈した。のろのろと車をおりると、母の後ろに従った。

病院の建物は道路より一段高いところにあり、階段の横に緩やかなスロープがついていた。当然スロープを使うと思っただのに、母はずんずん階段をのぼっていく。

「ちよっと！ 膝が痛いんじゃないの!?」

私は激しく責め立てた。

「痛いわよ。痛いに決まっているじゃない。だけど、こんなところで無様な姿をさらすのは、私の沽券にかかわるのよ」

だからなのか——。

いつもはゆったりとした脱ぎ着の楽な服しか着ないくせに、今日に限ってかっちりとしたスーツで固めている。こげ茶の千鳥格子の上品なスーツは、五十代の終わりころに、同窓会に着ていくために新調したものだったはず。

「五万円もしたのよ！」

実家を訪問したおりに、自慢げに見せられた。ハンガーを手にもったまま、母はその場でぐるぐると踊った。あの頃よりも痩せているから、スーツは完全にだぶついている。待合室の長椅子に座った母は、スーツからひよっこりと首を出している小さな亀のようだった。

それでも必死に背筋を伸ばすのは、母の精いっぱいの見栄なのだ。待合室を占めているのは、高齢の患者ばかりだ。自分分は彼らの仲間じゃないと、一人で勝手にいきがっている。

自分のありのままを受け入れられない姿というのは、はた

から見ると滑稽だ。それだけならまだ許せるが、自分の痛々しさに気づかないのは、見ているこちらが恥ずかしくなる。私は座らず壁際に立つと、テレビを観ているふりをした。

\*

診察の結果は「変形性膝関節症」で、湿布と痛み止めをもらって帰ってきた。高齢者に多い疾患ということで、治療も大切だがこれ以上悪化させないように、生活面での注意事項をあれこれとアドバイスされたらしい。

「年寄り扱いされちゃったわよ」

母は最後まで一人でぶんぶんと怒っていた。八十半ば、四捨五入すれば九十歳だ。誰がみても年寄りなのに、自覚というものがまるでない。

榊原医院に母を連れていったその夜に、私は啓介のスマホに電話した。母の病状を伝えるとともに、マスクのために奔走してくれた千恵子さんに、お詫びをしなければならぬと思っただからだ。

「母さんは基本的にずるいんだよ。都合が悪くなると、弱者に自分を見立てるんだ。それから被害妄想っていうのもあるだろ？ 私だけ不幸とか、私だけ辛いとか、そういう発言が多いじゃないか」

「そうそう、それからこういうのもあるよね。みんなが私をバカにする」

「自分に自信がないのかと思いきや、だれかれ構わず尊大になつて」

「だから友達なんて一人もいないし、習い事も続かないのよ」

母に対する見解が、「扱いにくい人」で一致した。二人同時に笑い出し、私はあることに気がついた。今日という一日を通して、初めて笑ったかもしれない。なんだか泣きたい気分になり、思わず唇をかみしめた。

「それにしても、そういう時期になったんだね」

今回は湿布ですんだものの、今後はどうなるかわからない。最初に介護の矢面に立たされるのは、同居している啓介たちだ。覚悟が必要な時期になったのだと、二人で改めて確認した。

電話を切ると、すでに九時を回っていた。啓介によると、母は夕食後に寝室に引きこもり、それっきり姿を見ないという。静まり返っているところから、さすがに今日は疲れはてて、すでに眠っていると思われる。

母からの電話がかかってこない。その事実が私の心を軽くした。

テーブルの中央に、缶チューハイと皿にのった焼きするめを鎮座させた。夫は寝室で仕事をしている。リモートワークというのだそうだ。新型コロナウイルスの影響で、自宅での仕事が多くなった。たぶん、これから一時間以上、部屋から出てくることはないだろう。

私はソファにごろりと横になると、テレビのリモコンに手

を伸ばした。ほろ酔い加減だったにも関わらず、いつもの癖でチャンネルを教育番組に合わせた。

健康関係の番組をやっていた。実直そうな年配のアナウンサーが、画面の向こう側で頭を下げた。

「こんばんは。今週は親子関係に焦点をあてていきます。お父さんやお母さんとの関係に、悩んでいる人はいないでしょうか。心が通じない、受け入れられていない気がしない、そんなもやもやした感情は、いったいどこからくるのでしょうか。」

今日は精神科の先生とカウンセラーの方々をお招きしています。コメントーターに児童福祉課の職員の方、そしてスタジオには十代から二十代の若い方々がいらっしやってくれています」

カメラが回転し、スタジオの後方が映し出される。十人ほどの若い顔が、緊張した面持ちで座っている。

「近年、虐待の件数が急増していると聞きましたが、いかがでしょう」

アナウンサーの問いに返事をしたのは、児童福祉課の職員だった。

「確かに増えていきます。虐待の相談件数の集計を始めた一九九〇年度以降、三十年連続で最多を更新しています」

「新型コロナウイルスの感染拡大との関連性も指摘されているようですが」

「集計結果からは直接的な影響は見られませんが、厚

労省は引き続き注視していくとされています」

「どういった虐待が多いのですか？」

「心理的虐待が、全体の約六割を占めています。その次に、殴る蹴るなどの身体的虐待。ネグレクト、性的虐待と続きます」

円グラフが描かれた一枚のボードを、アナウンサーが自分の前に立てかけた。ななめ横に並んでいる医師たちが、ボードのほうに視線を集める。

「グラフにするとこのようになりますが、どうして虐待は起こるのでしょうか」

指名を受けた精神科の医師は、軽く咳払いをしてから正面を向いた。

「虐待の種類によってさまざまですので、一概には答えられません。わかりやすいところで説明します。子供は親の愛情を受けて大きくなります。失敗しても挫折しても、無条件に許される。そのおかげで安心して社会に飛び立ち、経験を積むことで成熟した大人になります。」

さきほど親と言いましたが、必ずしも生みの親である必要はありません。受け入れてくれる大人がいれば、子供はきちんと育ちます。しかし、受け入れられず育った場合は、いつまでも愛されたいという欲求が残ります。だれかれ構わず受け入れてもらいたいと思うようになり、場合によっては依存症に陥ってしまったたり、ドメスティックバイオレンスやストーカーといった問題を引き起こします。そして、その気持

ちが自分の子供にむいたときに、虐待になってしまうのです」

医師はそこで口調を変えると、アナウンサーに問いかけた。

「自分の子供が思い通りにならないと仮定しましょう。おもちゃを片付けなかったり、嫌いなものを食べなかったり。そんなとき、あなたならどうしますか」

質問を向けられたアナウンサーは、困惑した表情をその顔に浮かべた。

「そうですね。ある程度は叱ったり論じたりすると思いますが、最後には子供だからと諦めてしまおうと思います」

「そうです。諦めて待つのです。大きくなったらわかるはずだと、自分の子供を信じるのです。しかし、愛されたいという欲求が強い場合は、そういうふうには考えません。

自分の言う通りに動かなかったことを、自分がないがしろにされたり、拒否されたことと同等にとらえてしまいます。愛されないことが本人にとって最大の苦痛になっていきますから、そういうことは、絶対に認められないことなのです。

そうではないことを確認するために、今すぐに、何としても、子供に言うことを聞かせなければなりません。それがうまくいけばいいですが、いかなければ憎しみが生まれます。その憎しみが、虐待という行為につながるのです」

それを聞いたアナウンサーが、総毛立った声をあげた。

「もらえなかった愛情を、自分の子供で満たそうとしている。言い方かえると、自分の親が果たすべきだった役割を、自分の子供に押し付けているのと同じことになりますよね」

「簡単にいうと、そういうことです。しかし、ほとんどの場合、虐待をしている本人はもろんのこと、されているほうも状況の説明ができません。深層心理の問題ですから、構造が大変見えにくい。かわいくないから虐待しているのだと、短絡的に受け止められて終わりになってしまいます。踏み込んだ理解をしていかなければ、虐待の問題は解決しません」

思わず立ち上がった。わなわなと唇が震えてくる。訳もわからずに叩かれた。悪意の言葉を投げつけられた。自分が愛されていることを確認するために、母は私を傷つけた――。

母のこれまでの行動が、やっと一つにつながった。そう思ったら、猛烈に怒りがわいてきた。母にとっては理由があつての行動だったが、子供の私には理不尽以外のなにものでもない。

翌日から私は動き出した。ありとあらゆる手段を使って、虐待というものを調べ始めた。図書館、インターネット、市役所の相談室も訪れた。調べれば調べるほど、母の悪行が浮き彫りになった。

「許せない……」

はらわたが煮えくり返るといふのは、こういうことをいうのだらう。気持ちを抑えようと努力すればするほど、頭にかつと血がのぼる。

考えないように努めるしかなかった。母からの電話は相変

わらずかかってくるが、留守電に切り替えて、一切出ないようにした。父に当たりが強くても、二人で解決すべきなのだ。娘に尻ぬぐいを頼むのは、お門違いというものだ。

それからしばらくは、図書館で借りた本に没頭した。ミステリー、純文学、ノンフィクション、ファンタジーと、手あたり次第に読み漁った。

読んでいるあいだは忘れられた。母との確執も数々の諍いも。食い物にされてしまった哀れな自分も……。

手におえないほど荒んでいたが、何日かしてようやく心が風いできた。だからだろう。私は完全に油断していた。かかってきた電話を取ったのだ。

母だった――。

「お父さんが寂しがつてるの。会いにきてやってちょうだいよ」

用件だけ伝えると、一方的に電話は切れた。

父が寂しがつている。娘に会いたいと言っている。私は衝動に駆られるままに、車を実家に走らせた。

\*

十月下旬、暖かな陽気だが、何かの瞬間にふっと冷たくなりそうな、そんな危うさが陽射しに感じられる午後だった。

玄関の鍵は開いていた。真鍮の取っ手に手をかける。からからと乾いた音とともに、家が奥を覗かせる。

両側に部屋があるせいで、廊下はのっぺりと暗かった。居間に続くガラスの嵌められた扉の向こうから、テレビの大音響が響いてくる。

「ただいま」

返事が返ってこないの、私は黙って靴を脱いだ。廊下を進入して居間に入る。炬燵に入った母の顔が、にこやかに私を出迎えた。

「ほらね。言った通りでしょ。ああ言えば、必ず来ると思っただのよ」

母が父に話しかけるが、父はテレビに見入っている。私が出来たことに気づいていない。父の耳が遠くなってきたことは啓介から聞いていたが、ここまでひどいとは、全く予想していなかった。

「どういうこと？ お父さんが寂しがつてるっていうのは、嘘だったっていうわけ!？」

「だって、しかたないじゃない。電話は通じないし、かかってもしすぐに切られるし」

「話なんてもう聞かないって決めたのよ。私はあんたのお母さんじゃない!」

言い放つ私に、母がへらへらと言いつ返した。

「なにをバカなことを言ってるの。そんなの当たり前のことじゃない」

我慢の限界を超えていた。私は母に詰め寄った。

「私、ぜんぶ知ってるんだよ。お母さん、私のこと、かわ

いいと思ったことなんて一度もないよね。いつも憎らしく思ってたよね。叩いても何とも思わなかったし、泣いても平気だったよね」

「そんなこと、あるわけがないじゃない。私は母親なんだから……」

「お父さんはなんにも知らないけど、それを教えたなら、どうなるかなあ。お父さんは子煩悩だから、さぞかしびっくりするだろうねえ。なんてやつつて、怒鳴るかもしれないね。それとも、こんなやつなんかいらなくて言うかなあ」

母は色めき立ち、そそくさと炬燵から立ち上がった。「洗濯物を入れなくっちゃ」と言いながら、庭先に出ていこうとする。

「あれー、逃げるのお？ 話は終わってないんだけどお」

私は母を追いかけて、一歩二歩と歩を進める。

「なにを言ってるのか、わからないわ」

焦ったようにそう言いながら、母がサンダルをつつかける。がたがたと音を立てながら、母が窓枠にすがりつく。脱ぎ飛ばしたサンダルが、庭の隅に転がっていく。

窓枠から視線を下ろすと、犬走りで転んでいる母がいた。なのに私の感情は、ぴくりとも動かずに静止していた。

「どうしたんですか!? すごい音がしましたよ」

千恵子さんが二階から飛んできた。

「お母さん、お母さん。しつかりして！」

ほんやりと佇む私の横で、千恵子さんが大声で叫んでいる。

「足が……。足が……」

太もを押さえながら、母がきれぎれに訴える。めくれあがったスカートの裾から、骨ばかりの細い足が、突き出るようにのぞいていた。瀕死の蝶は黒い腹をふるふる激しく痙攣させるが、母のふくらはぎもそれに似て、ふるぶると激しく震えていた。

救急車に乗っている最中も、母は「痛い」と呻き続けた。サイレンを奏でる振動に隠れて、私にはやりとほくそ笑んだ。

\*

大腿骨頸部骨折ということで、翌日には手術が行われた。しかし、興奮状態が続くために、入院生活は困難をきたした。

「なんでしょうねえ。鬼が来るって言い続けているんですよ。思い当たることはありませんか」

医師に訊ねられたが小首をかしげ、私は曖昧に笑ってみせた。

精神安定剤が処方されて、母はうとうとと眠り続けた。母の顔を直接見られたのは、手術の当日だけだった。新型コロナウイルスの影響で、家族でも面会が制限される。刺激がないことと安定剤の影響で、身体の機能は衰えていくばかりだった。

それでもなんとか骨折部位が完治した。痛みも取れて、リハビリが開始されたのだが、結局車椅子の生活からは離れることができなかった。食事もトイレも入浴も、すべてに介助

が必要だった。家に帰るのは実質的に困難で、老人施設への転院が決まった。

時々私は見舞いのために、母の施設を訪れる。

「お母さん、元気だった？」

私が顔を覗き込んでも、母はにこりともしないのだ。しかも面をしたままで、文句ばっかり垂れ流す。食事がまずいのだ、職員の対応が悪いのだと、とどまることを全く知らない。

そのたびに私は母をいさめる。食事がまずいのは、我儘だから。対応が悪いのは、あなたの性格が悪いから。必要以上に言葉を重ねて、今までの溜飲を下げていた。

しかしその日は様子が違った。母は私を見あげると、不思議そうな顔をした。

「お姉さん、誰？」

「ちよつと、私をからかっているの？」

しかし、母はきよんとした顔で、まじまじと私を見つめている。

私は慌てて母に訊ねた。

「ねえ、ここがどこだかわかっている？」

母は必死に考える。

「えーとね。ここは船のなか。私、お船に乗ってるの」

「ちよつと待ってよ。船のなかって、どういうこと？」

「あのね、ピョンニンナイっていうんだよ」

「なあに、それ。何かの暗号？」

母は激しく首を振る。

「ううん、違う。ピョンニンナイっていうのはね、病人ないっていうことなの。日本人じゃない人が、毎朝そう言って訊いてくるの。それから乾パンを五つくれるの。それが一回のご飯なの」

「ピョンニンナイ……」

見たことなんてないはずなのに、私はその場面に立っていた。

「病人はいませんか？」

肌の色の違う女性が、人々のあいだを巡回していく。差し出された手のひらに、乾パンを五つずつのせながら。疲れきったたくさんの視線が、女性の背中をぼんやりと追っていく。日本という故国への想いを、波音の間隙に埋めながら……。

「船に乗っているのはね、お母さんと、それからお姉ちゃんとお兄ちゃん！」

母は嬉しそうに頬を緩めると、自分の周囲を見回した。たくさんの老人が、ホールのあちこちに座っていた。何かをするでもなく、話をするでもなく、故国に想いを馳せている。

老人の間をめぐっていくのは、ピンクの制服を着た職員だ。「ピョンニンナイ」と繰り返しながら、老人の顔を覗いていく。

低く流れているテレビの音は、船底を切り裂く波音だ。くぐもったその音に、過去の亡霊が引きずり出される。沈殿し



ていくそれらの影が、ホール全体に積もっていく。

「お母さんがいない。どこにもいない」

いくら探しても母親はいなかった。姉や兄も見当たらず、母はしくしくと泣き出した。

私は母を許さない。死ぬまで決して許さない。しかし、ここで泣いているのは、いたいけな老女の姿をした少女だった。

この人は長いあいだ母親を探していた。ずっと迷子のままだった――。

戦中戦後の混乱にまぎれて、母は迷子になってしまった。

しかし、生きることにもみんな必死で、誰一人として母の迷子に気づかなかった。母は置き去りになったまま、いたずらに時間だけが流れていった。昭和から平成に、令和になっても、母は迷ったままだった。

「お母さん、見つからないの？」

いくらなんでも少女にむかって、辛辣な言葉を吐くことはできない。骨の浮き出た皺だらけの手の上に、私は自分の手をそっと重ねた。

母はうつむいたまま、うんうんと肯いた。

「だったらいっしょに捜しに行こう」

私は車椅子のストッパーを外した。上着を着せられてもここになった母は、なんだかうれしそうに笑っていた。

施設の周囲は散歩道になっていて、冬なのに美しい緑と花が添えられていた。私は空に目を向けながら、つぶやくように口にした。

「私もね、お母さんを探しているの」

「お母さん、どっかに行っちゃったの？」

「どこに行ったのか、わかんないの。本当にどこに行っちゃったのかなあ」

母はしばらく黙っていたが、思い出したようにふいに言った。

「それじゃあ、私がお母さんになってあげる」

驚いた私は、車椅子を押す手をその場でとめた。母の正面に回り込み、皺に埋もれたその目を見つめる。

「本当？ 私のお母さんになってくれるの？」

「本当だよ。優しいお母さんになってあげるね」

母はそれから、うかされているかのように、次から次へと言葉を紡いだ。

「おいしいものを作ってあげる。お菓子もたくさん作ってあげる。かわいいお洋服も縫ってあげる。音楽を聴いたり、ダンスをしたり、おでかけもいっしょにしてあげる」

だからもう、泣かなくていいんだよ。母の手が私の頬をつと撫でた。「ごめんね」という母の声が微かに聞こえた気がしたが、空耳だったのかもしれないし、私がそう思ったかっただけかもしれない。

それから半月後に、新しい年がやってきた。母の外泊が実現し、家族が実家を集まった。啓介夫婦と子供たち、私たち夫婦と子供たち、母の横には父がいる。

母は無邪気に笑っている。あれから母は、ほとんど喋らな

くなつてしまった。逆行している母の時計が、どこを指しているのかはわからない。しかし、私は思うのだ。母は今、失つてしまったものを、ようやく取り戻すことができたのだ。それを幸せと呼ぶことに、反対する者は一人もない。

（中区）  
（了）

「入選」

## 父の帰る日

遠藤 ゆき

お父さん。奈都子です。早いものですね。今年でお父さんが亡くなってから、はや十三年になります。生前、特別な信仰は持たなかったお父さんですが、仏教でいえば、今年はお父さんの十三回忌にあたる年ですね。実をいうと、生前はお父さんと何かと対立することの多かった奈都子ですが、何故か今年はお父さんの十三回忌を行いたいと思つたのです。不思議ですね。

数えて十三年前、そう、お父さんの亡くなったころ、奈都子は長年学んだ大学院を去り、浜松に戻ってきたばかりでした。研究の失敗、それに伴う自立の失敗。あの頃の奈都子は、度重なる挫折のストレスから、こころの失調をきたしていました。そんなところに大混乱を抱えていた奈都子は、お父さんのお葬式の時、まったく親戚の人たちに見せられるような顔をしていませんでした。立場のない奈都子は、お父さんのお葬式の時、どうふるまったらいいのか、何を言ったらいいのか、まったく分かりませんでした。

お葬式の手配など、あの頃の奈都子に出来るはずもなく、

妹の佐知子が、呆然とするお母さんを助けて、いろいろと差配していたことを思い出します。奈都子は何もできなくて、ただ家の中によさりと突っ立っていたら、佐知子に、「お姉ちゃん、やることがないのだったら、夕食の支度ぐらゐして」

と台所に回されました。だけど、あの頃の奈都子は、極度のこころの混乱にさんざん振り回され、悩まされた直後でした。奈都子のこころは疲れきっていました。その極度の疲れのため、奈都子の意欲だとか思考だとかは、すべてストップに陥っていました。そんな奈都子には、冷蔵庫の中を見渡しても、何を作っていいのか皆目思いつきませんでした。重たく感じる体をやつとで動かして、トマトとキュウリをぶつ切りにしたサラダと、ジャガイモのチーズ焼きを作るのがやつとでした。それだけでは、夕食にまったく足りるはずもなく、佐知子の夫、春人さんが、コンビニでカツ丼やら天津飯やらのお弁当を買ってきてやつと夕食になりました。奈都子のご飯を炊くことさえ気が回らなかったのですね。

お父さんが亡くなったのは、とても寒い年の一月でした。五十八歳から、それまで勤めていた日本の会社を辞め、台湾の企業の中国工場の工場長として働く決断をしたお父さん。そんなお父さんが、中国で体調不良を訴えて、日本に緊急に帰ってきたのは、十三年前の一月でした。中国に旅立って二年後のことでした。

かかりつけの医院から、受診後すぐに連絡があり、「肝臓の値が、異常に高い。入院になると思いますから、入院の支度をして総合病院に行ってください」

とのことで、かかりつけの先生の紹介した先の総合病院に即入院となりました。お父さんは、劇症肝炎を発症していたのでした。そんなお父さんがこの世を旅だったのは、そのたった十一日後のことでした。奈都子たち家族から見ても、もう入院二日目からは助からないだろうと思われるほど、お父さんの容体は悪いものでした。

奈都子は悪い娘でした。そんなICUに入ったお父さんに、その後には及んでも、恨みつらみを述べていたのですから。お母さんからは、

「奈都子は、お父さんに捨てられても仕方ないのだよ」と詰められたことを思い出します。奈都子は大学院に進学するという好きな道を、お父さんに支えられて歩いてこられたにも関わらず、好きな道で成果を上げることができなかったからです。それどころか、奈都子は自分の失敗の原因を、お父さんからのプレッシャーに転嫁して、お父さんに悪態をつき続けたのですから。他人様から見れば、奈都子は恵まれた娘だったにもかかわらず。

しめつばい話はやめましょう。お父さん。

お父さんのお葬式の日、お母さんは奈都子に言いました。「奈都子は、お父さんに治ると約束しなさい。奈都子がお父

さんに出来る恩返しはそのぐらいしかないのだから」

お父さん。奈都子は今ならお父さんに言えます。奈都子は今も医療のサポートは必要であるけれど、あの頃抱えていた多くの問題や悩みから抜け出して、元気になっていますと。

時間とは不思議なものです。お父さんが亡くなり、お葬式が済んだ後、佐知子がいきました。

「お姉ちゃんは、これからどうするの」

大学には残れず、それまで必死で打ち込んできた研究をあきらめるのは、ほんとうに悔しくつらかったけれど、もう自分でも無理なのはわかっていました。もう、三か月前にこの浜松の家に帰ってきているのだし、あとは大学に退学届けを出すだけです。奈都子は、佐知子に言いました。

「大学はやめる。あきらめる。半人前でもいい。何とか社会人をやりたい」

佐知子は言ってくれました。

「そう思っていると聞いてほっとした。お姉ちゃん、それがいいと思うよ」

それからの奈都子は、掃除の仕事のアルバイトだけど、働くという道を歩み続けてきました。お風呂を磨きながら、自分の欲に汚れて燃えかすのように真っ黒だったところも洗い整えてきたように思うのです。

どんな小さなことでもいい。自分にできる範囲のことを一生懸命に行い、毎日毎日を通り過ぎていくと、時はときに大きな贈り物をしてくれるものですね。お父さん。それは、平凡

な人生の汲みつくせぬ価値に気付くということでした。時ぐすりとはこうやって、与えられた一日一日を丁寧に生きることで与えられた洞察のことかもしれないね。お父さん。奈都子も一生懸命やってきましたと、今なら胸を張ってお父さんに言うことができます。

今年、不思議と縁の戻る年です。

この一月、浜松市の行っている文芸コンクールに応募した奈都子の童話が、市民文芸賞に輝いたのですよ。お父さん。実は四年前から、奈都子は昔好きだったお話を書くという活動を市内の文芸団体に所属して行ってきたのです。そういえば、浜松に帰ってきたばかりの落ち込んでいた奈都子に、お父さんが言ってくれたことを思い出します。新聞の文芸作品募集の案内を見て、

「奈都子もこういうものを書いてみたらどうだ」

と。研究に挫折したばかりの奈都子には、その時のお父さんの言葉が、それまでの研究に打ち込んできた奈都子の人生を否定されているように感じられ、とても切なく響きました。

でも、今思えば、奈都子にはほんとうにあっていたのかどうか分からない心理学の研究よりも、小さかった頃の奈都子が、物語や詩を楽しんで書いていたことを思っ言ってくれたのでしょ。

確かに、物語を書くということは、奈都子の中に、何か核というか、自分の芯のようなものを設える作業になったよう

な気がします。

誇れる自分、自信の持てる自分が出来た今年は、不思議と縁の戻る年になったのですよ。お父さん。

二月に大学の地方同窓会が浜松でありました。以前ならば、同窓会など、今の自分の立場のない立場が恥ずかしくて、とても出席する気にはならなかったのですが、市民文芸賞が背中をおしてくれたのでしょうか。岡崎に住む友人と誘い合わせて、思い切って同窓会に参加することができました。病気になっても縁を切らずにいてくれた友達にはほんとうに感謝します。話す相手はあまりいなくても、同窓会に参加できたと言うだけで、奈都子はとても嬉しく思いました。お父さんもきつと喜んでいてくれると思います。

今年ほんとうに縁の戻る年です。縁の戻りは同窓会だけではなかったのですよ。お父さん。

この三月のお彼岸に、奈都子はお母さんと一緒に、静岡のおじいちゃんとおばあちゃんの家にお参りに行きたいと思っただけです。そう、今日、このお彼岸にお父さんの実家にお参りに行きたいと思っただけです。

ほんとうは、奈都子は、この浜松の家に静岡の親戚を招いて、お父さんの十三回忌を行いたかったのです。なんとなくお父さんが亡くなってからは、静岡の親戚とは疎遠になってしまったようで、淋しく感じていました。でも、お母さんも佐知子も、

「十三回忌を行うと言っても今更来てくれるかね。七回忌も行わなかったのに」

と言いました。それでも、奈都子はなんとか静岡の親戚とも縁を結びなおしたいと思いました。お母さんにも、佐知子にも、そういった奈都子の思いを語りました。すると、佐知子は言いました。

「浜松に来てもらうのはハードルが高い。こっちから、おじいちゃん、おばあちゃんにもお参りさせてもらいたいって言うて、出かけて行く方がいい。それも、静岡に偶然出かける用事があるから、そのついでに寄せてもらいたいぐらいの軽い言い方でないと」

確かにその通りでした。お迎えする、もしくは、迎え入れてくれるにしても、先方の静岡の親戚のことを思うと、奈都子の思いだけで物事が動くわけにはいかなかったのです。でも、奈都子は静岡の親戚とも、たとえ細い糸でも繋がっていたく、だったらこのお彼岸に、挨拶に出かけたいと思っただけです。

お母さんが、お父さんの実家に電話をかけてくれました。剛おじいさんももうなくなっていて、お父さんの実家はもういとこの達好くんの代になっています。お母さんが、おそろおそろ、

「肇さんが亡くなってから、ご無沙汰していて、考えてみれば静岡のおじいちゃんとおばあちゃんに長くお参りすることもなかったので、今度のお彼岸に静岡に行ってお参りをさせ

ていただきたく思つて。奈都子がちょうど静岡である美術展を見たいと言つていますから、そのついでに」

達好くんは快く、どうぞと言つてくれたそうです。お母さんは、達好くんに、

「奈都子にも挨拶をさせます」

と言ひ、奈都子はとても緊張して、達好くんとの電話にできませんでした。しどろもどろながら、静岡の神谷の家の皆さんもお元気でいるかとか、奈都子も何とか元気でやっていることとか、今年うれしいことに、奈都子の書いた童話が浜松市民文芸賞に輝いたことなど、伝えたことを思い出します。

達好くんは言いました。

「では、次のお彼岸には、おばさんと奈っちゃんをさちんとお迎えできるようにして、待つていますから」

奈都子は、これで静岡にいけるようになったことを何度も何度も嬉しく思い出しました。

それからは、しばらくあわただしい日々が続きました。せっかく静岡に行くのであれば、神谷の家だけでなく、他の静岡の親戚にも会いたかったのです。だって、お父さん側の親戚は、うちをのぞいてみんな静岡に住んでいるのですから。

奈都子はお母さんに頼んで、林田のおじさんの家にも電話してもらいました。お父さんのお姉さん、聡子おばさんの家ですね。お父さんの兄弟姉妹はどうしたとかみんな寿命が短く、聡子おばさんも三年ほど前に亡くなつています

ね。今、お父さんは彼岸で聡子おばさんとも再会を果たしているでしょうか。

奈都子はおばさんが亡くなったとき、せめてお葬式には行きたいと思つたのですが、お母さんが、

「お葬式は、お坊さんが六人も来て、長いお経を唱えて疲れるから、奈都子には無理よ。無理にいかない方がいい」

と言われてしまいました。お母さんは、奈都子の健康のことを考えて言つてくれたかもしれないけれど、奈都子は聡子おばさんのお葬式にさえ行けなかった自分の立場を情けなく思いました。お母さんは、静岡の親戚に、奈都子の今の身の上を隠しておきたかったのではなかったかとも思いました。でも、奈都子も自分の来し方を振り返ると、お母さんに強くも出られず悲しい思いをしました。また、あの頃の奈都子には、奈都子も一生懸命生きていくという確たる自信がなかったのですね。

市民文芸賞はきっかけに過ぎなかつたかもしれないけれど、受賞作「金魚のエンピツ」は、奈都子が子どもの頃書いて、お父さんにも見せた童話を焼き直したものでしたのですよ。覚えていますか、お父さん。お父さんは、その時特に何を言つてくれたわけではなかつたけれど、奈都子は今回の童話、「金魚のエンピツ」の中で、お父さんに一生懸命、小さかつた奈都子が、自分の体験した不思議なことを伝える姿を書きました。

エンジンアだったお父さんは、いつも家で奈都子や佐知子に、つるかめ算だとか、難しい算数のなどを出すのが好きでしたね。それからいろいろと難しい科学の質問も。お父さんと同じくエンジンアになった佐知子は、そういったお父さんからのなぞなぞに答えるのが好きだったけれど、奈都子はぜんぜんダメでしたね。だけど、そんなお父さん不思議なことには、奈都子の得意な詩を書くことやお話を作ることは苦手でしたね。いつか、お母さんがお父さんに作って贈った短歌の返歌に、お父さんは字余りでしか応えられなかったことを思い出します。だから、お父さんには奈都子が作った、夢のようなお話は分からないかもしれないけれど、奈都子は、この「金魚のエンピツ」というお話の中で、不思議な国で出会った金魚たち一匹ずつに、それぞれの金魚たちにびつたりするお話を書いてあげたのですよ。お話屋さんの奈都子らしい、お話です。そして、その不思議な国での体験をお父さんに語る奈都子の姿もまた、書いたのですよ。そうやって、奈都子は奈都子なりに、このお話に、奈都子が小さかった頃のお父さんの思い出もちりばめて書いたのですよ。お話作りが苦手だったお父さんの姿も含めてね。お父さん。

だから、奈都子はこの「金魚のエンピツ」が市民文芸賞を受賞したことで、自然にお父さんのことを思い出したのだと思います。お父さんの十三回忌をやりたいと思ったのもそういう理由があったのかもしれない。

お母さんにも、佐知子にも、そんな奈都子の思いが伝わったでしょう。

お母さんは、林田のおじさんの家にも、またおそるおそる電話をしてくれました。

「ご無沙汰しています。浜松の神谷ですが、今度のお彼岸に、静岡の神谷のお家に、神谷のおじちゃんとおばあちゃんのお参りに、奈都子と行くことになりました。奈都子が聡子お姉さんのお葬式にも出られず申し訳なかったから、もしご都合さえよければ、お彼岸に、佐知子は忙しいので無理なのですが、奈都子と二人で、聡子お姉さんのお仏前にもお参りさせていただきたいと思うのですが」

嬉しいことに、林田のおじさんも、そんなお母さんと奈都子のおそるおそるのお願いに応じてくれました。お母さんは、達好くんと話したときと同じく、

「奈都子にも挨拶をさせます」

と言って、奈都子もまた緊張しつつも嬉しい思いで林田のおじさんとの電話に出ました。

聡子おばさんのお葬式に出られなかったことのお詫びや、今回改めておばさんのお仏前に手を合わせさせていただきたく思うこと、奈都子も元気でやっていること、その証拠に、今年嬉しいことに奈都子の書いた童話が、浜松の市民文芸賞を頂いたことなど、達好くんと話したようなことを繰り返しました。

林田のおじさんも言うてくれました。

「まあ、来るっていうんだっつたら、こっちもこっちで待っているよ。せっかくだから、吉紀と晴代も呼んでおくよ」なんて嬉しいことでしょうか。林田のおじさんは、いとこの吉紀くんと晴代ちゃんにも声を掛けておいてくれると言ってくれたんですよ、お父さん。ほんとうに縁の戻る年ってあるのですね。

達好くんと林田のおじさんが受け入れてくれて、奈都子はとても嬉しく思いました。そして、せっかくならばと、奈都子は更に欲張りしました。お母さんに頼んで、お父さんの妹の厚子おばさんと、お父さんの下のお兄さん、優おじさんの奥さん、美波美おばさんにも電話をかけてもらいました。優おじさんも、早くに亡くなっていて、直接血のつながっていない美波美おばさんまで会ってくれるかどうかは心配だったのですが、美波美おばさんも、お母さんと奈都子の気持ちを受け止めてくれました。

いつもはつきりものをいう厚子おばさんなんて、お母さんが電話をかけて、このお母さんと奈都子の計画を話すと、逆に、

「みんな喜ぶと思うよ」とすっぱりと言ってくれたそうです。

そうして、奈都子とお母さんは、お彼岸に、おじいちゃんとおばあちゃんのお参りをしがてら、静岡の親戚、お父さん側の一族とほんとうに久しぶりに会うことが決まったのでし

た。

さて、お彼岸の日です。お母さんと奈都子は朝、浜松から静岡行きの普通列車に乗り込みました。静岡に行くのは、ほんとうに久しぶりでした。浜松から静岡までは普通列車でもほんの一時間と少しの旅。こんな短時間で行けることも奈都子は長いこと忘れていました。たった一時間と少ししかかからない静岡が、今の今まで、奈都子にはなんと遠かったことでしょうか。列車に揺られながら、奈都子はしみじみ思いました。そして、おじいちゃんとおばあちゃん、それから、聡子おばさんのお仏前に供えようと持ってきた、封筒に入れた浜松市民文芸をしっかりと胸に抱きしめたのを思い出します。

これは、私もすっかり生きて来た証拠だから。そして、それが静岡の親戚と会うことのできる大切な切符であるかのように。

やがて、列車は静岡に着きました。電話での打ち合わせでは、改札を抜けたところで、厚子おばさんと美波美おばさんが待っていてくれるはず。結局、美術展は口実で、奈都子たちは、直接、静岡の親戚の皆さんに会うことにしていたのでした。

奈都子はお母さんと二人、列車を降りて改札に向かいました。改札を出てさあどこだろうと辺りを見渡すと、小さく手を振っている二人の姿が目に見えび込んできました。久しぶり



に会う、おばさん二人の姿に奈都子の胸は懐かしさでいっぱいになりました。小柄な二人の顔には、とても柔和な笑顔がありました。笑顔で会えてよかったと思いました。奈都子には、これまでの長い時間が一瞬にして飛び去ったように思えました。お母さんと、奈都子も思わず手を振り返しました。そして、互いに近づくとほんとうに久しぶりの挨拶を交わしました。

「ご無沙汰していました」

お母さんが言いました。奈都子も続けて言いました。

「厚子おばさんも、美波美おばさんも、今日はほんとうにありがとうございます」

それから、どんな話をしたのか、奈都子は嬉しすぎて思い出せません。ただ、四人とも、このとき、自然にあふれる穏やかな笑顔につつまれていたように思うのです。

お父さんの実家、神谷の家への訪問は、一時の約束で、まだ少し時間があつたので、タクシーに乗り込む前に、お母さんと奈都子、それに厚子おばさんに美波美おばさんで、お茶と軽い昼食をとるようになりました。

静岡駅のバルコの中のスターバックス・コーヒーに、なんとか四人の席が取れたので、そこに決めました。お母さんが言いました。

「ここは奈都子に払わせてますから」

厚子おばさんも美波美おばさんも、そんなことはいいのよ

いよと遠慮をしましたが、奈都子も、  
「ここは奈都子に払わせてください」

と、コーヒーを四つと、昼食用に分けて食べようとホットサンドを二つ頼みました。お母さんには、

「四人いるのに、何でホットサンドを四つ頼まないのよ。おばさんたちが遠慮したからと言って、それは社交辞令で、こういうときは四つ頼むものなのよ」

と怒られました。いつまでたつてもダメな奈都子ですね。お父さん。でも、とにかく奈都子は、コーヒー四杯にホットサンド二つを支払いました。

お父さんのお葬式の時、奈都子は仕事などとてもできる状態ではなく、何も支払うことの出来ない身の上でした。でも、今は違います。奈都子のアルバイトで得たお金からでも、このぐらいのコーヒー代は支払えます。おばさんたちにも、そのぐらいの奈都子のおごりは受け取ってもらえるものだと思います。

コーヒーを飲みながら、厚子おばさんがいいました。

「もう、肇兄さんが亡くなってから十三年にもなるのかね」  
奈都子たちは長い時間を思い出し、それぞれの最近の暮らしのことなど、一時間ほど話しました。そんな語り合いのなかで、奈都子は、十三年という年月を経ても、再び会える親戚というのは良いものだ、しみじみ思いました。

さて、いよいよ神谷の家に向かう時刻です。駅前のタクシ

一乗り場で、四人はタクシーに乗り込みました。厚子おぼさんが、

「足久保まで行つて」

と、先頭を切つて、行き先を告げてくれました。タクシーは駅前の大通りを抜けていきます。そういえば、ここの風景を見るのもほんとうに久しぶりです。奈都子には、小さいころ、お父さんが、奈都子と佐知子、それにお母さんを、静岡まつりを見せに連れて行つてくれたことを思い出しました。浜松に比べると静岡はのどかで、静岡まつりの折は、猫だとか犬だとか鳥だとかのガラス細工を売る露店が出ていたことを思い出します。それから、ヒヨコを売る露店も。かわいそうに、ヒヨコたちの数羽はどぎついピンクや緑のスプレーで派手に染められていたことも思い出します。浜松のお祭りでは、そういうものを売る露店はなかったのです。奈都子はガラス細工の露店やヒヨコの露店を物珍しく眺めたことを思い出します。お父さんは、小さかった奈都子が、あるガラス細工の露店の前で立ち止まってしまったので、奈都子が気に入った緑色のオウムのガラス細工を買ってくれましたね。妹の佐知子も、同じ露店でピンク色のオウムのガラス細工を買ってもらったことを思い出します。

それから、静岡の街中と言えば、串に刺された黒はんぺんだとか卵だとかの静岡おでんのお店が物珍しかったのを思い出します。家でお母さんが作るおでんは、いわゆる関東煮だったので、静岡の黒っぽい出汁の中に浮かぶ串に刺されたお

でんは見慣れない食べ物でした。奈都子は、特に串に刺された真つ赤なウインナーのおでんが面白く、別にわざわざそんなものを選ばなくてもいいというお母さんの目をよそに、そのウインナーのおでんを買つてもらつたことを思い出します。家族で静岡まつりに行ったことも懐かしい思い出ですね。お父さん。

そんな風に奈都子が思い出に浸っているうちに、タクシーはすっかり静岡の街中を通り過ぎていました。いつのまにか、厚子おぼさんがタクシーの運転手さんとおしゃべりをしていきます。

「私たち実家に行くのよ。お彼岸だからね」

「皆さんで」

「そうそう、久しぶりだけどね。おじいちゃんとおばあちゃんにお参りしてくるのよ」

風景はだんだんと街から田舎へと変わり、だんだんとお父さんの実家のあるところへと向かいます。厚子おぼさんが、「次の角を右に曲がつて、それからしばらくまっすぐ行つて」と、運転手さんのナビをしています。私は静岡の地理をほとんど覚えておらず、やっと見覚えのある風景を目にしたかと思つと、

「次を右で、三軒目」

という厚子おぼさんの声が入り、すぐにタクシーは神谷の家の前に止まりました。

奈都子は深呼吸をして、タクシーを降りました。以前とは少し変わっているけれど、滝カ谷のもみじの植わっている、石を交えた庭が左手に見えます。いったい幾年ぶりにこの家を訪ねたのだろうかという感慨を持ちながら、静岡の神谷の家の敷地に足を踏み入れると、タクシーの音で奈都子たちの到着に気付いた達好くんが、右手の母屋の玄関を開けて出迎えてくれました。

「こんにちは。ご無沙汰しています」

お母さんが、率先して達好くんに挨拶をします。

「私も久しぶりやけんね」

厚子おばさんも弾むような声で挨拶をしています。美波美おばさんも、

「私もほんとうにご無沙汰をして」

と続けます。奈都子も、

「こんにちは」

と、達好くんに挨拶をしました。それ以上は、奈都子は何を言っているのか、しどろもどろでしたが、達好くんは笑って、

「さあ、中どうぞ」

と、奈都子たち四人を中に招き入れてくれました。達好くんのお母さん、明子おばさんもお元気で、浜松とは違う静岡の方言で、

「やっとかめだね」

と、奈都子たちに声を掛けてくれました。達好くんは居間に

通され、まず隣の仏間で、おじいちゃんとおばあちゃんにお参りすることになりました。

最初に、お母さんがお仏壇に向かいお線香をあげお参りをしました。次は奈都子です。お仏壇の前に座り、おじいちゃんとおばあちゃんに、しっかりと抱えて持ってきた浜松市民文芸を贈呈しました。そして、お線香をあげ、こころのなかで祈りました。

「おじいちゃん、おばあちゃん、奈都子です。奈都子もおじいちゃん、おばあちゃん、それからお父さんたちみんなに見守られて、なんとか元気にやっています。ありがとうございます」

こんな時って、ほんとうに子どものような言葉しか思いつかないのですね。だけど、その言葉はその時の奈都子のほんとうの言葉でした。ひとはこうやって自分を慈しんでくれた大切な人の前に出ると、子どもの気持ちに戻るものなのです。ね、お父さん。

奈都子の後には、厚子おばさんと美波美おばさんもお参りをし、それからは静岡の家の居間で、お茶を飲みながら、この神谷の一族のそれぞれの消息話に花が咲きました。

達好くんのところでは、長男の健太くんがこの春、静岡大学の教育学部に合格したそうで、達好くんが誇らしげに、「この神谷の家から大学生を出すのは、肇おじさん以来です」と言ったことを思い出します。お母さんと奈都子が、こうやって静岡の家を訪ねたから、お父さんの名前もこうやって話

題に上がるのですね。だって、お父さんは亡くなつてしまつたかもしれないけれど、この縁はお父さんなくしてあり得なかつたのですから。

何を話したのかは、あまり覚えていないのだけれども、神谷の一族のどの家にもそれぞれの濃密で温かい物語がありました。厚子おばさんの孫が憎まれ口をたたいて、憎たらしいけどかわいいといった話とか、美波美おばさんも、がんで旦那さんを早くに亡くしたいとこの涼子ちゃんと一緒に暮らしていて、やつぱり、美波美おばさんにとてもやさしい孫の大樹くんの成長が楽しみだとか言つた話もでした。

十三年というときが経つのもいいものですね。ときが経つと、ひとは身近な人が亡くなつた悲しみから解放されていくように思います。そうして、こう節目に会することで、なんだかやはりお互いに懐かしいという感情に包まれるようになります。今日は、お彼岸です。やつぱりお父さんは、今日私たちがみんなの間に帰ってきてくれているのですね。おじいちゃんやおばあちゃん、それからおじさんたちと一緒に。神谷の一族それぞれの近況報告からは、それぞれの明るい道、未来へと続く道が見えたように思います。そして、それは奈都子にもあるものです。それは決して輝かしい成功というわけではないけれど、一步一步これからも丁寧に生きていけるという内的で自然な自信です。不思議ですね、お父さん。お父さんが生きていた時間を思い出すと、逆にこれからの道が見えてくるように思えるのですから。

そんな暖かくて明るい邂逅の時間が一時間ほどたつたと、達好くんがいました。

「おばさんも、奈つちゃんも、これから林田のおじさんの家に行くのですよね。林田の家までは僕が車で送ります。美波美おばさんも厚子おばさんもどうぞ。今日は吉紀と連絡をとつてあつて、帰りは吉紀が静岡駅まで送りますから」  
奈都子たちは、そうして達好くんの車で、内牧にある林田の家に向かいました。

林田のおじさんの家は茶農家です。お茶畑の多い地区を通つて、ほどなく林田のおじさんの家に到着しました。農機具を収めてある小屋とよく手入れされた庭の空いたスペースに車が止まります。

林田のおじさんと吉紀くんが出迎えてくれています。

「ご無沙汰しています」

お母さんが挨拶をしました。

「おじさん、吉紀くん、お久しぶりです」

奈都子も挨拶をしました。

「まあまあ、中へどうぞ」

と、林田のおじさんが玄関の扉を開けてくれました。すると、もうほんとうに長いこと会っていないかつたといこの晴代ちゃん顔が見えました。そうして、もうひとり、吉紀くんの奥さん、和美さんでした。ほんとうに林田のおじさんは親族に大集合をかけてくれたのでした。奈都子は、こうやつて

親族一同に迎えられるということは、こんなに嬉しいことかとしみじみ思いました。

林田の家のお仏壇の上の方には、聡子おばさんの遺影が、代々の林田家の人々の遺影に並んで掲げられていました。薄いさくら色の着物を着た聡子おばさんの面差しは、やっぱりお父さんに似ていますね。奈都子は、聡子おばさんのお仏前にも、浜松市民文芸を供えました。

「おばさん、ご無沙汰してすみません。お父さんのお葬式ときは、おばさんにまともには挨拶もできなかったけれど、奈都子も少しずつ元気になり、おばさんにも今日こうして会うことができました。ありがとうございます」

ほんとうに、こうやって親族のお仏前に向かうと、単純な言葉しか思い浮かばないものですね。でも、お父さん、奈都子は、こうしてやっと聡子おばさんにも顔見世が出来たことを嬉しく思ったのですよ。

親族一同、聡子おばさんへのお参りを済ますと、居間でお茶を頂きました。晴代ちゃんと和美さんが、おいしいお茶を入れてくれました。かつて、献上茶をだしたこともある林田の家のお茶です。ありがたくいただきました。そういえば、奈都子の子どもの頃のアルバムに、茶畑で静岡のおじいちゃんとおばあちゃんと一緒に撮った一枚があったことを思い出しました。ここで飲むと、お茶の香りとはやはりいいものだと思います。静岡の親戚は、浜松のお母さん側の親戚とは違って、やわらかですね。まるで、今日のこのお茶の香りのよ

うに。声のトーンも穏やかに響きました。

こんな穏やかな時間こそ、本来奈都子が求めていたものかもしれません。厚子おばさんが言ってくれました。

「奈っちゃん、良かったよ。奈っちゃんたちが来てくれたから、みんなこんなふうに乗られたけんね」

奈都子はそんな厚子おばさんの言葉を素直に喜べました。そういえば、お父さんが昔、「兄弟にはいいときも悪いときもある」と言っていたことを思い出しました。確かに、年を経る過程で、なんとなく親族疎遠になったり、兄弟姉妹ぎくしやくしたりすることもあると思います。でもやっぱり、「いいときもある」というお父さんの言葉はほんとうだったと思います。今日はそういう「いいとき」がみんなの間にやってきたのですね。お父さん。

さて、親族一同集まっつての久方ぶりの歓談も終わりました。もう、午後の三時を大きく回っています。達好くんはここで足久保の神谷の家に帰ります。今日は、残念ながらこれから用事があるのだそうです。

吉紀くんが言いました。

「名残は惜しいけれど、奈っちゃんたちもそろそろ電車の時間かな。今日は僕が、静岡駅まで車で送ります。厚子おばさんも美波美おばさんも、どうぞ。順番に送っていきますから」

「ありがとうございます」

奈都子は応え、お母さんともども、林田のおじさんにお礼の

挨拶をしました。

「まあ、無理のない範囲で、細く長く付き合っていきたいな」  
林田のおじさんはそう言ってくれました。そう、細く長く。みんな無理のない範囲でゆつたりと繋がっていたい。いつかみんなが、次の世代にこの世での役割を譲っていくころまで。お互いに縁が自然とほどこけていくときまで、ゆるく長く繋がっていきたい。こころの中で。奈都子は思いました。今日この日の「さようなら」は、淋しくありませんでした。不思議と淋しくありませんでした。

さて、吉紀くんの車に乗り込み、静岡駅へと向かいます。助手席に乗り込んだ奈都子に吉紀くんが言います。

「奈っちゃん、もう少し時間ある？」

「はい、ありますけど」

「なら、ちよつと寄っていきたいところがあるんだけど」

「えっ、どこですか？」

「奈っちゃんのお茶畑」

そういえば、静岡の神谷の家の近くには、お父さんとおじいちゃんおばあちゃんから相続したお茶畑があって、林田のおじさんが管理していてくれたことを奈都子も思い出しました。吉紀くんは、そのお茶畑も奈都子に見せてくれると言ってくれたのです。

車は林田の家を出て、奈都子の家の茶畑に向かいました。茶畑のそばで車は止まります。

「奈っちゃんは、この茶畑の主なんですよ」

吉紀くんは言いました。

静岡の地に、奈都子の家の茶畑がある。眼前に広がる大きくも小さくもない茶畑を眺めながら、奈都子は浜松だけでなく、この静岡にも、確かな奈都子のルーツがあることを嬉しく感じました。

「吉紀くん、うちの茶畑を見せてくれて、ありがとうございます」

「また、お茶を送りますよ」

吉紀くんはにっこりとそう言ってくれました。

そして、車は再び走り出し、最初に厚子おばさん、次に美波美おばさんを、それぞれの家に送り届けると、一路静岡駅に向かいました。そして、静岡駅で吉紀くんに別れを告げ、お母さんと奈都子は電車に乗り込みました。

電車の中で、奈都子は言いました。

「お母さん、今日はほんとうに良かった」

「お母さんも、最初は今更と思っただけれど、今日はほんとうに良かったと思うよ」

お母さんも、こころなしか柔らかい顔をしていました。ひとは過去には戻ることが出来ないと言います。でも、奈都子は今日一日を振り返ると、実は、普段気が付かないだけで、過去に戻ることに出来る秘密の扉がこの世にもあるように思うのです。今日はきつと、その秘密の扉の鍵を、お父さんが奈

都子たちに渡してくれたのですね。お父さん。奈都子には今日が、ほんとうに嬉しい一日でした。帰れないはずの過去に帰ることの出来る日。お彼岸って、きつとほんとうはそうなのですね。

帰りの電車の中で、奈都子は感無量で、お母さんともあまり話さなかったけれど、お母さんも、静岡への旅、帰れないはずの過去への旅を感じていたのではないかと思えます。

電車は浜松に着きました。さあ、これから帰宅です。バスを乗り継いで、家に帰ります。

家の扉を開けると、我が家の猫、ミイちゃんがお迎えに顔を出しました。この仔はお父さんが亡くなった後に飼った仔だけれど、今や家族の一員です。今日はおりこうさんにお留守番をしていてくれたのです。

「ただいま」

とミイちゃんに声を掛けて、家上がりしました。まず待っていてくれたミイちゃんに餌を与えて、着替えをし、荷物を整理しました。餌を食べ終えたミイちゃんが、足元をちよろちよろします。ミイちゃんは奈都子たちがどこを旅してきたか知らないでしょうか。でも、もしかしたら、奈都子とお母さんの表情と声から、どこかとても良いところを旅してきたことを知っているかもしれない。ミイちゃんの声も、一日お留守番をさせられて不満げに鳴くというよりは、ご主人様たちがどこか良いところに出かけてご機嫌で帰ってきたことに

呼応するような鳴き声でした。ミイちゃんにも分かるのですね、きつと。

ミイちゃんのご飯の後に、奈都子とお母さんはありあわせのもので、軽い夕食をとりました。今日という一日が終わっていきます。

そんな時、お母さんが言いました。

「奈都子、お父さんにお線香あげるの忘れていない？」

その通りでした。せつかく静岡のおじいちゃんとおばあちゃんや、聡子おばさんのお仏前に手を合わせて来たのに、奈都子は肝心のお父さんを忘れていたのです。

「あつ、そうだね。お父さんにお線香をあげてくる」

奈都子は、慌ててお父さんの遺影の前に座りました。

その時です。奈都子の脳裏にお父さんの姿がありありと映ったのは。お父さんは、どこか明るい光のアーチの前、光の椅子に腰かけて、じつと文庫本を読んでいた。お父さんは読書が好きで、奈都子が小さいころ、よく大人版のアンデルセン童話を奈都子に読み聞かせてくれましたね。そして、今も読書をしながら、きつといつか奈都子とその光の入り口を通るときに、奈都子を見逃さないようにずっと待っていてくれているのですね。

お父さんが亡くなったころは、奈都子の病気が一番ひどかったところで、お父さんはそんな奈都子たちが心配で、長く、天国というものがあるのならば、そこに行くことが出来なかったのではないかと思えます。でも、奈都子には今日、お父

さんが光のアーチの前で、本を読みながら奈都子たちを待っていてくれる姿が確かに見えました。

お父さん。待っていてください。お父さんに、もう一度、子どもの頃のように、この私の書いた童話、「金魚のエンピツ」を見せます。どうぞ、天国の入り口でいつか奈都子たちが通っていくのを待っているのなら、この奈都子の供える本も読んでみてください。奈都子は、これからお父さんに読んでもらえるお話をたくさん書いていきます。お父さんが待ちくたびれて退屈しないように、たくさん書いていきますね。

もちろん、お話を書く以外にも、奈都子には大切な仕事がいっぱいあります。お母さんを支えることも、佐知子と仲良くやっていくことも。でも、そんな暮らしの中にも物語はきつといっぱい。お父さん、そんな奈都子の一生懸命の物語を楽しく読んでみてください。いつか、光のアーチの前で、お父さんが奈都子を迎えてくれるその日まで。お父さん。

(西区)



小説選評

竹腰幸夫

本年の応募作品は、昨年と同数の15編。かつては本誌の主流とも言えた歴史小説は、今回は2編。古代に想を巡らせた物語が1編。戦中戦後に生きた人物の伝記1編。SF作品、ややSF的なものを含めて2編。他は現代に題材を得た作品でした。そのうち、現在の先端企業を取り巻く状況を舞台にした社会派作品が1編。またやはり現代ネット社会の陰翳をとらえようとした作品が1編。そして、若者（男子）の揺れる心を題材にした3編。さらに、若い女性を主人公にし、その抱える問題に目を据えた作品が4編と多かつたのが、今回の大きな特徴でした。

毎回申し上げますが、作品は読者の共感を得て初めて成立する世界です。自己中心的な表現や設定には読者をひきつける力は生み出せません。以下、心に残った作品を紹介いたします。

『エーデルワイス』 主人公は女性。読者の中には最初の暴力シーンに戸惑う（あるいは眼をそむけたくなる）かもしれない、が、ぜひ先へ読み進んでいただきたい。描写はリアリティと迫力。作者の力量が窺われます。小説の命である登場人物の会話も巧みで、後半にはスピードもついでぐんぐん読ませます。ストーリーはあえてここに記しませんが、居場所を見出し難い現代世界に、息苦しい思いを抱えている女性

たちのところに響くエールになっていきます。

『乱声（らんじょう）』 例えば、今日の「再生可能エネルギー」への世界的期待から、新技術によるモーター開発などへ、企業も銀行も躍らされます。しかし冷静な、実験の積み重ねによって、そうした「再生」新技術の限界が次第に明らかになります。その間の人間模様、会社という組織の問題点など、風刺的に描かれます。物づくりの市、浜松ならではの作品というべきでしょうか。エネルギーについての考え方の示唆も含めて面白く読ませていただきました。

『村方始末記』 歴史小説というと、まず一人の傑出した主人公をめぐる物語というのが定番ですが、この作品の主人公は、税を取り立てられる側の村民たちです。ところは浜松藩下天竜川流域の村々。藩主交代に伴うこの調査はどうやら増税をにらんでのこと。その税の基本となる「村方明細」を作成する村人たちの工夫、知恵や思惑がよくわかって興味をひかれます。

『まわり道』 公立高校の受験に失敗。友達に同情される自分がみじめ。卒業式、私立高校への入学、居場所は？ 苦しい魂の漂い。それらが小さな章に区切られながら、その一つひとつが「散文詩」としてつながり、やがて「まわり道」の行方を見つめる。若い女性のひとりごと。

『財政再建対策』 議員たちの会話。借金で膨れ上がった日本の財政はどうやって始末をつけるのか。そのヒントは「戦時国債」の顛末に。2024年の新札発行の際、旧紙幣の価値を半分にする省令告知を出すという。SF的作品ですが、笑って済ませられない風刺性をもった作品でした。

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

小説選評

柳本宗春

力作が並び、題材の魅力と人がもがきながら生きる姿を描こうとする意欲を感じました。それに加えて「小説」として違和感なく読ませられるかという点が重要でしょう。一言ずつになつてしましますが、全応募作の感想を記します。

「感動の再会」

怪我で球界を去った男と大怪我をリハビリで克服する女性フアンの再会。人物像をもつと書き込む必要がある。

「うつつらと頬に西日の君の此事」

大学受験前後の男子の心の揺れを描く。受験、卒業、部活、恋愛、政治と要素が多すぎて薄味になつてしまった感がある。

「迎合」

突撃取材型の動画投稿を生業とする男と主人公の出会いにより「不遇」についての見解を戦わせる展開は面白い。

「サミツチ別伝」

谷に落ち記憶を失った男が山の民として生き、自然に導かれて元の部落に戻る物語。現代につながっている伏線の効果が弱いのは惜しいが、自然や古代の生活の描写が上手な良作。

「尊徳の遺品」

二宮尊徳の遺品である「鶴鱗」の存在に迫る様が興味深い。会話表現がやや不自然だが、小説としての構成は巧みである。

「村方始末記」

江戸末期の一農村の姿を庄屋の苦勞を軸に描き出す。綿密な調査と想像力のバランス、流れを心得た構成が素晴らしい。

「乱声」

浜松まつりの凧合戦から技術開発を巡る企業の駆け引き、詐欺事件につながる構成は興味深い。ただ、技術的な説明が会話だけで長く続いたため場面が想像しにくくなつてしまった。

「逆回転散歩」

発想を生かした簡潔な作りに好感。何編かまとめて読みたい。

「財政再建対策」

議員会館の一室で交わされる議員の会話で構成。昨今の政治を風刺する意図は伝わるが、物語としての魅力を出して欲しい。

「3を超えたら、0に戻る」

結婚や不妊、家族の問題を抱える3女性の視点で現実の苦しみを描き出す。叙述が巧みでリアリティがあり引き込まれた。

「非色に染まる」

母を憐れみ憎んで育ってきた女性を中心に家族のあり方を表現する秀作。描かれた人間が「生きていく」と実感させる。

「まわり道」

内気な少女の日記を覗くような感覚になる私小説風の作り。主人公の状況を何となく想像はするが曖昧さが残ってしまう。

「父の帰る日」

疎遠になつていた親戚を訪ね、親族とのつながりを確かめる主人公。父に語りかける文体が生きている。題名が秀逸である。

「エーデルワイス」

不思議な夢と問題だらけの現実生活が重なる趣向が効いている。同様のテーマはよくあるが作者の読ませる力を感じた。

「戦略放送プロデューサー・恒石重嗣」

戦時中、敵国に厭戦気分を広げるための放送の企画・運営を司つた男。詳細な記録で知らなかった事実を興味深く読んだ。

## 児童文学

〔市民文芸賞〕

# 森においしやさんがやってきた

住吉玲子

秋の森は、きん色にかがやいていました。

さらさらと落ち葉が舞う山の道を、だれかがのぼってきま  
す。

がっしりとしたからだつきの、男の人です。

かた手に黒いかばんをもって、もうかたほうの手には、布  
につつんだ四角いものをかかえています。

「なんてきれいな森だろう！」

男の人は、坂道のとちゆうで立ちどまると、あたりを見ま  
わしました。

森じゆうが、あかるい陽の光をあびています。

黄色や赤に色づいた木々と光がからみあって、まるで木と  
光が手をつないで、ダンスをおどっているみたいです。

この男の人は、くちのまわりに黒いひげをはやして、  
かぶっているぼうしの上からは、ゴワゴワしたかみの毛

が、とびだしていました。かばんをもつ手は、大きくてごつ  
ごつしています。

そんな、ちよつとこわそうなすがたなのに、その目は、ひ  
とみに秋のこもれ日をおだやかにうつして、くちもとには、  
やさしいほえみがうかんでいました。

ゆつくりと山道をのぼってきたその男の人は、やがてブナ  
の木にかこまれた、レンガづくりの古い家につきました。

いりぐちのドアの前で立ちどまると、

「さあついたぞ。まずはカンバンをかけなくては。」  
そういつて、かかえていた布のつつみをほどきました。

なかみは長四角い、木の板です。

ドアのよこのかべに、その四角い板をかけました。  
木の板には、こうかかれています。

## もりくまびょういん

院長いんちやう

もりやま

くまきち

そうです。

この家は、森にはじめてできた、びょういんなのです。

そして男の人は、この『もりくまびょういん』のおいしゃさんの『くまきち先生』です。

つぎの日から、森は、もりくまびょういんのニュースで、もちきりです。

「ねえ、きいたかい？ ブナ林にできた、びょういんのこと？」

リスがキツネにいました。

「うん、知ってるよ。さつき、アライグマのばあさんから聞いた。」

「まえに絵かきさんが住んでいて、いまは、あきやになっていた家を、びょういんにしたんだよ。」

リスが、ものしり顔で教ええました。

「『くまくまびょういん』ていうんだろ？ アライグマのばあさんが、あさ早くに、川ぎしでころんで、あたまにコブができたからって、さっそく見てもらいに行ったらしいよ。」

キツネもまげずに、知っていることをはなします。

「ちがうな。『くまくまびょういん』じゃなくて『もりくま

びょういん』だよ。」

と、木の上から、りこうなオオタカが、くちをはさみました。

「ああ、そうだった。おいしゃさんの名前が『くまくま』だったね。」

「それもちがう。おいしゃさんの名前は『くまきち』だ。」

なんどもまちがえて、キツネは、

「なんだかややこしいな。」

と、あたまをかかえてしまいました。

そのようすをムクドリが遠くから見ている、  
「クッククッククック」

と、わらっています。

「びょういんって、なにするところ？」

ノウサギのぼうやが、おかあさんにきいています。

「おいしゃさんがいてね。びょうきやケガを、なおしてくれるところよ。」

「ぼく、行ってみたいな。」

「元氣なときは、行かないのよ。ぼうやが、ねつをだしたり、足にとげがささったりしたときに行くの。」

「なーんだ。」

ノウサギのぼうやは、がっかりして、

(あした、ねつがでたらいいのにな。)

と、おもいました。

くまきち先生が森にやってきてから、秋はどんどんふかま

つて、森の木々は、いそぎ足で葉を落としていきました。

「きのう、シマリスのやつが、コナラの実をたべすぎて、はらがいたくなつて、もりくまびょういんに、行つたらしいぞ。」

「へえ。それで、どうだつたんだい？」

「ああ、くまきち先生が、すごくにがい薬をだしてくれて、それをのんだらケロつとなおつたんだと。」

アナグマとシジュウカラが、そんなはなしをしているところへ、カモシカがとおりかかりました。

このカモシカは、ひっこみじあんな性質の若者でした。だから、アナグマたちに気づかれぬように、ウルシのしげみのむこうを、コンコンと、とおろすぎようとしたのです。そのとき、アナグマのはなし声が、耳にはいつたのです。

カモシカの若者は、森にびょういんができたことを、はじめて知りました。

そのころ、もりくまびょういんのくまきち先生は、いちにちのしんさつをおえて、かたづけをしていました。しんさつ用の白衣をぬいで、まどのそとに目をやりました。

太陽がしずんで、ブナの林が、オレンジ色の夕焼けの空に、黒い木立のシルエットをうつしています。くまきち先生は、

(まるで夕焼けが『おつかれさま。またあした』と、いつているみたいだな。)

と、おもいました。

この森にやってきたときは、だれも知りあいのいなかつた、くまきち先生でしたが、いまでは、森のみんなと、だん

だんになかよくなれてホツとしていました。

つめたい北風が森にふきはじめると、

「コホン、コホン」

「ゴホゴホ」

カゼをひいたどうぶつたちが、もりくまびょういんに、やってくるようになりました。

あのノウサギのぼうやも「コンコン」とせきをして、おかあさんにつれられてきました。

びょういんがどんなところなのか、見てみたかったノウサギのぼうやでしたが、それどころではありません。せきがでて、まるで元気がないのです。

くまきち先生は、ノウサギのぼうやの、のどを見たり、むねの音をきいたりしました。

それから、薬ばこをあけて小さなピンをとりだすと、「この薬は、あまくておいしいんだ。これをのんであたたかくして、ゆつくりねるんだよ。なおつたら、またあそびにおいで。」

と、やさしくいきました。

そのあとも、もりくまびょういんには、シカのおやこや、ムササビがやってきました。

こんなふうにして、いく日かがすぎた、ある日の午後。

「きようは、かんじやさんがこないな。みんな元気でけつこうなことだ。」

そんなひとりごとをつぶやいて、くまきち先生が、おやつ  
のビスケットをたべていたときです。ガサゴソと、まどのそ  
とで音がします。

ふりかえったくまきち先生の目に、サツ！と、はい色のか  
げが、まどをよこぎるのが見えました。

(かんじやさんかな?)

そうおもって、だれかがドアからはいつてくるのをまちま  
したが、しばらくしてもだれもきません。

くまきち先生はそとにでてみました。

風はつめたいけれど、晴れわたった空から、やさしい陽の  
光が、葉を落としたブナの枝に、ふりそそいでいます。

くまきち先生は、うでを大きく広げて、しんこきゅうしま  
した。

「あのう……」

いきなり声がきこえて、くまきち先生は、おもわず「ヒヤ  
ッ」と、小さなひめいをあげてしまいました。

ブナの木のかげから、カモシカがでてきました。あの、ひ  
つこみじあんのカモシカの若者です。

「ウホン。ああ、カモシカくんですか。」

くまきち先生は、ひめいをあげたりして、はずかしかった  
ので、とりつくろうように、せきはらいをしていました。

じつは、これはないしょなのですが、大きなからだのわり  
に、くまきち先生はこわがりなのです。

「こんにちは。」

カモシカは、おずおずとしたようすで、あいさつをしまし  
た。でも、くまきち先生の顔を見るなり、

「クスクス、ハハハ、ハハハハッ」

と、わらいだしました。

くまきち先生は、わけがわかりません。

ムツとした顔で、くびをかしげていると、

「先生、なにかたべましたね。」

と、まだ、わらいをこらえながら、カモシカがいました。

くまきち先生のひげに、おやつにたべたビスケットのこな  
が、グルリとついていたのです。

「やや、これはしまった。おはずかしい。」

くまきちせんせいは、いそいで白衣のポケットからハンカ  
チをだすと、ひげをふきました。ふきながら、くまきち先生  
はじぶんも、

「ハハハハ、ワハハ。」

と、わらいだしてしまいました。

すみわたった青空に、くまきち先生の大きなわらい声と、  
カモシカのクスクスわらいの音が、なかよく広がっていきま  
した。

そんなことがあって、まるで前から友だちだったみたい  
に、くまきち先生が、カモシカのかたをポンポンとたたいて、

「さあ、ここはさむい。中にはいりましょう。」

と、ならんで、しんさつ室にはいりました。

ところが、くまきち先生とむかいあって、イスにすわった

とたん、カモシカはシユンとしたようすで、だまりこくってしまいました。

「ゆつくりでいいですよ。ぐあいのわるいところをいってください。」

くまきち先生は、やさしい声でいきました。

カモシカは、もじもじしていました。やつと小さな声で、

「ぼく……どうしても森のみんなど、うまくはなしができませんです。」

と、うつむきながらいきました。

「ふむふむ。」

「みんなが楽しそうにおしゃべりしているのが、うらやましくて。」

「はあはあ。」

「なかまにはいって、おしゃべりしようとおもっても、はずかしくて、声がでなくなるんです。でも、でも……のどもいたくないし、せきもでないし。」

「ふんふん。」

「どこか、わるいところがあるんじゃないかと……。」

「なるほど。」

くまきち先生は、うなずいてきいていました。

「では、ちよつとみてみましょう。」

くちをあげさせて、のどのおくを見ました。それから、くびにさわったり、目をのぞきこんだりしたあと、ねつもはかりました。

「ねつはない。のどもいじょうなし。目の色もいい。」  
と、

（このころも、かぜをひくことがあるからなあ）と、かんがえました。

くまきち先生は少しのあいだ、うでぐみをして、カモシカの顔を見ました。やがて立ちあがると、とだなから一枚の大きな紙をだしてきました。

紙をつくえのうえにおくと、サラサラと、なにか書きはじめました。

カモシカの若者は、くびをのばして、よこからのぞきこんでいます。

「ところで、カモシカくんに、おねがいがあるのです。」

くまきち先生はそういうと、ペンをおいて、カモシカにその紙を手わたしました。

「これは、この森の地図なのですが、まん中のしるしが、この『もりくまびょういん』です。ふもとからの道はこれ。川はここ。」

と、指さしながらいきました。

「ぼくは、まだこの森にきて間がないので、どんな場所にだれが住んでいるのか、森の中のようすはどうなっているのか、よくわからないのです。なのでいろいろと、ふべんなことがあります。」

そういって、くまきち先生はこまり顔で、まゆげをさげました。黒いひげもいっしょにさがりました。

「きゆうびょうのかんじやさんがあつたときに、おうしんに行くのにもこまっています。そこで、カモシカくんがこの地図に、森のなかまたちの家を書きこんで、地図をかんせいさせてほしいのですが、いいでしょうか？」

とつぜん、くまきち先生からの、たのみごとに、カモシカはびびくりしました。

でも、こまっているといわれたら、手だすけないわけにはいきません。

「はあ。いいですが……。」

と、うなずきながら、

「でも……ぼくは友だちがいないので……みんなの家がどこにあるのか、あまり知らないのです……。」

と、つつかえつつかえ、こたえました。

「もうしわけない。お手すうをかけますが、あちこちできいてもらえると、ありがたい。ぜひ、おねがいます。」

くまきち先生が、あまりにねっしんにたのむので、

「わかりました。それでは……やってみます。」

と、カモシカは、しかたなくへんじをしました。

「ところで、ぼくはどこかわるいんですか？ どうすれば、みんなと同じように、おしゃべりできるのか……わからないんです。」

「そうだった。これはしつれい。」

「いま、薬をちようごうします。ちよつとまっていますか？ いただきますね。」

そういつてくまきち先生は、となりのへやへ行きました。カモシカは、おちつかない気もちでまっています。

もどつてきたくまきち先生は、手に白いカップをもっています。それをカモシカに手わたしながら、

「これを、ゆつくりのんでください。」

と、いいました。

ゆげの立つ、のみものでした。カモシカが、その、あたたかい薬をひとくちのむと、うちの中に、さわやかなおりが広がりました。そして、あまいあじがして、ふんわりゆつたり、いい気もちになりました。

「おいしい薬ですね。」

カモシカがいうと、くまきち先生は、にこにこしてうなずきました。

（おしゃべりが、じょうずにできるようになるかなあ？）

カモシカはそんなことを考えながら、カップの中のあまい薬のみほしました。

「ぐあいがわるいときには、いつでもよういしますから、きってくださいね。地図のこと、よろしくたのみましたよ。」

くまきち先生はそういつて、ドアをあけて、カモシカを見おくりました。

さて、それからいく日かすると、森の中のあちらこちらで、大きな紙を手にしたカモシカの若者のすがたが、目につくようになりまし



イノシシやアナグマは、いままで、あまり親しくなかったカモシカが、とつぜんたずねてきたのでおどろきました。

でも、カモシカが、くまきち先生にたのまれて、森の地図を作っているのだと知ると、冬じたくにいそがしい手をとめて、親切に、いろいろと教えてくれました。

はじめは、こわごわと消えそうな声で、森のどうぶつたちに、はなしかけていたカモシカでしたが、森のあちこちをまわって、地図作りをがんばっているうちに、みんなと、おしゃべりするのが楽しくなりました。

友だちもできました。

(あの薬のおかげかな?)

と、カモシカはおもいました。なので、「もりくまびょういんの、くまきち先生の薬は、おいしいうえに、ききめがいいんだ。」

と、もりくまびょういんのことをほめるので、くまきち先生のひょうばんまで、よくなりました。

森に、こがらしがふきはじめたころ。やっと地図ができあがりました。

よる、月あかりのしたで、カモシカの若者は、かんせいした地図を、すみからすみまで、ながめました。

「ここが、もりくまびょういん。ここが、ぼくの家。ここをまっすぐ行くと、大岩があつて、ちからもちのイノシシさんが住んでいる。そのさきの、キイチゴのしげみのおくは、イ

タチのごふうふの家だ。川ぎしのススキのかけには、ノネズミたちのすあな。そういえば、おいしいアザミが、いっぱい生えるところを、シカくん教えてもらったつけ。そう、そう、ここだ。春になったら、シカくんといっしょに、おもしろきりたべよう。」

書きあげた地図を見ながら、カモシカは、うれしくてなりません。

あしたは、くまきち先生のところへ、この地図をどこに行こうと、おもいました。

「くまきち先生は、よろこんでくれるかなあ? きつとよろこんでくれるよね。」

と、ひとりごとをいいながら、地図をまくらもとにおいて、カモシカは目をとじました。

(いつのまにか、森のみんなと、なかよくなれたな。友だちもいっぱいできたし、おしゃべりするのも楽しいし、あの薬のききめは、ばつぐんだ。くまきち先生は名医だな。)

カモシカの若者は、そんなことを考えながら、ねむりにおちていきました。

そのころ、もりくまびょういんのくまきち先生も、パジャマにきがえて、ねるところでした。

ねる前に、あたたかいのみのものを、もうとおもいました。なべを火にかけて、お湯をわかします。その中に、色々なしゆるいのハーブをいれて、にたてました。それにハチミツ

をたらしてまぜあわせる。

そうです。あの日、カモシカの若者に作った薬ができるのです。

くまきち先生は、できあがったのみものを、カップに入れて、ひとくちゴクンとのみました。

「ああ、おいしくて、あたたかい。からだがポカポカしてきた。」

くまきち先生は、カップをつつむように、りょう手でもつて、つぶやきました。そして、

（カモシカくんは、森のみんなと友だちになれただろうか？）と、考えました。

（ほくも、この森にたくさんの友だちができた。この森にきて、よかったな。）

まどのそとは、さむい冬です。でも、くまきち先生のころは、ポカポカとあたたかでした。

（浜北区）

「市民文芸賞」

## 月あかりの一軒の家

金指芙美代

山のおもとの小学校の校門の前です。

五年生の伸は、クラスの仲間達と、体育の時にかぶる赤白帽で遊んでいます。

空に上げた赤白帽が、赤でおちるか、白でおちるか、あてつこをしているのです。

「赤！ やったあ、あたり！」

伸の足もとに、ひらひらひらと帽子が舞いおちてきました。

伸は、近くにいた友だちのかぶっていた赤白帽をとって、また、サーっと空高くあげました。

「やあ、伸、ふざけるのよせよ」

クラスの仲間達の明るい笑い声が、校門の前に、ひびきわたります。

授業が終わり、スクールバスを待つ間の楽しい帰りの時間です。

「バスが来たぞ！」

伸が大きな声でいいました。

「おう！」

みんな一せいに声をそろえて、校門前のバス停に集まりました。

伸は、仲間と一緒にスクールバスに乗ります。バスの中でも、伸と仲間達のおしゃべりが、はずんでいます。

バスは帰り道を走っていきましました。

とちゅう一人降り、また二人降り、最後にひとり残った伸です。

伸が終点でバスから降りると、

「気をつけてお帰り」

運転手さんが、にっこり笑って、手を振りました。

「ありがとうございます」

伸も運転手さんに、かぶっていた赤白帽をとって、ペコリとおじぎをして別れました。

それから伸は、長く続く細い田舎道を歩きます。やがて、知り合いの、はるおばあさんちのサクランボの大きな木がみえてきました。

赤いサクランボの実が、こぼれるように、なっています。伸は、おばあさんちの家の前までくると、ブロッケいよじのほり

「おばあちゃん、サクランボもらうよ」と、ひとりごと。

いつものように、サクランボを食べます。

「あつ！ 伸ちゃんだ」

窓ごしに外をみていたはるおばあさんは、

「じいちゃん、伸ちゃんが学校から帰ってきたよ」と、腰が悪くねたきりの、じいちゃんにはなしかけます。

「そうか、伸ちゃんは、いつも元気だな」

「ほんとに、元気な明るい子」

おばあさんは、そういいながら、にこにこ顔で外に出ていきます。

じいちゃんも、にっこりと、はるおばあさんの後姿をみおくりまです。

はるおばあさんは、伸をほんとうの孫のようにかわいがっています。

ブロッケいの上でサクランボを食べている伸に

「伸ちゃん、おかえり。もうそろそろ学校から帰ってくるかなと思つて外をみてたら、へいをのぼつてくる子がいた。みたら、やっぱり伸ちゃんだったよ」

「はるおばあちゃん、ただいま。サクランボあまくておいしいね」

「そうかい、よかったよかった。伸ちゃんのほつぺが、おちそうにふくらんでいるよ」

伸は、両手でほつぺを持ちあげると、

「エへ、だつて、すごくおいしいんだもん」

「そんなにおいしいかい」

「うん、ごちそうさま。おばあちゃん、妹と弟にも、もらつてつていい？ 妹たち、おばあちゃんちのサクランボ大好きなんだ」

「ああ、いいよ。いっぱい持つておいき、おばあちゃんの家は、じいちゃんと二人だけ、ほかにだれも食べてくれる人いないからね。伸ちゃんが食べてくれて、サクランボもよるこんでいるよ」

「オツケイ、じゃ食べてあげるよ」

伸は、大きくて真っ赤なサクランボを、ポイツと、とると口の中へパツクリ。

「うーん、あまーい」

伸は、もう一粒とると

「はい、はるおばあちゃん、どうぞ」

「あらまあ伸ちゃん、ありがとう」

はるおばあさんは、うれしそうにサクランボをみつめ、そして、口の中にパツクリ。

「ほらね、おばあちゃん、ほくと同じようにほっぺがおちそうだら」

「ほんとだ、伸ちゃんにとつてもらったサクランボ、ばあちゃんのほっぺ、おちそうだよ」

「やっぱり、おばあちゃんちのサクランボ、一番さ」

「一番？ 一番か、うれしいよ、伸ちゃん、ありがとうね」伸は、につこり笑うと、サクランボをつんでポケットや、ランドセルにつめこみました。

「はるおばあちゃん、ありがとう」

ブロックべいから、ひよいと、とびおりと、伸は、山道をまた歩き出しました。

はるおばあさんは、ブロックべいから、からだをのりだし

て

「伸ちゃん、気をつけておかえり、暗くならないうちにね、寄り道するんじゃないよ」

と、伸の背中に大きな声をかけました。

伸はふりかえり

「オツケイ、オツケイ」

オツケイが口ぐせの伸は、笑いながら、はるおばあさんにピースをして、またくると背を向けて我が家をめざして、どんどん歩きます。

ました。

伸は、学校から家まで帰る途中で、おばあさんの所に寄るのが楽しみなのです。

慣れた道、だから伸は、どんな険しい道でも平気です。山の道を四つんばいになったり、枝をかきわけて登ります。

空からのこもればびが、キラキラ伸のランドセルに輝きます。そして、やがて、太陽がいつぱいふりそいでいる小さな

一軒の家につきました。

伸の家です。

家の囲りの庭には、洗たくものがたくさん干してあります。

「ただいまあ」

伸の声に気づいた、五才の妹の那奈が、

「あっ！ お兄ちゃん、おかえり」

干し場から、洗たくものを両手にかかえたまま伸にかけよります。

「那奈、ただいま。サクランボ、はるおばあちゃんの家から、いつぱいもらってきたぞ」

サクランボでふくらんでいるポケットを指さして笑うと

「わあ、サクランボ、大好き！ うれしいなお兄ちゃんありがとう」

那奈は声はずせました。

そして

「お兄ちゃん、サクランボ、お皿に入れといてね。わたし、

まだ、残りの洗たくもの、とりこんでくるから」

「オッケイ！ 那奈、お手伝い頑張れよ」

「はい」

那奈は、につこり伸に振りむき、干し場にもどつていきま  
す。

伸も那奈にピースして、家の中に入りました。

すると、赤ちゃんの葵をねかしつけているお母さんのやさ  
しい子守歌が聞こえてきます。

「春がきた、春がきた、どこにきた、山にきた、里にきた、  
野にもきた」

いつもお母さんが歌う子守歌は、きまつてこの歌です。

那奈のときも、三才の弟の良のときもです。

お母さんに聞いたら、伸が生まれたときからずっと歌つて  
きたつて。

伸は何だかうれしくなりました。

赤ちゃんの葵は、お母さんの子守歌に誘われるように、う  
とうととねむります。

人さし指と中指を口にくわえて気持よさそうに、チュッチ  
ユツと、音をならして指を吸いねむっています。

伸は、そのようすを見ると、自分もニコツとしてから、そ  
つと外に出ました。

するとむこうから、三才になったばかりの弟の良が、三輪  
車をスイスイとこいできました。

「お兄ちゃん」

「おつとつと」

伸は良の乗っている三輪車を上手にかわし

「良、三輪車、スピード出せるようになったな」

と、良の丸ぼうずのあたまに手をやりました。

良は、とめた三輪車に乗ったまま伸をみあげて

「うん、毎日、乗ってるもん」

と、得意そうにいつて、また三輪車をこぎだします。

この三輪車は、しんせきのおじちゃんとこの子のおさがり  
です。

お父さんが、もらつてきてくれたのでした。

伸のお父さんは、学校の先生です。

伸の通う小学校に勤めています。

若いころ、お父さんとお母さんは、東京の同じ大学で勉強  
をしていました。

そして、その大学のサークルで知り合い、結婚をしたので  
す。

葵をねかしつけたお母さんが、子供達に、声をかけます。

「伸ちゃん、那奈、良ちゃん、さあ、みんなで夕食の準備を  
しましょう」

「オッケイ！」

伸の口ぐせのオッケイが、とびだします。

すると、伸と一緒にボール遊びをしていた那奈も

「オツケイ！」

那奈につづいて三輪車をとめ、良も

「オツケイ！」

にわとりも大きな声をあげます。

「コッココッココッコケッコ！」

みんなの元気のいい声が、山の中に響きわたります。

すると、遠くのほうから鹿のなき声も、「オツケイ」と、

いつているように、聞こえました。

伸は、いつも、まき割りです。でも、ときどき、良がやりたがりです。

お米をといでいたお母さんが、

「良ちゃん、良ちゃんは、にわとり小屋をみてきて。にわとりが、たまごをうんでいたら持つてきてね」

「うん、わかった」

良は、お母さんから器のボールをもらつてにわとり小屋にかけだしていきます。

那奈は、庭に植えてある人参とネギをぬきました。

ぬいた人参をみた那奈は

「あれれれ、これ、二本足人参だあ！ おもしろい形、ハハッ」

と、大笑い。

みんな、お手伝いがとても楽しそうです。

にわとり小屋のほうから

「お母さん、たまご三つ、あつたよ！ この、たまご、ま

だあつたかい」

良の大きな声がきこえます。

良は、たまごを一つづつ入れたボールを、大事そうにかかえ、ゆっくり歩いてきます。

「お母さん、はい、たまご」

お母さんは、じゃがいもの皮をむいていた手を休めて

「まあ、大きなたまご！ 良ちゃん、こわれないように持つてきてくれてありがとうね」

と、ボールをうけとりました。

「うん、ぼくね、ゆっくりと、ゆっくりと、歩いてきたの。

だつて、たまごぶつかつちゃつたら、われちゃうものね、お母さん、エへへ、ぼく、すごいでしょう」

そういつて、良はお母さんのエプロンに、ほほをよせました。

お母さんも、みあげる良をみつめ、両ほほをなでて、もういちど

「良ちゃん、おてつだい、ありがとう」

と、ほほえみました。

みんな夕食のおてつだいが終わると、お父さんの帰りを待ちます。

お父さんは、今日は授業が終わると、校長先生と一緒に、校舎の裏側のウサギ小屋の屋根をなおしています。

お父さんは、授業で子供達に勉強を教えるほかに、小学校

にくる野鳥の巣箱を作ったり雑草を刈ったり、小動物の世話をしたり、落葉を肥料にしたりして、頑張っているのです。

夕暮れになり、三輪車をにわとり小屋の角に片付けた良は家に入ると、伸に声をかけました。

「ねえお兄ちゃん、おてつだい、もつとない？」

「ないな」

「ほく、もつとやりたいな」

「もつと？ もつとやりたいの？」

「うん」

こつくりうなずいた良に、伸は、ふざけるように、

「じゃあ、兄ちゃんの背中をかいてよ」

「かゆいの？」

「うん、かゆい」

「どこ？」

「右の上」

「右の上？ 兄ちゃん、右の上つてどっち？」

伸は、自分の右手を右の肩にのせて

「こっただよ」

「こっちかあ、こっちが右かあ」

良は、右手で伸の右の肩の上に手をおくと

「オッケー！」

伸の背中に、シャツをかきわけて、良の手がのびていきました。

「どこ？」

良は伸の顔をのぞきこみます。

「ああそうだ。うーん、気持ちいいよ、良、ありがとう」

伸は、ふりかえって、にっこりしました。

「もうかゆくないの？ お兄ちゃん」

「うん、オッケー、もうかゆくないよ。あーあ、気持ちよかったです。良、よくかゆいところに手が届くなあ、ちよつと、くすぐったかったけどな」

そんなところへ、お父さんが帰ってきました。

「ただいま」

玄関で、腰をかがめ靴をそろえていたお父さんの背中に

「お父さん、おかえりなさい」

伸と那奈ななと良は、いつせいに、そういつて出迎えます。

台所のほうから

「あなた、おかえりなさい。おつかれさまでした」

と、お母さんの声がきこえます。

お父さんは、ひとりひとりの頭に手をやり

「今日は、しっかり、おてつだいできたかい」

「できたよ」

良が、胸を張って得意そうに

「お父さん、よくね、たまご、みつけたの。三つもあったの。たまご、あったかくて、こわれそうだったから、ゆつくり持ってきたの」

「ほう、そっか！ 偉かったな良。おてつだい、がんばった



な」

お父さんは、良の頭をまた、さすります。

そして、食卓をみて

「おっ！ うまそうだな。たまご焼き」

お皿にもられた、作りたてのたまご焼きをのぞくと、

「お父さん、あのね、わたしがたまご焼きのおてつだいをしたの。人参とネギをいれるとおいしいし、きれいだからって、お母さんが教えてくれたの。ね、お母さん」

那奈は、お父さんの腕をつかんであまえます。

すると、お母さんは、食卓に茶わんを並べながら

「そうよ、那奈、がんばって人参とネギをきざんでくれて、お母さん、助かったわ」

「きょうは、サクランボもあるよ。はるおばあちゃんの家でもらってきたんだよ、ほうらね」

伸は、食卓の上の大皿に盛られたサクランボを持ち上げて、お父さんにさしだし、

「おいしいそうだろ？ お父さん」

「ほう、真つ赤なサクランボ、見事だな。お礼に、あしたの朝、はるおばあさんに、家の庭でとれた野菜を届けてあげるよ」

お父さんも伸と同じように、はるおばあさんと仲よくしているのです。

丸テーブルをお父さんお母さん、伸と那奈と良が囲みます。

食卓の上には、たまご焼きや、じゃがいもの煮つけ、そし

てサクランボが、赤く彩どられていました。

「お父さん、たまご焼き食べてみて。那奈のおてつだいなんだから、きつと、おいしいわよ」

と、お母さんが那奈をみつめてにっこり笑いました。

「那奈のたまご焼きか、どれどれ」

お父さんは、たまご焼きを一口パクリ。

那奈がお父さんの肩に抱きついて、

「お父さん、どんな味？」

「どんな味？ どんな味って、こんな味だ」

お父さんは、目をみひらいてキョロキョロ。

そして、

「目かとびだしそうな味だ」

「そんな味なんてないよ、お父さん」

那奈は、お父さんの肩に抱きついたまま、のぞきこんで笑います。

振りむいたお父さんは、

「そっか、でも、お父さんの目、とびだしているだろ？ どうだ、ワツハツハツハ」

キョトンとしている伸と良に、もう一度、目をキョロキョロ口。

すると、伸も那奈も良も、お父さんと同じように、たまご焼きを一口食べると、目をキョロキョロ。

伸が

「おいしいと、目かとびだすんだよ」

と、またキョロキョロ。  
みんなで大笑いしました。

次の日の夕方。

伸が学校から帰ると、良がいつものように三輪車に乗って、にこにこしながら

「お兄ちゃん、おかえり」

スピードをあげて伸の所に来ます。

「おっと、あぶないな良、気をつけるよ」

「うん」

良は、そのまま庭をぐるぐる回り、三輪車をこぎだします。

「良！ あまりスピードだすなよ」

伸は、そういうと、家の中に入っていきましました。

そして、しばらくすると、外のほうから、

「ギャー」

「ガチャガチャガチャーン！」

という音と、にわたりのものすごいなき声。

「ココケッコケッケー」

声があつてきこえます。

家の中にいた伸と那奈、そして葵をかかえて外に出てきた

お母さんは、

「伸、いまの音はなに？ 良！ 良は？ 良はどこ？」

「良、さつき三輪車に乗っていたよ、スピードだすなつて注

意したんだ、三輪車もないし良もいないなんて、おかしいな」

「良、どこかに落っこちたんじゃないの？ ね、お母さん」

「落ちたつて、えっ！ 良、どこ？ どこにいるの？ 良ちゃん」

葵を抱きながら叫びます。

そんなお母さんを那奈は心配そうにみあげています。

伸と那奈も、あちらこちらとさがしながら

「良！ 良！」

大きな声で呼んでいると

「どうしたんだ」

お父さんが学校から帰ってきました。

「あなた、良が、良がいないの。どうしましょう。」

「えっ！ なんだつて？」

「三輪車もないの。良、いったい、どこにいつてしまったのかしら」

お母さんの声は、泣き声にかわりました。

葵も、びっくりして大きな声をあげて泣いています。

那奈はシクシク泣き、お母さんにしがみつきました。

伸は、

「僕が、しっかり注意しなかったからだ」

口を一文字にしてつぶやきました。

「お父さん、いつも通る道には、良、いませんでしたか」

「いや……いなかつたな」

お父さん、お母さん、伸と那奈が、良をさがしているうちに

日が暮れてきました。

「みんな、暗くなつてきたから、家で待っていてくれ。お父

さんは、裏のほうの斜面をみてる」

「お父さん、僕もいく」

「伸、お前は、家において、家族を守れ」

「はい！」

伸は、お父さんを見て、しっかりと答えました。

お父さんは、懐中電燈を持って、裏の斜面を下つていきました。

斜面は、繁みがぼうぼうとして真つ暗です。

「良！ 良！ どこだ、返事をしろ！」

しばらく繁みをかきわけていくと、大きな木の根元に、小さな二つの光がありました。

シーンと、静まりかえったその光は、暗やみの中、ジィツと、こちらをみつめているようです。

お父さんが、少しづつ近づいて懐中電燈をてらしてみると、鹿でした。

家のまわりで、ときどき見かけるいつもの鹿にちがいません。

鹿は、顔をあげてやさしい瞳でお父さんを見つめています。お父さんは鹿のそばに、そっと近づいていきました。

良は、そのあたたかい鹿のからだに、くるまるように眠っているではありませんか。

「良！ 良じゃないか」

気持よさそうに眠っている良の体をゆすぶりました。

「うーん」

「良！ 良、お父さんだぞ！」

良は、ようやくとろんと目をあけ、眠たそうに目をこすり

ました。

「良！ 大丈夫か？」

「うーん、お父さん」

良は、まだ目をこすりながら

「うーん」

「しっかりとしろ！ 良」

「うーん、お父さん、僕、眠っちゃった。ぼかぼか毛布にくるまって。なんだか夢の中にいるみたいだ」

良は、鹿の首に手をまわして、鹿をみつめます。鹿は、やさしい目で、良をみつめています。

「ねえ、僕、鹿と一緒にねてたの？ お父さん」

「そうだ、そうだよ、無事でよかった。さあ家に帰ろう」

三輪車ごと、庭から裏の斜面にころがり落ちた良は、太い大きな木の根元に眠っていた鹿の上に落ち、助かったのです。

そして、いつのまにか眠ってしまったのでした。

鹿は、良を抱きかかえるようにしています。

鹿のひたいには、かすり傷があり、少し、血がにじんでいます。

良の三輪車が鹿にぶつかったときにできた傷です。その三輪車は、木の根元に逆さまになって倒れていました。

「助けてくれてありがとう。鹿くん、傷のであてをしないと」

お父さんは、つぶやいて良と、傷を負った鹿も一緒に、家に連れて帰っていききました。

伸は、家に帰った、ケガひとつない良をみると、思わず抱きしめ

「馬鹿！ 気をつけろっていったじゃないか大丈夫か？」  
声をあげて泣きました。

お母さんも、良をやさしく抱きしめると、

「良ちゃん、心配したわ、よかった、ほんとうによかったわ」  
なみだであふれそうな目で良の体中をみつめました。

「どこも痛くないのね」

うなずく良を、もう一度、しっかりと抱きしめました。

すると那奈が、鹿のあたまをさすり、

「良、鹿に助けられたんだね」

と、良のあたまをさすり

「良、よかったね」

と、にっこりしました。

鹿の傷のであてをし、野菜をいっぱいあげると、鹿は、おいしそうに食べました。

家族そろって、鹿を囲みながら遅い夕食をします。

すると良が、明るく天を指さしていました。

「僕ね、三輪車に乗って空をとんだんだよ、すごいだろ？」

そしたらね、いつのまにか、あたたかいおふとんの中にいた

の。ぽかぽかおふとん、ミルクのおいがしたの。くんくん、くんくんにおいをかいでたら眠っちゃった。すごくいい気持ちだったよ」

「ほう、そうか、そうか」

と、お父さん。

良は、お父さんの笑ってうなずく顔をみると、  
「僕、おきたらね、鹿とお父さんがいたの。ね、お父さん、ふしぎだな」

目を輝かせながらそういつて隣で横になっていた鹿に抱きつきます。

「オホホ、そうなの、良ちゃん、夢のようなおはなしね」  
お母さんがほほえみました。

「お前のおかげさ、良をすくってくれて、ありがとう。あしたになったら、ひたいの傷もおるだろう、そしたら、森にかえしてあげるからな」

伸は、鹿を何回もやさしくなでます。

「みんなシー」

お母さんが、人さし指を口にあてました。

ねむっていた葵のお目ざめです。

葵もお腹がすいたと、元気に泣いています。

外で葵の泣き声につられたのか、鳥が、チチチーと鳴きました。

家族の笑い声がきこえる、森の中の小さな一軒の家。

月あかりが、この家を明るく照らして、夜が静かにふけていきました。

(南区)

# このお花、なあに

河島憲代

二、三日ふった雨が、やつとやみました。

四さいになったことちゃんは、リボンがおきにいりのみず  
いろのくつをはいて、おにわにです。

「お日さまこんにちは」

そんなことをいってことちゃんは、おにわでスキップをは  
じめます。

かきねのよこに、まるで、てまりみたいなの、うすむらさき  
のおおきな花がさいていました。

ことちゃんは、その花のまえでたちどまります。  
そのとき、

「ことちゃん」

にかいのペランダから、ママが、よびました。

「はい」

うえをみあげて、ことちゃんは、ママにこたえます。

「おせんたくものをほしたら、おさんぽにいくから、おにわ  
にいてね」

「わかったー」

そういつてから、ことちゃんは、

「ママ、このお花、なあに？」

うすむらさきの花をゆびさして、ききました。

「アジサイよ」

「アジサイ、ふーん。きれい」

はっぱには、みずたまがついています。

そのみずたまに、ちよんとさわってみました。すると、み

ずたまはコロんとじいろにかがやいて、おちました。

「あはは。みずたま、ころころコロリン」

ことちゃんは、ふしをつけてうたいながら、もういつかい

やってみました。

じめんに、まあ面白いはずたまもようが、ぼつ、ぼつとできました。

それをみていたことちゃんのあしもとを、アリがじめんをすべるようにすすんでいきます。

「ありさんだ！」

くろくて大きいアリは、せわしくうごきまわっています。

「ありさん、ありさん」

そっくりながら、ことちゃんは、アリをおいかけて、みぎ手をアリにちかづけました。

すると、アリが、ふつととまり、

「おつと！ わたし、いそがしいのよ。つかまえたり、ふんだりしないで」

ことちゃんをみあげて、いいました。

みぎ手を、ひゅつとひゅつとこめたことちゃん。

「ああ、おどろいた。ありさん、いそがしいの？」

と、こえをかけました。

「そうよ。いまは、とつてもね」

「どうして？ わたしのママも、おせんたくでいそがしいの」

「おしゃべりしているひまは、ないわ」

「ふーん。みてていい？」

「かまわないわ。いそがし、いそがし」

アリは、ぶつぶつそういうと、ことちゃんのみずいろのくつを、すばやくよけて、にわのコンクリートのすきまに、はいつてしまいました。

「ここ、ありさんのおうちなの？」

ことちゃんは、てをついてコンクリートのすきまを、のぞいてみました。

アリがはいっていったあたりには、かわいたざらざらの土が、なから、ふきだしたみたいにするしもありあがつています。

じつとみていたことちゃんの目のまえに、こんどは、アリが、つぎつぎとでてきます。

「わあっ！ ありさんのぎょうれつだあ」

おもわず、ことちゃんは、しりもちをついてしまいました。

ありさんたち、いったいどこにいくのか。

「ありさん、どこにいくの？」

また、ことちゃんは、こえをかけました。

けれど、アリたちは、なんにもいいません。

大きな石は、よけます。

小さな石は、のりこえます。

アサガオのうえきばちを、カーブしてすすみます。

ママと、ことちゃんが、タネをまいたアサガオ。もう、みどりののはつばが、なんまいもついています。

ことちゃんは、こしをかがめて、アリたちのあとをついていきます。

「よいしょ、よいしょ」

アリをじつとみながら、ついていきます。  
にわのすみにきたときです。

せんとうのありが、みんなにいました。

「きょうのおしごとは、この木のうえよ」

「はい」

「ほーい」

「りょうかいね」

げんきいっぱいいのへんじがきこえました。

ありたちは、ことちゃんのせたけよりも、ずっとたかいノ  
ウゼンカズラの木に、のぼりはじめました。

ガサガサとした木のみきは、とちゅうで、なんどもからみ  
あっています。

ありたちは、のぼったり、とまったりと、たいへんそうで  
す。

「ありさん、木のぼりがんばれ！ がんばれ」

うんどうかいのときみたいに、ことちゃんは、おうえんし  
てあげます。すると、

「ちよつと、ちよつと。そばで大きわぎしないで」

「わたしたち、いっしょうけんめいなよ」

「そうよ。そうよ」

ありたちが、かわるがわるいつてきます。

「あつ、ごめん。だって、ありさんが、じめんのうえだけじ  
やなくて、きのぼりもするんだもん」

「あら、しらなかつたの？」

「ごちそうをみつけたら、どこだっていくわ」

「ありさんのごちそう？ この木のうえに？」

「あるわ！」

「とつてもたいせつな、ごちそうよ」

「ふーん。みていいい？」

「みてるだけならね」

「さあ！ いくわよ」

「いきましよ、いきましよ」

「おてんきのよい、いまのうち」

「おしごと、おしごと」

「いそがし、いそがし」

ありたちが、あわただしくのぼります。

とちゅうで、うえからきたありと、なにかおしゃべりして、  
また、のぼっていききました。

「あつ、あれえ。はっぱがもじゃもじゃあつて、ありさんが  
みえなくなっちゃったよ」

ことちゃんは、ありをみつけたくて、木をみあげます。そ  
のとたん。

「きれい！ お花がいっぱいさいてる。青いお空に、お花も  
ようのかさをひろげたみたい」

ことちゃんは、目だけじゃなく、口までまんまるにして、  
うつとりです。

「お花のいろは、オレンジ。お花のかたちは、かわいいラッ  
パね」

と、ささやくように、リズムをつけていつてみました。

その木は、空にむかって、みきから、しっかりとしたつる

を、なんぼんものばして、あちらこちらにひろげています。つるのさきには、かぞえきれない花がさき、つぼみも、たくさんつけています。

いつのまにか、ことちゃんは、木にしつかりつかまつて、せのびをして、てっぺんの花をみつめていました。

「……お花のなかに、なにかいる？」

ことちゃんは、あかるい空に、オレンジいろの花のなかで、もぞもぞとごくく、くろいかげをみつけます。

「なんだろう？ お花のなかにいるのは。ありさんなのー？」

そういつてみましたが、へんじはしません。

「ぜったい、ありさんだ。あのお花のなかにありさんのごちそうがあるんだわ。なんとというなまえのお花かなあ？ あとで、ママにきいてみよう」

ひとりごとをいつて、ことちゃんは、また木をみあげました。

「ありがとうございます。」

そのなかのいつびきのありが、ことちゃんのゆびを、チョイチョイとさわって、いいました。

「あの一。手が、おじやまなのよ」

「ええっ？ あつ、いけない。わたし、ありさんを、とおせんぼうしてた」

あわてて、木をにぎっていた手を、ぱつとはなしました。ありたちは、ことちゃんの目のまえを、おりにいきます。

「ひゃあ！ ありさん、さかさまおり！」

おもわず、ことちゃんは、目をしばたたき、

「こ、こわくないの？」

しんばいしていいました。

「そうだ！ わたしも、さかさまでみるわ」

と、よいことをおもいつきました。

くくつと、わらいながら、ことちゃんは、またのぞきをし

ます。

「ほらね。ありさんと、あたまのむきがおなじでしょ。おてつだいすること、ある？」

「ないない」

「みてていい？」

「みてるだけならね」

「すごいな！ ありさんは」

ことちゃんは、かんしんして、ありたちをながめていました。

そんなことちゃんを、お日さまが、まぶしくてらして

ます。

おや。

きゆうに、風がふいてきました。

ノウゼンカズラのはつばが、やさしくゆれます。はつばの

こすれるおとがします。

サワサワ サワサワ  
オレンジいろの花も、ゆれています。



サワサワ サワサワ

風のなかで、ノウゼンカズラの花が、ひとつ、すつとつるからはなれ、くるくるまわっておちていきます。

また、ひとつ。

また、ひとつ。

おちてきました。

ことちゃんの、またのぞきしているせなかにも、ボトンとおちてきました。

ドキンとしたことちゃん。

おもわず、はねおき、

「な、なんなの？」

と、あたりをきよるきよる。

すぐ、にこにこします。

「なあんだ。せなかにあたったのは、このお花だったんだ。

びっくりしちゃった」

ことちゃんのそばに、あのオレンジいろのラップみたいな花が、二つも、三つもころがっています。

じめんにおちたのに、まだすこしもしぼんでいません。

「かわいいお花。ママにあげよう」

そういつて、ことちゃんが、花に手をのばしたとき。

「ちゃくち、せいこうー」

つて、だれかがいました。

「だあれ？」

(だあれもないのに)

ことちゃんが、くびをかしげていると、おちている花のなから、ありがたいっぴきでてきます。

「くくくつ、ありさんじゃん」

すると、もうひとつの花からもありがでできます。

「花のバラシユートに、のつたね」

「ちかみち」

「ちかみち」

そうおしゃべりしながら、なかまのありのほうにいきます。

「ねえ、ねえ。ありさん、こわくなかった？ あんなにたか

いところから」

ことちゃんがききました。

ありたちは、ちよつととまつて、

「へっちらら」「へっちらら」

こえをそろえて、ことちゃんにいました。

それから、おおいそぎですすんでいきます。

ありを、じつとみていたことちゃん。

「ありさんて、いそがしいんだね」

あたまをこくんとして、にっこりしました。

ことちゃんは、みぎ手にひとつ。

ひだり手にもひとつ。

オレンジいろの花をひろいました。

そうして、うたいながら、アジサイのほうにスキップして

いきます。

「お花が、ボトンとおちました。

ことちゃんのせなかにも、おちました。

ありさんが、おしごとしていたお花だよ。

オレンジいろのお花だよ。

ラッパみたいなお花だよ。

かわいいお花。

風さんにふかれて。

またひとつ。

ポトトン ポトトン

ことちゃんのかわいいうた声をきいていたママが、

「ことちゃん。もうすぐ、おしごとおわるよー」

と、こえをかけてきました。

「ママー！ みてえー。このお花、なあに？ なんとというお

花？」

ことちゃんは、ママの顔を見上げてオレンジいろの花をふりました。

お日さまは、青い空のたかいところにありました。

田んぼみちを、ことちゃんはママと手をつないであるさま

す。

「ノウゼンカズラ」

さつき、ママにおしえてもらった花のなまえです。ことち

ゃんは、ゆっくりといってみました。

ママは、ノウゼンカズラの花を自分のあみこみへヤーにさ

しています。

「ママー、きれい！」

「ママかな？ このお花かなあ？」

「どっちもだよ」

「まあ！ うふふ」

ママが、ことちゃんとつないだ手を、ぎゅっとしました。

田んぼのイネが、ずいぶんとのびて、目にしみるようなき

れいなみどり色です。

みちばたで、ママがきゆうにしゃがみました。

「どうしたの？ ママ」

「ことちゃん、ママとおすもうをしよう」

「おすもう？」

なんだと、目をパチパチさせてママのよこにしゃがみま

す。

ママは、まるでスプーンみたいなかたちのはっぱをなんま

いもひろげている草から、ぴゅーとのびたくきを、にほんぬ

きました。

「はい、これは、ことちゃんの。こっちは、ママよ」

「なあに？ あっ、白いちいちゃいお花がならんでいるよ」

「よくみつけたわね」

「このお花にも、おなまえあるの？」

「あるわよ」

「このお花、なあに？」

「オオバコよ」

「オオバコ。ふうん」

「オオバコの花のくきは、じょうぶなの」

「そういいながら、ママは、オオバコのくきを、ひゅつとまげて、ことちゃんのもっているくきにからめました。」

「さあ、ひっぱりっこするよ」

「ママと、ひっぱりっこ？」

「されたら、まげよ」

「わかった！」

「それ。はっけよい」

「はっけよい」

「それぞれ、ことちゃんもつとひっぱれ」

「うーん」

「ことちゃんが、ちからいっぱいひっぱったとき。」

プチン

と、オオバコのくきがぎれました。

「あれれ、ママのまげだ」

「やったあ！ ことちゃんのかち！」

「オオバコさん、ありがと」

ママは、そういいながら、きれたくきを田んぼのよこにおきました。

「ことちゃんは、これもつてかえる。パパにおしえてあげるの」

「にこにここと、ことちゃんはオオバコのくきをにぎりしめました。」

それから、ことちゃんは、ママとスキップです。

「はっけよい、はっけよい」

と、うたいながら。

ことちゃんのはずんだこえが、田んぼのうえをふくかぜにのつていきました。

（東区）

「入選」

フフフツの  
ふうちちゃん物語

佃 美帆

「ただいまあ。おばあちゃん」

「お帰り。里菜、今日は、学校でおもしろいことあった？  
給食は、なんだった？」

「おばあちゃん、ちよつと待って。お話の前にね。まず、おやつだよ。私、習字の塾で全集中して書いていたから、エネルギー切れ。すつごくおなががすいているの。」

と、私は、おばあちゃんの質問攻撃をうまくかわした。

今、私は、お母さんのお母さん、つまり、おばあちゃんの家に来ている。

なぜかという……

うちのお母さんたら、私の落ち着きの無さを、ずつと何とかしたいと思っていだらしいの。それで、おとし、私が小学校に入学するときね。勝手に私を習字の塾に入れることにしたの。私の気持ちも聞かずにね。

私は、お母さんが、習字の先生のうまい話に、簡単に乗せられたのだと思っている。

「お宅のおじょうさんに、習字を習わせると、おしとやかになるわよ。」

なんてね。習字の先生は、お母さんが、その気になることを言ったんだよ。

ま、習字を始めてみたら、けっこうおもしろかったからいいけどね。新しい友達もできたし、学校の先生にも、字が上手になったとほめられたしね。

それで、私は、習字の塾に通う毎週水曜日、おばあちゃん家に寄っていくようになったわけ。だって、その塾は、おばあちゃん家の真ん前にあるのだから。

そして、私は、塾の帰りには、いつもおばあちゃん家で、いつしよにおいしいおやつを食べるといわけ。

私のおばあちゃんの名前は、『美智』。

おばあちゃんが私に教えてくれた話だとね。

おばあちゃんが生まれるちようど一年前、上皇様（当時は皇太子と言ったらしい）と美智子皇太后様が結婚されたんだって。私は、その方たちのこと、全然知らないけどね。とにかく、そのころ、普通の家の女の人が、皇太子様と結婚することは、まるで、シンデレラ姫のようだと、国民は大騒ぎをしたらしい。

だから、当時、生まれた女の子には、『美智子』って名前を付ける家が多かったんだって。美智子様のような幸せをつかんでほしいと、願ってね。

それでね。おばあちゃんのお父さん、つまり、私のひいじ

いちゃんも、同じことを考えたらしい。でもね、そのお方と同じ名前じゃ、畏れ多いと言つて、『美智』にしたらしい。私には、皇室のこととか、畏れ多いつて気持ちには、よく分らないけどね。

今なら、たぶん、歌手の嵐のファンが、男の子に『嵐』とか『翔』つていう名前を付けたことと同じじゃあないかな。かっこいい男の子になりますようにつてね。だったら、私は、『里菜』より『リカ』の方がよかつたかも。だつて、リカちゃん人形は、かわいいもんね。リカという名前だつたら、私、さつとかわいい女の子になつていたわ。残念！

そういうわけで、美智子様の結婚された年と同じ年に生まれたおばあちゃんの名前は、『美智』なのだ。そして、六十二歳。でも、おばあちゃんは、周りのみんなに言つていくる。

「私の歳は、三十五歳よ。精神年齢は二十歳じゃー。」

確かに、超元氣。地域のバレーボール部にも所属して活躍しているもの。私は、おばあちゃんと競走しても、いまだに勝てない。悔しい、すつこく悔しい。でも、子供といつしよにむきになつて走るおばあちゃんは、大人げないと思うよ、ほんとに……

そして、おばあちゃんは、おじいちゃんと二人きりでここに住んでいる。私のお母さんは、お嫁に行つたし、弟のおじさんは、仕事で東京に住んでいるからだ。

だから、孫の私ができるのをいつも楽しみにしている。もち

ろん、私の大好きなおやつをバッチリ用意してね。

おばあちゃんは、いつも家に行くとき、「よく来たね。里菜ちゃん、ラブー！」と言つて抱きついてくる。そう言われるのは悪い気はしないけれど、私も、もう三年生、とっても照れくさい。「私もよ、ラブー！」なんて、絶対言えないよ。

ところで、私は、さつきから、居間のテーブルの上にある、つやつやのゆで栗のことが気になつて仕方がない。

栗たちは、「おいらたちはおいしいぞ、早く食べて」と私を誘うように光っている。

この栗は、お昼過ぎに、おばあちゃん家のお隣りの鈴木さんが届けてくれたもの。

鈴木さんは、「今、ゆでたばかりだよ。かわいい里菜ちゃんに、食べさせてあげてね。」

と言つて、かごに山盛りいっぱいおせた栗を置いていってくれたそう。私のこと、かわいいだなんて、鈴木さんたら、フフツツ。

おばあちゃんは、私のおやつへの催促に、「そうだったね。食べよ、食べよ。」

と言つて、台所から小さなまな板と包丁、スプーンを持つてきた。

おばあちゃんが、包丁で栗を半分に切ると、ほくほくの黄色い中身が現れる。私は、おばあちゃんから、それを受け取ると、早速、スプーンでぐりぐりと栗をほじくる。そして、

口に運ぶ。すると、口の中が栗の甘さと香りでいっぱいになる。

「うーん、まいうー すつごく幸せ！ やっぱ、秋のおやつは栗だね。」

おばあちゃんが、半分に切ってくれた栗を私は、次々と頬張りながら、今日、学校であった出来事を話し始める。ときどき、栗にむせて、ゴリラみたいに胸をたたきながら言う。

「ゴホゴホゴホ…… く、くるしい。おばあちゃん、お茶、おかわり！」

「里菜、もう少し落ち着いて食べなさい。栗は、まだたくさんあるからね。ほんとにあわてんぼうさんだねえ。でも、少しは、おじいちゃんの分も、とっておいてあげなさいよ。」

「はい。」

私は、おばあちゃんには、お母さんに内緒にしていることだっけ話す。ときどき、おばあちゃんが大ファンの『嵐』の話もしちゃう。

おばあちゃんは、

「うんうん。そうなんだね。」とか、「おばあちゃんなら、こうするよ。」と言って、いつも真剣に聞いてくれる。アドバイスもしてくれる。おばあちゃんは、「それは、だめよ」「それは、違うわ。」とかは、決して言わない。うちのお母さんなら、私によく言うせりふだけだね。

「おばあちゃん、今日ね。同じクラスの芽衣ちゃんが、学校に、かわいいノートを持って来たの。そのノートって、こう、

パチンってリングを外して、一枚ずつシートを取り出せるものなの。おばあちゃんは、知ってる？」

芽衣ちゃんは、中三のお姉ちゃんといっしょにお店に行つて、買って来たんだって。芽衣ちゃんのお姉ちゃんは、そのシートにいろいろなメッセージを書いて、部活のみんなと、交換し合うように約束しているそうだよ。卒業の思い出ノートにするらしいよ。

芽衣ちゃんも、お姉ちゃんのまねしたいんだって。それで、私も、芽衣ちゃんからシートを一枚渡されたんだよ。『明日までに書いてちょうだい』だっけ。」

おばあちゃんは、うなずきながら、

「うん、うん。知ってるよ。おばあちゃんも、学生のころ思い出ノートを書いたことがあるよ。卒業が近くなると、必ず、だれかが始めるんだよねえ。お互いに『書いて、書いて。』ってね。先生にも頼んだね。ただし、好きな先生だけだったけど、ウフフツ。まだ、どっかにしまつてあるよ。どこだったかなあ。」

と、言つて、立ち上がろうとした。

「ちよつと、待つて。おばあちゃん。私、習字に行く前に、少し、そのシートを書きかけたんだけど…… けっこう難しいんだよ。いっしょに考えてくれない？」

私は、あわてて、おばあちゃんを引き留めた。そして、手提げから、シートを出して、おばあちゃんに見せた。

「なにになに…… なるほど！」

おばあちゃんは、この頃使い出した老眼鏡をかけて、じつくりとそのシートを見始めた。

この前、私が、その老眼鏡を見つけて、

「三十五歳が老眼鏡なの？」

と、聞いたたら、

「眼だけは、六十二歳なんだよ。プンプン。」

と、笑いながらこたえてくれた。

「名前・生年月日・星座・自分の似顔絵・好きな芸能人・好きな言葉・自分のチャームポイント・セールスポイント・贈る言葉ね。里菜、どれが難しいの？」

「えーとね。セールスポイントっていうところ。自分のチャームポイントなら書けるけどね。どういうこと？」

「えーと、里菜のチャームポイントは、目と書いてあるね。そうだね。大きな目だね。おばあちゃんも、そう思うよ。それで、セールスポイントねえ。簡単に言えば、自分のいいところだね。長所とも言うかな。チャームポイントが外から見

える所なら、セールスポイントは、見えない所かもね。行動のしかたとか、心とか……確かに、三年生には、難しいね。芽衣ちゃんのお姉さんなら、書けるでしょうけどね。」

「そうなんだ。難しいわね。私のセールスポイントって、どういうことかなあ。おばあちゃん、どういうことだと思

う？」

「そうね。おばあちゃんは、里菜の長所は、ここだつて言えるけどね。すぐ、それを言っちゃったら、つまらないなあ。

里菜、自分で考えてみるのも勉強だよ。」

「えー。おばあちゃんのけち。教えてくれてもいいじゃない。じゃあ、おばあちゃんのさつき言つてたノートを見せてよ、明日、芽衣ちゃんに渡さなきゃならないんだから。」

私は、口をとんがらせて、おばあちゃんに言つたけど、おばあちゃんは、

「この次までの宿題ね。楽しみにしてるよ。」

と、にこにこするだけだった。

私は、名探偵コナンみたいに腕を組んで、天井を見上げた。うーん。難しい……

おばあちゃんは、私の肩をポンとたたいて、

「まあ、あわてることはないんじゃないの。卒業して、芽衣ちゃんとお別れというわけじゃないし、もう少し待つてもらえば。」

と、言う。

「うーん、そうするか。もう少し、待つてくれるように、芽衣ちゃんに頼もうつと。」

私が、もう一つ栗を食べようとすると、おばあちゃんは、

「残りは、おじいちゃんの分ね。」

と言つて、さつさと栗を片付けてしまった。

仕方がない、自分で考えてみるか……

おばあちゃんは、栗のかわりに、今度はみかんを持ってきた。

「さて、みかんでも食べながら、おばあちゃんのお話をしよ

うかね。」

と、言いながら、私の隣りにすわった。

おばあちゃんのお話は、学校の図書室に並んでいる本のお話とちよつと違う。おもしろいし、笑つちゃうし、しかも、本当にあったことらしい。私は、おばあちゃんのお話を聞く、たとえどんなに心が「へこむ」ようなことがあつても、元気が出てくる気がする。まあ、おばあちゃんのお話は、私にとって魔法の薬みたいなものかな。

「今日は、『フフツツのふうちゃん物語』でも話そうかね。」  
「おばあちゃん、『フフツツのふうちゃん』つてだれそれ？」  
「さて、だれでしょう。答えは、お話を聞いた後でわかるかも？ きつと、里菜なら、分かるわよ。」

そう言つて、おばあちゃんは、話し始めた。

ちよつとだけ昔、あるところに、ふうちゃんという小さな女の子が住んでいました。ふうちゃんは、小学校に入学したばかりのピカピカの一年生です。

明日は、ふうちゃんの初めての運動会です。

「お母さん、明日のお弁当。絶対に、たらことおかかのおにぎりにしてよ。梅干しは、だめだからね。あと、栗とみかんもお願いね。」

ふうちゃんは、とつても張り切っていました。だって、家族みんなで、応援に来てくれるからです。

お父さんなんか、ふうちゃんの活躍するところを写真にとるんだと、お店でフィルムを五本も買ってきました。

(昔はね、カメラの中にフィルムというのを入れないと写真が撮れなかつたんだよ。それに、写真屋さんとそのフィルムを持つて行かないと、どういうふう写真が撮れたか、分からなくてねえ。現像するつて言うんだよ。デジカメより不便だけど、現像した写真を初めて見る、わくわく感がいいんだよ。)

ふうちゃんの出る種目は、かけっこ、玉入れ、ダンスでした。ふうちゃんは、ダンスと玉入れには、自信がありました。ダンスは、休み時間や放課後に、友達とずつと練習をしていたからです。玉入れは、背の高い正行くんとかちゃんが、同じクラスにいるからです。ふうちゃんのクラスは、練習の時から最強、いつも一等です。今日も、きつと一等に違いありません。

でも、かけっこは、違います。一人でがんばらなければなりません。ちよつぱり不安です。しかも、同じくらいの速さの孝枝ちゃんと、同じ組で走るようになっていきます。孝枝ちゃんとは、幼稚園のときからのライバルです。練習では、ふうちゃんが勝つときもあるし、孝枝ちゃんが勝つときもあります。

今日は、家族みんなが応援してくれるので、ふうちゃんは、絶対に一等になって、みんなを喜ばせたいと思いました。

「プログラムナンバー3。一年生のかけっこ、『風のように走れ！』が始まります。」

先生の後ろについて、駆け足で入場しました。スタートの



位置に並ぶと、次々に、ピストルの合図で、友達がスタートして行きます。

いよいよ、ふうちゃんたちの組の順番が来ました。

ふうちゃんは、スタートの前に、左手の平を見ました。

**ふうちゃん がんばれ!**

朝、家を出るときに、お母さんがマジックで手の平に書いてくれた言葉です。

よし! 絶対に一等になってやる!

「位置について。」

ふうちゃんは、左足を前に出し、両手をキュツと握って構えました。

「よいい。」

パーン!

ふうちゃんは、ピストルの合図で飛び出しました。ゴールの方向から、お父さんの声が聞こえます。

「いいぞー ふうちゃん、その調子!」

ライバルの孝枝ちゃんは、ふうちゃんのすぐ隣りを走っています。

今日は、孝枝ちゃんに負けられないわ。

ところが、ふうちゃんがそう思った途端に、孝枝ちゃんは、転んでしまったのです。

えっ、どうしたの? 孝枝ちゃんが転んじゃった…… 大丈夫……

ふうちゃんは、くると向きを変えて、孝枝ちゃんに駆け

寄りました。

それを見たふうちゃんのお母さんは、思わず叫びました。

「ふう、なぜ、戻るのよ。ビリになるわよ!」

驚いたのは、お母さんだけではありません。周りでレースを見守っていたみんなが驚きました。本部で応援していた校長先生は、

「あれっ、あの子はだれだ!」

と、叫んで立ち上がったくらいです。

ふうちゃんが駆け寄ると、孝枝ちゃんの右膝から、血がにじみ出ています。

「ふうちゃん。」

孝枝ちゃんは、泣きそうな顔をしています。

心配して駆け寄ってきた先生が、

「血がでているじゃないか。孝枝さん、ここで、やめてもいいんだよ。どうする?」

と、声を掛けました。

孝枝ちゃんは、右膝をかかえながら、ふうちゃんの顔を見ました。

「孝枝ちゃん、大丈夫よ、大丈夫! 私がいっしょに走るからね。いっしょにゴールまで行くのよ。」

ふうちゃんは、孝枝ちゃんを励ますように言いました。孝枝ちゃんは、少し迷うような顔をしました。コクンとうなずきました。

周りのみんなは、黙って二人を見守っていました。そして、

二人が肩を組んで進みだすと、いつせいに拍手！

ふうちゃんのお母さんや校長先生は、大きな声で叫びました。

「二人とも、がんばれ！」

お父さんは、二人の姿を写真に収めました。

「へえー、普通、レース中に、転んだ友達のところへ戻らないよね。ゴールしてから、大丈夫って声をかけるんじゃない？ 私なら、そうするな。一等になるチャンスじゃない。」

と、私は、おばあちゃんに言った。すると、おばあちゃんが、にこっとして言った。

「まだ、話の続きがあるんだよ。」

運動会が終わって、家に帰ると、ふうちゃんは、お父さんやお母さんに言いました。

「一等になれなくて…… ごめんね。」

お父さんは、ふうちゃんに、言いました。

「ふう、残念だったな。そりゃあ、ふうの、ゴールテープを切るかっこいいところ撮りたかったよ。急に、向きを変えて後ろに走り出したときは、ふうのやつ何してんだって思ったよ。」

でもな、ふうと孝枝ちゃんがゴールをしようとかんばっている姿に感動したよ。ゴールに向かってる、ふうと孝枝ちゃんは、とってもいい顔をしていた。

今だ！ シャッターチャンス！

ふう、あやまることはない。かけっこが一等でなくても、お父さんは、あの時のふうと孝枝ちゃんのがんばりは、一等賞だと思う。」

お母さんは、あの後、知り合いのお母さんたちから、「ふうちゃんって本当に優しい子ね。いい子ね。」と言われたことを、ふうちゃんに、教えてくれました。

「ふうのことを、あんまりほめてくれるから、お母さん、照れくさくって……」

孝枝ちゃんのお母さんには、『ふうちゃんに助けてもらって、ありがとうございます。ふうちゃん、あのまま走れば一等だったのに、ごめんなさいね。』って言われたのよ。」

でも、お母さんは、ちよっぴり悔しそうに言いました。

「いい、ふう。来年は、一等賞をとるわよ。」

「おいおい、お母さんたら。今日のふうは、ヒーロー。あんなにみんなから拍手をもらったんだからな。かけっこで一等賞をとっても、あんなに拍手をしてもらえないぞ。なあ。」と、お父さんは、ふうちゃんの頭を優しくなでながら言いました。

お父さんが、あの時撮った二人の写真は、写真屋さんで大きくプリントしてもらって、居間の壁に飾られました。

そうか、ふうちゃんって、いい子だな。でも、何か、もやもや…… 私には、できないことだと思っ……

おばあちゃんは、私の心がわかるかのように言った。

「里菜、里菜と芽衣ちゃんがいつしよに走って、もし、芽衣ちゃんが転んだら、どんな気持ちになる？」

あ、そうか。ふうちゃんは、孝枝ちゃんのことからライバルだけど、大好きなんだね。大切な友達なんだね。だからかあ……

私は、少しだけ、ふうちゃんの気持ちがあんなにわかったような気がした。私のもやもやは、晴れた気がする。フフツツ、笑えてくる。

おばあちゃんは、私の顔を見ながら言う。

「あのね。『フフツツのふうちゃん物語』は、その二があるんだけどねえ。続きは、今度にするかい？」

「えー。続きが聞きたいよ。来週まで待てないもん。お願い。」

私は、大げさに手を合わせ、おばあちゃんを拝むようにして頼んだ。

「そうかい、そんなに頼まれたら、話さないわけにはいかないね。じゃあ、『フフツツのふうちゃん物語その二』の始まり始まり。」

おばあちゃんの顔、うれしそう。本当は、続きを話したかったんだな。フフツツ。

私は、わざとうれしそうな声で、「やったー！」と叫んだ。

ふうちゃんは、三年生になりました。

その日の三時間目は、理科の学習でした。日光写真の実験をやることになっています。

日光写真には、何かの模様が付いている透明なシートが必要です。それを感熱紙の上に置き、日光に当ててその模様を写すのです。

理科が大好きなふうちゃんは、前の日に、お母さんといっしよに実験用の材料を準備しました。

「お母さん、これ、どうかな？」

「ふうちゃん、これ、いいんじゃない？」

ふうちゃんは、集めたパンやお菓子の空き袋を丁寧に切り開きました。そして、理科のノートの間に丁寧に挟んでおきました。

理科の時間になると、先生が、

「さあ、みんな、どんな材料を持ってきたかな。机の上に出してみよう。」

と、みんなに声を掛けました。

「はい。」

みんなは、机の中や机の横にかけた手提げから、材料を取り出して置きました。

先生は、机の間を歩きながら、みんなの持ってきた材料を確認し始めます。

ふうちゃんは、みんなが、どんな材料を持ってきたのか気になって、キョロキョロしていました。そして、隣の席の

ひでくんの机の上には、何も載っていないことに気が付いたのです。

「あれ、ひでくん、材料は？」

ひでくんは、よく先生にしかられます。忘れ物が多いし、机の周りに自分の持ち物を落としたままでも平気。机の中も、ぐちゃぐちゃ。ひどいときは、給食で出たパンやレバーの干からびたかけらが、ノートを出すときにコロロンと落ちることがあります。ふうちゃんは、隣の席なので、そんなひでくんに、いつも忘れた物を貸してあげる役です。

また、ひでくん、忘れたのね。きつと、またしかられちゃうわね。学校に来るときに、ちゃんと確かめてくればいいのに……うちのお母さんが言うように、本当にこりない人ね。でも、今日は、私、たくさん材料を持ってきたからあげようかな。でも、せっかくお母さんと集めたしな……

ふうちゃんが、迷っているうちに先生が来ました。

「おつ、ふうさん、たくさん持ってきたね。感心感心。きつと素敵な写真ができるよ。」

あれ、ひでくん。何もないのかい。これじゃあ、実験ができないなあ。だから、忘れ物をしてはいけなくて、いつも言っているんだよ。しかたがないなあ、後で、先生が何かあげるよ。」

と、先生は言って、次の席の方に進みました。

ほっ、よかった、先生は、あまりしからなかったわ。材料も先生がくれるって言ったから大丈夫ね。

クラス全員の確認が済むと、先生はひでくんに、材料をくれました。でも、他の忘れた子と半分ずつなのです。ひでくんがもらった材料のシートには、文字しかついていません。

実験用の感熱紙は、一人三枚あるのにな。ひでくんのあのシートじゃあ、素敵な写真にはなりそうもないよ。文字だけで模様がないものね。少し、材料をわけてあげようかな。

そこで、ふうちゃんは、模様があるシートを二枚選んで半分に切りました。

そして、ひでくんに、

「ひでくん、これあげる。明日は、忘れ物をしないでよ。約束よ。もし、約束破ったら、これからは、絶対に、貸してあげない！」

と言って、シートを渡そうとしました。

ふうちゃんは、ひでくんが、

「うん。ありがとう。」

と、言って受け取ってくれるかと思っていました。

ところが、

「ふん、おせっかい。いらないよ。」

と、言い返してきたのです。

ふうちゃんは、カチンとききましたが、

「上等なおせっかいだからね！」

と言って、さっとひでくんの机の上にシートを置きました。

私は、お話を聞いていて、またまた、『なぜ?』という気

持ちになった。

ふうちゃんは、おせっかいと言われたのに、なぜ、それでもシートをあげたのだろう……私なんか、おせっかいと言われたら、その子に「イーだ。あんたなんかやらないわよ。」って、あつかんべーをしてやるのに。

「ねえ、おばあちゃん。ふうちゃんは、ひでくんに『おせっかい』って言われたのに、どうしてシートをあげたの。それに、『上等なおせっかい』って、どういうこと？」

「アハハ。それねえ。おばあちゃんのお母さんの口癖だよ。

『おせっかい』って、いい意味でつかわれない言葉だろ。でも、時には、相手のために『おせっかい』も必要。つまりね、その人にとって、本当に必要なお世話のことを『上等なおせっかい』と言うのさ。まあ、『小さなお世話で、大きな親切』と言った方が、里菜にはわかりやすいかな。」

「ふうん。わかったような気はするよ。」  
私は、二つ目のミカンの皮をむきながら、おばあちゃんに、そう言った。

ふうちゃんは、使うシートをあれこれ考えて選びました。隣の席でも、ひでくんが難しい顔をしてシートを切っています。

しめしめ、ひでくんたら、『おせっかい』って、言ってるくせに、ちゃんと私のあげたシートを使っているじゃないよ。よかった。やっぱり、必要だったんだ。なんてったって、私

は、ひでくんのお世話係だもん。フフッ。

準備ができると、ふうちゃんたちは、実験をするために中庭に出ました。みんな、厚紙、感熱紙、シート、ガラス板の順に重ねて、輪ゴムで留めたものを持っています。そして、太陽の方向を考えながら、花壇のふちに立て掛けました。昼休みまで置いておきます。

昼休み、ふうちゃんは、外に置いておいた日光写真のセツトを片付けながら思いました。

なかなか、いい感じにできたわ、実験は大成功、早くお母さんに見せたいな。

さて、次の日の朝のことです。ふうちゃんが、教室に入ると、みんなが、教室の後ろにある掲示板の前に集まっています。昨日の理科で作った日光写真が掲示されていたのです。どの写真も、くっきりとシートの模様が感熱紙に写されています。

写真を見ていた女の子たちは、  
「ひでくんの写真すてきだね。このリボンの模様、かわいらしいわね。」

と、言っています。確かに、リボンのクルクルとした模様が、きれいに写っています。その模様は、ふうちゃんが、ひでくんにあげたシートの模様でした。友達が、ほめている言葉を聞くと、

「それ、私があげたものよ。」  
と、ふうちゃんは言いたくなりました。それに、このシート

を私が使っていたら、私がほめられたかもしれないとも思いました。

でも、ひでくんの笑顔を見たら、言えなくなりました。ひでくんが、みんなからほめられるなんて、めつたにないことですから……

ふうちゃんは、家に帰るとすぐに、お母さんに、今日の出来事を話しました。ちよつとだけ、うらやましい気持ちがあったことも。

すると、お母さんは、

「それこそ、『上等なおせっかい』よ。ふう、えらいわ。さすが、私の娘！」

と、言っけふうちゃんの頭をなでてくれました。そして、こつうも言っけくれました。

「もちろん、ふうの悔しいとかうらやましいという気持ちも分かるわよ。でも、ひでくんのことを氣遣えるふうのこと、お母さんは、大好きよ。」

ふうちゃんは、思つうのです。

私、これからも、ひでくんに、『上等なおせっかい』を焼くかもしれないわ、フフフツ。

「これで、『フフフツのふうちゃん物語』はおしまい。あー、のどがかわいた。」

おばあちゃんは、そう言つうと、みかんを取つて、皮をむき始めました。

私も、四つ目のミカンの皮をむきながら、

「ふうちゃんつて、いい子だね。ふうちゃんのセールスポイントは、友達に対して、『上等なおせっかい』ができることなんだね。」

おばあちゃん、何だか私のセールスポイントを見つけるヒントになつた氣がするよ。ありがとう。ん？ ふうちゃんつて、もしかして私のお母さん？ ふ・さ・こ〓ふう？

と、言つうと、おばあちゃんがウインクをした。

「正解！ さすが里菜。」

ありがとう。おばあちゃん。ラブ！。フフフツ。

(東区)

鈴木ゆき江

昭和を代表する童話作家、神沢利子さんの書かれたものの中に、「子どもに風を送る、『ふいご』になりたい」という一言がありました。私の好きな言葉です。

もう一つ、私の背中を押してくれている言葉があります。それは、私がご指導をいただいた先生のお言葉で、「一箇所だけでもキラリと光る、その人だけの表現、その人だけの描写があれば、成功」というものです。大切なことは、子供たちに何を一番伝えたいのかを、慣用句や使い古された言葉ではなく、自分の言葉で、子供たちの心に届けることであると。私は今でも、そのキラリを探し続けています。まだまだ未熟で勉強不足ですが、物語の視点やテーマ、構成や描写など、念頭において審査させていただきました。応募作は、八作品でした。

(市民文芸賞)「森においしゃさんがやってきた」  
書き出しから物語への誘導が、巧みで美しく、期待感を膨らめてくれます。発想が新鮮で、物語の展開が素直で映像が目に浮かんできます。森の動物たちのそれぞれの個性が、親しみを込めて書かれていて、背後に作者のやさしい目線とメッセージが感じられ、安心して読み進むことができました。余韻を残して読後感がよく、完成度の高い作品です。

(市民文芸賞)「月あかりの一軒の家」  
山の上の自然の中で暮らす一家の家族愛が、ほっこりとのびのびと書かれています。素朴な筆致で丁寧な書かれています。

て、どこか懐しく、心の故郷に帰ったような温もりのある物語です。が、鹿は野生です。予め鹿への親近感を出しておくために、森陰から興味ありげに、時々一家の様子を覗いている鹿がいることを、前の方でもう少しだけ書き添えたかっと思えます。鹿も、山の一家に興味津津だったことでしょう。

(市民文芸賞)「このお花、なあに」  
日常のいつときを切り取って、ことちゃんとありさんの、微笑ましいお話にしています。弾けるようなテンポが魅力で、会話がきれいです。その会話をうまく使ってお話を進めています。お話の始めと終わりにママが登場していることで、子どもは安心感を覚えることでしょう。小さな生き物に目を留めた作者の、感性の瑞瑞しさとやさしさにほっとします。膝に抱いて読んであげたい、すてきな幼年童話です。

(入選)「フフフツのふうちゃん物語」

文章力があり、着想も展開もよく、読み応えがありました。ただ、導入部が長いです。筆力で読ませてしまうのですが、読者である子供にとってはどうでしょう。あまり盛り込み過ぎると、山が見えなくなってしまう子になってしまいます。時代を越えて共感できるいいお話ですが、おばあちゃんのお話の記述だけでは印象が固くなってしまいます。物語性が欲しいです。後半、説明的で心の情景が見えないことと、筆者の視点が覗いて少し教訓的になってしまったのが惜しいです。この他、惜しくも選に入らなかった作品も、力作揃いで楽しく読ませていただきました。次回もぜひ挑戦なさって下さい。

## 評論

「市民文芸賞」

## 藤枝静男と死者の箱庭

木 俣 統 裕

対象への触知を果てしなく引き伸ばすことが詩的言語の性質の一側面とするならば、病を得た妻を限りなく死者へなぞらえようとした藤枝静男の小説群は、連続するひとつの挽歌である。たとえば歌の行間に悲哀があり、またその終幕に情感の残余があるように、藤枝作品は妻の生前において既に哀悼を尽くし、また実の死に際して「悲しいだけ」という余韻を残した。

もつとも藤枝は自身の作品において挽歌など意識しなかったであろう。ただ妻は近い将来に亡くなるのだという確信を抱き続けながらその時その時を観察し描写していたはずである。自身が医者である以上、それら描写は単なる感傷的な死の予感ではない。私小説に孕まれた、確たる診断にもとづく具体的な余命宣告である。

かつて中村邦生は短編小説のアンソロジーを編むにあた

って、戯れに各短編から想起される別の一作品をリストアップした。たとえばユルスナールの「源氏の君の最後の恋」には町田康の「末摘花」があてられ、太宰治の「きりぎりす」には同じく太宰の「貨幣」があてられている。そのなかで横光一の「春は馬車に乗って」には、藤枝の「悲しいだけ」が照応された。それこそ横光の短編こそ挽歌と呼ぶに相応しいように思う。修辞を凝らした文体が若き妻の死と相俟って、小説の技巧とはかくも悲劇をも仄かに華やかせるのかと感嘆させる。

かたや藤枝はどうだろう。横光とは対照的に、その直截的な文体は歌とよぶにはあまりに武張ってみえる。それでも見詰め続けた妻の闘病の終わりにただ一言、「悲しいだけ」と発した事実が、たとえ口数が少なくともやはり藤枝の意図を超えて挽歌であったのだと確信させる。悲しみという痛みの



外郭があるということは、本来その生成過程において悲しさの中身があつたことを意味する。また、悲しさを貸方とした、生に紐づく肯定的な借方があつたことを物語る。

藤枝作品においてそれら痕跡を辿る営為は多少の困難をもなう。作品を紐解くとき、挽歌として理解しにくい理由は先述の文体の他いくつか思い至るが、そのうち最大のものは藤枝にとつて妻が最期まで御すことの能わない他者であつたことのように思う。横光と異なり、自身の独特の世界観に妻の死をピースとして適切に配せなかつた。それは、きれいごとや安易な理解で済まそうとしなかつた生真面目さの現れなのかもしれない。しかし、死に隔てられた他者と自己の和解は訪れず、確定されてしまつた断絶がその挽歌に深い影を落としてゐる。

昭和二十二年の第一作「路」は、感情の描写を極力排したようにみえる文体の表面上の印象を裏切つて、当時の藤枝が妻に抱く心理をよく表している。

——そして十月の終り、妻は近くの山の中腹にある療養所に入院した。

近くと云つても、片田舎の私の家から、私設電車で二十分、それから歩いて四十分はかかる。

電車を終点で降りると、そこはもう天竜川の岸で、岸に

沿つて幅三間程のバス道路があり、バスは駅から出発すると暫くはひどい埃をまき上げて走るが、やがて右に折れ、長い橋を渡つて対岸にある町の方へ行つてしまふ。私の行く道は、橋を渡らず、眼下に天竜川の大彎曲部を見下しながら、そこからやや狭くなつて山の中へ入つて行くのである。すると、もうすぐ片側は切り立った崖になり、岩肌から浸み出す水でじめじめした崖面には苔類の白い小さな花がびっしりと簇生し、空気は急に冷え冷えとしてくる。崖上から路を超えてかぶさつた大きな樹の枝の下にポツンと小さな暗い自転車修理店、崖を切つて狭い石段をはめ込んだ神社、そんなものを、右に見左に見て尚暫く歩くと川を見下ろした川魚料理屋があり、その向かい側が診療所の登り口になつていて「T国立療養所入口」という棒杭が立っている。そこから広い坂が始まつているのである。

それはかなり長く、ジグザグに折れ曲がり、代燃車では登り切れない程度の傾斜をもつ、岩の破片を敷き固めた凸凹道であるから、いつも食料などを背負つて行く私にとつては相当こたえるのである。

#### 〔路〕

当時西ヶ崎に暮らしていた藤枝は入院中の妻のために食料を背負い込み、ひとり西鹿島駅に降りる。はじめてこの書出しを読んで腑に落ちない一文に気付く。「電車を終点で降りると、そこはもう天竜川の岸」。どうだろうか、実際の河川

敷はまだ相当北側にある。駅をでてすぐに岸が視界へはいるだろうか。

しかし事実に近かったのである。確かに昭和二十二年当時、西鹿島駅前には川岸と呼んでもおかしくない景色が広がっていたと思われる。かつて西鹿島とその東に位置する上島地区は天竜川の流路のひとつ、大平川によって隔てられていた。その上島地区が治水のために地区の北側と東側の大分を河川敷に差し出ししたのは昭和に入ってからすぐのことである。同時に昭和五年から上島地区と西鹿島とをへだてる天竜川の流路が堰き止められはじめ、途中で出水と決壊に遭いながらも昭和十三年から十四年にかけて今の位置に堤防が竣工した。すると天竜川の流路でなくなつてから十年近く経つたとはいえ、やはり昭和二十二年当時の西鹿島駅の小断崖の東側は、一見すると河川敷の様相を呈していたであろう。

ここで藤枝によって語られること語られないことの差異が浮かびあがる。まず藤枝は天竜病院へとつづく道の描写を微細に表現する。数多くの白い苔の花、崖下の北面のひんやりとした空気感、それに多少の人の営みを感じさせる社や店舗。病院へ続く坂の入口にある川魚料理屋とは納涼亭のことであろう。今でも同じ道を辿れば往時を偲はせる。

一方で、おそらく視界に映じているはずの対岸のビジュアルの一切は描写されない。小断崖から近くに見えたはずの上島の集落も、大彎曲部を見下ろした先にある北鹿島の集落も、地域で最も栄えた町、二俣町へ向かう国鉄二俣線の轍も、

その鉄路をけたたましく走る蒸気機関車も客車も貨車も。唯一バスが鹿島橋をわたる様は、どこかバス自体が見えない空間に吸い込まれていくかのような無機質な印象を与える。

つまり天竜川を挟んで此岸は生の世界であり、彼岸は死の世界である。それとともに、ここ此岸は運賃さえ払えばバスに乗って死の世界に行ける程度のマジナルな空間でもある。「空気が急に冷え冷えとしてくる」ような、言うなれば生のエリアのきつ先である。乗り換えれば二俣町へも森町へも向かう国鉄を無視して降りた駅が終点であることが印象付けられ、水の流れが絶えて久しい駅前の風景は川の岸と呼ばれる。だから結核患者を多く収容する天竜病院はこの立地にあるべきだし、その収容患者は戦場帰りの病兵が多くを占めるべきである。そして今、妻はそのような場所にいる。

二月二十三日、前晩から降り出した雪が朝になってやみ、風がなく静かな底冷えのする曇り日であった。夕刻、私は何時よりも二電車おくれで山に向つて歩いて行つた。裏門にかかる坂の途中でリヤカーが登りなやんでいく。私は追いついてそれを押しはじめた。荷物が三個の寝棺であることは、掛けむしろの端からすぐわかり、一つは原田さんのものであろうと思われた。挽子は「からでも重いもんだ」と云つた。私達は坂をイナズマ形に登り、裏門につきそこで挽子は門衛に断りに寄つた。私はスキー帽をぬぎ汗をふきながら遠くの方を見下ろしていた。冬枯れの

天竜川の河原は、今暮れかかり、白く雪におおわれ、まん中あたりに細い黒い帯のように流れがあつた。私達はまた出発し、私は原田さんに教わつた路を、息を吐きながら車を押し押し登つて行つた。

〔路〕

「冬枯れの天竜川の河原」とは彼岸へ渡ることが容易になつてゐる様のメタファーである。病院にむかつて坂を登る三つの寝棺のうち、ひとつは亡くなつた作中人物の原田さんのものであるが、他の棺には誰がはいるのだろうか。それは妻のはずだ。妻はいずれ死すべき者として扱われた。結核の罹患後三十年を超えて妻が闘病しながらも生きながらえたことは、藤枝にとつて意外なことだつただろう。

ところで棺はもうひとつある。残りひとつに入るべき者はだれか。それは自らの棺を押しながらかく歩く者である。キリストが十字架を背負つてゴルゴダまで歩くがごとく、自らが納まる棺を山頂まで歩き押し上げる。藤枝にとつての生とは、救済を望みつつ死と連れ立って歩く登り坂である。たとえパスが軽々と彼岸へ渡ろうとも、命あるかぎり此岸の坂道は自身の足でしか登れない。藤枝は既にその出発点において、置かれた環境を、病身の妻を、嫌悪する己を、全てまとめて風景としての死のふちへと投げ入れようとしていた。

藤枝にとつて死が吸引力をもつ理由の一端を昭和四十一年「一家団欒」に見ることが出来る。藤枝は作中の世界で執筆時から約二十年後の自らを死者として登場させ、先に亡くなつた家族と再会させる。

妹ケイ 明治四三年没 一歳

姉ナツ 大正二年没 一三歳

弟三郎 大正三年没 一歳

姉ハル 大正四年没 一八歳

兄秋雄 昭和一三年没 三六歳

父鎮吉 昭和一七年没 七〇歳

〔一家団欒〕

藤枝にとつて身内の死はその生よりも現実的な経験である。そして生者と関係を結ぶよりも死者とより上手に交わる。妻を死者になぞらえた理由もその辺りにあつたであろう。

ナツ姉が死んだとき、兄は赤ん坊の三郎を背中にくくりつけて、大人しく枕元に坐つていた。三郎も翌年には死んで、いま部屋の隅に、その六年まえに生まれて七ヶ月で死んだケイとならんで、小さな蒲団ですやすやと眠つている。兄は何時もやさしかった。自分自身は何でも我慢して、みんなを可愛がつてくれた。そう思うと章の眼からまたしても涙が流れた。

「僕は兄さんにも悪いことばかりして、悪かったやあ」と云つて彼は泣いた。

彼は、高等学校のと看、兄が自分の乏しい小遣をためてみな章にくれたことを、後悔の念をもつて思い起した。彼は何時看、それをチップとして下らないカフエの女にやつた。兄が結核にかかつて大学をやめ、絶望的な療養生活に入つていたとき、彼は兄からあずかつた顕微鏡を質にいれた。そして兄がやつとの思いで父から貰うことのできた五〇円の写真機代を猫ばばして、二〇円の中古品を送り、余りをカフエ通いにつかつてしまった。

「それ、また章の二時間泣きがはじまつたによ」

ハルが氣を引きたてるように云つた。

「お前も、はあ死んじやつただで、それでええじゃんか」

「死んでも消えない」

と彼は呟いた。しかし一方では「そうか、そうか」と思ひ、すこしは氣が晴れるようでもあつた。

「な、それでええにおしな」

とナツが云つた。なるほど、これで本当にいいのかもしれない、と彼は思つた。もう肉体がないのだから、自分は悪いことをしなくてもすむだろう。——それから世の中に對する不平不満のようなものからも、そこから生ずる責任感みたいなものからも、それに対して自分が一指を加えることもできないという焦慮と無力感からも、そういうすべでのものから、自分は否応なしに解放された。それも相手

の方から解除してくれたのだ。

——ああ何てここは暖いだろう、と彼は溜息をつくように思つた。これからは、もう父や兄や姉の云うことを何でもよく聞いて、素直に、永久にここで暮らせばいいのだ。

#### (一家団欒)

たとえ生きている間はあらゆる罪を犯そうとも、死人であればもう過つことはない。むしろ、あらゆる告解に對して限りない許しが与えられる。理想の世界をすら想像することができる。苦惱と後悔を抱えながら自らの棺をかついだその先に救済があつてほしい、藤枝はそう願つた。

ただしここに見える作中の家族は嚴密な意味での家族ではないだろう。あきらかに藤枝が自分自身のためにつくつた物語に登場するキャラクターたちである。都合よく振る舞う死者たちは、まさに藤枝自身の一部である。家族Ⅱ死者Ⅱ自己の連環は、藤枝によつてコントロールされる死者の箱庭とよぶにふさわしい。家族が死者であればこそ藤枝は救われる。ゆえに妻を死者とすることは、先立つた家族の墓碑銘にあらたな名前をきざみ、死後の世界で自身の救いを与える者のひとりに加えることだつたはずである。しかしこの目論見は決定的に崩れてしまう。後に妻はどうしようもなく他者であることが不可逆的につきつけられる。

昭和四十二年「空気頭」の冒頭、瀧井孝作の勧めるように事実をありのままに書くと言明して筆が起こされる。その宣言には付言があり、他人に同感を期待しないのだという。

今日は妻の死んだときのことを楽しく空想した。

今日も同じことを楽しく想像した。そしてやがて私も死んで、妻の墓へ入っていくときの光景を楽しく空想した。妻は毎日の収入から、百円硬貨だけを自分の収入としてみ、筆筒のうえのブリキ罐のなかにためている。墓の中で、「こんなにたまったよ」

と云って私がそれを渡す。妻がニッコリする。

〔空気頭〕

この「一家団欒」とよく似た色彩の世界は、直後にある出来事をターニングポイントとしてあえなく崩壊する。

何ヶ月か前の暑い日の午後、私と妻とは故郷に帰って墓の掃除をしていた。父のつくったその小さな墓の下には、父と私の肉親たちが眠っていた。そして多分ちかい将来に、私自身もその親しい場所へ入って行く。

私はほとんど我を忘れて仕事に没頭していた。玉石に混ざりこんだ枯葉ひとつひとつ拾い棄て、花筒の底にたまった泥を指で丹念に洗い出し、汲みたての冷水を存分にかけ

て、熱した墓石を濡らした。草をむしり、枯れて古い供花は抜き出してまどめて火をつけた。何よりも水を好んだ兄の顔を思い浮かべ、私は壇にあがって、彼と話を交わすように、何度も何度も石の頭へ水を浴びせかけた。すこし離れて、切花を持って立っていた妻が、不意に、思いつめたように

「わたしはこのお墓に入るの嫌です」

と云った。すると反射的に、(裏切られた)というような、異様な不快感が私を襲った。

——あれが俺だ。

さめかけたコーヒーを啜りながら、そのときのことを私は思い出していた。裏切ったのは俺だ。ほとんどゾツとするような暗い気持ち私を襲った。

あのとき俺は、それとない身振りで妻を墓の下にひきずりこもうとしていたのだ。墓洗いに没頭する俺のさも嬉しそうな動作は、彼女をその肉親から引き離して、彼女のまったく見識らぬ肉親たちの棲み家へ押し入れようとする、残酷な約束として彼女の眼に映ったにちがいない。私の脳裡を、あのときの彼女の死におびえたような暗い眼つきがよぎった。

〔空気頭〕

この妻の言葉は藤枝作品に繰り返し用いられるモチーフとなった。相当に衝撃的な発言だったと思われる。こと「空気

頭」においては、妻の言葉を境として自らの内面的な醜悪さがこれでもかと露悪的に展開される。自らの醜さは「上半盲」や「情欲の昂進」などの病として描かれる。まず上半盲への対症療法として気胸療法がとられる。自らの手でチューブの先端を脇の裏から脳内へ通し、そこから空気を送り込む。かつての結核の治療法を擬していることを思えば、自らの頭が結核同様に回復困難な病に侵されていることを暗示している。まさに空気頭とは絶望的な病のシノニムである。

つづいて情欲の昂進への対策として、ある薬の研究開発を推し進める。薬で精力を究極まで高めることによってむしろ抑制させるといふ方針のもと、人糞を用いて薬を精製する。欲望の解放という願いのために必死に欲望を満たそうとする。目的に対する手段の醜さが際立ち、読む者にとって、全ては手遅れのように見える。瀧井的な手法が反転してしまつたのであろうか。いや、ありのままを描き他者の共感を求めない点で手法が先鋭化したといえるだろう。

本来藤枝にとつての死者は、己の恥部を絶対的に許容してくれる存在だった。しかし妻は死者の箱庭に入ることを、また藤枝と同化することを拒絶する。自ら作り出した死者の箱庭が幻想にすぎないことが露わになることで、救済されえない内面が暴走する。しよせん箱庭は箱庭にすぎず、結局のところ死者による救済は幻想なのではないか。この露呈された欺瞞を背景にもつて「空気頭」の支離滅裂な内面世界が展開される。

「空気頭」の最後はもはや生死について感情の入り込む余地のない日常が淡々と描かれる。藤枝に代表される生きながら死者と紐帯をもつ者の絶望とは、死の意味付けを奪われて過ごす日常という名の砂漠であろう。

昭和四十三年「悲しいだけ」は、妻の死の瞬間まさにそのときを切り取った。妻の死によって揺さぶられた感情の断片が理屈、合理的思考に食い込み、戸惑う様子が言語化されている。

「妻の死が悲しいだけ」という感覚が塊となって、物質のように実際に存在している。これまでの私の理性的または感覚的の想像とか、死一般についての考えとかが変わつたわけではない。理屈が変わつたわけではない。こんなものはただの現象に過ぎないという、それはそれで確信としてある。ただ、今はひとつの埒もない感覚が、消えるべき苦痛として心中にあるのである。

〔悲しいだけ〕

そして、感情の発露が、心情の吐露が、死の前にナンセンスなふるまいを求められている。「悲しいだけ」、その一言を超えて悲しさの具体的説明はなされない。藤枝は気付かされたであろう。妻の死に臨んで悲しさが漂白されていること

を。長年にわたる献身的な看病のなかで既に悲しさの中身に触れすぎていた。「悲しい」という言語が真に対象に触れたそのとき、長い時間の中で感情は蕩尽されていた。

私の小説の処女作は、結核療養所に入院している妻のもとへ營養物をリュックにつめて通う二十余年前の自分のことをそのままに書いた短編であったが、それから何年かたったとき友人の本多秋五が「彼の最後に近くなって書く小説は、たぶん最初のそれに戻るだろうという気がする」と何かに書いた。そのとき変な、疑わしいような気がしたことがあった。むしろ否定的に思った。

しかし今は偶然に自然にそうなった。本多の本意がどういうものであったのかは解らないままだが、今の私は死んで行った妻が可哀想でならず、理屈なし心が他に流れていかないことは確かである。

〔悲しいだけ〕

妻の死を詠った挽歌が、箱庭の創造と幻滅を経てふたたび妻の死へと閉じられる。死者の箱庭の上位に妻と藤枝が対面し、箱庭は入れ子構造となる。この入れ子の下位を想像することは果てしなく可能であるし、また上位を想像することも同じく可能である。「一家団欒」の死者たちは藤枝の求めがあれば応じて新たな箱庭をつくるであろうし、妻に網を打てばその瞬間に再び新たな装いの他者として妻は藤枝の眼前に

立つてであろう。入れ子の全容は藤枝とともに中から見ることができない。藤枝は生前の妻の望みに応えるため、大原美術館の敷地の一角に遺骨の一部を埋納しようとした。しかし職員に咎められて実現できず、思考はあらためて同じルートを循環する。

——「わたしはこのお墓の下に入るのはいやです」といつかここに立って妻が云った。妻はその瞬間に、私の過去にまつわりついている見識らぬ一族の幻影に怯えたのかも知れなかった。私の妻としてだけで自分の生を打ち切りたかったのかも知れない。それは尤もである。私は自分が二つに引き裂かれているような気がした。

——しかし私は、やはり私が死んだら私の骨壺に妻の残した骨の薄片を入れ、帯同してこの父母の待つ墓の下に入り、そして皆で仲好く暮らすつもりである。「前にはあんなことを云いましたが連れてきました」と頼めば、みんな喜んでくれると思う。後継者の私が娘二人を他家へやって家を絶やしてしまったのだから、私が行って永久に皆を世話し護らねばならない。

私がこれ以上過ちを繰返すことなしに生を終えて帰って行くのを父母が待っていてくれるにちがいないという妄想がどうしてもある。

〔悲しいだけ〕

そう、全ては自覚的な妄想である。この重層的な入れ子構造を貫く様々な悲しさに思いを馳せることは容易ではある。妻を死者としか見ることができなかったことも、自身の救済の根拠が幻想であることを突き付けられたことも。

しかしつき詰めれば、それら以上に妻の喪失という還元された事実だけが核となり悲しさを迫っている。妄想に対する妻の死という現実だけが、他者がかつて存在したであろう気配と残響が入れ子という閉鎖空間に満ち、喪失による避けえない悲しさが確かな関係性をもって挽歌となる。自分自身を死者へととぞらえることでたとえ他のどのような感情が生じようとも、また排されようとも、悲しさという感情だけは藤枝作品のなかで静かに特権的な地位を占めている。

#### 参考

- 『藤枝静男著作集第一巻』 講談社  
 藤枝静男 『悲しいだけ・欣求浄土』 講談社  
 藤枝静男 『田紳有楽・空気頭』 講談社  
 中村邦生編 『この愛のゆくえ』 岩波書店

(浜北区)

#### 「入選」

## 原田喬と俳誌「樵」

市川 敏

#### 原田喬の生い立ち

「地方には地方の文化がある。それは地方人の誇りだ。地方からどんなん発信していこう」これは、原田喬が俳誌「樵」を創刊した時の理念だ。このような考えで俳誌を創刊した原田喬の生涯と思想を見ていきたい。

一九一三(大正二)年父八郎、母なよの長男として福岡県小倉に生まれる。父は濱人の俳号を持つ「ホトトギス」第二回同人である。父の仕事の関係でその後、奈良、諏訪、沼津などを転居するが、本籍は浜名郡長上村(現在の浜松市東区原島町)である。一九九九年(平成十一)逝去。八十六年の生涯であった。

二十三歳ころから父濱人につき俳句を学ぶ。昭和十六年二十八歳の時満州に渡り、ハルピン商工会に勤務。昭和二十二年応召、終戦と共にソ連捕虜となる。そして昭和二十三年シベリアより帰還した。この体験は、その後の喬の生涯に大きな影響を与え、作品作りの上で、重要な核となっている。そ



ここで、シベリア抑留とは何だったのか、原田喬のシベリア体験が描かれている作品を通して、少しばかり考えてみたいと思う。

## シベリア抑留

まず、原田喬も体験したこのシベリア抑留とは何だったのか。世界大百科事典によると、「第二次大戦終結時にソ連軍に降伏・逮捕された日本軍人その他がシベリアで強制労働に従事させられたこと。その大部分は関東軍軍人で、これに樺太・千島、北朝鮮で武装解除された部隊が加わり、その数は日本政府推定で五十七万五〇〇〇余人とされる。(中略)ソ連は上記人員をシベリア、外蒙古、中央アジア、ヨーロッパ・ロシアと約一二〇〇カ所の捕虜収容所・監獄に収容、土木建築、鉄道建設、採炭・採鉱、生産工業に従事させた。」とある。シベリアに連行された日本人の数は、ソ連国防省の記録では、六十万九一七六人も記される。今日もなお、その正確な数は把握されていないのが実情である。抑留された日本人のうち、酷寒の異境の地で飢えと重労働の日々、望郷の思いを抱いたまま果てた人々の数は、七万人〜十万人とも言われている。

## シベリア三重苦

### ① 飢え

抑留者たちを苦しめたシベリア三重苦と呼ばれるのが、「飢

餓」「酷寒」「重労働」である。中でも飢餓こそが諸悪の根源であり、重労働と酷寒がこれに加重されて多大の犠牲者を生んだ。厚生省の『引き上げと援護三十年の歩み』は、ソ連領全域の食糧事情について「量、質共に甚だしく不足し、油気のないスープ、こうりゃん等雑穀のかゆ、馬鈴薯等が通常の主食で、ときに魚、肉、黒パン等が与えられるにとどまり、健康を維持する最低限のカロリー摂取さえ困難な状況であった」としている。ソ連の給食は絶対的に量が不足していただけではなく、質的にも日本人にふさわしいものではなかった。米と味噌汁に替えて、なれない雑穀のかゆ、薄い塩味のスープ、黒パン。これらは、下痢、頻尿等の病気を出現させ、栄養失調を引き起こした。

原田喬にも、

生くるは飢うることあかあかとベチカ燃ゆ

雪に垂らす血便あわれ生きてあり

の句（『落葉松』）がある。

### ② 酷寒

シベリアはカザフスタンとモンゴルの北部を含めて、かつて南北の樺太の境界線であった北緯五十度線より北側にすっぽり収まる高緯度地帯である。しかも大陸性気候のため非常に寒い。寒く長い冬と短く暑い夏。春と秋はごく短い。真冬にはマイナス四十度から五十度にも下がる。さらに、マイナス七十度の中で抑留されたという記録もある。全く日本人には想像を絶する寒さだ。日本で最も寒い旭川市周辺でも、最

低気温はマイナス十五〜二十度くらいで、最低気温の極値はマイナス三十度ほどだ。この並外れた寒さが、シベリア抑留の悲劇を増幅させ多くの死者を出した。

凍死体運ぶ力もなくなりぬ 『落葉松』  
だからこそ、春を迎えた喜びは大きい。

雀鳥われらみな生き解氷期

羽衣のそれより淡し春の雲 『落葉松』

### ③重労働

ソ連が抑留者に課した労働は、帰還者の手記や日本政府の資料によると次のようなものだった。伐採と木材運搬。材木工場作業。収容所や学校、住宅などの建設。水道管理設と管理。港、棧橋構築。農作業。電柱立て、電線張り。炭鉱での採掘や運搬。鉄道の路盤造りとレールの敷設。造船所作業。道路造りと整備。発電所建設。炊事。医務補助。縫製。特に採掘や伐採は辛い重労働だった。

原田喬は、その伐採に従事した。場所は、クラスノヤルスクからエニセー川を北へ下った北緯六十度近いエニセースクの付近の山。町から三百数十キロは離れていた。『続曳馬野雑記』に「昭和二十年十二月二十五日」と題して次のように記す。

「午後三時頃作業が終了した。私は整列のとき立てなかつた。立ったのかもしれないが歩けなかつた。皆が歩き出した。私はその列を追えなかつた。そして俯せのまま倒れた。寒さも痛さももう感じなかつた。ただ茫々たる綿のよ

うな雪が網膜に映っていた。後は全く知らない。(中略)

バラックへ着くと丁たちは私を裸にして全身を摩擦した。薬は何もなかつた。人間の両手に力をこめて死のうとして人間の体をただ摩擦し、声の限りにその名を呼びながら血と魂をこの世につなげようとしたのである。何回も何回もそれをくり返した。しかし私の正気は戻らなかつた。皆があきらめかけたとき、K兵長が一人あきらめなかつた。この人は新京以来何かと私をかばってくれた。「原田を死なせるわけにはゆかない」と言つてK兵長は私の体へあらゆる処置を加えつづけた。こうして私は息をふきかえした。

これは昭和二十年十二月二十五日のことである。大正天皇の亡くなった天皇祭の日である。私は三十二歳だった。

私と同じ状態に陥つた幾多の戦友のほとんどが死んだのに私は死ななかつた。私は一番弱い兵隊の一人で、一番早く倒れた。それ故にこそ死ななかつたのかもしれない。あのときから私の強運が始まつた。」

また、『落葉松』には次の句もある。

オーロラ見たりと生きて告ぐべき春いつぞ

倒れ伏すや雪茫として綿のごとし 喬

昭和二十年から翌年の冬は、捕虜たちにとってシベリアでの最初の冬、一番多くの死者が出たという。その数四万人余。喬もこの年の十二月二十五日に倒れた。沢山の死者を出して部隊は、翌年五月エニセースクを経てクラスノヤルスクへ帰

つてきた。喬は病弱のため作業免除となり、医療助手として病院勤務となる。語学が得意だったこともあるようだ。帰国までの二年間を、クラスノヤルスクで過ごす。

## 生きる力

シベリアで倒れた多くの兵士たち。その中には豊かな才能を持っていた若者たちも多くいた。その一方で、シベリアから生還したもののたちの中には、芸能や文学、政治など、それぞれの分野で歴史に名を残す仕事をした者がいる。

例えば彫刻家佐藤忠良。二年間のシベリア抑留後、一九四八年夏に帰国。その後、彫刻の世界で残した業績はよく知られる。他に、絵画の香月泰男もシベリア帰還者だ。

また、作曲家の吉田正もそうだ。満州、シベリアでの六年を経て昭和二十三年に帰国した。故郷に住む家族六人全員が空襲で死亡。戦友、家族、多くの死を背負い吉田正の戦後は始まった。「異国の丘」でデビュー。戦後を代表する名曲「いつでも夢を」他数多くの曲を作曲。明るく希望に満ちた歌は戦後の混乱期から高度経済成長期へと向かう日本を励まし続けた。国民栄誉賞も受賞している。

この戦争は、大陸、満州の引き揚げ者にも多くの影響を与えている。例えば、昨年十二月に亡くなった作詞家・作家のなかにし礼。七歳で終戦、その後一年二ヶ月の避難行と避難民生活を経て命からがら帰国した。なかにしは、横浜の空襲で焼け出され浮浪児となった経験を持つ美空ひばりにも自分

の精神的分身を感じると言っている。(『芸能の不思議な力』) 彼にとつてこの体験が、その後の人生の原点になっている。以上のようにシベリア体験をはじめとする戦争体験は、多くの人のその後の人生に重要な影響を与えている。原田喬の場合もそうだ。

喬が体験したシベリア体験、他人にどんなに語っても理解してもらえないこの体験を、生涯俳句を作るときの核として生き続けた。つまり、この体験を俳句を作るときの切り口として、生涯かけての自分のテーマにしてきたのだ。

## 楸邨を知る

喬は歴史を勉強し、詩を読み、短歌を勉強する。しかし、早くから父親の原田濱人によつて覚えた俳句を楸邨に就いて勉強することになる。虚子、秋桜子、誓子らとともに、人間探究派を勉強する。原田喬は「楸邨先生との三十六年」(『続曳馬野雑記』)の中で次のように書いている。

「草田男は、近代的知的すぎた。その裸の姿がすきになれなかった。波郷は聡明すぎた。この人には若くして人生の結論が見えていた。楸邨はちがっていた。自らの句集に『野哭』と名付けた楸邨に私はもつともひかれた。私の戦後の野哭の時代も続いていた。自身の楸邨が惻々と訴えてくるものが私にはよく分かった。こうして楸邨を師と選び三十六年経った。(百代の過客しんがり猫の子も)の猫の子の後ろにつきながら楸邨を見失うまいとして歩いて

きた。」

この文章のサブタイトルに「楸邨におけるあづまみちのく  
的精神」とある。これは、原田喬の目を通して楸邨のルーッ  
スを捉えた文章になっている。

楸邨の父は酒田出身、母は金沢出身、二十一歳で東京に落  
ち着くまですべてみちのくを転々としている。そして楸邨が  
求めたものは、京を中心とした王朝的なものではなく、言っ  
てみれば反逆の精神、そこにあづまの精神がある。さらにそ  
れを遡れば、アテルイに代表されるような原始人の生き方に  
ルーッスが繋がっていく、このことに原田喬は共鳴している。  
そして楸邨の生き方をさらに延長して考えるならば、シルク  
ロードの旅に繋がる。原田喬は、楸邨の中に自分のシベリア  
体験をダブらせる形で作品作りの核としていくことで、楸邨  
に学ぶことがたくさんあるということに気づいていたのだろ  
う。楸邨の生き方を一言で言ったならば、高浜虚子が言った  
「花鳥諷詠」的な生き方ではないと思われる。

結論を先に言うと、原田喬が生涯をかけてやろうとしたこ  
とは、この虚子的な「花鳥諷詠」と、一見逆に見える楸邨的  
なものを、自分の生身の体を実験台のようにして生涯をかけ  
て一つにしようとしたのではないかということだ。いわゆる  
弁証法の止揚（アウフヘーベン）という考え方。矛盾と統一  
の法則ともいい、正（テーゼ）と反（アンチテーゼ）を統合  
し、合（ジンテーゼ）とするというもの。喬は、こういう考  
え方を体験的に学んだには違いないが、一体どこで学んだの

だろうか。

戦後の俳句史を見ると、昭和二十一年に、桑原武夫の「俳  
句第二芸術論」がある。彼は一つの実験をした。それは、虚  
子や草城という有名俳人の句と、全く素人の作品を無記名で  
並べておいて、有名な俳人の句を当てるといふもの。ところ  
が、何人やつてもほとんど当たらないものはいなかった。そこで  
導いた結論が、芸術において作品そのものから作者が判断で  
きないようなものは、近代芸術ではない。従って俳句は、第  
二芸術だというものだ。

これに対して俳人たちは、様々な反論を唱えた。その代表  
的なものに、山口誓子の「根源俳句論」がある。俳句は短い  
けれども、物事の根源というものを一番端的に表現できる文  
学だという考え方だ。様々な論がある中で、私が一番効果的  
だと思ふものに、金子兜太の「造形俳句論」がある。たとえ  
ば、コップを二面から見ると違うように、物事を二つの意識  
によってとらえるというもの。一つは、社会的に表に出る意  
識、もう一つは、根源的などろどろした裏の意識。原田喬は、  
この考え方を密かに勉強していたのではないかと思われる。  
つまり、楸邨的なものをA、花鳥諷詠的なものをBとして考  
えると次のようになる。

A 「時間的な社会的な意識」（自覚的に形成されたもの）  
B 「非時間的な空間的な意識」（うぶな根源的な混沌たる  
もの）

喬がやろうとしたのは、感覚的な着想を契機に、AとBと

を「創る自分」が一句の言葉に仕上げるということではないかということだ。そこで、実際の作品をこの二面に分類してみよう。

○喬俳句における楸邨的な精神風土への探求としてのA面

楸邨を探しに出れば天の川  
猫の子を残し楸邨逝き給ふ

山河茫茫鮫鯨よ楸邨よ

優曇華や乱待つ心失はじ

気の狂ふまで翡翠を追うてみよ

うらやましきまでにぼるぼる葱坊主

以上『長流』

○喬俳句における虚子のな土着風土への発掘としてのB面

鬼やんま虚子のこしし眼はも『伏流』

虚子忌来ぬ棒の如くに虚子があて

虚子一人と言いひしかの虚子天の川

菜の花や七十九年とはこれか

菜の花や一茶の道はそこからぬ

冬瓜の誰のものでもなくなりぬ

朴落葉朴より高きところより

以上『長流』

Aの意識を象徴するものとして「葱坊主」、Bの意識を代表するものとして「菜の花」がある。「葱坊主」は、きわめて愚かなもの、しかしその中に種というエネルギーが固まっている。この葱坊主に代表される愚かなるものを生きたるエネ

ルギーに変えていこうとする楸邨的なもの。一方、一面の「菜の花」の中に入ると無限の優しさを感じる。その菜の花に代表される無限の優しさとしての虚子のなもの。原田喬は、この二つのものをきわめて巧みに俳句にしている。金子兜太が意識の二重構造として「俳句造形論」の中で言っているように、言葉では言っていない。原田喬がやったことは理屈ではない。それが生涯最後の句

流水やわが音楽はその中よりに結実する。

原田喬は、楸邨、虚子の残した一番いいエキスのようなものを、シベリア体験というものを背景にしてまとめ上げた。

このような作業は、戦後の俳句史を見ても、誰もやってないと思われる。このような仕事を、中央ではなくこの遠州という一地方でやったのが原田喬という俳人だったということができなのではないだろうか。

### 原田喬と古事記の世界

喬の句集を読んでいると、『古事記』に材を取った作品にしばしば出会う。

発心や朝日たばしる蘆の角

はるかなる古事記霞切鳴いてゐる

喬は、葦原を見るのが好きだった。場所もいろいろで、浜名湖周辺の葦原、遠州の大小の川の葦原、遠くは満州の湿原の葦も胸中にはあったようだ。喬の葦の句を見ると、早春の

『伏流』

『長流』

葦の角から冬枯れの葦まで、四季折々の葦を見ていたことが分かる。葦原は古代の人々にとって、自然の豊かさを原始的に象徴する生命力あふれる空間だった。

あきらめて案山子とならば何見えん

『伏流』

葦二度鳴いて山二度暮れぬ

『灘』

古事記の中で、葦や案山子が出てくるのは、大国主が出雲の国造りをする場面である。海の内こうからやつてきたスクナビコナが何者かを誰も知らなかったとき、谷蟻（ヒキガエル）が、崩彦（案山子）こそ知っていると云う。「あきらめて」の句は、まさに古事記に出てくる案山子の本質を言い当てている。雨の日も、風の日もただ立ちつくす案山子、無欲で虚心にただ立っているからこそ大切なものが見えてくるのだろう。古事記の中に案山子と並んで描かれ、喬句集にも登場する藁蛙。この悠然と構えた、動作の鈍い、愛嬌のある、醜い動物には、己の運命を堪え忍んでいる勇者にして賢者の面影がある。土に近く、低い存在、動かない存在だからこそ物事の本質が分かるのだ。「椎」の俳句の理念に、〈素朴・単純・平明・土に近くあれ〉がある。変化が激しく、表面的な華やかさばかりが目立つ今の世の中において、土に近くあって、じっくりと物事の本質を見ろ、人間を磨き、生活感・存在感のある句を作つてゆけ。そんな喬の声が聞こえてくるようだ。

倭建の火は見えざるや初山河

『長流』

ヤマトタケルは、第十二代景行天皇の皇子。その物語は、父帝に疎まれて故郷を追われた皇子の遍歴の物語になつてい

る。戦いとロマンの物語は、文字通り「ヤマトの国の勇士」として悲劇の英雄ヤマトタケルを描いている。「倭建の火」とは、東征の途中で野火の難に遭い、草薙の剣で火を退けたあの場面のものであろう。

炎天の三輪山に入る鳥一つ

『伏流』

崇神天皇陵北面の笹子かな

『灘』

喬は奈良へはよく旅行した。この二句もそのとき詠んだ句であろう。ともに背景にある三輪山とそれにまつわる神話が思い出される。

大和平野の東南に位置する大神神社は、東にそびえる三輪山そのものを今も神体とし、原初崇拜の形をとどめている。ここにはふつうの神社様式にみられる神殿（神体）がない。富士山や御嶽山の例でみられるように、古くは山自体が神であった。それほどに三輪山は深い由緒をもち、奈良盆地を巡る山々の中でもひときわ形の整った山である。

二句目にある崇神天皇は、第十代の天皇である。百六十歳で亡くなり、御陵は山辺の道の丘にあると記され、いくつかの伝説もあるこの天皇は歴史的にも実在したと考えられる。炎天の三輪山に入る一羽の鳥が、崇神天皇陵北面の笹子が、はるかな古事記の世界へ誘う。

内容的にも古事記は神話が三分の一を占めるのに対し、日本書紀では神話の割合は全体から見れば非常に少ない。しかも古事記にある出雲神話の話は、日本書紀にはほとんど出てこない。これに関連して古代文学者の三浦佑之は、「古事記

は敗れた側の歴史を語る。勝者（天皇側）の日本書紀とは成り立ちが違う」と『出雲神話論』（講談社）で述べている。

この言葉でふと芭蕉のことを思い出した。奥州衣川で非業の死を遂げた義経主従を偲び〈夏草や兵どもが夢の跡〉と詠んだ。また、芭蕉を埋葬した義仲寺には門人又玄の〈木曾殿と背中合わせの寒さかな〉の碑がある。ともに、敗者の義経や義仲に思いを馳せている。考えてみれば、芭蕉の祖先は戦国時代末期天正の乱で織田信長から徹底的に殲滅されわずかに残った敗者の子孫である。自ずと敗者に心寄せざるを得ない。

以上のように見てくると、『古事記』は楸邨の「あづまみちのく的精神」に通じるものがあるのではないだろうか。尾形仿も「楸邨俳句の故郷」という文章の中で次のように述べている。

「楸邨の魅力は近代人の失った健康な原始的感覚を働かせ、自身の血の基底にひそむ遠い記憶を追求する点にある。それは王城の近畿政権に反逆した、関東・みちのくの風土に探る『あづまの精神』だ。アテルイ（悪路王）の末裔としての自覚を持ちながら。」

『古事記』の世界は混沌としている。カオスといってもいい。しかし、混沌の中にはすさまじいエネルギーが秘められている。カオスを抜け出したときに光が見つかる事も多い。世界中が新型コロナウイルス禍にある今、まさに混沌の中にあるといつていい状況だ。大正二年生まれの原田喬が生きた八十六年は、それとは比べものにならないほどの混沌の中

にあったともいえる。

いずれにせよ原田喬が『古事記』に親しんだのは、カオスの世界に入っていく中で、その膨大なエネルギーとその先にある光を求めたからではなからうか。

### 原田喬が求めたもの

「椎」創刊時の句に、

発心や朝日たばしる蘆の角 喬

がある。ほとぼしる朝日を受けた蘆の角に、「椎」創刊への思いが込められている。

椎はブナ科の常緑広葉樹。『古事記』にも椎は出てくる。椎の森は、太古より祖先の生きた場所であり、信仰の場所であった。椎の花は六月頃開花。生物多様性が言われる中、緑のダムとしての役割も重要だ。こうした思いも託して命名された誌名「椎」である。

「椎創刊のことば」の中で喬は次のように述べている。

私たちは地方人としての素朴な自然観、人間観を基にしながら、次の三点を目標に進みます。

感動の核心をつかむこと、表現を徹底的に追いつめること、絶えず学んで心を磨くこと、この三つです。心を打ってきたものの中心をつかみそれに簡潔適切な表現を与えることです。そして、何よりも俳句を作る前の混じりけのない心が大切だと言わねばなりません。

原田喬が求めたもの、「地方人としての誇りを持ち、地方

から文化を発信していく」という理念。句集『伏流』には、  
 枸杞の実を噛み東京を憎みをり

の句がある。東京を嫌い憎む、いわゆる「反東京」的態度だ。  
 しかしこれは極端な表現で、「地方文化」を大切にしたいと  
 という気持ちの表れであり、いい意味での「風土性」を推し進  
 めるための反動ともいえる。

コロナ禍で東京一極集中の方向性に変化が出てきていると  
 言われる。テレワークで東京からの流出超過に転じた人口、  
 「都会から地方へ」とも報じられる。こうした今日の情勢の  
 中で、原田喬が唱えた「地方からの文化の発信」という考え  
 方はますます重要になってくるのではないだろうか。

#### 参考文献

- 「椎」創刊号／五五〇号  
 『原田喬全句集』ふらんす堂  
 原田喬『曳馬野雜記』ふらんす堂  
 原田喬『統曳馬野雜記』ふらんす堂  
 長勢了治『シベリア抑留』新潮選書  
 西郷信綱『古事記注釈』第一～四巻  
 三浦佑之『出雲神話論』講談社  
 なかにし礼『芸能の不思議な力』毎日新聞出版社  
 桑原武夫『第二芸術』講談社学術文庫  
 中澤康人『けやき春秋』信濃けやき文庫

(浜北区)

#### 「入選」

## 岸田劉生「麗子微笑」蒐集物語 パトロン浜松山本貞次郎

伊東政好

はじめに

「麗子微笑（青果持てる）」が岸田劉生によって完成された  
 のは、大正十年十月十五日であった。なんと今年一〇〇周年  
 を迎え、作品が重要文化財に指定されてから五十周年を迎え  
 るという記念すべき年となった。

麗子像として岸田劉生は、油彩二十一点水彩二十二点デッ  
 サン十四点テンペラ一点計五十八点かいている。麗子微笑は  
 最も傑作とされ重要文化財に指定された。浜松富塚の山本貞  
 次郎は岸田劉生のパトロンとして二十三点を蒐集している。  
 貞次郎旧蔵の麗子像は「麗子微笑（青果持てる）」「人形持て  
 る麗子（毛糸肩掛して）」「子供の居るスケッチ」（未確定）「揆  
 撽する麗子（おぢぎする麗子）」（未見）であった。

貞次郎が麗子微笑をどのように入手したのか、そのあと所



蔵者がどのようにかわっていったか資料など判明している。貞次郎が亡くなっていかに貞次郎の岸田劉生の絵画に関心をもち積極的に蒐集したことに対して、浜松が生んだコレクターとして忘れることなきよう後世に伝えるべきと思う。

### 一、岸田劉生とは

劉生は明治二十四年六月二十三日に父岸田吟香・母勝子の四男として東京銀座で生まれる。父は明治の先覚者でヘボンの「和英語林集成」の編纂を助け、最初の新聞である「海外新聞」を創刊している。目薬など薬局も経営していた。明治四十一年十七才で黒田清輝に師事する。明治四十三年十月文部省美術展覧会二点入選。明治四十四年二十才の時雑誌「白樺」の同人。近代美術の洗礼を受ける。明治四十五年初めて個展を開催。ヴァン・ゴッホの影響を受ける。大正二年自画像の連作描く。大正四年草土社結成自然風景の絵画描く。大正七年二十七才の時麗子など油絵描きはじめる。大正九年二十九才東洋画への関心生まれる。大正十二年三十二才京都移住東洋古美術の鑑賞と蒐集日本画描く。昭和四年三十八才満州の帰路山口県徳山で病死する。

劉生は「在るということの不思議な神秘」と「内なる美」「古格をそなえた厳格な写生」を信条としていた。いまや日本近代美術史において最も高い評価を受けている画家のひとつである。

### 二、山本貞次郎の蒐集

山本貞次郎は戸籍では父源吉・母はんの長男として浜松富

塚村馬生で生まれる。家業は木綿晒し工場を経営、段子川の水を使って真つ白に仕立てた製品を浜松の日本形染に納入していた。

貞次郎は大正八年から十一年までの四年間に集中して岸田劉生の作品蒐集していた。コレクションに費した金額は二六七四円になる。大正十年前後は大正版（ガチャマン）景気であった。さて「麗子微笑（青果持てる）」作品はどのように蒐集したのか。大正十年十一月十二日に神田小川町の流逸荘で「岸田劉生作品展覧会」で「麗子微笑（青果持てる）」を見る。この作品が欲しくて浜松に帰って劉生に手紙で購入を申し込む。売価八〇〇円であった。

劉生と貞次郎との出会いは大正四年に伊豆に旅行した時、折しも伊豆を写生中の劉生と知り合ったことが始端である。それから貞次郎は劉生の作品を次々蒐集していった。

### 三、岸田劉生のパトロン

劉生の最初のパトロンは大阪船場の羅紗問屋の経営者芝川昭吉で劉生の作品五十点を蒐集していた。その次が山本貞次郎で二十三点蒐集している。そのあと鎌倉の住友財閥の住友寛一、横浜の豪商原善一郎、西郷家の健雄一族なのであった。画家に対してのパトロンは多くの人物が居た。貞次郎三十二才、劉生が三十八才という若さで他界したことは残念である。

### 四、「麗子微笑」の流転

貞次郎が亡くなってからの所蔵作品はとみ未亡人（昭和五年没）の甥越川七郎（鍛冶町）に移され昭和初期には松本長

十郎（和田町）の手中となる。さらに東京の後藤真太郎に引継がれた「麗子微笑」だけ松本長十郎のもとにおかれた。戦後になって、松本長十郎と竹村啓介（市野町）が共同経営する浜松駅前の古書店「松竹山房」で展示販売されていた。なんと売価三十万円であった。作家であり眼科医師の藤枝静男も見ていたが蒐集できなかった。そのあと「麗子微笑」は東京国立博物館に購入され、現在所蔵されている。

二十三点もの作品が現在浜松に残されていたらと思うと残念である。現在、浜松市美術館が所蔵している岸田劉生作「草と赤土の道」は東京代々木の道を描いたもので、草土社結成の命名となる。一九一五年六月制作（大正六年）一九七三年



重要文化財  
「麗子微笑（青果持てる）」  
一九二一年（大正十）十月十五日  
油彩・キャンバス  
四四・二×三六・四  
東京国立博物館

所蔵となる。

参考文献

寺田行健『岸田劉生のコレクター』浜松の山本貞次郎の研究

究』平成二十一年

金原宏行『劉生と浜松』昭和五十一年

東珠樹『岸田劉生とその周辺』東出版 昭和四十九年

富山秀男『岸田劉生』岩波新書 昭和六十三年

岸田麗子『父岸田劉生』中央公論社愛蔵版 令和三年

菅沼五十一『遠州文学散歩』浜名湖出版 昭和五十七年

『劉生絵日記 山本貞次郎』

蔵屋美香『もっと知りたい岸田劉生 生涯と作品』東京美術

令和元年

（中区）

貞次郎 劉生



1919年（大正八年）5月8日岸田劉生来浜の折  
山本貞次郎邸にて

評論選評

中西美沙子

ある詩人の本を読んでいて、「文章を構成するあらゆる原  
子の順序を一新する」ということばに目を奪われました。

この箴言のような文章はニーチェのものです。そこから窺  
えるのは、「既成概念を壊す」ということでしょうか。しか  
し細心に読み込んでみると、「既成概念を壊す」ことは、「新  
たな既成概念を生む」ということをニーチェがいつているよ  
うにも思えるのです。

言葉を換えれば、「自分の文章に拘泥するのは危険だ」と。  
その危険性は文芸評論にも当てはまります。

文芸評論は書くべき素材を解体するところから始まりま  
す。素材を読み解き、そこにある固有なものを探し、再構築  
するのが評論だといえます。

平易に言えば「内なる思い」と「外なる思い」を重ねたと  
きに起こる「微かな声」、それを聴くことが、論ずることの  
意味ではないでしょうか。

私たちは大凡、表現を為すとき、「自分の表現」に拘泥し  
がちです。それは自己の目に捉われるということ、他者の  
目としての自分を無意識にスルーしてしまう傾向があるとい  
うことです。その事態を、表現の「自己撞着」といつてもよ  
いでしょう。

それはニーチェのいう「原子の順序を一新する」とは正反  
対なものです。

今回応募された作品は、浜松市に関わる小説家、俳人、文  
化人についてのものでした。何時もいつていることですが、  
評論を為すということは、忍耐そのものだといえます。言葉  
が軽い時代に於いてなお、文章を綴る方たちに、改めてリス  
ペクトの念を捧げたいと思います。

「藤枝静男と死者の箱庭」

藤枝静男の文学を普遍化するキーワードとして筆者は、「死  
者の箱庭」という概念を置きました。「死者の箱庭」から筆  
者が紡ぎだしているのは、「家族」と、その「死」です。幾  
つかの藤枝の小説を引用して、筆者は彼の文学性を俯瞰しな  
がら分析しています。筆者のいう「死者の箱庭」とは、藤枝  
が終生、死者とその家族を手元に置きたいという欲望の象徴  
だと推測します。

藤枝静男は師である志賀直哉に倣ってか、「見えたこと」  
と「感じたこと」を率直に表現しています。筆者は藤枝の作  
品から「死」と「家族の崩壊」、換言すれば「死の予兆」が  
もたらす藤枝の文学性を論じています。その論は成功してい  
るのですが、新しい視野とはいえないかも知れません。しか  
し筆者が藤枝文学の中にある亀裂を見出した処には、新鮮さ  
と読み解く力量を受け止めました。

「死者の箱庭」が必然的に壊れるところを、藤枝は心の中

で気づきながら、躊躇している。そこに筆者は鋭く斬りこんでいます。論じられ語られてきたものを読み、それをさらに論ずるのは困難なものです。が、「死者の箱庭」の「箱庭」が、藤枝の自己撞着と幻想だったことを論じた筆者に敬意を持ちました。文体も読者を引き込む魅力を持っており、さらに磨かれることを期待します。

小説の引用はやや長いと感じました。重要な部分に焦点を絞って論じたほうが、それに類する他の小説と重ねることができ、論が深まるのではないのでしょうか。

### 「原田喬と俳誌『樵』」

俳人原田喬の俳句に対する矜持と真摯さが、筆者の論から窺えました。それは原田のシベリア抑留と彼が地方で俳句を意識して為したことの意味です。筆者の言から、原田喬の人生に触れることができ、また浜松に於ける俳句文化が、とても深いものだと改めて知りました。

筆者は、俳句に傾倒していて「俳論」の知識もあり、読みながら目が開かれるところが多々ありました。

しかし論が多岐に渡り、テーマである原田喬のシベリア抑留という過酷な状況での句作と、彼が地方で俳句を為した意味を弱めた感が否めません。

死が日常であったシベリアで原田喬は、俳句を通して過酷な現実をどのように描いていたか、そこを深める必要があると思います。シベリアをモチーフにした喬の俳句が数句あり

ますが、もう少し句を増やして、原田喬の句に対する心根を論じると、「俳句」の意味と力が見えてくるのではないのでしょうか。

次に重要なのは、なぜ喬が東京を嫌い地方で句作に励んだのか、その心模様を詳細に論じられると、喬が地方俳誌「樵」にかけた思いが明確になったと思われまます。

それはシベリア体験が為したものなのか、また地方は単なる地方にあらざして、垂直に文化を穿つ場所としての考えがあったからなのか。さまざまに考えさせられました。それは筆者の文章から原田喬への深い共感が窺えるからです。

### 「岸田劉生『麗子微笑』蒐集物語 パトロン浜松山本貞次郎」

絵画や彫刻などに惹かれる人とは、その対象と自己の感性とが呼応、共振することをいうのでしょうか。

筆者は浜松の文化人の一人であった山本貞次郎の岸田劉生コレクションと、劉生との関わりを丁寧に掘り起こしています。貞次郎が劉生の作品を二十三点も蒐集していたことに、驚きを禁じえませんでした。「麗子微笑」「人形持てる麗子」は貞次郎の劉生コレクションの中でも特筆するものだったことが、筆者の記述から窺えます。そこからかつての浜松文化人の感性の伸びやかさと熱意を新たに感じました。今の浜松は、「文化不毛の地」と揶揄されることがよくあります。筆者は貞次郎の死によって、流転の憂き目にあつた「麗子微笑」を守ろうとした人々も描いています。筆者の意図は、浜松文

化の古層に眠っているものを、揺り動かしたいということと推測しました。

しかし「評論」として考えたとき、この記述の方法が有効だとは思えません。それは山本貞次郎がテーマなのか浜松の文化を問うのか、焦点が明確に見えなかつたからです。必要な資料を集め記すことと併せて、イマジネーションを加える必要があると考えます。貞次郎や劉生が生きた大正デモクラシーの時代や世相、浜松の地誌や人物などを絡めて書けば、筆者の思いに繋がると思えるのです。しかし筆者の論から、浜松人としての貞次郎の熱意が、今を生きる私たちの文化のあり方を問い、示唆していると受け取りました。

### 『GOTOOLABEL』『GOTOOITTO』についての論評

新型コロナウイルスの蔓延に拠って、様々な業種の方々が経済的な逼迫を受けました。筆者は、宿泊と飲食業が被った経済的な問題点と公的な支援に対して細やかな分析をします。現状と対策については、理解が及びましたが、筆者の評論は「資料事実」の肯定と批判でした。そこから論を為すことが、評論だと考えます。

コロナに拠って宿泊業と飲食業の形は大きく変容するといえます。かつての経済のあり方が良いのか、コロナによって被った人間の精神性等を、「資料事実」と重ねて論じてみてはどうでしょうか。

随筆

「市民文芸賞」

怒ってくれる人

別所綾子

仕事で取引先とやり取りをしていて、それってどうなの？と思うことがあった。相手の言い分もわかるし、間違っていることではない。納得したつもりでも、でも、どうにも喉にトゲが刺さったような、ザラザラとした気持ちが残る。ひたすら忘れようとしていたときのこと。

顧問税理士と話す機会があり、その話題になった。すると間髪入れず、「そんな寝言みたいなこと、言ってきたのか！」と、なかなかの剣幕で言った。半分冗談、半分本気で。

うれしかった。

いつも毒舌な、この税理士ならではの一言が、ことのほか沁みた。

そうだ私、本当は怒りたかったんだ。押さえていた感情にハツとした。

事情を知る人が、わかりやすく怒ってくれると救われる。それぞれ、取引先に言うわけでもないし、事態が変わるわけでもない。そんなことはこの際どうでもいい。それよりも、「気が済む」という着地点にもってこられた、この効果は侮れない。

私は、「怒らないこと」がいいことだと、思い過ぎていたのかもしれない。本

当は、怒ったり笑ったりしながら築いてくのが信頼関係なのに。しかも、怒りを共有したときの方が、喜びを共有したときよりもずっと距離が縮まるのに。

怒りこそ、誰かに共感してもらえると、後を引かないことが多い。

現に私は、モヤモヤしていた気持ちはどこかへ行き、さして怒ってはいない自分がいる。

(中区)

## 随筆

〔市民文芸賞〕

# 最期の桜

中津川久子

趣味の文芸で、気の合うKくんという同級生がいた。もっぱら、新聞の川柳や俳句の欄に投句するという地味な楽しみだ。

「あっ、Kの川柳が載ってる。すごい、三席とは」

当時の安倍政権を皮肉ったものだが、実的に的を得ている。さっそく電話を入れる。

「おめでとう、見たよ。上位に入ったね」  
「あー、たまたまだよ」

私のはしゃぎように対して、いつも素っ気ない。

次第に、私も影響されて投句を始め

た。ぼつぼつと採られるようになって大いに励みになった。

「やったじゃん。俺、今回は負けたよ、焦点がいまいちだったかも」

「次はいっしょに上位へ入ろうぜ」

どっちが男だか女だか分からないような口調で発破をかける。

そんな折、こんどは私が、『浜松市民文芸誌』への投稿をすすめた。私にとつて、市民文芸は人生の伴侶といっても過言ではない。彼はさっそく応えた。なんと、デビュー作にして二部門で入選を決めたのである。気を良くした彼は、さらに磨きをかけた。私も負けじと踏ん張

る。まさに、ゴール寸前の走者のようだ。

平成三十年、ついに市民文芸賞を手に入れたのだった。部門は違えど、いっしょに受賞できた喜びはひとしおだ。会場に彼を見つけると、人目もはばからずツーショットに収めたものだ。

令和二年暮れ、Kから半年ぶりに電話がきた。

「俺、体調くずして、いま、一時退院ですよ。見つけてとこさ」

思ってもみなかったことに仰天する。話し方は変わっていないように思えたので、ずばずばぶつけていく。

「それで、後遺症でも」

「実は倒れる前に脱輪してさ、その記憶があいまいだったので脳検査を受けることになってね」

「怖ーっ、脱輪？ 記憶が無い？」

どうりで、ここしばらく新聞に見かけなかったはずだ。

「さいごの桜を見に行こう」

彼は思いきったように口にした。

「えっ何、さいごって、やだー」

桜を詠むのが得意な彼のこと、吟行へ

の誘いだとすぐに分かった。だが私は、  
 こともあるように高笑いをして受話器を置  
 いてしまったのだ。

その電話からわずか一カ月。一月下  
 旬、Kの訃報を知った。美容院をやっ  
 ている同級生からだった。

「えーっ、うそー、えーっ」

私はただただ絶叫するばかり。なん  
 も、彼のお姉さんの行きつけの店ら  
 し、私たちが良きライバル同士である  
 ことを常々話していたようだ。

「新聞には載せないと言っていたし、あ  
 なたには、ぜひ礼を言いたい口ぶりだ  
 ったので何としても報らせなくては思  
 ってね」

とのことであつた。

翌日、通夜に急いだ。葬儀場の入口の  
 案内板に書かれているKの名前が飛び込  
 んできた。容易に受け入れられない。ま  
 るで夢を見ているようだ。息をととのえ  
 て、まず喪主の奥さんに、そしてお姉さ  
 んを教えてもらい声をかけた。

「あー、よく来てくれたわね。いい友だ

ちでいてくれてありがとう」

「とんでもございません、良きライバル  
 でした」

脳梗塞と聞いていると言うと、

「ほんとに脳腫瘍なの。梗塞と言ってい  
 たのは、Kが自らに暗示をかけていた  
 の、怖さのあまりかねえ」

お姉さんは溢れる涙を拭こうともせず  
 続けた。

「本人は分かっていたのよ、腫瘍のこと  
 ……」

私は彼女の手を握りしめるしかなか  
 った。

そうだったのか。あの電話の切り際、  
 まだ何か口ごもっていたのが気になっ  
 っていたのだ。さいごの桜は、最期の意味だ  
 ったのか。事実を明かしたいのに明かせ  
 られなかった彼の心中は、いくばかりで  
 あつただろうか。

恐る恐る柩に進み寄る。穏やかな顔だ。

「おっ、中津川、ちようどいいところへ  
 来てくれた。これ来月の旬だけど投函し  
 といてくれないか」

言い終わると、また忙しく原稿に向か

った。

最期の桜は叶わなかったけれど、古希  
 に咲いた「浜松市民文芸賞」は、今も色  
 褪せることはない。

合掌

(南区)



## 下田の鴉

井上 盛

時計は5時を過ぎてゐる「しまつた！」下田駅前のホテルを跳び出した。波止場の遊漁船龍正丸めざし駆けた、かなりの距離だ、夜が白み始めている。前夜フロントに明け方4時に声掛けを頼んで寝たのが失敗だった。

走る走る、彼方に龍正丸の白い船体が見えてきた。エンジン音が聞こえる、やばいぞこれは、走る走るオーイ叫び手を振るが息が上つて声にならない、声が届く距離ではないのに叫ばずにおれない。船長らしい人影が舳(ちや)綱を解いている、アア駄目か、船体がゆっくり動きはじめは港を出て行った。スクリューの白い泡を残して、オレの頭の中も白い泡だらけだ。

繫留止めの傍に大型のクーラボックスが一個残されていた。オレの青色のどっかいボックスだ。前夜の8時家を出て富士見台駅から池袋山手線内廻りで東京駅、新幹線で熱海、伊豆急の最終で下田駅着。駅前のホテルで手続きをすませ先ず龍正丸へ直行深夜の街を通り抜け波止場へ、龍正丸には幾度も乗っているので勝手は知っている、懐中電灯で足元を照し船の中央舳(へ)先寄りにクーラを置き、先着優先の好位置に席を確保した「よし明日はいいキンメをこのクーラに入れるぞ」ホテルに戻りベッドに…そして朝になった、泡と消えちまった何も彼もだナ。左手の山の頂上で鴉が鳴いた「ハイ今日の釣りはオシマイ、いつまで突立っていないで家に帰りナバアカー」空を見上げオレは呟いた、でっかい空ツポのクーラ担いでサ、はるばる下田から「只いま」は惨めで情けないやね。あの方(女房)にどう説明するの…海が時代で船が出なかつたてカ、それはまずい火に油を注ぐようなものだ。ゆんべもテレビの天気予報を見ながら眼をムイテ、波浪がどうの

風速がどうのと釣行に反対する、オレはそこで啖呵(たんか)「あのナ海釣りはナ、冬場の海はそれが普通なんだ」で鳧(ひげ)山の頂上では鴉が騒いでる。今は観念するしかないナ。

思えばオレの五十代は釣り馬鹿で走つた。投じた金額と釣果との釣り合いは思考の外だ、かけた時間もある、四十年も経つた今になって気付いて納得とは アホ好きと素質は別物一緒でないナ、諺(ことわざ)には好きこそ物の上手なれがあるがオレの釣りには当て嵌(は)まらなかつた。そもそも釣りににはそんなのは無い…いやあるぞ其の(その)一だ。伊東に在住する釣り友がいた。鰹(かつお)を機械で削りホテルに納入する家業、同年配で彼の車に便乗し龍正丸に行くようになった。彼の隣で同じ要領で深場釣りリール竿を繰り出すのだが彼の仕掛けには必ず良型のキンメが二、三枚かかつていた。或る時は最後の三投目で良型キンメ三枚とその下鉤(かぎ)にでっかいクロムツ、これにはオレは眼を剥いたナ、一方オレは惨たる状況だ、根がかりで仕掛けの十五本鉤(かぎ)は海の底、二投目は仕掛けの取

り付作業でバス、最後の三投目は：この名人と同行した龍正丸でキンメを釣り上げた記憶はない。単独行の時でも稲取の漁船にも乗ったがキンメはゼロだった、が初めて赤ムツを釣り上げた、嬉しかったナ。

船に乗っての沖釣りが初めての知人を誘い鹿島沖のヒラメ釣りに出た。ヒラメは用心深い魚で餌のイワシを一度に喰わない、二度、三度噛んで後に呑み込む、その習性に合せ竿先を思い切り上げろ、鉤にイワシの取り付け方などを指導した。初日から彼のクーラには中型を含め三、四枚「ヒラメ釣りは面白いですな」早くもコツを覚えたようだ。俺の心はザワついたナ、クーラーの中は冬景色、小型のヒラメ二枚、以後何回かの釣行をして彼とはクーラーの中の景色が違い過ぎた。俺のヒラメ釣りは終わった。これが素質でもんだろナ。

ついでにヒラメ釣りで起った珍事を紹介しようその日乗り合わせた釣り客の語り草になっただろうナ。でっかいヒラメが釣れた、釣り仲間で憧れる「座布団」

だ、ヒラメの喉に二本の鉤がかかっていた。から大変だ、鉤の主であるAとBの睨めっこが始まりだ。

まつりは船の沖釣りに付き物、まつりとは他者の釣り糸とこちらの糸の絡み合の事だこのヒラメの場合もまつりの変種だろナ。

船が帰港し客は船宿へ、船長の指示は両者の話し合いだが決着は不能。ヒラメを二ツに分ける魚は台無し、ではジャンケンでとなれば敗けた方は一生の悔となるのは必定、が思わぬ梟がついた。船宿で出されたラーメンを喰べている際中だった。裏庭の駐車場から悲鳴の様な男の怒鳴り声が出た。

「嗚呼！あの野郎逃げやがった、今度会ったら只ぢや置かねえ畜生」何かの隙を狙いヒラメを攫って遁走。後のまつりだナ ヒヒヒ

下田港に戻ろう、繫留止の前で突立ち思考停止空を仰いだり海を見たり、頭をよぎるのはあの方の顔「釣り、もう止めたら！高いお金遣って」極まり文句が出てガラガラピシャン、戸を閉めて台所

を出て行く。クソツ止めないぞと怒鳴り返したのだが、今度は観念するしかないナ、これからは仕事に精出そう。又頂上の鴉が鳴いた「まだ居たのカー」頂上を見上げる、空も晴れて釣り日寄り、ふと險の隅に歩いて来る黒っぽい人がいる。オレの傍で立ち止った「どうしたの？」不審に思ったのだろうナ。

前夜以来の経緯を説明した、ニターツと笑った「そこで待っている俺の船に乗せてやる」と立ち去った。暫くするとエンジン音を響かせ漁船がオレの前に横着けた。その人は職漁船の船長で驚いたナ、龍正丸船長の弟さんだった。さあ乗れ、船はエンジン全開沖へと向った。夢見る心地、地獄に佛、幸福感あの頂上の鴉は恰も車窓を過ぎた点景だナ。ホッホ遙か彼方の沖に龍正丸が見えた、職漁船と遊漁船の釣り場が区別されている。

漁場に着き船が停った、準備OK船べりに並べた十五本鉤の仕掛け餌はイカの短冊、漁探知画像を見た船長「投げて」思い切りオモリを投げた、仕掛けも海中に消えた、リールの回転が伝わり快適、オ

モリが四〇〇米の海底に着いた。糸の弛みを直し数回リールを巻く、不安だった根がかりも回避、竿先がピクンと動いた続いてピクン連続のアタリ、太い竿先がしなり海面に引き込まれる。上げてと船長の合図でリールを巻く、重い！初めて体験するこの重さ、わくわくするのはいいものだ。

二十米程先の海面にポツカリと赤い魚体が浮かんだ。リールを巻くポカリポカリ次々と良型のアコウ鯛が海面に漂った。絶景だ、深場釣りファン憧れの状景「提灯行列」仕掛けの殆ど魚がついている、船長の合図「帰るよ」クーラは満杯、赤い魚体が重なり見事だ。他の箱にも詰め込み、船長に乗船料と感謝の魚二匹を提供した。朝の内に釣は終った。「人間萬事西翁が馬」などとは大袈裟だがその一部位の美味があつたな。あの日の朝を想うと不思議だ、ひよっとして鴉が彼の人を呼び寄せたのかア、鴉とはその後縁があつたな、浜松のNHKのど自慢に出て歌つた曲が「カラスの女房」鐘二ツ、アこれは蛇足です。(東区)

「入選」

## 人生の機微

松田 健

妻が何気なくお買い得だったからと、余分を買ってきてくれたウイスキーだったが、銘柄が初めて目にする珍しい物だったので、嬉しい反面、どうせ際物ではないかと疑い、早速、製造元を改めてみると、何とそれは話したことも無い妻には知る由もないが、自分が若い頃、一時世話になっていた印刷会社の親会社で、大手老舗の日本酒メーカーが新たに手掛け始めた代物だった。

当然、その印刷会社でデザインされ刷られたのであろうその銘柄の派手なラベルを、しげしげと感慨深く眺めているうちに、自分がその会社に在籍していた若い頃のホロ苦しい想い出までが、一気に脳裏に蘇って来た。

もう半世紀も昔のことになってしまつたが、京都に住んでいた頃、それまで下町の小さな印刷屋で苦労していたのが、二十歳を過ぎて市内の印刷業界でトップの座にあつた、この会社に運良く移籍することが出来た。まだ職業訓練所で印刷技術を学んでいた時、ここを見学で訪れて以来、ずっと憧れの会社だったので中途でも採用された時は、まるで雲にまで昇れたかの様な夢心地だった。会社の事業内容は親会社の酒造会社以外にも市内の主要な企業の殆どと取引があり、業績順調で社員に対する福利厚生も充実していて、それが巷で評判になっていたぐらいだった。

私は京都府下の田舎町の出身だったが、地元の高校にさえ入れない落ちこぼれの劣等生で、当時市内の大学に通っていた七歳年上の兄に学校の勉強が苦手なら、せめて手に職をつけろと職業訓練所に入れさせられ、兄の下宿に居候させてもらいながら訓練所に通い印刷技術を習得したのだったが、そもそもこの印刷

会社は学歴も高卒以上でないと入社出来ないと言われていた。

それでもその後、この兄から徹底的に基礎から勉強も叩きこまれ、夜間の定時制高校だけでも何とか卒業が果たせたので応募も叶ったのだった。しかも希望通り版下デザインの部署に就くことが出来た。

入社が決まると即、風光明媚な嵐山に近い高台にあった独身寮の個室を当てがわれ、夜、部屋の窓から市内の夜景が一望できるだけでも心癒され、幸せな気分になることができた。家賃いらずの寮生活で、日々三度の食事も社員食堂と寮で格安で済ませることが出来るようになり、実に恵まれた境遇になったのだった……。

そのうち私は社内だけでは賄いきれない業務を、外部の専門業者に委託する外注管理の一端を任されるようになった。これが己の運命を大きく狂わせることになった。

発注の最終判断、権限は、あくまでも

上司にあり、自分はただ取引業者との窓口になっていたに過ぎなかったが、それでも尚、業者から盛んな接待を受けるようになった。元々が酒好きで気楽な独身でもあり、上司に代わって一度も誘いを断らない始末。誘いたい側にも実に便利な存在になっていったのだった。

そしてそんな接待の場の一つに祇園の某高級ナイトクラブがあった。ここでは連日、有名無名のタレントを招きショータイムが催されていて、私はボックス席で左右をホステスに囲まれ、シャンパングラスを傾けながら、そんな舞台を眺めては、いっばし自分も社交界の人間にもなったかのような錯覚を起こし、悦に入っていた。

しかもそれだけならまだしも、更に客の飛び入りコーナーというのがあり、たまたま自分が唯一、中学時代から得意としていたギターで、度々ステージ上立つようになった。業者とホステスたちに上手く乗せられ、スポットライトを浴びて自慢のギターソロや弾き語りを披露すると、受けに受け、気分はまるでスーパー

スターだった。

軽薄だった私は舞い上がり、学校の勉強が苦手だった己の劣等感も、これで完璧に払拭できるだろうという気になってしまったのである。やがてプロのミュージシャンを夢見て上京。せっかく憧れの職場に就けながら若気の至りで二年と半年ほどでそれを手放し、恵まれていた筈の生活に自ら終止符を打ってしまったのだった。

また幸か不幸かもうこの頃には、私の学習の面倒ばかりか生活指導までしてくれていた堅実派の兄が、念願の博士号も取得し地方の大学に赴任して既に京都にはなく、私の軽率な行動を諫められることも無かったのだった。

そして私の浮ついた夢は、上京後、僅か数年にして呆気なく頓挫し散ってしまった。

しかし、それも今にして思えば、わが青春時代の一ページだったのだ。結局、プロのミュージシャンになる夢は果たせなかったが、そのお陰で今度は、ジャン

ルこそ異なるものの同じ音楽をやっていた女性とめぐり逢い、やがてその女性と所帯まで持つことになった。

妻は音大卒のピアノ講師で、小生とは異なり小学生の頃から学級委員や生徒会の役員を務める優等生で、その上実家が浜松の土地持ちだった。妻にとつては不運な出会いも、私にとつては、まるで柵から牡丹餅式に妻徳に恵まれてしまったのである。

かつて兄から基礎学習を徹底的に叩き込まれた様に、今度はこの妻から日常生活を支えられながら、世間の常識の数々を一から教えられた。そのお陰で、その後のわが人生は、今度こそ平凡ながらも無難に過ぎて来てくれたのだった。

バカの一つ覚えでギターしか弾けなかった愚弟を、せめて高卒レベルにまで押し上げてくれた兄は、その後、赴任先の大学から国費で米国の研究機関に派遣され、帰国後は応用微生物学、遺伝子工学の分野で、数々の功績を挙げる学者になった。

兄の研究成果が新聞紙上等で紹介される度に、同じ血を分けた兄弟として誇らしかったが、私の日常とはあまりにもかけ離れていたのも、たまたま職場の昼休みに同僚達と一緒にテレビの報道番組を観ていた時も、「これって俺の兄貴のことだよ」とは、ついぞ一度たりとも告げられなかったものである。

そんな兄も私に対して微塵も軽蔑したりはせず、「ひとの生き方は、人それぞれ。おまえは青空大学の出身」などと、言ってくれるようになっていた。

秋の夜長、酔うほどに、何故、私のような中途半端でくだらない男が、こんな兄や妻に恵まれてきたのだろうか……と、勿論、その奇遇には心から感謝しつつも、これこそが人生の摩訶不思議なところなのだろうと、他人事のように想うのだった。

(北区)

「入選」

## 父、育爺になる。

高木由美子

私には、父に関するいい思い出がない。無口で、帰りも遅く、いつもイライラして土日は自室に閉じこもっている。顔はしかめっ面で、娘たちとの日常会話は無い。

久々に話す私の話はやたら否定され、考えが甘いと怒られた。そんな父が嫌いだったので、私は家で顔を合わせても無視するようになった。当然、お互い挨拶もない。

専業主婦の母はそんな父といつも喧嘩していて、仲が悪い。母はよく、父がコミュニケーションというものをとれない人で、家族を気にかけることもなく、あまりにも感じが悪すぎると言った。こんな人と結婚したのが間違いだと言

い、私が子供の頃、何回か離婚騒ぎになつた。

物心ついてから、家族仲はずっとこんな調子だったから、もし私と姉が結婚して家を出たら、晩年この夫婦はどうなってしまうのかと、かねがね思っていた。

母は昭和の典型的な、子育てを生きがいとしているタイプの母親だったので、その先に待っているのは熟年離婚か、家庭内別居のように思えた。

だが、世の中とは分らないもので。実際にやってきた晩年は、想像とはまるで違っていた。

父には人生を変えるほどの転機が2つほどやってきて、一つ目は庭に迷い込んだ猫を保護したこと（この保護猫2匹は、父に最も懐いていたため、可愛がるようになるのは当然の結果であった）。二つ目は、姉に子どもが産まれたことだった。

無口で感じが悪いおじさんだったはずの父は、圧倒的にピュアな存在であるベツトと赤ちゃんという存在によって、心

から癒されたようであった。自他ともに、「育爺」になったのである。自分の娘たちは生まれてから今まで、ろくに面倒を見てこなかったというのに。

「育爺」とは何か。育児をする爺さんである。

なんと父は、保育園に入れることができなかった姉の仕事復帰のため、自分の仕事を調整してまで、平日の育児を全面的に請け負った。また、世はコロナ禍であり、在宅勤務が可能であったことも手伝って、父はますます育児に奮闘することになる。

ミルクを飲ませ、オムツを変え、グズったら抱っこし、庭を散歩する。なんと寝かしつけに関しては実親である姉や、祖母である母よりも上手かった。無口だったはずの父は、ニコニコしながら赤ちゃん言葉で新生児に熱心に話しかけている。それは、誰も見たことのない姿であった。もはや父というより母である。

土日になると暇になるので、父は今まで足を踏み入れることのなかったトイザらスや西松屋に熱心に通っていた。若い

ママやパパたちの中で、恥ずかしげもなくウキウキ歩き回っている父は相当浮いているだろうとこっちが心配になつてしまう。

そしてしょっちゅう勝手におもちゃをたくさん買ってしまふので、母が呆れるほどであった。

次第に、私と同じように父を苦手に思っていたはずの姉も、父を育爺として一層頼りにするようになった。たまに父が仕事で出張に行っており、帰りが遅いと、子どもに向かつて「今日はおじいちゃん遅いねえ、早く帰って来ないかな」なんて言うようになってしまった。今や、皆から求められ、いなくてはならない存在になったのだ。

私たちは、孫の誕生によって、新たに家族の形を再構築したのだった。

私は今、新しい命をお腹に授かり、寒さが厳しくなる頃にはその誕生を迎えようとしている。姉の出産と同様、父は本当にうれしそうにしてくれている。

そして、「育児には慣れたから任せて

くれ」と頼もしい発言。私たち家族には今、笑顔と笑いが溢れている。

ふと思うのは、もし昔の「家族」のままだったなら、今頃どうなっていたのだろう、ということ。私は大人になった今、当時、遅くまで仕事をし、家に帰ったら自室に会話もなく閉じこもる父のことを思い出し、あの時、一体父は人生の何に楽しみを感じていたのだろうと思う。常に母に文句を言われ、家庭に居場所はなく、楽しかったことはあるのかな、と。そのうち私たちはバラバラになり、会話もなく、娘たちとは会うこともなくなっていたらどうか。

子がかすがい、なんて言うけれど。

孫という新しい命が紡いでくれた、新しい家族の形。小さい命の存在に救われていたのは、私たちの方だった。

私ははち切れそうなくほど大きくなったお腹を撫でながら、猫たちにちゅーるをあげている父を見る。その背中が、優しい。

私がこれから築き上げようとしている「家族」が、どうか暖かく、笑顔に溢れ

たものでありますように。

そして、「育爺」、これからも家族の員として、よろしくね。

(南区)

「入選」

## 老いて生きる

糟谷修子

「おかあさん、カレーだよ。ほたても入ってる。おいしそうだね。」

「カレーもほたても、認知症予防になるんだよ。いっぱい食べて元気だよ。」

「卵焼きだよ。長芋と刻みねぎが入っておいしそうだね。息子が作ったんだよ。」

「おかあさんの作った卵焼きはおいしかったね。一流だったね。でも、息子の卵焼きは栄養満点なんだよ。」

「いっぱい食べてよかったね。元気でいれるからね。よかったね。」

そんな言葉かけを繰り返しながら、義母の食事介助を続けてきた。しかし、今では、一人ではスプーンすらも口に運ぶことができなくなっている。目を閉じ疲れた表情を見せて口を閉じたままにいる

時間が増えている。食事を終えるまでに、一時間もかかるようになった。

それでも、少しでも食べてほしいと願いながら食事の介助を続けている。

義母は九十一歳を迎えた。要介護五。

平成二十九年五月に夫の死を迎えるまでは夫婦二人で生活していた。

しかし、今は、会話が成り立たない程に認知症が進んでいる。息子がわからなくなつて自分から話をすることも減つてきている。それでも「ありがとう。」と、笑顔を見せてくれることがあり、うれしくなつて笑顔を返す。

笑顔が続いてくれることを願いながら、夫と二人で介護を続けているのである。

「電気かみそりがどっかについてない。

困っているんだよ。」と、義父が話していたことがある。どこを探しても見つからなかったらしい。

「お前、電気かみそりを知らないか。どこにしまったんだ。」と問うたら、「私がどこかによつた証拠を出せ。」と怒つた

顔で返してきた。二人しれないのに無くなるはずがない。妻がおかしくなったのか。そう話した義父。

義母は、この頃片づけたことを記憶できなくなつていたのであるか。それでも、夫から責任を問われたことは理解できて反発していたのだろうか。義母なりの精一杯の対応であつたことは間違いのない。

義母はどんな思いでいたのであるかと、今でも電気かみそり事件を考えることがある。

若い頃から義母は、膝関節の異和感を抱えながら生活していた様であつた。膝関節が緩く、日々の生活の場で簡単にはずれてしまうが、すぐに自分で元に戻している。

生活を共にするようになってからも、そんな状況は続いて「昔からそうやってきたから大丈夫。何ともないからね。」と気にする様子は見せなかつた。しかし、長年のそんな生活は、歩行に支障をもたらずまでになつていたのである。

介護を始めてすぐに、ケアマネージャーから訪問リハビリの導入を勧められる。

整形外科で診察を受けると、両膝の変形が進んでいて、右側の股関節も変形を伴っていることが説明された。歩行への支障を最少限にいくために可動域の制限を緩和するようにと、リハビリを続けていくことを指示されたのである。

平成二十九年七月、週二日の訪問リハビリが始まる。理学療法士が訪問してくれて、義母は、足や腕を指示に従つて動かすようになった。笑顔を見せながら、足を曲げたり伸ばしたり。腕の曲げ伸ばしも一生懸命にやっている。痛みがあるはずなのに、「大丈夫です。」と頑張る様子が見てとれた。

「おかあさん、すごいね。足があがるね。よかつたね。」と笑顔で声をかけると、にっこりと笑顔を返してくれる日々が続いていった。楽しみながらリハビリに取り組んだ日々。義母にとって、充実した



時間であったに違いない。

リハビリを始めてから五カ月が過ぎ、十二月を迎える。

この頃から義母は、理学療法士の指示が理解できなくなってくる。「痛いところはどこですか。」と尋ねられ、「郵便局のむこうの…」と答える。そして、言い繕うことも徐々にできなくなっていく。自分で手足を動かすこともむづかしくなっていく。

今でも可動域の制限緩和のために、そして拘縮予防のために、理学療法士による訪問リハビリは続けられている。体のケアのために寄り添ってくれているだけでなく、義母の心のケアにもつながっているのである。

義母と出会ってから四十年がたつ。嫁姑となり、お互いに葛藤を抱えながらも、共に歩んできた。

しかし、老いと共に心身の変化が顕著となり全面介助となった義母。認知症を患うようになっていくことも、車椅子の

生活となっていくことも予想できないことであった。

義母の介護を始めてから四年余がたつ。その年月は老いて生きていくことを考えさせてくれる時間となっていた。

高齢者と言われる年齢を迎えている私も、若い頃は仕事と子育てに追われ毎日の生活を送ることに精一杯であった。老いていくことを考えることはなかった。介護を続けるうちに、義母の老いと向きあうようになって考え始めたのである。

認知症になって、毎日の生活も心配事も思い思うことがなくなった義母。うれしい時にだけ笑顔を見せてくれるようになった義母。その姿は、老いていく現実を語っていた。

そして、家族や周りのサポートがあっても老いて生きていくことがたいへんであると言う現実を教えてくれている。寿命のある限りを生きていかなければならない現実をも教えてくれているのであ

る。

私も老いに向かっていることは間違いない。

しかし、その現実を目のあたりにしてもなお、まだ老いは先のこととしか考えられないのである。

笑顔で暮らしていく時間が続いていくことを願うだけなのである。

年を重ねることを楽しみながら、これから先の老いを考えて生きていきたいと思っている。

(中区)

## 「入選」

## 妻と歩む老々介護

鈴木勝則

「親父がなくなつて、もう十五年になるな」

「早いものね。おばあさん、自分で身の回りのことでできているかしら？」

「できているけど、この間、スーパーで買い物かごに商品を詰めている時、財布を盗まれたと言っていたな——」

「注意力が行き届かなくなってきたのかしら、毎日様子を見に行くようにしたら」  
この日を境に毎日、母を訪問することにした。

母は八五歳の時自転車で転びひざを痛めた。歩くのに問題はなかったが、正座ができなくなり、いつも椅子に座っていた。

今日は、ちよつと様子が違っていた。いつも編んでいる手編みの靴下が、止ま

つたまま座卓の上に置かれていた。

「どうしたの、疲れたのか」

「一服しているだけだよ」気丈な言葉が返ってきた。そんなことが続いたある日のこと。

「今日は、寝ていた。手編みの靴下も編みかけのまま止まっていた。この頃は、様子がおかしい時が多くなってきた」と妻に報告。

「昼夜が逆転しているかもしれないわね」

「このままではまずい、どうしようか」私の不安な気持ちで包まれた言葉に妻は、

「この間、高齢者地域包括支援センターのチラシが配られていたわ、相談してみようよ」

「そうだな、二人で行ってみるか」

介護認定を受け、かけつけ医を決めて週一回、訪問看護を受けることにした。この時から妻と一緒に毎日、母の基に出向き、身の回りや、食事の用意などの世話をすることにした。

「どこか痛いところない」看護師のやさしい声かけに

「変わりないよ。自分のことは、何でも自分でやっているから」と相変わらず気丈な返事が返ってきた。

「足がむくんでいるね。お風呂に入つて温めないといけないよ。お風呂に入ろうか」と看護師の誘い掛けに、

「毎日入っているからいいよ。夜、自分で入るから」とひと昔前の習慣を口にして、一歩も説得に応じなかった。

「なかなか手ごわいぞ、今後が心配だ。仕方がない。近くの温泉に時々連れて行くしかないか」と妻に同意を求めた。

「いいわよ。そうしましょう」優しい妻の言葉が返ってきた。三人で館山寺の温泉に行くことにした。

ホテルの温泉は、昼間は人がほとんどいなくて広いので、母は喜んで入浴した。

「長かったな、やつとお風呂に入つたよ」三ヶ月経った訪問看護の日のことである。

「よかったわ。でもこれからもすんなりとはいかないでしょうね」

「分かってる。お風呂から出た最初の言葉が「疲れたー」だからな」  
「無理もないわ、血圧の薬を飲んでいても、高目だから、しょうがないわよ」

今日は、雲一つない晴天。ぽかぽか陽気だ。母は、駐車場で日向ぼっこをしていた。

「晴れた日は、暖かくて気持ちいいね」と声をかけると、  
「気持ちいいよ」と日に焼けて真黒な顔がほほ笑んだ。手編みの靴下もまた再開していた。以前と変わらない景色が戻って来た。

「介護を始める前は、どうなるかと思っただが、元気を取り戻してほっとしたよ」  
「ほんと。よかったわ。そろそろデーサービスの話をしてみたら」

「介護認定を受けた時、絶対に行かないと意固地になっていたけど、そろそろ介護支援専門員さんに相談してみるか」  
いろいろ、作戦を練って説得した結果、やっとお試しで行ってみることにした。

「おはよう、今日はデーサービスに行く日だよ。迎えに来るから支度をして」と声を懸け、行く準備をさせた。

「おはようございます。おばあさんデーサービスに行きましょう」迎えの方の声に、

「わかった。わかった」と言いながらぐずぐずして、迎えの車に乗るのにてこずった。しかし、二回目からは「今日は行く日？」と言って、すんなり迎えの車に乗った。

「お雛様、うまくできたね、先生が手伝ってくれたのか」と聞くと

「全部自分で作ったよ。工作は得意だもん」幼児が得意になって自慢するように誇らしげだった。

デーサービスで作った工作や塗り絵、書などを、自分で椅子の前のテーブルにきれいに並べた。そして、看護師や姉さんなど来るたびに、「菊の花、きれいに塗れた。だるまの目も、にらめっこをしているように描けた」と指をさしながら嬉しそうに説明をしていた。

「デーサービスは楽しそうだね」と言う

と、

「楽しくはないよ、ポーとしていても仕方ないから行くよ。工作の時、隣の人に教えてやるよ」と楽しげに話した。介護支援専門員さんのお話でも「デーサービスでは、よく話をしている」とのことだった。こんなことならもっと早く行くようにすれば良かったと思った。半年後、慣れてきたので、週二回に増やした。

春日和となって来たので、おばあさんは日課のように今日も、駐車場に座っていた。

「よく近所の人に「おばあさん元気だね、年はいくつになるの」と聞かれると、いつも「もうじき天井に届くよ」と言っていた」とつぶやくように妻に話しをするると、

「おばあさん、あと二年とちよつとで一〇〇歳になるのよね」と妻の相打ち、「一〇〇歳になったら盛大にお祝いしたい。もう少しの踏ん張りだ」と言うのと、「あなたも去年は大きな手術で、二週間

も入院してしまつたわね。私も健康診断で、異常な数値が見つかつて、経過観察となつていたが、六月に入院することになつてしまつたわ」

「俺たち、今までは元気にしてきたが、不安を抱えてしまつたな」ため息交じりの言葉に

「先のことはわからないわ、とりあえず母の百歳のお祝いを目指して、一緒に頑張りましょう」と妻の励ましの言葉が返つてきた。

母は、妻が入院した途端に体調を崩してしまつたが、徐々に回復したので「ほつと」した。その時、「気が付かないうちに妻を頼りにしていたのだな」と妻のありがたさを実感した。

私は「介護の終着駅は、いつ現れるかわからないが、その時まで妻と一緒に乗り越えていこう」と心に誓つた。

(北区)

「入選」

## 妻の生命保険

福代善彦

先日妻が、「私が亡くなつたら保険金がいくら出るの？」と聞いてきた。

「お母さん(妻)が亡くなつても保険金なんて出ないよ」

「生命保険なんて昔から入っていないよ」

「お母さんが亡くなつて、お金貰つても仕方がないからと思つて」

「えー、そうなの？」

「最近、葬式代を用意するために保険に入るって聞くけど」と妻にそう言つてはみたが、入つておけばよかつたところになつて後悔する。

もしも妻が亡くなつていたら、大変なことになつていたのである。

妻が亡くなつたあとの生活を、どう乗り

切るかなどとは想像も出来なかつた。若かつたときの考えとは、今は少し変わつてきている。

もし妻が亡くなつていたら、家事や子供の世話が大きな負担になつていただろう。

そしてその負担は、たぶんお金で解決することになつたであろう。

お金で解決しなければ自分がすることに、仕事も制限されたであろう。今になって、そのようなことを考えれば妻の生命保険に入つておくべきだつた。

(幸運にも相手がみつかつて再婚でもすれば話は別だが)

年金を貰えるこの年まで妻に何もなくて良かつたと、つくづく思う。

「葬式だけは子供に面倒を掛けずに自分で用意したい」とよく耳にする。

たしかに私もそのように思う。

その時のためにはお金が必要になる。

そのためには、亡くなった時にまとまつたお金が受け取れる死亡保険が便利である。

今からでも遅くない、テレビCMでやっている死亡保険を検討してみよう。欲をかって九十歳まで保障が続くのがいい。

やはり妻の生命保険には入っておくべきだったと後悔する。こうなったら妻が健康で長生きしてくれることを祈るばかりである。

(中区)

とはいえ最近の葬儀は家族葬が流行りで、多くなったらしい。少人数で身内だけだから費用も掛からなくなつた。敢えて保険で葬儀代を準備しておく必要もないのかもしれない。

今、妻に先立たれたら色々やっかいなことになる。

毎日の食事はどうしよう 洗濯はどうしよう

このご時世、ほとんどがお金でなんともなるかもしれない

お金で解決できるものは、お金で解決することになるだろう。

宅配の弁当が多くなる。

家事代行も頼むことになる。

今流行りのお一人様の老後生活だ。

## 随筆選評

## たかはたけいこ

コロナと老い

感染症が世界を覆った二年間が過ぎようとしている。地球に生きる人々のすべてが「被害者」であり、「加害者」になり得る日常が過ぎていく。更にマスコミは地球温暖化がこれからの地球と地球に暮らす人類を含めた生物の存続が危ういと報道している。

私たちはマスクをする日常を続けることが当たり前になった。そんな中での選考だったが、応募作品を読みながら、私は人間の営みの力強さを感じた。人は生まれ、育ち、働き、老いていきやがて死んでいく。

生まれた瞬間から、人は死に向かって歩き始める。なぜ、生まれるのか。なぜ、生きるのか。その答えのひとつひとつが、応募作品のなかに息づいていた。

悲しみを、喜びを、友情を、家族の営みを人々は享受しながら、一日一日を確かに生きている。「今」をどう受け止めることができるのか、それが「人間力」だと改めて思った。応募作品の筆者たちの一瞬の喜びや、悲しみ、思いを書き

留めることが、文章を綴ることでもある。

コロナとの戦いは先が見えない。けれど、敵はコロナだけではない。老いという不治の病は誰も回避することができない。

だからこそ私は、人々に書き綴って欲しいと願う。人間が作った「文字」という永遠につながる表現方法が、ただひとつの武器なのだ。

## 怒ってくれる人

社会を生きる私たちは、いろんな感情を抑えている。とりわけ怒りの感情は我慢することが多い。我慢することによって、怒りは増幅し、時に心を侵食する。

そんな時、同調してくれる人がいることがなんと頼もしいことか。同じように怒ってくれることで、自分の怒りは薄れていく。

## 最期の桜

同級生のKくんは文芸が趣味で、新聞の川柳や俳句に投稿

していた。新聞を見て、お祝いの電話を入れたのがきつかけで、筆者は投稿を始めた。やがて互いを良きライバルと認め、切磋琢磨している日々の充実感。

突然、亡くなったKが空から言っているようだ。オレノブ  
ンマデガンバレヨ

## 下田の鴉

釣りに興じる筆者の心を一気に描いた作品は生き生きと周りの人をも描いている。思いをそのまま言葉にした文章もまた良い。タイトルのカラスはまた、もう一人の筆者なのかもしれない。

## 人生の機微

妻が買ってきた見慣れぬウイスキーのラベルから、筆者は青春を蘇らせる。中学卒業後、京都で勉学にいそんでいた七歳年上の兄との生活が人生を変えた。堅実な人生を歩みだしたはずなのに、新たな人生を歩もうと、「今まで」を捨てた。人生は流れていく。出会う人と出来事によって。

## 父、育爺になる。

筆者が子供の頃、父はいつもイライラしていて、家族との会話はなかった。私たち姉妹が家を出たら、一家離散してしまいかもしれないとまで思う。

娘たちの成長と共に父が変わった。猫を飼い、孫の世話を

する現在の父には、過去の負のイメージはない。

## 老いて生きる

老いと共に認知症が進んでいく義母。嫁姑となって四〇年の歳月が流れ、その間に起きた確執や葛藤。筆者は確実に壊れていく義母の日常に寄り添い、自身に起こる老いへの覚悟を日々、強めていく。優しくも力強い作品。

## 妻と歩む老々介護

八五歳になって一人暮らしを続けている母を息子夫婦は思う。気丈な母が心身の衰えが始まる。毎日、針を動かしていた編み物が止まる。夫婦は母の尊厳を保ちながら、母がどうしたら気持ちよく過ごせるかを考える。現在の母はこれからの自分たちでもある。

## 妻の生命保険

私の生命保険はいくら？ との妻に問われ、入っていないと答える夫。

死んだらお金が入る生命保険がテレビコマーシャルで流れている。妻が亡くなったら、筆者の生活は変わるだろう。今の生活を続けることはできない。代わりにお金に頼らなければならぬ時代を私たちは生きている。

**合唱部** 加藤貴代美

中学三年間を合唱部に籍を置き、仲間と共に県大会を目指した筆者。厳しかった顧問の先生。共に悩み、泣き、歌った仲間たち。

県大会出場を賭けて、筆者たちの心はひとつになり、顧問の先生と共にその思いは今にも伝わっている。

**ゼニの要らん趣味** 石山武

子どもたちが巣立ち、妻とのふたり暮らしになって十七年。互いの老いを自覚しながらも生きている筆者。得意なゼニの要らん趣味「人の名前を覚えること」が薄らいでいる。嘆きながらも筆者は言葉を探し、紡いでいる。書くこともまた、ゼニの要らん趣味だ。

**小椋佳さんの思い出** 伊藤壽勇

作曲家小椋佳氏が銀行マンとの二足の草鞋を履いていたことは、有名だ。筆者は氏の浜松支店長時代の片腕だった。そして氏の音楽活動終了宣言を受け、浜松時代の思い出がふれ出てきた思いを書き綴った。

一般人が知らない「小椋佳像」がここにある。



詩

〔市民文芸賞〕

# 邪鬼のよばなし

竹内としみ

ガタンと重い音が耳に届く

少しの間を置き

コトリとかすかな金属の響き

その音を合図に、僅かに射し込んでいた光の筋がすつと消えていく

毎日繰り返される外の世界と遮断される瞬間

ああ、やつとこの時間

待ち兼ねたかのように

四方からふーつとため息の連鎖

やがて

動かぬはずの鎧をゆるゆる揺らす音

その音が見えない空気を切り崩す

夜半になり

囁きながらも凶太い声が聞こえる

「おい、起きてるかい」

足の下の動かぬ塊に問うてみる

むくむくと、わらわらと

小さな塊が物言わず体を震わす

いつもならここで悪口雑言

日がな一日踏みつけられ、おいらには通りすぎる人の視線さ

えも届かない

そんなお役目の憂さ晴らし

今日のおいらはどうかしてる

喉の奥に言葉がつまって出てきやしない

熱い息に混じって、涙さえ流れてきやがる

あの子の顔と声が頭に張り付いて眠れないや

邪悪と煩惱のシンボル

それがおいらに課せられたお役目

大袈裟に泣き、情けない姿を日々さらす

何の不満はなかった、情けなくもなかった

なのに、予想外の展開だった

小さなあの子はおいらを見て涙ぐみ

可哀想、助けてあげたいと言ってくれた

慰めより深い労りの心

それを受けとる資格がおいらにもあったのか

ふと体に何かが触れる気配

大きな手がゆつくりと体を包んでいく

見上げると鎧の隙間から見える優しい眼差し

「お前は自慢の相棒さ、邪鬼に涙は似合わないよ」

愛される幸せを初めて知った夜

邪鬼の泣き顔は穏やかな笑みに変わり

暗闇の寝床に静かに溶けていった

(中区)



〔市民文芸賞〕

# 何でもない日

山下 來 郁

おめでとう

今日は何でもない日

誕生日でもなく

クリスマスでもなく

今日は何でもない日

宝くじが当たったわけでもなく

虹が見えたわけでもなく

今日は何でもない日

でも今日は

あなたが生きている

大事な大事な一日

さあ祝おう

今日は何でもない日

さあ祝おう

今日は何でもない日

(愛知県豊田市)

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

「市民文芸賞」

# ちぢれ麺

永瀬誠人

「冗談じゃないよ」

暑いときには冷たいもの  
そう思いながらも  
あつあつのラーメンを食べすごす  
あの夏

「冗談じゃないよ」

夢を否定されたあの日  
ラーメンをすすするように  
走らすペン  
スープを飲み干すように  
終わらす過去問

麺と成績は

どこか似ている  
気づけばいつかのびている

(中区)



〔市民文芸賞〕

# 寒椿

高山ひなた

おおきな白にひとつだけ  
えのぐをたらしした赤がある

わたしみたい でもわたしじゃない  
わたしは白くなる ときどき黒くなる  
きどらずに赤？ こいしてピンク？  
かんぺきじゃないわたしは山茶花

ひたむきに ただひたむきに

朱になれ 赤になれ

紅になれ。

(中区)



小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

「市民文芸賞」

密やかに女 をんな

岡田 あい

今日も無事を念頭に

一日が暮れた

終しまい湯に

熱めの湯をたつぶりつき足して

湯気のなかに身をしずめる

今日という日が

湯船のふちを一気に流れ落ちて行く

節くれだつた指も

下り坂を急加速して

ころがりだした

乳房も肌も

無遠慮にのさばる

脂肪の塊りも

この時刻

密やかに艶めく

じっと息をひそめて

生きつづけている女をんなが

わずかな瞑想の中で息づく

女の乗ったブランコは

大きく弓を描くことも

止まることもなかった

人の世の襞を

黙もくとたたむ女と

乱れた襞の数を

いとほしむ女

さびた鎖を切ろうと

もがく女と

さびた鎖を

ひそかにみがく女が

互助力となつて生きてきた

ぬくもりの中  
まつげに集う微笑

ふと

目をあければ湯の中で  
薬指にくい込んだ  
指輪が鈍色に光る

瞬間

明日へたくましく生きる人間をんなが  
背筋をぐいと伸ばす

束の間の女は

未練もみせず

排水口の渦にのまれて

消えてゆく

密やかに

息づく女がいる限り

そっと紅をひく

私だけの可愛い女が

私の中に生き続けているのだ

一生

(天竜区)

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

「入選」

## 介護列車

鈴木勝則

列車にゆられ、揺れと伴に深い眠りにつく。  
暇に、妻と行っている母親の介護の様子が、  
列車の映像と重なって浮かんできた。

介護列車は今日から運転を開始する  
介護列車は決まりのない未知の世界に行く  
介護列車は多くのサポーターの助けがいる  
介護列車は飽きることなく毎日発車する  
介護列車は時々ダイヤの見直しをする  
介護列車は老運転手の健康管理に気を遣う  
介護列車は車掌との連携を一番重視する  
介護列車は運転に気を抜くことができない  
介護列車は線路とのコミュニケーションを大切に  
介護列車はどこまでも続く線路の上を走る  
介護列車は暗いトンネルに入ることもある  
介護列車は突然脱線することもあるが、  
介護列車はきれいな景色を見せてくれる

介護列車の車窓からみる景色は感動をくれる

介護列車の終着駅は遠い先にあつてほしい

介護列車の終着駅は突然現れるのだろうか

介護列車の終着駅は来ないことを願っている

列車の「ガタン」と言う音に目が覚めた。

(北区)



「入選」

# 音色

吉川 愛

今朝、ゴミ捨てに階下まで行った時  
収集所の前の道路を

オカリナを吹きながら歩く、初老の男性がいた

陽気な口笛や

小学生のリコーダーではなく

控え目に、でも、心から親しむように

オカリナを吹いていた

眩しい気持ちで目で追うと

男性は、曲がり角の多い道を

まっすぐに、まっすぐに歩いて行った

まっすぐに、彼の発する澄んだ音色もなびいていた

私は目を細め

心のカラージュブツクに、オカリナを加えた

ウチの人が帰ったら

このことをつまみに

ちよつといいお酒を飲もう、と

足取りを弾ませながら

(中区)

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

「入選」

# ふーちゃんの

尾内以太

れいぞうこをあけ  
ジュースをのむと

きみはいうよね

「ふーちゃんのとつかいてあるでしょ」

えほんをひらき

こえにだしてよむと

きみはいうよね

「ふーちゃんのとつかいてあるでしょ」

おうちでごろり

よこになると

きみはいうよね

「ふーちゃんのとつかいてあるでしょ」

ママのかたを

もみもみ トントンすると

きみはいうよね

「ふーちゃんのとつかいてあるでしょ」

あおぞらにも

くもにも ねこにも

へびにも 木にも

きみのなまえが

かいてある

ふーちゃんのとつかいてある

きみの目にうつるものすべてに

そうかいてある

ぜんぶ ふーちゃんのとつかいてある

やがて きみのめが

もちぬしのなまえを

みえるようになってしまふまで

(南区)

〔入選〕

# 風鈴

石野帆奈

風が吹き  
チリチリ音が鳴っている  
風が吹き  
左右に体が揺れている

ああ、夏だ  
君を見ると涼しく感じる  
君を見ると夏が来たと感じる  
飛ばされた麦わら帽子  
カラフルな君  
ありがとう  
夏を知らせに来てくれて

(中区)

〔入選〕

# 音楽

首藤琴音

音楽はまるで服のようだ  
身にまとったその色や形は  
自分を表す一部となる

音楽はまるで水のようにだ  
雨が川や海へ流れていくように  
誰かの曲は次の世代へ語り継がれ  
影響されていく  
音楽はまるで家のようにだ  
悲しい日も  
楽しい日も  
変わらぬ場所にある  
私を迎え入れてくれる

(西区)

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

「入選」

# 鼓動

谷澤萌那美

真夜中  
 眠れない魔法をかけられ抜け出した  
 午前三時の真夜中の海辺は  
 とても静かで心地の良い音がする  
 波の音を聞きながら  
 ふと空を見上げてみた  
 空にはたくさんの星々の姿  
 一番大きな星を見たら  
 星の鼓動が聞こえた

(中区)

「入選」

# もつと遠くに

竹原孝子

雨上がりの  
 国立競技場のトラックは  
 まだ濡れていた  
 無顧客のスタジアムに  
 生気が戻る  
 まっしぐらに  
 駆け出す助走から  
 義足の右足で踏み切り  
 折りたたまれた  
 マルクス・レームの身体が  
 宙を舞う  
 右ひざ下切断の  
 過酷な少年時代を潜り抜け  
 今、この東京の宙を舞う

「自分の限界を決めるのは自分」

そう言い切るレームは  
健常者に負けてはいない

彼が目指そうとするのは  
世界記録保持者だが

記録ではない  
三連覇の金メダリストだが  
メダルでもない

もつと その先にあるもの

(中区)

「入選」

よもつひらさか  
黄泉比良坂

内山文久

闇の底から這い上がり

夢中で この坂まで走ってきた 俺

「千曳の岩」を押さえつけながら

四肢は激しく震えていた

追ってきた おまえ

岩の向こうから おまえが 囁く

(岩を退かして こちらにいらして

そう私達 再び 愛し合うのよ)

俺が 答える

(駄目だ それは出来ない)

(何故? 私達お互い こんなに恋い焦がれているのに)

(おまえも俺も知っている

おまえに見えれば 俺は おまえを忘れる

俺に見えれば おまえは 俺を忘れる

俺だつて忘れたくない おまえを愛している

でも もうおまえは 俺が 決して味わえない

至上の秘密を 味わったのだ)

俺は 味わい続けていた

(至上の秘密? それがどうだというの  
こちらにいらっしやい もうあなたは 私のもの)

(いやいや そうじゃない  
おまえはおまえ おまえは  
そちらにいるのがいい)

出来れば 《呆けた俺のお袋》のように目覚め

乙女の頃の 思い人に逢いに行く心持ちで  
日々を過ごすのがいいのさ)

(何をおっしゃって

私をきっぱり忘れるとでも?)

そう それならそれでいいのよ

あなたが あの日暗闇で 私を抱いた時

あなたの背中に 静かに匕首を刺しておいたもの)

(そんな事解っている 解っている だから

あの時 冷たくなっていくおまえを強く抱きしめ

おまえの途方もない悲しみを 和らげようとしたのだ)

(そんなの 言い訳 そんなの駄目

私がかこまで来たのは あなたのためなのに)

(そんなの 言い訳 そんなの駄目)

(そんなの そんなの 駄目 駄目……)

―諦めたのかどうかは 解らない

おまえの声が 次第に遠ざかっていく―

頑是無い おまえのことのはのうちに

透きとほった悲しみと慰めにも似た喜びを

(中区)

## 橋本由紀子

コロナからオミクロン株が発生し人間の移動、活動にストップがかかっています。どちらも生き延びるための奮戦中です。偶然この世紀に居合わせた私たちは、極低温透過型電子顕微鏡下のウイルス映像と睨めっこ。早い終息を願っています。

「邪鬼のよばなし」は煩惱と願い事を抱えて生きていく人間達が去った後、静寂な御堂に残る悪の役割分担を演じる邪鬼に溜息と人間愛を語らせるといふ小話仕立て。作者は書きなれた人であろう。元々は占いや願いを入れた密教の影響下から来た天部像つまり仏教世界のガードマンの梵天や帝釈天。もう一つは、武闘派と呼ばれる鎧をつけた四天王達が足元に踏んづけている邪鬼達。苦悶の表情や抗ったりあきらめたり表情で人氣がある。伊豆願成就院の若き日の運慶作毘沙門天像が二匹の邪鬼を踏みつけていますが、その邪鬼は何ともユニークで魅力的であったのを覚えています。作者の眼にも人間の業を、背負う邪鬼が愛らしかったのでは。「何でもない日」はシンプルにパステルカラーのように気持ちよく描かれています。何もなく過ぎゆく幸せな一日を感じられる感覚が大切だと思います。「ちぢれ麵一面白い感覚の比喩が使われています。成績とラーメンを、併走させるなんて。「冗談じゃないよ」と思いつつ、もうひと踏ん張りしてください。「寒椿」は一輪の椿を、見つめて

の問答が楽しい。色の中には物語があるので、「黒」が入ったことで作品が締まってくる。「密やかに女」正当な評価を受けていないと思いつつ過ぎ行く時を感じている女性のジレンマや情念のようなものが書き込まれていて「東の間く排水口に消えていく」が愛おしく抗う生身の女性像を痛く感じさせます。

入選の「介護列車」は今日の介護の現況が描かれた作品ですが、「介護列車」が全て頭についていますが、最初に一つのみあれば良くて、後は全て取るか、全て空間をあけて「は」から始めた方が、スキリイメーリアップでより伝わると思えます。単細胞生物のようにただ分裂のみ繰り返していれば「永遠」を得られるのですが、進化の過程で生殖し「死」を選んだ人類、長くなった終焉への、やるせない思いの厳しい現況が夢の配慮で描かれています。「音色」思わぬ優しい出会いがスケッチで爽やかに描かれています。「ふーちゃんの」成長する幼児を見守る目線。最後の三行で詩が生まれました。「風鈴」夏を告げる使者として捉えた、爽やか感のある詩。「音楽」音楽を愛する心が素直に伝わってきます。「鼓動」少し短すぎる詩のだけれど、最後の二行で古代人の瞳をも感じました。「もつと遠くに」パラリンピックを映像で見ていた人の応援歌。命が輝く瞬間の記録。「黄泉比良坂」は「古事記」「オルフェウス神話」も愛しい人と呼び戻しに行き、禁忌を犯し失う話なのでアレレンジすることは良いですが、少し離れている気がしました。

高校生諸君の原稿に読み取れないほどの細字シャープ・薄字書きの原稿がとて多かったのが気になりました。相手に伝えるための文字。役目と力。自信を持って将来のためにも、濃度調整のための原稿を待っています。

短歌

〔市民文芸賞〕

奉公に出されし母の少女期を思ひて辛し負けん気の相  
父と諍ひ下宿へ戻りし吾の元に送金ありぬ送り名なしの  
生涯に笑顔少なき父なりしが遺影ほほゑむ母を隣に

中区

石原新一郎

食べこぼす父を父かと訝りてつくづくと見る父の顔<sup>かんはせ</sup>  
父母の墓二人だけでは淋しかる暫し待たれよわれもゆく故  
越し方の起伏思えば顔<sup>たい</sup>齢の平安を謝し逝くを恐れず

中区

坂口 ちせ



音たてて重機は家を解体すかたえに人なく夕陽てらしぬ  
里の家茶をのむ昼の庭先に赤とんぼついと羽ひからせる  
かけっこはぎこちなくとも運動会ピンクの靴と孫登園す

中区

鈴木 和子

母逝きてふるさと遠くなりにつけりさつきは今も変わらずに咲く  
やぶかげにひとりしずかの咲ける見ゆ清楚な姿心和ます  
万葉の歌人よみし萩の花ひっそり咲けり団地の隅で

中区

鈴木 賢三

吾が運命波乱万丈過ぎて来し想いめぐらす夫との縁  
夫逝きて走馬灯のごと刻は過ぎ良くも悪しきも淡雪のよう  
断酒して十八年の歳月を逝きにし夫にビールを供え

中区

高橋 幸

〔入選〕

半生を奉仕に生きて卒寿いま杖の余生をいか  
に過ごさむ  
中区 倉見 藤子

水引草庭のかたえに楚々と咲く夫の形見の幾  
とせ経しか  
菊一途短かきひと世の夫偲ぶ庭の山茶花大樹  
となりぬ

頭上から三日月さんの呼ぶ声が転ばぬ様に一  
日を生きよと  
北区 伊藤 美代

夏草と格闘つづく汗涙不安が過る来る年の夏  
夕日落ち山里さわぐ蝉しぐれカラスも瞬に我  
もわが宿

冬の朝日入り来る窓辺のベッドの上眠れるこ  
としまだ温き母  
抽出しの小筥にひっそり残りゐし私の臍の緒  
母の勲章  
孝行をもつとしてをけば良かつたと詫びつつ  
墓前に一人草引く  
中区 菅沼 祐子

高齢者が部品のように流されてワクチン接種  
の椅子に至りぬ  
曼殊沙華九輪揃いて突き抜ける今日の青天彼  
岸入りの日  
基準値をはるかに超えるポロトニン医師のま  
なこ手術と決める  
中区 伊藤 雅章

晩鐘が秋の音色で溢れてるいよいよ深む湯宿  
の旅情  
我八十路二十キロ歩き異常なし元氣は財産  
亡父母にサンキュウ  
意味もなく毛虫潰した後悔が良心つつく罰の  
一日  
東区 飯田 裕子

北区 安藤 圭子

アブラゼミ、ニイニイゼミも少なくてクマゼミ集まり温暖化する

松影に寄りて休めば切り株に百匹の蟻が寄り集まりぬ

梅雨晴れてコンビニ弁当食べながら姫街道の風を楽しむ

中区 柴谷 俊行

主無く取り壊されし瓦屋の瓦礫の山に侘しさ募る

晩秋の朝日を浴びて輝けるメタセコイアは金の屏風よ

中区 宮本 恵司

朝十時チェロを弾かむと部屋に入りケースを開く儀式の如く

チェロ抱へ弓を張るのは三日ぶりねぢを締めつつ心を締める

東区 坪井いち子

手術終え病室へやに戻れば傍らあねに義姉の眼差し優しくありて

消灯の刻近づきて長き夜を弄ぶなり天井見つ

西区 伊藤 友治

戦国の歴史を見たか大槓は長屋門脇超然と立つ

中村家の歴史を語る榎の木の切られしあとにうぐいすの鳴く

浜北区 岩城 悦子

湿布貼る夫の手恋ゆる秋の夜の早や来る年は十三回忌

成人の日にと晴着の届きをり奄美の祖母の機音聞こゆ

南区 尾内甲太郎

配達の順路を外れ浜へゆく海まだ冬の匂いのなかに

薄氷の家へ速達届ければ不意に言われる「いともありがと」

南区 池上 佳弘

マスクして帽子を被り街へゆく声かけられて  
会釈のみする  
耳少し遠くなりしが虫を聴く一人暮らしの静  
かさのなか

東区 鈴木 壽子

賽銭箱の木目美しく仕上がりて町の小さな神  
社に納まる  
切り張りの花形障子に写る家共に独りの高齢  
者なり

天竜区 リコリス

小春日に待つてるおやつは焼芋か買って帰る  
にたい焼きもよし  
大作に衝撃を受けビビビビ後日再び労美展  
へ

北区 鈴木 弘子

紅葉を見あげる人のとりどりのマスクの下の  
笑顔を想う  
気がつけばたつぷりの陽と青空に煩うことを  
明日に延期す

中区 鳥井 美代

街路樹は黄葉それぞれ色づきて車窓は秋の美  
術館なる  
気づかずに安易な暮らし重ね来て住みにくき  
世を作り上げしか

中区 遠山 長春

裏庭の丸葉薄荷は自然生え鎌を振るへば仄か  
に匂ふ  
心経を唱へ終へたる静まりに遠くすだくは鉦  
叩きの音

北区 平井 要子

骨癌と戦いながらも明るくて「みこと同じ  
よ」典子さん笑む  
過ぎし日の待合室のおしゃべりはなぜか和め  
り暖かかった

中区 加藤貴代美

同郷の卓球ベアは磐田市の自慢誇りの金メダ  
リスト  
ポータブルトイレ掃除で母想う健康チェック  
毎日して

中区 桜花 ふみ

金色の光ふうわり浴びながらやっここまで  
来たね秋の蝶  
冷蔵庫に密かに魔物棲んでいて時に唸りて夜  
を惑わす

東区 宮澤 秀子

老いてなほ良き眼を持つ幸せよ本の世界への  
めり込みたる  
今生は旅の仮寝と思へども思ひ煩ふことの多  
かり

東区 高木 勝海

老い先の短い身には二年もの自肅はつらきも  
のと知らされ  
マスク顔常に見かけて早二年たまの素顔がと  
ても新鮮

86才の今 東区 大檐 一郎

この道は誰れも行く道通る道病<sup>やまい</sup>振り切りさ  
あ行かまいか  
見渡せば淋しくなりし同窓会挨拶そぞろにい  
つ迄続くや

北区 清水 孜郎

家継ぎて妻と働き八十路なり連れ立てば近し  
秋の駒ヶ岳（中央アルプス）  
胸を突く悲しさありて美しき河野裕子の息が  
足りない

東区 根本 文子

喜寿になる平凡だけど有り難いコロナ禍によ  
り旅もかなわず  
肉が好き魚が好きと各々に台所立つ婚五十年

南区 鈴木 善一

コロナ緩みビーバームーンが世を照らす我が  
身も明るく生きたいと願う  
雑草と四つに取り組む毎日にたわわな実りが  
気持ち和ます

中区 吉野 正子

「お出かけ」はデイスービスの夫のためブル  
ーのシャツにアイロンかける  
夕さりの庭に並びて草をぬく共に存る日の長  
くあれかし

小説 児童文学 評論 随筆 詩 短歌 定型俳句 自由律俳句 川柳

中区 阪口佳寿子  
 離れ住む孫の話をするときの娘はいつも喜憂  
 半々  
 親の思いのようにはゆかぬ子の話そうよあな  
 たもそうだったのよ

西区 渥美 進

酔芙蓉暑中はがきに大のぼし六十余年のブラ  
 ンクうめる  
 佐鳴湖でつり揚げ鯉と背くらべ逆さ富士山波  
 紋に消える

中区 木下 文子

久々に潮見坂より眺めいる大海原は碧く輝く  
 コロナにて聴衆少なきホールなりフォルテピ  
 アノのシューベルト聴く

中区 松浦ふみ子

くしやくしやと顔のリハビリするわれを三面  
 鏡の月が見ている  
 鏝広の夏の帽子とコロナ禍のマスク味方にス  
 ーパーへ行く

西区 柴田千賀子  
 石仏の頂を踏む啄木も賢治も登りしかの岩手  
 山  
 多分そう初めてとなる賀状出す面会できぬ施  
 設の母に

中区 佐野実佐代

万才を笑う老どちほがらかにトンチンカンな  
 会話が家も  
 丸木夫妻沖繩の悲劇描く時米軍ジェット機頭  
 上をよぎる

中区 山本 勝彦

逆光に木の葉いちまい舞うごとく小さき鳥は  
 こだちをうつる  
 花終えて瓶に永らふ藪椿いのちなりけりめぐ  
 りてつぼみ

東区 鈴木 浩子

七月の朝顔の実の弾けをり十月にまた花を楽  
 しむ  
 「大賞の栄誉と努力たたえます」クリスタル  
 の楯届く秋晴

南二 江間 得二  
姿見の孫の手の跡残し置くコロナ禍過ぎて逢  
える日までは  
賜杯持ち男泣きする徳勝龍続けておれば巡り  
来た春

南二 内山 正則  
気にとめず幾十年を使い来し膝の悲鳴はとく  
と聴くべし  
いつしらに日にひとたびは空仰ぎ生きゆくこ  
とを我に課したり

中区 石井 泰子  
「ありがとう」の言の葉多くなれる夫ふつと  
淋しく嬉しくもあり  
「ごめんな」と沈黙の後ポツリ言う夫にうな  
ずき茶をいれに立つ

浜北区 峯村友香里  
きつぱりと飛行機雲が伸びてゆきあなたと私  
の世界を分ける  
立ったままマフラーを編む味噌汁の湯が沸く  
までは自分の時間

西区 かもともこ  
工房に眼光鋭き染師等が居並ぶ薄き光を背に  
し  
手も足もあつて泳げぬ我なればパラ競泳に釘  
付となる

中区 清水 紫津  
恥じらいて深き緑の葉の奥に山茶花の紅そつ  
と咲き初む  
中区 平野 旭  
ブス猫の日々幸福な暮らしなり鏡を持たず野  
に寝そべりて

北区 あひる  
夏の朝我が家のめす猫気に入りて今日まで居  
たり真黒な雄  
リーダーの後を追いつつ六匹の黒き牛達丘か  
け登り

浜北区 竹内オリエ  
たち葵知人がくれしその種を蒔けば翌年りん  
と咲きけり

東区 神谷 司  
 ポカポカと眠気誘うや春の日にフツと目につくカエルの親子

中区 白柳ますみ  
 風荒ぶ目覚めし朝の静けさは亡き人偲ぶ雲は流れて

東区 木村 幸子  
 墓石に微動だにせぬ赤とんぼ線香の煙にあわてとび立つ

東区 井口 絹子  
 深き森あちこちに座す釈迦の像巡り拝みて心洗わる

南区 大庭 拓郎  
 わが心のままに生きたしひた思う銀河を渡る月を仰ぎて

南区 袴田 成子  
 朝日浴びハイビスカスの葉を宿に「居ごこち良いのね」赤ちゃん蛙

南区 相曾多加根  
 二回目のワクチン接種無事に終え梅雨の晴れ間を遠まわりする

中区 岡本 蓉子  
 満開の桜見上げてひと休みタンポポの花も一面に咲く

南区 赤堀 進  
 秋彼岸破れた手袋つくろいし母の思い出ひとり占め

北区 藤原 孝志  
 夫婦とは運動会の二人三脚転ばぬようにリズム合わせて

中区 高山 紀恵  
 馬防柵設楽が原に武士と馬のいななき巡り巡りて

南区 井浪マリエ  
 致 医院へと湖畔を走る対岸に等間隔の枯木の風



会いたいと思う娘へ文字にして長なが書いた  
今夜の日記  
中区 池田 稔

来訪者アクリル板に話し掛く肌にも触れずコ  
ロナ禍寂し  
北区 古谷聰一郎

四季の花々  
藪椿黄色き蕊にメジロ来て晩冬ふゆの山陰やまかげ垂氷溶  
けゆく  
中区 内山 文久

三河松右に左にゆれている光の陰や春の陽炎  
中区 田中 貞夫

友来たり話しはずみて一人居の私今日ものを  
云うたぞ  
中区 渥美 佳子

日の出見て今日の始まり身支度を浮き立つ心  
足も軽やか  
北区 鈴木 民江

大空をすばやくかける飛行機雲その自由さが  
羨ましきかな  
北区 小川 道子

寿ぎに旧知の友と探梅し時の流れに愁いを憶  
え  
北区 フーコ

癒しを求めて  
そよ風に静かに揺れるネモフィラや真つ青の  
空に溶け込んで  
北区 鈴木 勝則

月下美人影の昔の儂さよ井筒の友の去りて久  
しき  
中区 寺田ひさ子

指染めて遊びし日々を思い出すつやつや赤き  
クコが実れば  
東区 栗原 恵子

訪れるは小鳥だけのお正月初氷の上で戸惑う  
メジロ  
中区 中村 照美

西区 池谷 和廣  
 パスパスと叫びしラグーライン際タツクルか  
 わし逆転トライ

中区 神谷 淳子  
 将棋盤見つめおもむろに手をのばす義父ちの笑  
 顔は穏やかなりき

浜北区 大城きみ子  
 村まつり集合写真に写る子の笑顔ぜんかい眩  
 しく映る

天竜区 美山 愛  
 大好きな爺じが逝きて幼な子は言葉少なに星  
 空を見る

中区 大山 啓  
 藤色のランドセル背に駆けてゆく少女よ忘る  
 なコロナ禍の世を

北区 鈴木 健示  
 海に向け自転車を漕ぐぎりぎりとし心臓を透き  
 通らせたくて

中区 福島 正義  
 伊勢神宮参拝  
 肉を削ぎ筋骨むき出し老杉に社を死守する矜  
 持あり

西区 木本 紀子  
 跨線橋登れば空に吸われゆく鯛雲舞ういつの  
 まに秋

中区 内藤久仁茂  
 桜散れば田畑を耕す生業の始まることを懐か  
 しみをり

西区 水野佐喜恵  
 見し夢をうつつのごとく語る母へもつと相づ  
 ち打てておればと

中区 和久田俊文  
 田起こしや畦行く子らの歌声にこわばる土の  
 跳ね踊りたり

浜北区 山下 晏子  
 驟雨行き富士見上げれば虹かかると大観描く日  
 本画となる

秋深し轍踏みしめ一人行く塩の道には馬頭観  
音 浜北区 伊藤 正

父母の相談と言う要求をかなえ続けた良い子  
六十年 浜北区 青海 まち

初明りの届く机に肩並べ書き初めをする二人  
の孫が 西区 河合 和子

平安の雅香りて綿帽子重陽の節句秋天高し  
中区 戸田田鶴子

墓参りの供花に造花の白添へぬ枯れたる後を  
墓所彩らむ 東区 村木 幸子

大泣きの注射済ませて幼子の安堵の笑みに涙  
のすじも 南区 由倉 典之

濁り濃き水晶体を吸い出してレンズ入れ込み  
手術終えたり 西区 伊藤 米子

「長生きをして下さい」と誕生日そう言われ  
る歳なんだ石露の花 西区 野末 妙子

熱帯夜布団の上で転がるも寝れぬ寝れぬと目  
覚めたら朝 磐田市 渥美 朋可

ひさびさの面会解除に取り越しの泡に消へゆ  
く不安の軽さ 浜北区 すぎきとしやす

安産の御守り拾い真つ新を梅の小枝にひよい  
と掛けたり 中区 手塚 みよ

この深夜爆走しまくるバイク音オヌシは闇に  
何を叫ぶや コロナ禍の日常 中区 石黒 實

小説 児童文学 評論 随筆 詩 短歌 定型俳句 自由律俳句 川柳

南区 中村 淳子  
部屋の中松の葉あまた落ちて  
いる植木職人二年目の夫

北区 山田 文好  
「三十年、休もう」なんて  
言わない資本主義  
せめて味わおう地球の味を

西区 遠藤 ゆき  
初夏に祖母の逝きけり橘の  
香り懐かし果樹園のみち

中区 飛 天 如  
風吹かば千の風の一つかと  
耳をすましてしばし佇む

中区 小笠原靖子  
愛車手放し免許返上の勇気  
なくルームミラーに後車の  
いら立ちの顔

東区 寒風澤 毅  
コロナ禍中合唱サークル  
再開すマスクしたままを  
いつか忘れぬ

中区 鵜田 健  
借用の畑九十坪今や水道管  
の敷設工事

短歌選評

村木道彦

若い頃作った「死は汗のひゆるがごとくきたるべし真夏砲丸投げのわかもの」という歌がある。実はこの中には人生の老いも含んでいる。砲丸投げをしているわかものも今は若さの絶頂であるが汗が冷えるように老いが来ることだろう。

二年近く続いているコロナ禍で日常の生活が少しづつ変わってきている人もいるのではないか。不安要素をかかえた環境の中でも、私たちは昨日、今日と積み重ねていく。

生き方は、人さまさまであるが、いづれも無理したがが無駄ではなかったと思いたい。

応募作品を読ませていただき伴侶との別れ、そして老いの作品がとりわけ目につきました。しかしその老いの捉え方が淡々とむしろ明るく感じられたところがよかったです。

次の五人の方を本年度浜松市民文芸賞に推す。

奉公に出されし母の少女期を思ひて辛し負けん気の相  
父と諍ひ下宿へ戻りし吾の元に送金ありぬ送り名なしの  
生涯の笑顔少なき父なりしが遺影ほほゑむ母を隣に

一首目、「負けん気の相」が鋭い観察。

二首目、「送り名なしの」にいわく言い難い深みが感じら

れる。

食べこぼす父を父かと訝りてつくづくと見る父の顔  
父母の墓二人だけでは淋しかる暫し待たれよわれもゆく故  
越し方の起伏思えば類齢の平安を謝し逝くを恐れず

一首目、「父の顔」を「父の横顔」としたらどうでしょうか。

三首目、「類齢の平安」とは厳しい言葉ですね。

音たてて重機は家を解体すかたえに人なく夕陽てらしぬ  
里の家茶をのむ昼の庭先に赤とんぼついと羽ひからせる  
かけっこはぎこちなくとも運動会ピンクの靴と孫登園す  
一首目と二首目ともに牧歌的な雰囲気は活きている。

母逝きてふるさと遠くなりけりさつきは今も変わらずに咲  
く  
やぶかげにひとりしずかの咲ける見ゆ清楚な姿心あます

万葉の歌人よみし萩の花ひっそり咲けり団地の隅で  
三首目「団地の隅」が具体的に印象深い。

吾が運命波乱万丈過ぎて来し想いめぐらす夫との縁  
夫逝きて走馬灯のごと刻は過ぎ長くも悪しきも淡雪のよう  
断酒して十八年の歳月を逝きにし夫にビールを供え

二首目、「良くも悪しきも淡雪のよう」が時間の過ぎたこ  
とを忍ばせます。

定型俳句

〔市民文芸賞〕

声までも凍て子供らの帰りきぬ

中区

山田 泰久

聖樹立つ洗濯屋にもパン屋にも

あちこちに風音つくる落葉かな

客はみな座布団持参村歌舞伎

金縷<sup>まんざく</sup>梅や森の水車の廻り初む

中区

加藤美智代

長身の禰宜の沓音涼新た

防人の歌碑のくぼみや露光る

媼らの不慣れなスマホ日向ぼこ

白き息・パス・タッチダウン・大歓声

南区

鈴木やよい

汁粉屋に女子姦しく外は雪

冬うらら園の動物みな薄目

ほうれん草茹でる曇天偏頭痛

サンドレス素直になれぬ背中あり

東区

川口八重子

絶え間なき滴り神は山深く

正論は時に重たし青芒

霜柱踏みて海馬を目覚めさす

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

わかば風真剣に叱られている

中区

勝田 洋子

あとずさりしながら蟬の鳴きはじむ

野の百合を揺らして過ぎぬこだま号

野仏の胸乳むなちに雀蛾の眠る

滝しぶきかかるにまかせ写真撮る

中区

大平 悦子

林檎むくかすかな音に目覚めけり

どんぐりやところは遠き日と同じ

冬星や静かなる夜の掛時計



すみれ草涙こらえる帰り道

浜北区

峯村友香里

幼子が褒められたくてレタス食む

草の花大人もたまには褒められたい

街中の光を集めて日向ぼこ

エレカシの大音量や冬銀河

中区

杉田みさき

ブラウスの胸に春風入りけり

夏の夜に遠く賢治の貨車が行く

秋風や壁一面の旅葉書

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

初泣の子を抱きあげて夜の座敷

中区

藤本 幸子

気がねなく夫の枕に稲積めり

ひとにぎり日を得て冬の草引けり

干大根大ぶり小ぶりえり分けて

静寂はバイクが裂きて除夜の鐘

西区

池田 智子

外は雨五時起きの花見弁当

晩酌は朝採り瓜のマヨディップ

釣日和藍色深く冬の凧

〔入選〕

恋文を書く夜猫の発情期  
磐田市

渥美 朋可

藍染のテーブルクロス夏料理  
南区

井浪 マリエ

朝冷えし毛布かぶりて齒を磨く

母逝きし齡わが生き墓洗う

わらび餅の声に集いし女子高生

ポストまで時には路地を歩く秋

五月雨や私の涙誤魔化して

家灯り幻想的な早苗田に

本閉じて余韻にひたる虫の夜  
南区

伊藤 久子

寺巡り筍飯のにぎりかな  
中区

岩崎 五郎

稲穂垂る農夫手間隙いとはざる

同窓の母と校歌で卒業す

秋風鈴声囁るるまで囁るるまで

目をこらし孵化せし目高数へをり

快晴の今日は大安大根蒔く

銀杏を拾う人なし宮掃除

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

まめご飯弾んで帰る一年生

中区

小楠惠津子

友来たるカサブランカの香る午後

毬栗に挑む長靴赤黄色

墨の香のひとりの時間冬の夜

西区

柴田ミドリ

訪はるるも訪ふこともなく雛納む

菜の育ち見にゆく勤労感謝の日

夜半ふと切干しまひ忘れしを

集計は今も算盤家計簿果つ

南区

河合三代子

糸切歯生え初むるかな雲の峰

春立つや標本箱の翅ひかり

そよ風はノートを捲る目借時

鍋提げて豆腐屋さーん秋夕焼

天竜区

鈴木 利久

芹を摘む一步に濁る沢の水

子持鮎みぎはの葦をゆらしをり

道草の子の指先にいととんぼ

新しき老眼鏡の夜長かな

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

片仮名へ替はる駅名風光る

東区

鈴木 浩子

鳥羽山の崖百丈の花吹雪

浜北区

中川 正男

キヤラメルとスケッチブック草紅葉

おんぼろの天井裏のつづれさせ

艇庫より担ぎだす声霧の声

転居先告げずの別れ日短

浜名湖の寒海苔かをる船溜り

中区

鈴木由紀子

南区

中津川久子

鬼出るぞ出るぞ早鉦壬生念仏

学ランの突つけんどんや葱坊主

我に欲し森青蛙ほどの意地

癌告知夫の強がり雲の峰

大叔父のわらべ歌出る囲炉裏端

「恋かしら」しゅわしゅわしゅわわわソーダ水

年用意父は仏具を磨きをり

どさと着く文の二行と柿百個

南区

遠雷や採血の針太く見ゆ

中村日出子

好きな花にひとつ加えて吾亦紅

北区

休日のテクノポリスや黄落期

二橋三千代

雲の峰授業始まるオンライン

隣まで三分の径金木屋

新酒みな佳き名賜ひて並びをり

休日のおふたりの梅酒つくりかな

父に似し愚直な夫と日向ぼこ

中区

賢治忌の宵の明星探しけり

名倉 智代

東区

声大き友は善き人花南瓜

能勢亜沙里

凍屋やお供の犬とポストまで

頑張ってゐてもふらふらねこじやらし

北に住む子にも逢ひたし柳葉魚焼く

石垣の屏風折びよふわりなる石路の花

紅梅や自宅警備の猫二匹

再会の友もわたしも春シヨール

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

中区

長生きもほどほどで良い菓喰

長谷川絹代

北区

早春の日差し捉へし風見鶏

山口 英男

切株の温み尻から虫すだく

ふくよかな耳の仏や雲の峰

着ぶくれてなお封じこむ隠しごと

十薬の匂ふ峠のかくれ里

認知症と自分に許し桜餅

恙なく生くる齡や新酒酌む

南区

音読のこゑの強弱梅匂ふ

村松ヒサ子

中区

先づ石を選ぶ水切り夏休み

和久田郁江

梅雨湿る三和土に並ぶハイヒール

休暇明けの少女前髪下ろしけり

参道の右手に社務所菊の鉢

日時計は正午秋麗の山頂

虎落笛島と島とを繋ぐ橋

表紙なき菜園日記秋時雨

九年母のひっそり一つ古書の上  
南区

婦省子のノート数式でぎっしり

将棋さす親子無言の春日向

秋晴に良きも悪きも飲まれけり

水中を火花さながらめだか散る  
南区

茶の花や舞子の下駄の軽やかさ

間仕切とマスクもいらぬ春を待つ

渡辺きぬ代

赤堀 進

シクラメン挨拶文が恋文に  
西区

吹き渡るその名やさしき花菜風

さりげない愛は透明花水木

女学生らしくなったね夏の孫  
中区

さあ描かうコスモス畑青き空

公園に落ち葉一面さか上がり

過去に感謝未来は希望山笑ふ  
中区

捨て切れず着もせず仕舞うコートかな

露地裏の触れば零るむかごかな

縣 裕子

池谷 静子

石井 泰子



八島

浜北区

市川

敏

オリンピックの駆け抜けし日々扇置く

門前の難波茨や夕日影

南区

内海セツ子

倒れたる野牡丹起こすふたりかな

白百合や口の体操ばびぶべほ

聖徳太子の和をもて八島鳥渡る

黄金の稲田や鷺の首見えて

東区

伊藤 倭夫

西区

太田沙知子

味噌となり朝餉の箸に露の臺

広縁はいつも母居す梅の花

ちらほらと紅葉の朝の奈良茶粥

平凡なる朝餉の仕度終戦日

満中陰鹿は冬毛に変はりたり

沙魚<sup>はせ</sup>日和橋の向こうの舟溜り

中区

稲津とし子

中区

小川 恵子

地下道を二つ抜け来し秋の暮

春日傘弾みて渡る丸木橋

行く秋や腹の底より鳴く鴉

打ち水の意志あるやうにどこまでも

短日の抱っこおんぶのヤングママ

無造作に積まれしレール草いきれ

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川

柳

理系女子物理のはての天の川

西区

加藤 喬

凧上がる少年らしき少年よ

冬風や海拔ゼロの家ぼつん

SLの終着駅や落とし文

中区

川島 泰子

人気なき木洩れ日の丘夏薊

過ぎし日を語らふ良夜娘ゐて

草の絮<sup>わた</sup>荒天の野に飛びいでし

西区

絹 枝

波間のうねりふわふわと草の絮<sup>わた</sup>

南瓜<sup>かぼちや</sup>もらうまじまじと見てスープにと

古日記読みて昼寝の暑さかな

北区

後藤 とも

干物も仕舞わずすみし時雨かな

鐘撞堂木の香新たや墓参り

秋山へ指のデスケル当てにけり

天竜区

笹瀬 幸代

秋桜や遺影の夫の笑い皺

顔見えぬ電話がよいの星月夜

白シャツや青春の道登校す

中区

佐野 朋旦

海望<sup>もち</sup>む繭<sup>もち</sup>の実赤き画廊かな

長生きは幸せなのか残る虫

コロナ禍に死ぬならベニス 蝉時雨

北区

鈴木 章子

黒南風や樹林にひそと 崑崙花

中区

竹田 たみ子

ひかげへゴ原生林にハブの罨

豆まきや一人暮らしの十粒程

ボート漕ぐ 高校生の笑顔かな

西区

鈴木 嘉子

西区

竹平 和枝

靴音に鯉が乱せる花筏

露味嘈や寝ぼけた脳に父の喝

遅番の娘に残す秋灯

朝霧や動き始める山の市

玻璃越しに爪先立ちの雪見猫

冬の雷まだ明けやらぬ厨かな

東区

砂間 達也

東区

田中美保子

山椿落ちて峠の暗さかな

川涸れて石の狭間のボールペン

暇道日傘傾げし会釈かな

凧や車のドアを筆らんと

波の打つ露岩ひとつに鶴の一羽

長き夜記憶たどりて鶴を折る

木犀の香り漂う朝参り

東区

根本 文子

母の日に水晶玉の邪気払い

柵越しにふれ合ふ麒麟うらけし

東区

日比つや子

習い事習字に決めた文化の日

春灯しオランウータン引き籠り

スケボーを蹴って少女の夏終はる

駅を出て空風のなか星一つ

中区

橋本 英夫

野良猫やコロナを知らん土手の春

中区

平野 旭

老いてなおこの柄好きと更衣

青天を突く生命の蟬時雨

停電にただ座しており虫の声

案山子の手軍手の白さ空青し

中区

林田 昭子

東区

藤井 星子

朝焼けや手渡しに新聞を受く

寒卵ぬくもり移す掌に

籠り居の部屋の華やぐアマリリス

下校の子鞆の中に蝸牛

ちゃんちゃんこ遺影の兄の笑顔かな

幼子のまとも飛び出す夏蒲団

白粥は終つひのたべもの梅漬ける

南区

藤田 節子

花冷えや孔雀静かに尾をたたむ

中区

山上アサ子

夏草のヒリリと皮膚を擦りけり

公園の丸太のベンチ風薫る

秋の声後ろの正面誰もゐず

年寄りの取り越し苦劳着ぶくれて

会へずともつながるこころ風信子

南区

堀川千代子

母となりシヨートカットの揺れる初夏

南区

由倉 典之

病得て気丈になりぬ薔薇の雨

目覚ましの音かき消して蟬時雨

父恋ふ日「小さな木の実」口づさみ

夏の花焼けた素肌に風のキス

東区

宮田 悦自

河川敷わが家のつばめ混ざるらむ

八十路過ぎ明日は何処いずこに百合ゆりの花はな

西区

渥美 進

だんまりの子を引き寄せて青蜜柑

ラクエンという名のポート冬の湖

結婚けっこんのおやじの涙桜舞なみださくらまう

くつつき虫くつついたまま草を刈る

北区

あひる

ぴちぴちと紫蘇の実しごく夕厨

南区

石川みき

水を汲む滝に沢ガニ堂々と

あかときのカラス叫喚神の留守

東区

飯田裕子

浜北区

伊藤正

能登岬月掴むがに波頭

三和土にて糾う藁や注連作り

奢りなど知らぬ生活や花大根

蝌蚪動く光る水面に雲映る

東区

井口絹子

中区

伊藤好子

車座になつて笑顔とよもぎ餅

通園のバスを待ちをり初つばめ

蟻の列どこまで行くか我も追う

朝採りの匂ふトマトを丸かじり

西区

池谷和廣

浜北区

岩城悦子

月天心佐鳴湖水面煌めかす

今を生きむとコスモスの揺れたれば

コロナ禍はそつと飲み込む噓かな

文化の日足裏に灸してゐたり

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

橋裏をつばらに映し春の水 西区

岩崎 芳子

春彼岸大阪弁のたい焼き屋 中区

小楠 勝代

青蘆の葉のまるまれる暑さかな

参道の羅漢数えつ初詣

母子寮の庭のコスモス華やぎて 南区

大田 勝子

唐黍のハーモニカ喰い昭和の日 中区

小楠 達司

子と酌むと言ひ残し逝く桜東風

櫓田の隅にポツンと道祖神

我米寿「八十八夜」新茶会 中区

大屋 智代

失し物を探しあぐねる濁り酒 北区

小栗 道子

早起きの朝の挨拶庭の蝉

拘泥のとけしきっかけ赤蜻蛉

秋色のカールの先へ雲速し 中区

小粥 通恵

幼稚園の便器の小さきこと四月 南区

小澤 幸一

秋祭太鼓台図に畏まる

アヒージヨの鯛ほろほろ地中海

元旦や一号线は海を越ゆ 南区

尾内 以太

初風呂や指は謹賀の墨まみれ

夏真昼なつまひるぐるぐる描がきとおさな児こと

糟谷 修子

中区

小野田みさ子

中区

加藤 雅子

夏菊は竹箕の端に掛かりけり

嫁ぐ荷に山椒の鉢秋うらら

新米や寺に寄進の一斗米

影踏みの追う子逃げる子息白し

南区

尾林せい子

南区

金子 典子

野辺の花摘みて月見の膳飾り

死ぬるには何も持たぬや星月夜

潔き朝の轍や雪の宿

子の名前幾度書きしか卒業子

北区

影山 久恵

南区

神谷知恵子

春雨にけぶる街灯宴あと

少年はいつから無口半夏生

夜店の灯誘われ母子りんご飴

逢ふ度に背丈伸びる子冬木の芽



リボン付き傘寿の母の夏帽子

西区

かもともこ

夏の空雲の落書多き日も

西区

川原 弘美

幸福は此処にあるもの冬ぬくし

植木鉢は明治の火鉢黄水仙

ススキ持ち祖父のあぐらに吾子乗りて

中区

かりりん

古民家の雑木紅葉はこもごもに

中区

菊池みよ子

駆け足で帰る子ポツケに蒲公英よ

たしなめぬ人と二人で温め酒

戦争を語りつくして秋天へ

中区

川合 泰子

鯛よりも高値の付きし秋刀魚かな

北区

北村 友秀

釜ぶたに猫うずくまる冬の朝

秋刀魚焼く匂ひかぎつけ猫二匹

もう一夜泊まつていけと衣被

中区

川上 勝

親芋に確と付きたる子芋かな

東区

切畠 正子

散骨のお伴は綿毛ちんぐるま

後手組み青田眺むる漢かな

夏草や追いかけて来る次々と  
掘りたての筍ご飯父しのぶ

東区

齊藤 純子

ミントンのタオル一枚早春譜  
マンゴーにビルマ戦線父偲ぶ

中区

白柳ますみ

数へ日やあれもこれもと思へども

西区

佐藤 健

もふもふと犬付いて来る梅見かな

西区

鈴木 和

下萌や杖を休めし足元に

かなかなや五右衛門風呂の水の音

南区

小 百 合

中区

鈴木 和子

青き海浮き輪の花がぶかぶかと

七五三姉妹年子で競ひけり

七五三浜砂利踏んですまし顔

祖母も二女泣いた記憶の七五三

北区

清水 孜郎

北区

鈴木 健示

コロナ禍を泰然自若鳴く蛙

松茸飯兎にも角にも目を閉じて

姫街道難所の坂や散り椿

小刻みに箒の音や秋の朝

沖はるか夢遙かなり夏の海 中区

鈴木 賢三

友の声思い出せずに月を見る 東区

高木 勝海

年ふれど心ときめく桜かな

サザンカの咲き初めても孤独の日

浮き見詰め釣り師一人の日永かな 西区

鈴木 智子

新米や瑞穂の国の先細り 中区

竹下 勝子

夏座敷ランプ一つが置かれあり

文化の日鳥獣戯画のお道化ぶり

赤紫蘇の色も香りも指の皺 南区

鈴木 直美

薬一つ朝餉に添へて梅雨に入る 中区

館石 照子

日焼け止めリユックの中へ子供用

ちちははの腕のぶらんこ初詣で

秋深き巨石しづもる涓伊いの宮 中区

鈴木 みちゑ

初参り鈴鹿の森も凜として 中区

田中 愛子

木洩れ日と鶉の声降る宮の杜

一人鍋娘も一人淋しかろ

二歳児の姉となる日や菊日和

中区

寺田ひさ子

若葉して入江に浮かぶ笹の舟

南区

中村 功

空蟬や痛みの多き世に残る

土用東風廃校の池水枯るる

中区

徳澄 英樹

中区

中村つぎ子

逢へなくも旅のたよりやアサギマダラ

蟬の穴覗く子の黙路線バス

ネモフィラやおカリナの澄みわたりけり

藍浴衣下駄に残りし歩きぐせ

中区

鳥井 美代

中区

野田多満子

侘助の花の気品を我が身にも

制服を見せに来る子よ風光る

ドクダミの括り干されし梅雨晴れ間

故郷や土間に西瓜の五つ六つ

中区

永田 恵子

北区

野田智恵子

春光を感じ草木目を覚ます

岬より潮花見せし晩夏かな

そよ風にコスモス揺れる野原かな

枯蟪蛄落日の色まとひけり

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

北区

落ち葉踏み夫婦仲良くウォーキング

古橋美由紀

西区

境木の檜を倒し冬の空

松本憲資郎

ほかほか芋かかえ西空茜いろ

枝打や梯子の掛かるところまで

南区

椋鳥の饒舌夕星のターミナル

古谷とく

西区

水木の実学童保育空き家跡

宮崎季有美

捨てられぬ絵本を開く炬燵かな

縄文杉の日めぐりめぐくる敬老日

北区

石の間の流れ涼しや法師蟬

牧元久

東区

父と子の釣竿しなる雲の峰

宮澤秀子

花筏杓で掬いし滝不動

麦藁帽子脱げば潮の香日の匂ひ

中区

昼餉とる家族団らん軒簾

まさこ

天竜区

駐車場の柳青める風やさし

美山愛

娘嫁し二人に戻り除夜の鐘

楽しみは見つけ出すもの露のとう

寺の庭銀杏落ちて足早に

北区

山川美恵子

嵐の前視界広がる鱗雲

西区

浅井裕子

馳走とて黒こげ秋刀魚山の宿

北区

伊藤アツ子

竹落葉ひらひらと舞う撮へと

北区

山口京子

梅月夜家業一途の兄召され

中区

伊藤栄里

懐かしき水着眺めてハワイかな

中区

山田知明

木犀の香や切りたての髪そよぐ

行く船は銀河の下を通りけり

北区

伊藤美代

果てしなく続く鉄路や秋の風

朝顔におはようさんとランドセル

中区

右崎容子

石舞台古墳の由来亀の鳴く

西区

山本晏規子

田を追はれ都市計画や遠蛙

天竜区

氏原魁星

雛納め雛にさよなら一人言

まつたけで家族だんらん山の味

公園にて 中区  
 孫掴む逃げもしないね兜虫 中区  
 さつまいも無人販売小銭出す 中区  
 加藤貴代美

幼子が割る薄氷に光見ず 中区  
 大石 万鈴 東区  
 受験生寒さ蹴散らす熱気かな 東区  
 神谷 司

幾千年この岩山や紅葉照る 中区  
 大村千鶴子 北区  
 星飛ぶや住み心地良き遠江 北区  
 坂本 清美

夕顔の花をかぞえて日々記す 中区  
 岡本 蓉子 中区  
 小春日や猫様ベンチ一人占め 中区  
 佐藤 晃成

子不知の空を震はす冬怒濤 西区  
 刑部 末松 中区  
 世の中を埋め尽くさんと水雨かな 中区  
 宍戸 理乃

海月たちゆれては秋を連れてくる 中区  
 一 義 西区  
 さるすべり妻を介護の散歩道 西区  
 清水 康成

カールを吹く色なき風や駒ヶ岳

南区

下位 満雄

波の華遠く恋しき父の里

浜北区

竹内オリエ

もう少し生きねばならぬ夏祓

南区

須川てる子

法名と俳号違へ初句会

中区

竹田 道広

秋の灯に乗り場尋ねし白き杖

南区

鈴木 敦子

バラシンシングストーン秋の空へ立つ

西区

竹平 安則

奥山の空一面の桜色

北区

鈴木 勝則

友よなぜ急ぐ来世らいせの山眠る

中区

田中 貞夫

露天風呂枯れ葉一枚友として

中区

鈴木 利定

蟻地獄見つけし男児声放つ

東区

坪井いち子

風花にアロエの穂先天をつく

中区

高山 紀恵

干涸びる蚯蚓夜に出て戻れない

中区

手塚 みよ



亡き母へ見守ってねと墓参り 中区

鴫田 健

母白寿水仙が好き人が好き 浜北区

平松 茂子

雑煮餅長寿を願い伸ばして喰う 南区

利徳 春花

秋の浜心の整理一歩づつ 中区

深谷とく子

風鈴のよく鳴る午後や嫁を待ち 中区

戸田田 鶴子

観月や嫁ぎ先より来るライン 北区

藤生 君江

華麗なる桜並木で宴かな 南区

永井 眞澄

まん丸き地球の友や今日の月 北区

藤原 孝志

秋の昼白蝶よぎる山上湖 西区

野田 俊枝

猫じゃらし摘んで帰りてタマ恋し 北区

松本 栖枝

お茶の間を居酒屋にして夏夕べ 中区

飛 天 如

熱燗を酌んでコロナを遠ざける 南区

水野 健一

にいにい蟬己が道行く小声でも

中区

宮本 恵司

遠雷や観劇帰り科白真似

中区

山口 一郎

ひっそりとコロナ正月明けて行く

中区

山中 伸夫

ひぐらしの声の響きて募参り

中区

和久田 俊文

高柳克弘

高浜虚子という俳人が、選句の基準について重要なことを言っています。「先ず私は俳句らしいものと、俳句らしくないものとを区別する。その思想の上から、またその措辞の上から。思想の上からは大概なものは採る。非常に憎悪すべきものは採らない。措辞の上からは最も厳密に検討する。」〔玉藻〕昭和二十七年十一月号)。「俳句らしいもの」と「らしくないもの」の違いは難しいのですが、「思想」において大概のものを採るといつているところが注目されます。人それぞれ個性があり、俳句にして伝えようとすることもさまざまですが、そこでえり好みはしないということです。句の良し悪しをわけるのは「措辞」です。効果的な語順か。レトリックは十全に生かされているか。省略はうまくできていないか。措辞を見るということは、作者のひとりよがりではなく、読者に伝わる句かどうかという点を見とらえてもよいでしょう。自分の句を客観的に見て、「措辞」を吟味してみると、いつそう磨きがかかるはず。

聖樹立つ洗濯屋にもパン屋にも

山田 泰久

現代では「クリーニング店」というのが一般的ですが、この句では「洗濯屋」が合っています。開発の進んだ新しい街というより、昔ながらの街が思われるからです。布を白くする「洗濯屋」と、白いパンを連想させる「パン屋」とが、雪のイメージを呼び込んでくるのも工夫されています。

金縷梅や森の水車の廻り初む

加藤美智代

「金縷梅」は早春、ほかの花にさきがけて咲きます。「森の水車の廻り初む」——つまり雪解けのころにふさわしい花といえるでしょう。「水仙」や「白梅」と置き換えてみると、はつきりした黄色の「金縷梅」が、色彩感の上でも、適していると気づかれます。

冬うらら園の動物みな薄目

鈴木やよい

冬日和のあたたかさに、動物園の象もシマウマもカバも、みんな気持ちよさそうに薄目をしているというのです。実際には、「みな」とまでは言い切れないうえ、あえて「みな」といった誇張によって、大変ユーモラスな一句になっています。

絶え間なき滴り神は山深く

川口八重子

「神は」で句切れをはさみ、「山深く」とつながっていく調べが重々しく、幽玄な山中を詠んだ句として、内容に合っています。内容と調べとは、密接にかかわっているのです。

わかば風真剣に叱られている

勝田 洋子

叱られている心象を季語に託すとすれば、ふつうは冷たい風や、荒々しい風を選ぶのではないのでしょうか。この作者は「わかば風」という、すがすがしく輝かしい風を選びました。真剣に叱ってくれる人への感謝の念を、この句からは汲み取れます。そこに、この作者ならではの個性が出ています。

滝しぶきかかるとまかせ写真撮る

大平 悦子

スマートフォンで手軽に風景の写真を撮れるようになって、現代的な風景です。滝しぶきがかかるとなるとどこかでそんなことをして、大丈夫かなと思ってしまうですが、まさにそこが作者の狙い。滝の迫力に打たれ、できるだけ近くで撮りたいと願ったのでしょう。滝への思いの強さが伝わってきます。

自由律俳句

〔市民文芸賞〕

風食べる砂丘のぞわぞわ咀嚼音

南区

中津川久子

夜明け前星載せた三日月の笑顔

中区

中谷 則子

「入選」

傷口を這う熱き指の痛み今も脳裏に

中区

桜花 ふみ

ひと刷毛のさつと伸びたる秋の雲

中区

鈴木 早苗

君の声が昨日と違うと感じたあの日

風やさしく今を生きる私の背にそつと

真正面富士を仰ぎて曼殊沙華  
気兼ねなく大きな一歩秋の旅

威張りはじめたお天道さま冬を畳む

東区

源 次郎

夜を無口に白い花びらの吐息

東区

宮本 卓郎

さみだれに過去の記憶流し去れば更地

窓辺の月が映すモノクロームの記憶

落ちつくところ探し ただひらひら舞っている

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

風の便りが無色透明の封筒で来る  
南區 村松ヒサ子

太陽を浴びて眩しいガラス張りのビルの林立

歩いてても歩いてても辿り着かぬ夢の中の我が家

風、咲いたばかりの花びらを落とす  
東區 井手賀代子

別れはいつから「さようなら」は言わない

サイフォンの音のしずかさ初秋の窓辺  
浜北區 岩城 悦子

地球の傷み拭はむと春夕焼けのささやき

新緑を影の歩幅であゆみ行く人  
南區 大庭 拓郎

淋しさも途切れる時ありてご飯を作る

ねじこまれている競馬新聞へ吹く秋風  
南區 尾内 以太

夕暮の木は咳をしている

青い空 天は変わらぬ 無常かな  
東區 神谷 司

受験生 もうすぐ見える 近い春

重き鍵束帰る家はひとつなのに  
中区 杉田みさき

ただただシンク磨く夜は透明に

北区 鈴木 章子

おかえり かぼちゃの馬車 夢の中で

中区 ヒメ巴勢里

『カラ元気』なんてせず弱い貴方が見たかった

やつとめぐり逢えたね 星のエスカレーターで

駅降りて白く匂う百合を撮る

中区 鈴木 和子

深く吸う稲架はさの稲穂のかくわし

中区 渡辺 憲三

可も不可もなく何もしてない誕生日の午後

マスク越しまなざし深き人に会う

紙コップそつと置く検診の朝

浜北区 竹内オリエ

コロナ禍で祭り提灯出せぬ手寂し

磐田市 渥美 朋可

金木犀あなたを思い出す香り

南区 中津川久子

何もかも面倒で放り出す明日への思考

浜北区 伊藤 正

山頭火分け入りし青山独り辿る

南区 夜の雨が寝返り打って女の妬心

伊藤 美代

三面鏡の死角で編み返してる腸

北区 この寒さ感じとり河津桜くる狂うがごとく満開に

残照透かし櫻巨大のモンスタ―

天竜区

岩本多津子

写経をして日常から離れた時間に入る

北区

鈴木 勝則

もう来ない夏鳥きみ 項垂れ歩むうなだ 城公園こうえん

中区

内山 文久

青虫を摘み取る朝の日課成り

中区

鴫田 健

言葉のピアノニスト君「シヨパン」を語る

西区

遠藤 ゆき

友来たる咲き競うなり時計草

中区

戸田田鶴子

人生半分一緒だった亡夫 桜落の道一人歩く

中区

小笠原靖子

メガネ取りと ストレートパーマにし 美女びじょになりました

南区

永井 眞澄 実とは

孫からの絵手紙うれし春の日に

中区

岡本 蓉子

青空映して揺れる梅の香り

中区

中谷 則子

雨音に浸かる岩風呂湯仕舞う

中区

嘉山 春夫

宅配便気づかぬままの置き配よ

南区

中村 淳子



小
説
児童文学
評
論
随
筆
詩
短
歌
定型俳句
自由律俳句
川
柳

赤まんま取りながら遠い日遠い里

東区

根本 文子

棘多いいばらの道を潜ってきた

北区

古谷聰一郎

レターパック使い初めなり入学祝

天竜区

美山 愛

ヒコーキ雲その速さを孫と見る

天竜区

リコリス

## 自由律俳句選評

鶴田育久

## 選を終えて

今回をもって自由律俳句の選者を辞することになりました。拙い選でありましたが、ともかく長い間この任を続けられましたのも、偏に皆さんのご尽力の賜であると深く感謝しております。

尚、後任の宮本先生は長らく教職にあつた人でしたから、指導力には定評があります。安心して後事を託せる方です。

さて、最後の選になりますが、例によつて十二句を予選句に採り上げました。○印は二次予選句です。

○夜明け前星載せた三日月の笑顔

地球の傷み拭はむと春夕焼けのささやき

○夕暮の木は咳をしている

○夜の雨が寝返り打って女の妬心

○風食べる砂丘のぞわぞわ咀嚼音

もう来ない夏鳥うなだ 項垂れ歩む 城公園こうえん

窓辺の月が映すモノクロームの記憶

○淋しさも途切れる時ありてご飯を作る

真正面富士を仰ぎて曼殊沙華

○可も不可もなく何もしてない誕生日の午後

風の便りが無色透明の封筒で来る

夜を無口に白い花びらの吐息

市民文芸賞には次の二句を推します。

**風食べる砂丘のぞわぞわ咀嚼音**

ぞわぞわという独特なオノマトベが秀逸です。自由律俳句ならではの面白い表現だと思います。

**夜明け前星載せた三日月の笑顔**

この句は三日月で生きています。顎のしゃくれた月だから絵になるのです。

**夕暮の木は咳をしている**

この句の良さは、なんの外連もなく、ただ咳をしていると端的に表現していることです。余分な説明もないことから、反つてより夕暮れの情景が想像出来ます。

**夜の雨が寝返り打って女の妬心**

女の妬心と答を出していることで、夜の雨が寝返りを打つという意味深な折角な雰囲気や破壊してしまいました。惜しまれます。

**可も不可もなく何もしてない誕生日の午後**

この句の場合は、誕生日の午後とまで言い切っているのがミソです。可も不可もないという何でもない誕生日の様子が眼に浮かびます。

川柳

〔市民文芸賞〕

反抗期積み木を崩す音がする

東区

菊川 文江

指切りの指の疼きを知る辛さ

東区

竹山恵一郎

ポケットに隠した嘘がこぼれ落ち

中区

伊熊 靖子

自意識の鎧を脱げば視野ひらけ

西区

鵜 瑠璃

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

「入選」

照明が落ちてピエロの無言劇

中区

浅井 常義

シャッターへ浮世の風が八つ当たり

ボタン穴ひとつずらして聞く話

南区

鈴木千代見

ふる里の思い出巡る母子草

真つすぐに生きてささくれ気が付かず

現実の影は世相に揺れている

妥協して大河に染まるひと滴

グッドラック明日に目覚める老いの足

錆びた釘頭が取れてしがみつく

中区

嘉山 和美

ひとすじの光チャンスにする本気

山の湯で心温めて問う余生

天竜区

鈴木 俊彦

ただいまのトーン見抜ける母の耳

父の傘畳むと決めた星月夜

臆測が大手を振って会話する

身の丈の浅瀬で我慢老いを知る

閉じ込めてふとした時に出る涙

診察後同じ花でも違う色

逢えぬ孫待ちくたびれた糸電話

コロナ禍に目覚めワクワク翔タイム

思惑は外れ覚悟の命乞い  
西区 鈴木 均

本気度で見える景色が様変わり

苦難こそ前進の糧嘔吐かぬ

悲惨への無欲の支援こそ平和

目からウロコ言葉の垣根越した今

西区 竹川美智子

木枯らしを老いの孤独に耐えて聞く

蛸に追いたてられる余命表

断捨離に未練が残り託す処理

壺の中チャリンと音し無人市

鯉のほりリュックとなりて戦後生き

解って欲しい分かるもんかと青い葦  
北区 田中 恵子

ごめんねが無くて尖ってゆく空気

目的地見えたら俄然湧く気力

関係ないさ夢語るのに歳なんて

芽が出たね花が咲いたねそんな日日

南区 牧田 龍司

寂しさが募る夜長のノクターン

ごめんねのひと言が消す蟠り

お迎えもうれし孫からありがとう

年金の暮らし楽しむおうちカフェ

聞き役がいなくて寂しひとり言

良い目覚め幸せ探す靴を履く

中区

宮崎 和子

迷う時意志の強さが道拓く

見方変え許せる事が多くなる

九条が軸となつてる平和な日

切りのない欲が地球を泣かせてる

天竜区

宮澤 正人

借金も貯金も無いが山はある

廃屋になりし実家に朝日さす

山菜の旨味奥歯で噛み締める

猿が来て断りもなく芋を食う

過疎の町日本の未来見るごとし

夢いっぱい跳んだ日もある古日記

北区

山口 英男

まっすぐを歩けば背筋伸びてくる

どの芽にも咲く日の夢はきつとある

心地よく酔わせてくれるほめ上手

不足ない日日の暮らしに感謝する

中区

伊熊 靖子

耐える子を母は黙って抱きしめる

友と会う夢を見た日の鰯雲

出遅れてリズムに乗れず逃がす運

コロナ禍に足裏疼く旅の夢

ストレスも溜めてゴミ出す月曜日

中区

池田 稔

新茶呑む湯気の向こうに初夏の風

東区

内山 敏子

言い訳も愚痴も動じぬ父の壁

頑張ろう一声たしてもう一步

追い掛ける夢の欠片にせまる刻

枯れ草に包まれ小さな芽が育つ

悔い残る仮面を洗う深夜風呂

さりげない言葉でフォローする介護

南区

伊藤 信吾

中区

岡本 蓉子

父の留守家を守った母ひとり

ちぎり絵に亡友の笑顔が浮かびくる

鮭一尾釣った釣ったと北の友

この一步感謝して行く八十路

妻の背が母に似てきた割烹着

残された機能を生かし金メダル

母の友旅立ち聞いて駆けつける

彼岸入りおはぎを作り亡姉偲ぶ

遠方の友にも会えぬもどかしさ

北区

小川 道子

解放感あんな幸せ有ったのだ

満月と明暗分ける浮世かな

新米のほのかな香り至福なり

観客の真ん中にいる主人公

北区

加藤 典男

悩み抜き得た結論に身を任せ

好きな町海辺の松と語り合う

各駅の人生乗せる改札へ

色褪せた記憶の中の優しい手

東区

菊川 文江

幾つもの試練に耐えた母の腕

思春期の揺れる心に嘘ひとつ

不揃いの胡瓜の主張篤と聴く

心にもA4ほどはある空き地

東区

源 次郎

両の手の届いた月がぼろり落ち

西陽射す坂道上る八十の杖

終わろうとする旅路へのみおつくし



税金のよもやよもやの使い道

中区

鈴木 和子

カーナビの声が恋人ひとり者

中区

高山 功

解体の主なき家に緋の夕陽

笑み浮かぶバックの駐車ぴつたりと

マドンナの酌に浮かれるクラス会

拉致の闇いかなる手なら帰り来る

海外へ娘に世話を焼かれつつ

中区

鈴木 敏子

東区

竹山 恵一郎

いい人を演じ続けて丸くなる

よく喋るピエロが過去を曝け出す

種を蒔き春の花壇の絵を描く

断ち切れぬ過去に絡まれ老いの足

ヒヨドリの仕業と気付く余所の柿

色褪せた少年の夢捨て切れず

冴える目も本が優しく寝かしつけ

遠い日の記憶が不意に甦る

知らぬ間に年季の入る隠し味

東区

竹山 容子

薬より効果絶大その笑顔

向こう見ず言われた昔なつかしい

年輪の見える鏡に独り言

中区

鶴見 芙佐子

会話途切れ言葉探している二人

小説の中の言葉が背中押す

集まって無駄話して笑いたい

デジタル化私を置いて進んでく

一杯の水眠い体に染み渡る

中区

名倉 智代

基礎練習やがて大きな花が咲く

困ったな名前ど忘れどちら様

だってでも言い訳するは悪い癖

天竜区

美山 愛

輝きは無観客でも金は金

打ち解けて井戸端会議出る余裕

期限切れ食べて事なし持つ自信

コロナ禍にマスク時代が定着す

1mmの希望を繋ぐ多様性 西区

山田とく子

向かいあう心のとげがあばれ出す 中区

足立 和代

寿命まで悔いのないよう食べ歩く

迷い道今でも迷い生きてゆく

歳月が恨みつらみを押し流す

正解のわからぬ道をまた進む

いい仕事しました子らの手が温い

旅立ちを濁さぬように灰汁を抜く 中区

荒沢 博

あわれやかな富が全ての餓鬼地獄 中区

山中 伸夫

しがらみを抜けた私は今が旬

膝で寝る猫のイビキに癒されて

返せない恩はその都度お裾分け

猫逝きて畳に残る爪の跡 北区

ランドセル期待の重さつまってる

池谷 八重子

向上心上へ上へと芋のツル

ほめ上手育てた孫に桜咲く

声変わり伸びたる背丈刻を知る 北区

いつまでも子は幼くて胸に住む

東区

川口八重子

「限定」に財布のひものつい緩み

立ち話あれこれそれで通じ合う

東区

佐次本浜子

忘れてた時に顔だす羞恥心

ひきこもり笑顔なくても日日平和

陽を浴びて花に水やり生きかえる

東区

佐野ふみ子

鉛筆ポロリマヒした手からこぼれ落ち

誰よりも動いて欲しいこの手指

マヒした手に添える左手愛おしい

看板を変えたお陰で勝ち残り

東区

高木 勝海

選挙区で落ちたゾンビが復活し

早寝して早起き出来ぬ冬の朝

西区

高柳 龍夫

血圧計不安で超える境界値

備蓄用ここにあつたか期限切れ

アニメ見て絆深める孫と爺

南区

寺田喜代子

姿見にうつる背中が亡母に似る

水やりにおいしくなれと言ひ聞かす

席ゆずられ老いの実感納得し

使い捨てもったいないがしゃしゃり出る 中区 徳田美知子

デジタル化コロナ対策押し進め

生活を気候変動おびやかす

中区

八十路なお今も青春春うらら

桜散る一夜の雨のにくらしさ

天の川逢いたき人は遠い国

中区

三代が空を見上げる鯉のほり

卒寿まで脇目もふらず老いの道

老いて尚明日を信じて歩き出す

戸田田鶴子

中村 禎次

リベンジへ燃える心とクールな目 西区 鷺 瑠璃

継母ははと子の信頼強く築く瞬間とき

笑顔でもへこんでいても君は君

南区

祭り上げ誉めそやされて蚊帳の外

いわし雲夕陽に染まり食べ頃に

宣言が明けて飲み屋の灯が躍る

西区

入るたび手指消毒で手荒れする

脂のる秋刀魚は今や高級魚

由倉 典之

池谷 和廣

あの時がこうだったらと悔む日々

浜北区

伊藤 正

許せぬか他者の過ち迷い花

旅をして日ごろのつかれ捨ててくる

北区

鈴木 勝則

地雷のごとゴキブリ団子置きにけり

浜北区

岩城 悦子

耳遠く目はかすめども口は別

中区

鈴木 賢三

聴診器当てればすでに梅雨の入り

考える人のポーズで眠りこけ

江間 得二

鈴木 民江

携帯に今でも残る友の声

南区

食卓にピカ一光るさくらえび

北区

三猿も上手く使える歳となり

妻の味孫を相手に酒すすむ

かとうのじい

中津川 久子

奴も逝き賀状書くのも一けたに

中区

破りたい殻にいい風きて踊る

南区

聞かされる同じ話を三回め

取り消しキー人の情もワンプッシュ

リサイクルショップに並ぶ昭和家具 東区 根本 文子  
 虫すだく夫入院一人きり 北区 藤生 君江

折紙を得意としてる細い指 自分史書き夫の短所転換す

汚染水魚黙して春の海 中区 平野 旭  
 カンバスに出ない出せない自分色 中区 馬淵 征稍

藍消えぬ道一筋の翁の手 舗装した隙間の土に四季の花

北斎の今も巷に名所図会 北区 フーコ  
 下り坂前を見つめてゆつくりと 東区 宮澤 秀子

謙虚とはいつも誠実友増える 一歩ずつ明日へつなげてゆく歩み

柏餅濃茶で友と弾む午後 東区 藤井 星子  
 長生きの初物サンマ夫婦膳 東区 森 恵子

田んぼ道コスモス揺れて深呼吸 温暖化紅葉も見ず冬が来た

秋桜の色が年々増えてくる  
北区

谷田貝忠弘

世の中は評価と差別紙一重

母親の人生かける俳句帳  
中区

加藤貴代美

コロナ禍で昔の知恵を掘り起こし  
南区

あつこ

コロナ禍も変わらぬ寒さ一段と  
東区

神谷司

人の世は十人十色の道はるか  
北区

伊藤美代

愛犬といびきで会話澄んだ夜  
東区

河島いずみ

忘れたる眼鏡さがしてメガネ掛け  
南区

大庭拓郎

風鈴もコロナ恐れて部屋の中  
北区

後藤とも

聴こえるは遠き昭和のメロデーか  
北区

影山久恵

顔のしわ喜怒哀楽を織り込んで  
中区

白柳ますみ

柏手が響くや今日も無事祈る  
中区

高山紀恵



小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

さよならの最終電車駆けてゆく

浜北区

竹内オリエ

ワクチン打ちバイク飛ばして湯の街へ

中区

早水 精一

根無し草父母亡き里は過疎化へと

西区

竹平 安則

夫婦共青春ありし白髪かな

北区

藤原 孝志

決断の早い気性は親譲り

中区

手塚 美誉

いつからか妻の機嫌を探る癖

北区

古谷聰一郎

棄てる残す体力勝負秋の日々

中区

寺田ひさ子

幼子の「じいじ若い」と初ヨイシヨ

中区

和久田俊文

責任は重いと言うもとらぬ総理

南区

ど ぜ う

横断の歩きスマホを待つ車

中区

戸塚 忠道

## 川柳選評

## 今田久帆

今年は応募者が昨年より九名減り、四二六句の応募でした。その中で私の心を捉えた二五句を市民文芸賞候補に挙げ、熟考した上で、四句を市民文芸賞とさせていたたきました。

同じ様な日常が毎日過ぎ去って行きますが、平凡に見える日常でも、視点の当て方によって、その姿の違った局面が見えてきます。アンテナを高くして、今までと違った角度で捉えると日常の新たな一面に気付くことができます。

コロナ禍で行われたオリンピックを選手の視点で考えると、困難な状況の中でも、自分達が参加できるチャンスをもらい、感謝でいっぱいと言っています。運営側からすると、多様性と調和、そして安心安全の大会を目指したと言っています。コロナ禍の国民からすると、大会とコロナ対策をどのように両立するかが問われました。どの視点からオリンピックを見るかは更に分かれ、一人ひとりの思いの数だけ存在しました。オリンピックの前と後でも、個々の思いも大きく違っていました。それゆえに、自分の思いを明確にし、共感を得られるようにすることや新たな切り口を示すことが重要になってきます。

## 市民文芸賞予選句

ごめんねが無くて尖ってゆく空気  
本気度で見える景色が様変わり

悩み抜き得た結論に身を任せ  
ひとすじの光チャンネルにする本気  
猫逝きて畳に残る爪の跡

種を蒔き春の花壇の絵を描く  
向かいあう心のとげがあばれ出す  
老いて尚明日を信じて歩き出す

木枯らしを老いの孤独に耐えて聞く  
見方変え許せる事が多くなる  
一歩ずつ明日へつなげてゆく歩み  
照明が落ちてピエロの無言劇

デジタル化私を置いて進んでく  
基礎練習やがて大きな花が咲く  
妥協して大河に染まるひと滴  
診察後同じ花でも違う色

年金の暮らし楽しむおうちカフェ  
心地よく酔わせてくれるほめ上手  
旅立ちを濁さぬように灰汁を抜く  
枯れ草に包まれ小さな芽が育つ  
廃屋になりし実家に朝日さす

## 市民文芸賞

## ◎ 反抗期積み木を崩す音がする

反抗期には思春期の急激な変化や不安の中で、拒否や反抗的な態度が見られる。自分を壊して再生し、自分を確かめようとしている。反抗期を積み木にたとえ、うまく表現している。

## ◎ 指切りの指の疼きを知る辛さ

指切りにはそれなりの責任がついてくる。その責任の重みを知っているだけに、何とかしようと思ひ苦しんでいる。

## ◎ ポケットに隠した嘘がこぼれ落ち

日常で、その場を繕おうとしてウソをついてしまうことがあるが、そんなウソはポケットに隠してもすぐに露見してしまふ。

## ◎ 自意識の鎧を脱げば視野ひらけ

自分自身にばかり意識を向け、鎧で内面を守っていると、外への意識が薄くなるので、自分を解放して視野を広げたい。

# 浜松市芸術祭

## 『浜松市民文芸 第68集』作品募集要項

### 一 趣 旨

市民の文芸活動の向上と普及を図るため、創作された文芸作品(未発表)を募集して、「浜松市民文芸 第68集」を編集・発行します。

浜松市

### 二 発 行

公益財団法人浜松市文化振興財団 浜松文芸館

### 三 編 集

浜松市内に在住・在勤・在学されている人(ただし、中学生以下は除く)

### 四 応募資格

### 五 募集部門及び応募原稿

部 門	枚数等(一人)	部 門	枚数等(一人)
小説(戯曲を含む)	50枚以内(一編)	児童文学	30枚以内(一編)
評論	25枚以内(一編)	随筆	7枚以内(二編)
詩(漢詩を除く)	50行以内(一編)	短歌	5首以内
定型俳句	5句以内	自由律俳句	5句以内
川柳	5句以内		

※ 原稿用紙はB4判(四〇〇字詰め、縦書き)を使用してください。

※ ワードプロ・パソコン原稿(二〇字×二〇行・縦書き)A4判でも結構です。

※ 原稿が複数枚になる場合はページ番号を付けてください。

選者の氏名は、令和四年七月配布(予定)の「浜松市民文芸第68集」の作品募集要項に記載します。

令和四年九月一日(木)から十一月二十日(日)まで。(必着)

### 六 選 者

### 七 募集期間

## 八 応募上の注意

- ① 応募作品は、本人の創作で未発表のものに限ります。他のコンクール及び同人誌・結社等へ投稿した作品は応募できません。
  - ② 応募する作品ごとに、規定の応募票(コピー可)を必ず添付してください。応募票付き募集要項は、浜松文芸館、浜松市文化振興財団、市役所創造都市・文化振興課、中区まちづくり推進課、市内の協働センター・図書館等の公共施設で入手できます。浜松文芸館ホームページからも印刷できます。
  - ③ 応募原稿の書き方については、別紙募集要項の「応募原稿の書き方」をご覧ください。
  - ④ 応募時に、選考結果通知のための返信用の定形封筒に自分の住所・氏名を書き、84円切手を貼って作品に添えて出してください。返信用の封筒は応募作品の部門の数に関係なく一通で結構です。
  - ⑤ 難読の語や特殊な語、地名・人名などの固有名詞、歴史的な事柄などにはふりがなを付けてください。
  - ⑥ 応募原稿は必ず清書したものを提出してください。
  - ⑦ 作品掲載の際には、清書原稿を活字にします。文字遣い・句読点・ルビ・符号など表記に関わることについては、「浜松市民文芸」として一部統一させていただくことがあります。
  - ⑧ 右記の規定や注意に反する作品・判読しにくい作品は、失格になることがあります。
  - ⑨ 応募原稿は、返却いたしません。(必要な方は事前にコピーをおとりください)
  - ⑩ 応募後の、原稿の修正はできません。
- 選考結果は、応募時に提出された返信用封筒で令和五年二月初旬までにお知らせします。
- 市民文芸賞及び入選の作品は、令和五年三月発行予定の第68集に掲載いたします。
- 市民文芸賞の方には、令和五年三月の表彰式で賞状と記念品を贈ります。
- 市民文芸賞及び入選の方には、「浜松市民文芸第68集」を一部贈呈いたします。
- 購入される場合は、一部五〇〇円です。
- 御提供いただいた個人情報、応募者への連絡及び確認のために使用し、目的外に利用することはありません。また、御本人の同意なく第三者に開示・提供することはありません。

## 〈提出及びお問い合わせ先〉

### 浜松文芸館

〒四三〇一〇九一六

浜松市中区早馬町二一クリエート浜松内

☎〇五三一四五三一三九三三

# 「浜松市民文芸」第68 集応募票

部 門	小説 ・ 児童文学 ・ 評論 随筆 ・ 詩 ・ 短歌 ・ 定型俳句 自由律俳句 ・ 川柳 <small>(部門に1箇所○をお付けください)</small>	小説・児童文学・評論・随筆・詩を投稿される方は記入してください 題名は、原稿用紙1枚目の右欄外にも、同じように記入してください 題名	原稿枚数 (ページ数) 枚
	ふりがな	ふりがな	発表名 ペンネーム
氏名	通学先・市外在住の方の勤務先		
年齢	歳 名称 所在地 <small>(令和4年11月20日現在)</small>		
		文芸館 使用欄	
住所	〒		
電話番号			



## 編集後記

令和三年度の浜松市教育文化奨励賞を松平和久先生が受賞しました。先生は永く浜松市の文化・教育活動に携わり、『浜松市民文芸』34号（平成元年）から50号（平成16年）では『随筆』の部の選者を務めてくださいました。平成16年からは浜松文芸館で講座を担当し、現在は『源氏物語』『万葉集』・『古今和歌集』と三つの講座を受け持っています。市民の皆様は古典文学を身近なものとして、そのおもしろさや楽しさを広く市民の皆様にお伝えしています。

松平先生は『浜松市民文芸48号』の随筆の選評のなかで、次のように書いています。

「（前略）もし、あなたが、自分の文章の読み手を求めるのなら、まず、他の人の文章の読み手になってほしい。子どもの頃によく読んでいたという記憶をお持ちの人は多いと思う。過去のことは捨てて、いま、大人の目で、大人の心で、できることなら自分が生まれ変わることを期待して、丁寧に、時間をかけて、他の人の文章を読んでもらえないだろうか。盛りだくさんの情報を捉えるためではなく、心に残る文章の書き手が、どんな言葉を選んでるか知るために。詩でも、短歌でも、俳句でも、童話でも、小説でも、随筆でも、読むものは何でもいい。（後略）」

また、今年度から児童文学の選者は鈴木ゆき江先生です。先生の選評には、

「わたしのご指導をいただいた先生のお言葉で、「一箇所だけでもキラリと光る、その人だけの表現、その人だけの描写があれば、成功」というものです。」

とありました。

の方たちの作品が掲載されます。ぜひ、他の人の作品もじっくり読んで自分の作品を振り返るとともに、次の作品へのステップアップとしていただければと思います。そして、自分だけのキラリと光る表現や描写を追い求め、意欲をもって文芸への創作活動に取り組んでほしいと願っています。

今年度は九部門で三十四名の方が市民文芸賞を受賞しました。応募作品総数は二千二百一十一点と昨年度とほぼ同じですが、投稿者数は延べ六百四十二名で大幅に増加しました。特に詩の部ではたくさん的高校生が投稿し、今年も市民文芸賞を受賞しました。また、二年ぶりに小説の部でも入選者ができました。浜松市は文芸活動に取り組む若い世代は確実に育っています。定型俳句は十五歳から九十九歳の方までの投稿があり、本当に幅広い年齢の方に愛されている『浜松市民文芸』です。

最後になりましたが、投稿者・選者・関係機関の皆様方のご理解、ご協力に感謝し、厚くお礼申し上げますとともに、これからもよろしくお願ひします。

浜松文芸館 館長 鈴木隆之

### 浜松市民文芸 第67集

令和四年三月十九日 発行

発行 浜松市  
編集 浜松市文化振興財団  
浜松文芸館

〒四三〇一〇九一六

浜松市中区早馬町二一

☎〇五三一四五三三三三三

印刷 杉森印刷株式会社

# ようこそ浜松文芸館へ

はいと  
俳人くん

ことばちゃん

静岡大学地域創造学環作